

---

# 真・恋姫†無双～乙女大乱改～

西森

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真・恋姫†無双〜乙女大乱改〜

### 【Nコード】

N4711T

### 【作者名】

西森

### 【あらすじ】

現代で平和に暮らしていた北郷一刀は剣道大会の帰りに謎の声によつて外史の世界へと飛ばされる。そして苦しんでいる人や困っている人を助けたいという一刀の優しい心がアニメの世界を救う！（この小説は基本はアニメのように進みますが、西森は無印くらいしか詳しく知りませんのでオリジナルがあるかもしれません。又、時々OVAの様な話が加わります）

「一刀、外史に飛ばされる」

ある剣道大会会場

？「面ッ！」

ズバッ！

審判「一本、それまで！よって勝者、北郷一刀」

ワーワー！！

会場が多いに騒ぎまくった。

大会委員長「今年の男子個人・木刀の部の優勝者は北郷一刀君に決定です！」

一刀「よっしゃー！」

彼の名は北郷一刀、聖フランチェスカ学園2年生。有名な剣道青年である。

今年開かれた大会は個人戦・団体戦と共に一刀の活躍で聖フランチェスカ学園が優勝した。

全国大会終了後

先輩1「今回は北郷のおかげで優勝できたぜ」

先輩2「何せ先鋒なら五人抜きだし、大将なら5対1でも負けない  
実力だしな」

先輩達が騒ぐなか、当の本人である一刀はあまり嬉しそうにしてい  
なかった。

後輩「どうしたんですか一刀先輩、優勝嬉しくないんですか？」

後輩が聞くと

一刀「いくら優勝しても相手にならなきゃ意味がないからなあんま  
りつまらないんだよ」

一刀がこう言うのも理由があった。

それは一刀が幼少時代から祖父によって行われた厳しい稽古により  
一刀は強くなりすぎたのだった。

よって全国大会といっても一刀の相手になる人なんて一人もいなか  
った。

一刀「まあ優勝して嬉しい事って言ったら…」

一刀が話をしていると

P i p p i p i …

携帯が鳴り出した。

パカッ

一刀が携帯を開くとメールが届いていた。

メールの内容は

『大会優勝おめでとう』

ごちそう作って帰りを待ってます 小百合&一刀 』

一刀「優勝記念に小百合姉のごちそうを食べれるっていうのが嬉しい事かな」

パタンッ！

一刀は携帯を閉じると

一刀「それじゃあ俺は帰りますので！」

ダダッ！

先輩「気を付けて帰れよ！」

一刀は走り去っていった。

一刀が妹の一刀と義姉の小百合の待つ家に向けて走っていると

（ある世界を平和に変えて欲しい）

ピタッ

一刀「今の声は何だ？」

一刀は辺りを見渡すが特に異常はなかった。

一刀「空耳ってやつかな？」

一刀が再び走り出そうとすると

（ある世界を平和に変えて欲しい）

またあの声が聞こえてきた。

一刀「（声からして女のようにけども周りには女がいないしどうなっているんだ！？）」

一刀が不思議に感じていると

フッ！

一刀「えっ！？」

昼間なのに急に目の前が暗くなった。

一刀「何が起きたんだ！？」

一刀が不思議がっていると

ピカッ！

一刀「うわっ！？」

さっきまで暗かったはずが急に眩しいくらいに明るくなった。

そして一刀はあまりの眩しさに目を閉じてしまった。

しばらく時間が立ち、一刀が目を開けてみると

一刀「何だよこれ!？」

さっきまで道路を走っていたはずが目の前には森しかなかった。

今、新たな外史が始まる。

## 「関羽との出会い」

一刀「何処だよここ!？」

一刀は周りの景色が変わっていることに驚いた。

街中から一気に森の中に変わったのにも驚いたが他にさっきまで昼間だったにもかかわらずいつの間にか夜になっていた。

一刀「俺の荷物は無事のようにけども…そうだ!携帯の通話機能なら」

ガバツ!

一刀は鞆の中から携帯を取り出して誰かにかけようとするが

ピー 圏外です

一刀「森の中だから圏外なのかな？」

この時、一刀は知らなかった。この世界では携帯が使えないことを

一刀「仕方がない森をおりてみるか」

一刀は森をおりることにした。

30分後

一刀「腹減ったな」

ゲキユ〜ッ！！

一刀はお腹が空いて動けないでいた。

一刀「剣道大会は昼前に終わったから家でご飯食べるつもりだったから間食してないし腹減ったな〜」

一刀が愚痴を言っていると

一刀「もうダメだ〜」

バタンッ！

その場で倒れてしまった。

ガサガサッ！

しかし一刀は知らなかった一刀に誰かが近付いてくることを

そして翌日

一刀「んっ…」

一刀が目を覚ますと

？「気が付かれましたか？」

一刀の目の前には黒髪ポニーテールの美人がいた。

一刀「うわっ!？」

一刀が驚いてあどずさると

？「そんなに驚くとは失礼だと思いますが」

黒髪の人が言うと

一刀「すみません！いきなり目の前に美人さんがいたものでつい！？」

美人と言われた黒髪の方は

？「美人だなんて何を言うのですか！武人に対しては侮辱のようなものです」

何故か急に怒り出した。

一刀「ところでさっきから気になっていたんだけどその服ってコスプレ？」

一刀が聞くと

？「こすぷれ？何を言っているのか分かりませんが服ならあなただっておかしいじゃないですか！」

ビシッ！

黒髪の方は一刀の着ていたフランチェス力学園の制服を指差した。

一刀「（フランチエス力学園の制服っておかしいと言われるくらいかわっているのかな？）」

一刀はこの時、理解していなかった。

一刀「それにしてもここどこ？」

一刀が聞くと

？「どこって？ここはこの先にある幽州の村近くの森ですが…」

この時、一刀は黒髪の人と言った幽州が気になっていた。

一刀「（幽州ってどこかで聞いたことがあるなどこだろう？………思い出した！三国史に出てくる街名だ！）」

一刀は祖父から多少の知識を学んでいた。

一刀が考え終ると

一刀「ところでまだ名前聞いてなかったね俺は北郷一刀！君は？」

一刀が聞くと

関羽「我が名は関羽雲長といいます！」

関羽さんが言うとお一刀は再び考え始めた。

一刀「（関羽だって！？関羽っていったら劉備につかえた美髯公で有名な！？）」

一刀が考えていると

関羽「もうよろしいかな北郷殿、私はこれで失礼する！」

ザッ！

関羽さんは一刀が考えているまに去っていった。

一刀が考え終って目を開いてみると

一刀「あれっ！？関羽さんは？」

関羽は既に去っていた。

一刀「参ったな、街への道を知ってたなら教えてもらおうとしたのに

」

一刀が残念がっていると

一刀「あれは！？」

昨日は暗くて分からなかったが一筋の煙がたっていた。

一刀「煙があるところには人がいるかも」

ダッ！

一刀は煙めがけて走り出した。

しばらくして

一刀が煙の元にたどり着くと

一刀「大きいなあ!？」

目の前には大きな門がそびえていた。

一刀が門の中に入ろうとすると

門番「その者、止まれ！」

門番に止められた。

門番「怪しい服の奴め! ひっ捕えてやる！」

門番が一刀に襲いかかる

一刀「(この制服ってそんなに怪しいものなの!?)」

門番が一刀に掴みかかろうとしたその時!

ドドドッ!!

一刀の後ろ側から土煙が走っていた。

門番「またあいつか! 今度は通さんぞ！」

門番が構えていると

？「退けー！退くのだー！鈴々山賊団のお通りなのだー！」

子供達『オオーッ！』

豚にまたがった赤髪の小さな子を先頭に子供達が走っていた。

？「今日も豪快に悪戯するのだー！」

ドドドッ！！

そして構えていた門番とぶつかりと

ドカンッ！　　≡

門番「ぐはっ！？　　」

門番は豚にはねられた。

？「邪魔は片付いたのだ！村に潜入なのだー！」

子供達『オオーッ！』

そして子供達は村に入っていた。

そしてぶつかる瞬間に避けた一刀は

一刀「門番が気絶してるし、中に入ってもいいよな」

一刀は村の中に入っていた。

これが一刀と関羽、張飛との出会いである。

## 「関羽との出会い」（後書き）

話は進まないし、ページは短いし、新作のネタが頭に入ってくるで大変です。

下手すると隔週投稿になりかねませんので了承ください。

## 「三人が揃う時」(前書き)

久々の更新です。これからは週一のペースになります。

## 「三人が揃う時」

門番が豚に撥ねられてのびているうちに村へと潜入した一刀だが

一刀「この村はどうなってるんだ？」

村のあちこちに『鈴々山賊団参上！』と書かれていた。

一刀「まるで暴走族だな！？」

一刀が驚いていると

グキョー！

一刀のお腹が鳴り出した。

一刀「結局昨日は何も食べてないからお腹が空いたぜ！」

一刀がその場にしゃがみこんでいると

モワーン

いい匂いがしてきた。

一刀「この匂いはチャーハンの匂いだ！」

匂いをかいで復活した一刀は匂いの元に走り出した。

ガラリッ！

そして一刀が店の中に入ると

関羽「いらっしやいませご主人様」

メイド姿の関羽に出会った。

関羽「・・・」

そしてしばらく経つと

関羽「うわー！？今のは忘れてください！／＼／」

一刀「えっ！？」

顔を赤くした関羽が暴れだした。

しばらくして

一刀「それじゃあ飯代が払えないから働いているわけか」

関羽「悔しいがその通りだ」

関羽は自らの失態をくやしがるのだった。

一刀「それにしてもこの村はどうなってるんだ？町中落書きだらけだけど」

一刀が話していると

男「山に住む野猿のせいだよ」

話を聞いていたのか男が会話に入ってきた。

一刀「野猿って？」

一刀が聞くと

男「山に一人で住んでいるチビさ、村に降りてきてはいつも村の子供をひき連れて悪戯ばかりする奴だよ」

聞いた一刀は思った。多分そいつは豚に跨っていた赤髪の子だろうと

男「まあ度重なる悪戯に怒った役人が野猿を討ちに行くって話だぜ

」

一刀「えっ!？」

これを聞いた一刀は驚いた。

男「いくらチビでも限度があるからな」

すると話を聞いていた関羽は

関羽「済まないが、その山への道を教えてください」

男に山への道を訪ねた。

男「それは構わないがどうする気だ？」

男が聞くと関羽は

関羽「役人に伝えてください！野猿を連れて謝らせるから討伐は明日の昼まで待つてくれと」

スッ！

そして関羽は山に向かっていった。

それを見た一刀は

一刀「それじゃあ俺も行くかな」

関羽の後について行くのだった。

山道

関羽「何で北郷殿までついてくるのだ！」

関羽が聞くと

一刀「だって俺は野猿の顔を知ってるから役に立つし、武には自信あるからね」

しかし関羽は信用していなかった。見た目がへばい一刀が武に自信があるとは思えなかったからだ。

関羽が一刀を馬鹿にしながら歩いていると

ガサッ！

近くで小さな音が聞こえたのを一刀は聞き逃さなかった。

一刀「関羽さん、あの木に二人隠れてるぜ」

関羽「ハッ!?」

何言ってるんだこの人はと関羽が思っていると

シュンツ!

木の後ろから石が飛んできた。

一刀「危ないっ!」

カンツ!

関羽に飛んできた石を一刀は持っていた木刀ではねかえした。

関羽「なっ!?」

関羽は驚いた。自分にも察知できなかった気配を一刀がよんだのだから

一刀「その木に隠れている人!出てきなさい!」

一刀が木に向かって言うと

スッ! スッ! スッ!

次々と木の後ろから子供達が出てきた。

一刀「君達はもしかして鈴々山賊団の人かな？」

一刀が聞くと

子供A「そうだい！」

子供B「お前らオヤビンを捕まえに来た役人の奴だろう！」

子供C「オヤビンを役人に渡してたまるか！」

子供達が言うと

関羽「我々は役人ではない！お前達のオヤビンに悪戯をやめるように注意しに来たのだ！」

一刀「オヤビンの命は保証するからオヤビンに会わせてくれ！」

すると子供達は輪になってヒソヒソ話していると

子供A「本当に保証するならオヤビンに会わせてやるよ！」

スッ！

子供達は道案内をしてくれるようだ。

そしてたどり着いた先はとある洞穴の前

子供A「それじゃあオヤビンを頼むぞ」

スッ！

子供達は去って行った。

子供達が去った後、関羽は洞穴の前に立つと

関羽「出てこい山賊の野猿！黒髪の山賊狩りの関羽が成敗しに来たぞ！  
」

関羽が叫ぶと

タタタツ！

穴の中から何かが駆けてくる音が聞こえてきた。

バツ！

？「うりやりやりやりー！  
」

ブンツ！

出てきたものはいきなり武器を振ってきた。

関羽「いきなりとはさすがは野猿だな  
」

スッ！

関羽も自分の武器を手にとろうとするが

スカッ！

関羽「あれっ！？」

関羽は自分の武器を飯屋に忘れていた。

？「うりゃーっ！」

ブンッ！

そして野猿の武器が関羽に当たるかと思い、関羽は思わず目を閉じたが

ガキンッ！

関羽「えっ！？」

関羽は自分の目を疑った。何故なら目の前で野猿の武器を受け止める一刀がいたからだ。

一刀「チビのくせに力は強いな！？」

？「はにやにや！？」

バツ！　バツ！

そして二人は互いに離れると

一刀「俺の名は北郷一刀、君の名前は？」

張飛「鈴々は張飛翼徳なのだ！」

一刀はまた驚いた。

張飛「いえば髭デブで有名(?)なのに目の前の張飛はちびっ子だったからだ。」

張飛「お前らは鈴々を捕まえに来た役人なのだな! だったら倒すのだ!」

バツ!

張飛が攻めてきた。しかし一刀は一步も動いていない。

関羽「(何故北郷殿は動かないのだ?)」

関羽が心配するなか

張飛「とりゃー!!」

張飛が飛び出してきた。

すると一刀は木刀を構えると

ビシッ!

一刀「面っ!」

張飛に面を繰り出した。

喰らった張飛は

張飛「はにやつ!？」

バタンツ!

その場で倒れてしまった。

関羽「(一体何が起きたのだ!?)」

一刀の剣筋は武人である関羽にも見えないくらい早かった。

関羽が考えていると

一刀「関羽さん、この子気を失っているみたいだから運ぶの手伝ってくれる？」

一刀が声をかけてきた。

そして二人は張飛を穴に運ぶと

張飛「うにやつ!？」

張飛が目覚めました。

一刀「目が覚めたようだな」

スッ!

一刀が張飛の顔を見ると

張飛「ひっ！？謝るから痛いお仕置きは嫌なのだ！」

ズザザーッ！

張飛はいきなり後退りしてきた。

関羽「我々はお前をいじめたりはせん、お前に役人に謝ってもらおうと来たのだ」

一刀「そもそも何で村に悪戯しに行くんだ？」

一刀が聞くと

張飛「…寂しかったのだ」

張飛がポツリとつぶやいた。

張飛「鈴々はおじいちゃんが行ってからずっと一人ぼっちなのだ、だから村の子供をひき連れて悪戯してたのだ。悪戯すればみんな鈴々と一緒にいてくれるから、でも夜になるとまた一人ぼっちになるのだ…」

張飛が泣きそうになると

ガバッ！

一刀は張飛を抱き締めた。

一刀「一人で寂しかったんだな、でも悪戯はダメだよ」

一刀がささやくと

張飛「ヒック…ごめんなさいなのだ〜！」

張飛はわんわん泣き出した。

関羽「（この男は私にはない不思議な力があるのかもしれないな）」

この時、関羽の一刀に対する評価が上がった。

そして夜になり、

カポ〜ン！

関羽「こんな山の中でお風呂に入れるとは思わなかったな」

関羽は一刀が寝ている隙にお風呂に入っていた。

その時、

ガラリッ！

風呂の扉が開いて

張飛「鈴々も入るのだ〜」

ザブンッ！

張飛が飛込んできた。

関羽「こらお前！静かに入らんか！！」

関羽が張飛を叱ると

張飛「（じ〜）」

張飛は関羽の胸を見つめていた。

関羽「な…何だ！？」

関羽が聞くと

張飛「関羽のおっぱいはどうやって大きくなったのだ？」

関羽「なっ！？／／／」

関羽は顔を赤くした。

張飛「どうしてなのだ？教えてほしいのだ！」

あまりしつこく聞いてくる張飛に関羽は

ザバツ！

風呂から体をあげると

関羽「胸に大志を抱けばそのぶん大きくなる！」

バンッ！

張飛「オオーッ！」

関羽が凄いことを言った直後に

ガラリッ！

一刀「俺も風呂に入るかな…」

一刀がいきなり風呂に入ってきた。

関羽「・・・」

一刀「・・・」

そして互いを見つめ合った二人は

関羽「キヤーツ！この変態！／／／」

ポイポイツ！

関羽はそこら辺にあるものを投げつけてきた。

一刀「俺は何も見えてないから！ピンクの先っぽなんて見てないから！？」  
「」

関羽「見てたんじゃないですかー！！／／／」

自ら墓穴を掘る一刀だった。そして関羽の一刀に対する評価が少し

下がった。

張飛「（こんなに騒がしいのは久しぶりなのだ♪）」

そして次の日の朝

三人で役人に謝りに行き、何とか許してもらったのだが

関羽「何でついてくるのですか！？」

関羽の後ろには一刀と張飛がついてきていた。

一刀「ほらっ！俺はこの先どうすればいいのか分からないしさ！？

」

張飛「鈴々は関羽とお兄ちゃんのが好きになったのだ♪」

こう言われた関羽は

関羽「仕方がないですね、一人旅も飽きてきましたしいでしょう

」

旅に連れていくことを了承するのだった。

張飛「やったのだ！でもどうせなら真名も交換しあうのだ！」

一刀「真名<sup>まな</sup>って何？」

関羽「北郷殿は真名も知らないのか！真名とは聖なる名で許可なく言えば首を切られてもおかしくないのだぞ！」

一刀「（ブルッ！？）以後気を付けます！」

こうして一刀、関羽（真名は愛紗）、張飛（真名は鈴々）の三人旅が始まったのだった。

「三人が揃う時」(後書き)

この話を考えていたとき、真っ先に思い付いたのがお風呂のシーンです。

「公孫贇の城にて」

愛紗と鈴々と共に旅をすることになった一刀

そして一行は公孫贇が太守を勤めるといふ村にやって来た。

一刀達が何でそんな村に行くのかというと

愛紗「旅をすることは早めに路銀を稼がなくてはならないからです。  
ですからそのためにどこかの主君に仕えなければならぬのです！」

鈴々「愛紗は誰にいつてるのだ？」

一刀「さあな？」

それは誰にもわからない

そして一行が村の門にたどり着くと

門番「その三人何者だ！」

門番に止められた。

すると愛紗は

愛紗「我が名は関羽雲長、噂に聞く黒髪の子盗りだ！」

愛紗が叫ぶと門番は

門番「ほんとに噂の黒髪の山賊狩りか？確か黒髪の山賊狩りは超がつくほどの絶世の美女だと聞いたが？」

門番は頭を悩ませた。

それを聞いた愛紗はがっくりとしていた。

鈴々「よほど自分の美貌に自信があつたようなのだ」

一刀「そういうのを確か自画自賛っていうんだよ」

自画自賛…自分で自分のことをほめること。

一刀と鈴々がヒソヒソ話していると

愛紗「聞こえてますよ！！」

愛紗にはしっかり聞こえていた。

愛紗「どうせ私は絶世の美女じゃありませんよー！」

愛紗は怒って一刀達を追いかけて回した。

一刀「ごめんなさい！！？」

鈴々「許してほしいのだ」！？」

愛紗「誰が許すかー！」

結局逃げた二人は愛紗に捕まっ てしまい頭に大きなタンコブを作った。

その様子を見ていた門番は思った。

門番「ほんとにこの人は黒髪 of 山賊狩りなのか？」

そう思うしかなかった。

しばらくして

三人が公孫賛の城の中に入ると東屋（休憩所）から声が聞こえてきた。

公孫賛「また山賊が出てくるとはこの辺には何人山賊がいるのやら？」

東屋にて公孫賛が頭を悩ましていると

愛紗「失礼だが貴殿は幽州の太守である公孫賛どののでしょうか？」

愛紗が聞くと

公孫賛「確かに私は幽州の太守である公孫賛伯珪だがお前達は誰だ？」

やけに太守を強調して言う公孫賛が聞くと

愛紗「我が名は関羽雲長と申します」

鈴々「鈴々は張飛翼徳なのだ！」

一刀「俺は北郷一刀です」

三人が自己紹介をすると

鈴々「ねえねえ、お姉ちゃんはほんとに太守なのかなのだ？鈴々より弱そうなのにおかしいのだ」

鈴々の失礼な発言に

愛紗「こらっ！鈴々失礼ではないか！」

愛紗が鈴々を叱ると

公孫賛「別に構わないと言われなれてるからな…」

最後の方をボソツと言うと

公孫賛「おちびちゃん、私は確かに地味であまり目立たないが白馬に乗ればどんな相手にも負けないすごい人物なのだ！人を見かけで判断したらいけないぞ！」

公孫賛が言うと

？「人を見かけで判断してはいけないと言った伯珪殿がそのおちびの実力も分からぬとは面白いことですな」

どこからか声が聞こえてきた。

愛紗「今の声は何者だ！」

鈴々「隠れてないで出てくるのだ鈴々はちびじゃないのだ！」

二人が声の主を探していると

一刀「その木の後ろに誰かが隠れているだろ！」

全員『！？』

そしてみんなは一刀が指差した木を見てみると

？「ほほう、この私がどこにいるのかを見抜くとはお主はなかなかの腕前ですな」

スッ

木の後ろから白を主体とした服を着た女の子が現れた。

公孫賛「趙雲、やっぱりお前だったのか！？」

趙雲と聞いて一刀は頭の中を調べてみた。

趙雲で有名なエピソードといえば長坂の戦いで劉備の息子の命を救ったことで有名である。

公孫賛「すまないみんな、こいつは我が軍の客将で名は趙雲子龍

と言っんだ  
」

趙雲「趙雲と申す！以後お見知りおきを  
」

趙雲が軽く挨拶すると

公孫賛「ところで趙雲よ、さっき見た目で判断するなっっていうたのは何故だ  
」

すると趙雲は

趙雲「簡単なことです、こやつらは見た目はひ弱だが武力ならば伯珪殿を遥かに越える実力ですぞ  
」

そして趙雲は愛紗と鈴々を見ると

趙雲「そっちの黒髪の得物は偃月刀で武力が優れていて赤面症ですな  
」

趙雲が言つと

愛紗「なっ！？／＼／  
」

顔を赤くしていた。どうやら凶星らしい

趙雲「そちらのおちびは力は強いが頭は悪いですな  
」

鈴々「なっ！？  
」

趙雲「そしてそちらの殿方は少々スケベでありますがあなた達の中

で一番強い、違いますかな？」

愛紗「何を言うのだ趙雲殿、北郷殿の実力は…」

愛紗が最後まで言おうとすると

門番「公孫賛さまー！！」

門番が慌てて駆け出してきた。

公孫賛「そんなに慌ててどうしたんだ！？」

公孫賛が聞くと

門番「実は山賊が村に現れて村の娘をさらったようです！！」

公孫賛「何だって！？」

## 「人質奪還作戦」

呉の国を飛び出した一刀達は現在、ある荒野にて休んでいた。

駆けつけてきた兵によって村娘が賊にさらわれたことを知った公孫賛は

公孫賛「私がおさめる村から人質が出るなんて！？こうしてはおれん直ぐ様娘を助けにいくぞ！」

公孫賛が外にいかうとすると

趙雲「待たれよ伯珪殿！」

趙雲に呼び止められた。

公孫賛「何が待てだよ趙雲！早くいかないと娘の命が危ないんだぞ！」

公孫賛が言つと

趙雲「しかし、大勢でいけば賊にしろれるようなもの、ここは少数でいけばよいかと」

一刀「確かに趙雲の言う通りだな」

一刀も趙雲の案に便乗した。

公孫賛「しかし少数でといっても自慢じゃないが我が軍は単体では弱いやつらばかりだぞ」

確かに自慢することではない

趙雲「その点に関してはご安心を、私がいきますから大丈夫でございます」

趙雲が言うと

愛紗「一人では危ないだろう私もいかせてもらっぞ」

鈴々「愛紗がいくなら鈴々も行くのだ！」

一刀「じゃあ俺もだな」

しかし愛紗は一刀の参入に不満を持っていた。何故なら一刀の実力を知らないからである。

でも長々と話している時間がないので連れていくことにした。

賊のアジト

愛紗「ここが賊のアジトのようだな」

趙雲「見張りがいないのがちょうどよいな」

四人は見張りがいないのを確認すると

愛紗「それでは突入といくぞ！」

全員『オオーッ！』

みんなは潜入を開始した。

そして広場らしい場所にたどり着くと

わいわいガヤガヤ

賊達は宴会をしていた。

子分「お頭、今日は上玉の女が手に入りましたね♪」

お頭「まったくだぜ！あの村にはババアとブスしかいなかったから  
今まで襲わなかったがこんな上玉がいたとはな♪」

ムニユツ

村娘「いやんっ！？」

お頭が村娘の胸をさわることを嫌がる娘

お頭「胸くらいさわったって減るもんじゃねえし別に良いじゃんか  
よ♪」

ムニユツムニユツ！

嫌がる娘に対してなおも続けるお頭

それを陰から見ていた愛紗達は

愛紗「おのれっ！外道らめ！！」

趙雲「ほほう、あのお頭なかなか揉むのがうまいな」

一刀「鈴々には早いから見ちゃいけません！」

パッ！

鈴々「お兄ちゃん、何で目隠しするのだ？」

怒る愛紗、変なところに興味をもつ趙雲、鈴々の目をふさぐ一刀など様々な反応であった。

しかしずっと見ているわけにもいかないのです

愛紗「私と趙雲は正面から行きます、北郷殿は裏口から、鈴々はいざというときの出口を探してくれ！」

全員『なのだ了解！』

実はこの組み合わせには裏があった。

それは裏口なら敵が少ないと愛紗が考えわざと一刀を裏口に配備したのだ。

そして全員が行動を開始した。

お頭「やっぱり若い娘の胸は揉みごたえがあって良いな」

お頭がまだ娘の胸を揉んでいると

愛紗「そこまでだ外道共！」

そこに愛紗達が現れた。

愛紗「我々はその娘を救いに来た！おとなしく返せば見逃してやる！」

愛紗が言うと

子分「お頭、あいつらきつとこの辺をおさめているハムの兵ですぜ！？」

子分が慌てると

お頭「慌てるんじゃない！裏口にいる一万の兵を呼んできやがれ！」

愛紗「一万の兵だと！？」

愛紗は驚いた。

まさか一万もの兵が裏口に潜んでいるとは思わなかったからだ。それと同時に一刀の心配をしていたが

一刀「悪いけど兵は来ないよ」

全員『！？』

全員が声のする方を見るとそこには一刀がいた。

お頭「まさか裏口から来たのか！？一万の兵はどうした！？」

お頭が聞くと

一刀「相手が弱すぎるんで全員気絶してるよ」

スッ！

一刀が指差した裏口を全員が見てみると

そこには一万の兵が気絶して倒れていた。

一刀「さてと、人質も取り返したし、さっさと帰ろうぜ！」

お頭「なにっ！？」

お頭が慌てて人質を見るとさっきまで気絶して抱いていた人質がいつの間にか一刀の背中におぶさっていた。

お頭「何してやがるやつらを逃がすな！？」

賊達『ワァー！ワァー！』

賊達が一刀達を追いかけるが

一刀「この早さなら逃げ切れる！」

ダダッ！

一刀達の足は早く、賊達をあっという間にふりきった。

愛紗「信じられん、人を背負いながら私や趙雲より早いだなんて！？」

愛紗はその事を驚いていた。

趙雲「（やはり私の目に狂いはなかったようだな）」

そして三人が走っていると

鈴々「お兄ちゃん、愛紗、こっちなのだー！」

遠くの方で鈴々が呼んでいた。

愛紗「でかしたぞ鈴々！」

ダダッ！

そしてみんながたどり着くとそこには

ガラーンッ！

目の前には断崖絶壁の崖があり向かい側まで約30メートルという距離があった。

鈴々「ここしか道がなかったのだ！？」

趙雲「とはいえこの距離を飛び越すのは至難だし、くずぐずしていると賊が来てしまう！？」

全員が悩んでいると

一刀「この方法しかないな」

スッ！スッ！スッ！

愛紗「えっ！？」

鈴々「んにゃっ！？」

趙雲「なっ！？」

一刀は三人を背負うと

一刀「いくぜーっ！」

ピョンッ！

そのまま向こう岸まで跳んでいこうとした。

愛紗「何て無茶な！？」

趙雲「この手がありましたか！？」

鈴々「鈴々空を飛んでいるのだー！？」

確かに落ちたら一貫の終わりの状況で無茶なことだと思っが

ダンッ！

一刀は無事に向こう岸にたどり着いた。

愛紗「渡れたのか!？」

趙雲「奇跡が起きたようだな」

鈴々「お兄ちゃん、もう一回やってなのだ」

確かに女とはいえ四人を背負って崖飛びはリスクが大きすぎて危険であつた。

これは一刀だからできることです真似しないでください。

一刀「ここまでではこれないと思うけどさっさと城に戻ろう」

そして一行は城に戻るのだが

鈴々「でもお兄ちゃん、あのままじゃいずれ賊が仕返しに来るのだ」

確かに鈴々の言う通りだが

一刀「それなら大丈夫だよ来るときにあつた吊り橋を壊しておいたからね」

そう、実は一刀は来るときにあつた吊り橋を全員が渡った後、壊しておいたのだ

これを聞いた愛紗は

愛紗「なっ！！ではもし我々が入り口から戻ったときには帰れなかったかもしれないじゃないですか！！」

すごく怒っていた。

そして一行が公孫賛の城にたどり着くと

公孫賛「お前らよく無事だったな！？」

とても驚いていた。

それもそのはず、一万以上いる賊のアジトにたった四人で忍び込んで怪我ひとつなく帰ってきたのだから

愛紗「あのう公孫賛殿、誠に申し訳ないが仕官の件なのだが我々は旅を続けたいので遠慮させてもらいたいのだが」

愛紗が言うつと

公孫賛「なら仕方がないさお前達のような強いやつが来なくて残念だけだな」

公孫賛が言うつと

趙雲「申し訳ないが伯珪殿、私も離れさせていただく」

全員「えっ！？」

趙雲の言葉に全員が驚いた。

趙雲「伯珪殿のもとにいるよりこの者達と旅をする方が面白いからな」

趙雲が言つと

公孫賛「そうかお前が出たいなら仕方がない達者でな！」

素直に見送る公孫賛だが心のなかでは

公孫賛「（お前がいったらうちの軍は弱くなるじゃないかだから帰ってきてくれ）」

とても残念がっていた。

趙雲「というわけでこれから世話になる趙雲子龍こと真名を星と申す！」

こうして一刀達の旅に新しく星が加わったのだった。

「喧嘩別れ」

一刀達三人の旅に新しく趙雲こと星が加わった。

鈴々「ランラララン」山があるから山なのだ、クマに出会って  
くまっとな」

一刀「鈴々、その歌は何だ？」

一刀が聞くと

鈴々「じいちゃんから教わったクマ避けの歌なのだ！楽しいからお  
兄ちゃんも歌うのだ」

こういうと鈴々を止めることができないので

一刀「じゃあさっそく！山があるから山なのだ、クマに出会って  
まっとな」

鈴々「鈴々も歌うのだ、山があるから山なのだ……」

二人が仲良く歌っていると

愛紗「それにしても星はついてきてよかったのか？公孫賛の元に  
いればそれなりに活躍できただろうに？」

愛紗が聞くと星は

星「確かに愛紗の言う通りなのだが所詮公孫賛殿の元ではそれほど

有名にはなれないし、はじめからいつの日か離れる予定だったしな  
」

単純な性格だなと思う愛紗だった。

星「それにしてもすまないな家族の旅に便乗してしまつて」

星の質問に愛紗は

愛紗「は！？家族とはどういう意味だ？」

すると星は

星「どういう意味つて、鈴々はお主と一刀殿の娘だろう？」

これを聞いた瞬間愛紗は

愛紗「ななな！？なに馬鹿なことをいつてるのだ！私と一刀殿はそういう仲ではないし、私は一度も子供を作るような行為は／＼／」

愛紗が顔を赤くしながら反論すると

星「ほほう、ならば一刀殿の妻には私になろうかのう？」

星がからかいながら言うと

愛紗「それはいかん！」

愛紗は必死で止めに入った。

愛紗「はっ！？（なぜ私はむきになっているのだ？別に一刀殿のこととは何も思っていないはずなのに！？）」

この時、愛紗は気付いてなかった。愛紗は知らないうちに一刀に対して恋愛感情が芽生えていたことを

星「（やはり公孫賛を捨ててこっちに来たのはいい選択だったようだな）」

そして星は何かを知ったようにニヤリとするのだった。

そして昼時頃、ある飯屋では

愛紗「いらっしやいませ！」

星「ご注文はいかがかな？」

ウェイトレス姿の愛紗と星がいた。

愛紗「まさか星が無一文だったとはな！？おかげで働かなくてはならなくなっただけだ！」

星「まあ別にいいではないか私は結構楽しいし、一刀殿も喜んでくれるみたいだぞ」

スッ！

そして愛紗は星が指差した先を見てみると

一刀「ご注文はいかがですか？」

ニコッ

女の子達『ポワーン／＼／』

一刀のスマイルに女の子達は釘付けだった。

それを見た愛紗は

愛紗「別に私が気にすることでもない！」

と言いながらも

メキッ！バキッ！

お盆に八つ当たりをして破壊していた。

一方鈴々は

鈴々「はにゃー！？」

ガッチャーン！！

走っては皿を割り

鈴々「美味しかったのだ♪」

注文を届ける途中で全部食べてしまったりと散々だった。

それが何回も続くと

愛紗「鈴々！足手まといだから宿でおとなしくしておれっ！」

愛紗の雷が落ちた。

鈴々「わかったのだ！出ていけと言っなら出ていくのだ！」

ダッ！

鈴々は飯屋を飛び出していった。

一刀「鈴々！？ちょっと心配だから鈴々についていくよ！？」

ダッ！

一刀も鈴々のあとを追って飯屋を出ていった。

星「おやおや、子供と旦那が家出してしまった方がいいのかな？」

愛紗「だから私と一刀殿は夫婦でもないし、子作りの経験もないっ！」

愛紗はむきになって反論した。

「袁紹軍武將試験（前編）」

愛紗と喧嘩して鈴々は出ていってしまい、一刀は鈴々のあとを追っていくのだった。

一刀「なあ鈴々、愛紗だって悪気はなかったんだからさ！」

一刀が鈴々に言うと

鈴々「お兄ちゃん黙っていてほしいのだ！鈴々はどうしてもお金をためて愛紗を見返してやりたいのだ！」

しかし、世の中はそう甘くはなかった。

店主「子供はダメだよ」

店主「ガキはママのところに帰りな！」

店主「そっちの兄ちゃんならいいけどよ」

店主「うちは二人とも大歓迎よん、可愛がってあげるわねん」

みんな鈴々が子供だからと馬鹿にして雇ってくれなかった。（最後は怪しかったが）

そして一刀と鈴々が途方にくれていると

鈴々「お金を稼ぐって案外難しいのだ〜!!!」

一刀「（それ以前に雇って貰えてないけどね）確かに大変だよな」

二人がため息をついていると

ザワザワッ！

大通りが騒がしくなってきた。

一刀「何の騒ぎだろ？」

鈴々「見たいけど人混みで見えないのだ〜！」

背が低い鈴々では騒ぎがよく見えないのだ。

一刀「ほらよっ！」

スッ！

そんな鈴々にすかさず一刀が肩車をする

鈴々「おおーっ！高いのだ〜」

一刀「そんなことより鈴々、騒ぎの元がなんなのかを確かめないと  
な」

鈴々「わかってるのだ」

じーっ

鈴々が騒ぎの元を見るとそこには立て看板があった。

鈴々「えーっと、袁紹軍武将大募集！見事採用されたら大金プレゼント」

立て看板にはそう書かれていた。

そして立て看板を見た鈴々は

鈴々「こっ…」

鈴々「これなのだー！」

？「これだー！」

鈴々が叫ぶと同時に誰かが叫んだ。

声のする方を見てみると

？「えっ！？」

茶髪のポニーテールの女の子がいた。

「袁紹軍武將試験（前編）」（後書き）

話の展開はうまく進まないし、ネタは思い付かないし、新作品が頭の中で完成しつつある、もしかしたら新作を書くためこの小説の投稿速度が遅くなるかもしれません。

「袁紹軍武將試験（後編）」（前書き）

遅くなりました。久々の更新です。

「袁紹軍武將試験（後編）」

？「へえ、あんたも袁紹軍兵士募集の看板に目をつけたのかよ」

鈴々「そうなのだ！」

一刀「俺は違うけどね」

看板前にてポニーテールの女性と出会った一刀と鈴々はすっかり打ち解けあつて会話をしていた。

馬超「そついや自己紹介がまだだったな、あたしの名前は馬超だ。よろしくな！」

鈴々「鈴々は張飛なのだ」

一刀「俺は北郷一刀、一刀って呼んでくれ」

そして互いに自己紹介をした後

馬超「それじゃあ仲良く募集会場に行くとするか」

鈴々「応なのだ！」

一刀「やれやれ」

募集会場

そこには

？「おーほっほっほっ！こんなに沢山の皆さんがわたくしの家来になりに来てくれてわたくし自分の人を引き寄せる魅力に少しは喜ばしいですわ」

金髪縦ロールを二つ構えた女性が何かを話していた。

一刀「誰だあの人は？」

鈴々「なんだかおばさん臭いのだ」

失礼なことを言う二人に

馬超「馬鹿っ！あの人が袁紹さんだぞ！」

馬超が言うと

一刀「マジでかよ！？」

鈴々「あんなオバサンに仕えるなら鈴々やる気がなくなるのだ」

帰ろうとする鈴々だが

袁紹「ではみなさん、見事選ばれた方は大金を差し上げますので頑張ってくださいな」

ピクンッ！

袁紹から大金という言葉が出てくると

鈴々「大金のためなら少しは我慢するのだ！」

コロコロ態度を変える鈴々だった。

そして

袁紹「では集まったみなさん、これからわたくしを守る…」

袁紹が最後まで言おうとすると

？・？『ちよつと待ったー！』

サッ

何者かが会話に入って舞台の真ん中に立った。

文醜「やいやいテメエら！どうしても袁紹様の家来になりたければ  
一の家来である文醜と」

顔良「二の家来である顔良を倒してからにしてください！」

バンッ！

二人は参加者達の前に立つと

男A「なんだと生意気な！」

男B「相手は女が二人だ、男の力を見せてやるぜ！」

男達『うおーっ！』

ドドドッ！

男達は一斉に文醜と顔良に立ち向かうが

ドカッ！バキッ！ボコッ！

ぼろ〜ん

男達は返り討ちにあってしまいボロボロになった。

文醜「弱い男共だな！」

顔良「それで袁紹様の家来になりたいだなんて笑わせてくれますね  
」

実はこの二人が家来募集を邪魔するのには理由があった。それは袁紹に大金を払わせないためである。

文醜「（大金なんて払わしたらただでさえ少ない給金がさらに減っちゃうよ）」

顔良「（絶対に希望者を倒さなくちゃ）」

二人は男達を倒して安心していたが

スッ

鈴々「まだ鈴々が残っているのだ！」

馬超「あたしだって残ってるぜ！」

まだ二人残っていた。

袁紹「こうなったら仕方ありませんわね、ブ男さん達は消えたようですし、互いに競いあってもらいましょう！」

鈴々・馬超・文醜・顔良『競いあい？』

四人が驚くと

袁紹「袁紹軍に必要な知力・美力・武力、この三つのうち先に二つとった方の勝ちですわ！」

袁紹が言うと

鈴々「受けてたつのだ！」

馬超「あたしだって！」

文醜「負けられないよな！」

顔良「そうだよね！」

ゴゴゴッ……！！

今、四人の目には炎が燃えたぎっていた。

一刀「ややこしいことになったな」

一刀はただ一人外野で見守るしかなかった。

しばらくして

陳琳「さあ、袁紹様の突然の思い付きで急遽開かれた家来争奪合戦！果たして勝つのは文醜・顔良選手か？それとも張飛・馬超選手か？実況・解説は私、陳琳がお送りします！」

観客達『わあーっ！』

ズッシリ

そして袁紹は玉座の椅子でふんぞり返っていた

陳琳「まずは知力対決です！」

そこで用意されたのが、バナナと数個の踏み台

陳琳「上空に吊られたバナナをジャンプせずにつかまえてください！」

ズコッ！

これに一刀がずっこけた。

一刀「チンパンジーのテストかよ！こんなもの誰だって解けるだろうが」

ところが

鈴々「背が届かないのだ〜！」

馬超「武器使っちゃダメなのか？」

文醜「バナナを食うのを諦める！」

ズコッ！

またまた一刀はずっこけた。

男「兄ちゃん大丈夫か？」

一刀「あんな問題も解けないのかよ！」

誰もが解けないと思っていたが

顔良「これでいいんですよ？」

スッ

観客達「おおーっ！？」

顔良は普通に踏み台を積み重ねて見事バナナに手を触れた。

馬超「そんな手があったのかよ〜！」

文醜「さすが斗詩（顔良の真名）知力34なだけはあるぜ」

顔良「文ちゃん！そんな言い方ないでしょ！」

何はともあれ文醜・顔良組の勝利

陳琳「続いては美力対決です」

袁紹「それぞれ服を変えて会場みなさんに評価してもらいますのよ」

ジャーンッ！

かこの中には沢山の服がおかれていた。

鈴々「ねえねえ馬超、どんな服を着ればいいのだ？」

馬超「あたしだって聞きたいよ！」

二人が服選びに悩んでいると

一刀「仕方ない、大金を手に入れるためだし協力するよ」

スッ

一刀が舞台に上がった。

陳琳「どうやら張飛・馬超組は男に助っ人を頼むようですがいいのでしょうか？」

陳琳が袁紹に聞くと

袁紹「別に構いませんわ、あんなブ男に何ができると言いますの？」

「

袁紹が認めたことにより一刀の助っ人が許可された。

一刀「（背丈が小さな子と中くらいな子に似合って人気がありそうな服といえば…あれしかないな）」

そしてお披露目の時

文醜「どうだいあたい達のセンス？」

顔良「どうかな？」

どろろん

はつきり言って二人の服に関するセンスはゼロに近かった。

そして鈴々達はというと

ジャーンッ！

馬超「ポケ○ンゲットだぜ！／＼／」

鈴々「ピカ―ッなのだー！」

どこかで見たような赤い帽子を被った男と黄色いネズミのコスプレをした二人がいた。

馬超「（あたしにこんな格好させやがって！こんな変なのがつけるわけないだろうが）」

ところが観客の反応は

観客達『わぁーっ！』

馬超の考えとは違い大盛況であつた。

陳琳「さあこれで一対一の戦いになった。勝負の結果は次の武力対決で決まるぞ！」

鈴々「力比べなら負けないのだー！」

馬超「あたしだって負けないぜ！」

文醜「ここまできたら意地でも負けてたまるかー！」

顔良「絶対勝とうね文ちゃん！」

バチバチッ！

火花をとばしあう四人

袁紹「では次の武力対決の勝敗の付け方ですが、ここはやっぱり…」

「

スッ

そう言つて袁紹は背中から

バァーンッ！

袁紹「袁家に伝わる白鳥のまわしを締めての女相撲としますわ！」

まわしに白鳥の首がついたものを取り出した。

男達『うおーっ!!』

まわしを締めた選手達に期待する男達

一刀「（鈴々はともかく、馬超があまわしを締めると…）」

モワッ

そして一刀は白鳥のまわしを締めた馬超を妄想していると

ボカーンッ！

馬超「このエロエロ魔神！」

一刀は馬超に後ろから殴られて気絶した。

そして試合の時、舞台にはすでに

顔良「文ちゃん、ちょっと恥ずかしいよう／＼」

文醜「我慢しろ斗詩、恥ずかしいのはあたいだって一緒さ／＼」

ジャーンッ！

すでに白鳥のまわしを締めた二人がいたが鈴々達の姿はなかった。

陳琳「おおっと、ここで速報です。張飛・馬超の両選手はくだらないから帰るとのことです。よって不戦勝により文醜・顔良組の勝利とします！」

この結果に

文醜「勝ったのはよかったけれど……」

顔良「こんな恥ずかしい格好しなくなかったよね」

袁紹「大金を差し上げるというのに欲のない方達でしたわね」

これにて袁紹軍兵士募集大会は幕を閉じた。

一方、一刀、鈴々、馬超はというと

鈴々「ハァ、結局お金は手に入らなかったのだ」

一刀「鈴々はよく頑張ったよ！」

馬超「最後があんな勝負じゃなけりやな」

三人が言いながら歩いていると

カツンッ！

一刀達の泊まる宿の前に

愛紗「遅いぞ鈴々！」

バンッ！

偃月刀を持った鬼が待ち構えていた。

鈴々「愛紗！？」

愛紗「まったくお前は勝手に出て行って宿には戻ってないし、心配かけさせおつて！」

一刀「愛紗、鈴々は…」

一刀が口を挟もうとすると

愛紗「一刀殿は口を出さないでください！ あなたも同罪なんですよ！」

一刀「はい…」

シュルルッ

とたんに小さくなる一刀

愛紗「だいたいお前は…」

愛紗が鈴々に説教していると

鈴々「ぐすんっ」

鈴々は涙を流しながら

鈴々「ごめんなさいなのだ〜！」

ぎゅっ

愛紗に抱きついた。

愛紗「鈴々、私も少し叱りすぎたようだな。もう泣くでない」

ぎゅっ

愛紗は鈴々を優しく包み込むように抱いた。

一刀「愛紗〜、俺もごめんなさ〜…」

一刀も愛紗に抱きつこうと涙を流しながら駆け寄るが

ドグボツ！！

一刀「何故俺だけ！？」

バタリッ

愛紗のクロスカウンターを食らって一刀は倒れた。

そして倒れた一刀に向かって

星「一刀殿、愛紗よりは小さいが私の胸ならば貸してやるぞ」

星が一刀の前で手を広げると

一刀「星ッ！」

バツ

すぐに飛びかかる一刀

愛紗「一刀殿、鈴々がいるのですから少しは自重してください！」

「

鈴々「鈴々は別に構わないのだ。それにそれは愛紗が勝手に焼きもちやいているだけなのだ。」

星「愛紗よ、お主も少しは素直になればよいのに。」

愛紗「何いつてるかー！／＼／＼」

馬超「あの、あたしはどうすりゃいいんだよ！」

こうしてなんとか仲直りした愛紗と鈴々であつた。

「袁紹軍武將試験（後編）」（後書き）

次話の予定は未定ですが、ついに華琳が出てきます

## 「馬超、曹操を狙う」（前書き）

久しぶりの更新です。連載していた作品が一つ終わって時間に余裕ができたので投稿しました。（また次回から新作を投稿するので不定期投稿になります）

「馬超、曹操を狙う」

馬超を一刀達が泊まっている宿においてから一夜が明けた。

そして次の日の朝

愛紗「ほう、馬超はある人を追って故郷の西涼からやって来たのか」

愛紗達は真名は交換していないが馬超とすっかり打ち解けていた。

馬超「ああ、名前は教えられないけどな」

星「確か西涼には当主である馬騰殿がいたはずだがよく許してくれたものだな」

星が言つと

馬超「・・・」

馬超は黙りこんだ。

鈴々「馬超はどうしたのだ？」

一刀「さあね？」

一刀達が不思議に思っていると

ゴォンゴォンッ！

突然銅鑼ひらの音が鳴り響き

ササッ！

人々が避けて一本の大きな道を作り上げた。

愛紗「何が起きるんだ？」

鈴々「おじちゃん、何が始まるのだ？」

鈴々が側にいたおじちゃんに聞いてみると

おじちゃん「この村に国のお偉いさんが通るからみんな道を開けて  
いるんだよ」

一刀「なるほど大名行列みたいなもんか」

星「それはさておき誰が通るのだ？」

星がおじちゃんに聞くと

おじちゃん「確か曹操とか…」

ビクンッ！

おじちゃんの話聞いた馬超は

馬超「あんの野郎！」

ダダッ！

血相変えて大きな道に向かっていった。

愛紗「待て馬超！？」

一刀「追いかけるぞ！？」

ダダッ！

一刀達も馬超の後を追っていった。

パカポコッ

その頃、大きな道には金髪縦ロールを2つ構えた女の子が大きな馬に乗り、その左右を赤い服を着た黒髪のロングの女性と青い服を着た水色の髪の女性が金髪縦ロールを守るように馬に乗っていた。

金髪縦ロール「この国は平和ね」

黒髪ロング「曹操様が納めている国はどこもかしこも平和に違いありませんよ」

この金髪縦ロールの女の子は実は曹操孟徳（真名は華琳）である。

そして黒髪ロングは夏侯惇（真名は春蘭）、水色の髪は夏侯淵（真名は秋蘭）という名であった。

華琳「だけでも争いを起こしてこそ平和が起きるのよ！もっと国を

大きくするには戦をしなければ」

春蘭「その通りです曹操様」

華琳達が話をしていると

馬超「曹操覚悟ー！」

ダダッ！

馬超が十文字槍・銀閃を構えて華琳に突っ込んできた。

ジャキンッ！

銀閃は華琳をとらえようとするが

ガキンッ！

おしくも春蘭の大剣・七星餓狼に食い止められてしまった。

馬超「くそっ！ならもう一度！」

サッ！

馬超は春蘭から距離をとって再び攻めようとするが

一刀「落ち着けよ馬超！」

ガシリッ！

後ろからやって来た一刀に捕まれてしまった。

馬超「（このあたしが気配を感じれなかったなんて！？）放せ北郷！曹操はあたしが殺してやるんだ！」

じたばた！

一刀に押さえつけながらも暴れる馬超に対して

一刀「そんなに暴れると！？」

むにっ！

馬超「／／／」

馬超が暴れたせいで一刀は馬超の胸を揉んでしまいその瞬間

馬超「このエロエロ魔神がー！どこ触ってやがるんだ！」

一刀「不可抗力…ぐほっ」

ドカカツ！

馬超の標的は華琳から一刀に切り替わり、一刀は馬超にボコボコにされた。

愛紗「馬超、大丈夫か！？」

鈴々「急に飛び出してどうしたのだ？」

そしてようやく愛紗達が馬超の元にたどり着くと

星「ほう、これはまたすごいことに」

ポローン

そこには馬超にボコボコにされた一刀が倒れていた。

みんなが一刀に夢中になっていると

華琳「春蘭・秋蘭！この者をとらえなさい！」

春蘭・秋蘭『はっ！』

シュバツ！ ガシツ！

華琳に命じられて二人は馬超を取り押さえた。

馬超「しまった油断しちゃった！？」

そして華琳は押さえつけられている馬超の顔を見ると

華琳「あら、あなたは確か西涼太守である馬騰の娘だったわね。あのマヌケな馬騰にこんないい娘がいたとは驚きね」

父である馬騰を馬鹿にされた馬超は

馬超「うるさい！父を殺した敵討ちだあたしと勝負しろ！」

愛紗達『！？』

この言葉に愛紗達は驚いた。曹操は馬超の父である馬騰を殺したという事実が衝撃であった。

華琳「親の敵討ちに私と戦えっていうの？その心意気は買ってあげるけどこれから死ぬあなたとどうやって戦うっていうのかしら？」

愛紗達「！？」

またも愛紗達に衝撃が走った。

華琳は愛紗達を見ると

華琳「見たところ馬超の仲間らしいけど何故そうなるのか不思議なようね。答えは簡単よ、太守である私に刃を向けたものは即刻死刑！これは当然なのよ」

華琳が言うと

華琳「それではさよならね」

サッ！

華琳が去ろうとすると

愛紗「待ってくれ曹操殿！」

ビシッ！

愛紗が華琳を呼び止めた。

華琳「しつこいわね、今さら何を…」

くるっ

華琳が愛紗の方を向くと

ドッキーンッ！

華琳は愛紗に心を打たれた。

華琳「（やつだー！黒髪 of 山賊狩りの関羽じゃない！？強くて美しいって聞いたから我が軍に入れようと思ったけどこれはチャンスだわ／＼／＼）」

もんもん

華琳が一人で妄想していると

愛紗「私達と馬騰は同じ宿に泊まっただけの仲だが殺されるというのを黙ってみておれん！どうか馬超の命を助けて頂きたい！」

スッ

愛紗が頭を下げた華琳に頼むと

華琳「そうねえ、私の条件をのむというのなら馬超を殺すのは見逃してもいいわよ」

華琳が言うと

愛紗「わかった条件をのもうだから馬超の命は助けてくれ！」

愛紗が華琳に頼むと

華琳「いいわ、馬超の命は助けてあげる」

愛紗「よかった（ホッ）」

華琳「ただし条件として関羽！あなたは今夜私と<sup>ねや</sup>閨で過ごすのよ！」

ビシッ！

愛紗「なっ！？閨だと／＼／」

この時愛紗は曹操の噂話を思い出した。曹操は女好きで気に入った女は閨に連れ込んで ピー することを

華琳「嫌ならいいのよ馬超は殺すし、天下の関雲長が一度決めたことから逃げ出したって噂になるからね」

華琳はいたいところをついてくる。

そして迷ったあげく愛紗の返答は

愛紗「わかった！私でよければ付き合おう！」

華琳と閨を共にすることを決意した。

華琳「商談成立よ。春蘭、馬超は牢に入れときなさい！では関羽、また夜にね」

スッ

そして華琳は去っていった。

鈴々「星、曹操は愛紗を閨に呼んで何するのだ？」

星「それはだなあ……」

星が鈴々に話そうとすると

愛紗「鈴々にはまだ早い！」

星「おやおや」

愛紗に怒鳴られてしまった。

そして夜が来て

愛紗は華琳が用意した天幕の閨で裸になっていた。

愛紗「（ううつ、馬超を助けるためとはいえ私のはじめてを曹操にやるなんて）」

愛紗は今さらながら後悔していた。ちなみに条件は愛紗一人だとい  
うので星と鈴々は宿に泊まっている。

ヒラッ

華琳「うふふっ！関羽はしっとりつやつやできれいな」

華琳が天幕にタオル一枚を巻いて入ると

バサッ

華琳「さあ、閨の時間よ！」

華琳はタオルを脱ぎ捨てて愛紗に襲いかかろうとする。

愛紗「（もうダメだ！？）」

そして華琳と愛紗の肌が触れ合おうとしたその時！

ガシャンッ！

刺客「曹操、お命頂戴する！」

華琳の命を狙う刺客が天幕の上から剣を突き立てて襲いかかってき  
た。

愛紗「（まずい！？得物は置いてきてしまったから反撃できない！  
？）」

愛紗がどうにもできずに戸惑っていたその時！

バリッ！

一刀「このくせ者がー！」

刺客が降りてきたすぐ後に天幕の上から一刀が現れた。

愛紗「一刀殿！？」

華琳「！？」

突然の一刀の登場に驚く二人

そして現れた一刀は

一刀「くらえーっ！」

ドカツ！

刺客「ぐえっ！？」

刺客に一撃食らわせると

刺客「ちっ！邪魔者がいたとはな！？ここは退却だ」

サッ！

刺客が逃げようとする

一刀「逃がすかよ待てー！」

ダッ！

一刀も刺客の後を追っていった。

そんな騒動が起きたあと、天幕に取り残された裸の愛紗と華琳は

華琳「あの男は確か馬超に殴られていた情けない男ね。でもその情けない男に助けられるなんてね」

スッ

華琳はタオルを巻くと

華琳「もう帰ってもいいわよ、あの男に免じて勘弁してあげるわ」

愛紗「えっ！？」

華琳「春蘭！関羽を送ってあげなさい！だけど私はあなたを諦めた訳じゃないからね、いつか必ずや私と閨を過ごしてもらわよ」

愛紗「（ぞくっ！？）」

その言葉に恐怖を感じる愛紗だった。

しばらくして、愛紗が春蘭に送られていると

春蘭「喜ぶがよい、華琳様が馬超を解放してもよいと言った。馬超と共に帰るがよい」

愛紗「う、うむ」

愛紗は何か考え事をしていた。

愛紗「なあ夏侯惇殿、ひとつ聞くが曹操殿は本当に馬騰殿を殺したのか？私にはあの者が人殺しするようにには思えないのだが」

春蘭「・・・」

愛紗の言葉に春蘭は黙りこんだ。

そして

春蘭「関羽よ、お前は人を見る目は確かなようだ。いいだろう信じてくれるかわからないが真実を教えてやる」

春蘭は話を開始した。

## 「馬超、曹操を狙う」(後書き)

ちなみにこの小説はアニメにそっていますので春蘭は眼帯をせず両目があります。

## 「馬騰殺害の事実」（前書き）

作者が早く続きを書きたいのと続きを楽しみに待っている人（いるのかな？）のため書いてみました。

## 「馬騰殺害の事実」

夏侯惇（春蘭）は馬騰殺害の事実を愛紗に話しかけた。

春蘭「今から数カ月前のことだ。華琳様と馬騰は何進將軍かしんに呼ばれていたのだ」

数カ月前

何進「退屈じゃのう、誰か余興（宴会の演芸）をせぬか」

退屈をしていた何進はその場にいた曹操（華琳）達に命じると

馬騰「ういゝ、ヒック！それでは何進將軍、この西涼太守である馬騰が余興をしましょう」

酒に酔った馬騰がいうと

スッ

馬騰はザルと手拭いを用意して

馬騰「これぞ和の国（日本）に伝わる宴会芸の一つ」

キュッ！

馬騰は手拭いを頭に巻いてザルを手にとると

馬騰「ドジョウすくいでございまーす！あらえつさつさー！」

馬騰の意味不明な行動に

しゅん…

場の空気が冷めてしまった。

そして何進將軍は

何進「もうよい！つまらなすぎてあきれるわい！」

ビシッ！

と厳しくいつてしまった。

馬騰「これじゃダメですか？ならば裸躍りでも…」

スッ

酒に酔った馬騰が服を脱ごうとすると

何進「無礼者！とつとと去るがよい！曹操、送ってやれ！」

アニメを知っている人ならわかると思うが何進將軍は女である。

何進は華琳に命じると

華琳「わかりました何進將軍！（何で私がこんな酔っ払いの世話を

！  
」

ホントは華琳だって従いたくなかったが何進の方が位くらいが高いので従うしかなかった。（もしそむいたら罰を与えられるため）

そして帰り道

馬騰「ういゝ」

パカポコッ

馬騰は酔っ払いながら馬に乗っていた。

華琳「馬騰、危ないから気を付けなさいよ」

華琳が心配するが

馬騰「馬鹿言つてんじゃねえよ！俺を誰だと思ってるんだ西涼太守である馬騰様だぞ……」

馬騰が話を続けようとしたその時！

ぐらりっ

馬騰「えっ！？」

ゴロゴロッ！！

馬騰「うわぁーっ！？」

馬騰は馬から落馬して坂を転げ落ちた。

華琳「まったくもう、何をして…」

ひょこっ

華琳は馬騰が落ちていった坂を見てみると

華琳「!？」

馬騰は岩に頭を強く打ち、亡くなってしまった。

しかもタイミングが悪く

兵士「ひっ!？」

偶然その場にいた見つかってしまい

兵士「曹操様が馬騰様を殺害したぞー!？」

ダッ!

その場にいた兵士から見たらそう見えなくても不思議はなく兵士はそのまま逃げていった。

そして次の日、華琳に馬騰殺害の容疑がかかる。現代なら即警察行きだが、この世界では人殺しは当たり前なので華琳は逮捕されなかった。

だが瓦版（新聞）は各地に流れていく

春蘭「こんなでたらめ書きおって！」

ブリッ！

春蘭は瓦版を破くと

春蘭「華琳様、さつさと民達に話をしてやりましょう！」

しかし華琳は

華琳「ほっておきなさい、どうせ私が話したところで全員が信じるかどうかかわからないじゃない。むしろこの件で私に齒向かう者が増えて好都合だわ」

そして華琳は真実を公表しなかった。

春蘭「以上が真実だ」

春蘭が真実を話すと

愛紗「成程、では夏侯惇殿馬超には真実を話した方がいいのではないか？」

春蘭「・・・」

愛紗の言葉を聞いた春蘭は黙りこむが

春蘭「いいだろう。信じるかどうかかわかんがな」

そして牢屋前

春蘭は牢から出された馬超に全てを話すが

馬超「嘘だっ！そんな話信じるもんか！」

と言った具合であつた。

愛紗「馬超、信じたくない気持ちもわかるが事実なのだ」

愛紗が春蘭をフォローするようなセリフを言うと

馬超「関羽！お前だって曹操に騙されているんだ！いくら関羽でもそれ以上言ったら許さないぞ！」

愛紗にまできつく当たる馬超

すると馬超の後ろから

一刀「俺は夏侯惇の話を信じるぜ」

バンッ！

一刀が現れた。

馬超「北郷！？」

愛紗「一刀殿！？」

春蘭「貴様は！？」

三人が突然現れた一刀に驚くと

一刀「愛紗すまないな刺客には逃げられちまってな。そして帰る時に夏侯惇の話が聞こえちまってな」

愛紗「（この私が気配を感じなかったとは！？）そ…そうか」

一刀「そして話を聞いてみたら事実だと感じてね」

一刀が言うと

馬超「北郷！お前まで曹操の味方する気かよ！」

馬超が叫んだ。

しかし一刀は

一刀「味方をするわけじゃない。馬超、真実を受け止めるんだ」

一刀が言うと

馬超「うるせえ！あたしに説教するんじゃないやねえよ！」

ブォンッ！！      ズッシーンッ！！

馬超は銀閃を一刀めがけて降り下ろした。

春蘭「馬鹿め！？今の一撃であの男は死んだぞ！？」

愛紗「一刀殿！？」

二人は一刀が亡くなったと思っていたが

一刀「おいおい、俺は生きてるよ」

三人「えっ！？」

ジャーンッ！！

なんと一刀は馬超の一撃を木刀で受け止めていた。

一刀「こんな一撃じゃ俺は殺せないよ」

一刀は馬超を挑発すると

馬超「この野郎！」

ガンガンッ！

馬超は連続で攻撃を仕掛けるが

パシッ！ パシッ！

一刀は馬超の攻撃を全て受け流していた。

春蘭「あの男は何者だ？あんな細い体でよく何度も受け止められる

ものだな！？  
「

愛紗「あ…ああ！？  
「

これには初めて見る春蘭だけでなく愛紗も驚いていた。

馬超「くそっ！くそっ！  
何で倒れないんだよ！？  
「

馬超が叫ぶと

一刀「俺は馬超がわかってくれるまで何度でも受け流すさ！武器と武器が交われれば俺の気持ちを馬超が理解してくれるだろうしね  
「

ドキンッ！

この一刀の言葉に馬超は何かを感じていた。

今から数年前

西涼の屋敷

幼い馬超「ぐはっ！？  
「

馬騰「どうした翠（馬超の真名）いつもより気合いが足りないぞ  
「

幼い馬超は馬騰から鍛練を受けていた。

幼い馬超「な…何でもないよ！  
「

馬超は強気に言うが

馬騰「ははん、さてはまたおねしょしたんだな」

馬騰が言うと

幼い馬超「（ドキンッ!?）お…おねしょなんてしてないよあたしをいくつだと思ってるんだよ!／＼／＼」

馬超が誤魔化そうとすると

馬騰「嘘をついてもダメだぞ翠、武器と武器が交わればお前の心が俺にはわかるからな」

幼い馬超「ち…父上／＼／」

馬騰「ガハハッ！濡れた下着は自分で洗えよ！」

現在

馬超は一刀の言葉が昔、馬騰が言っていた言葉と同じことを言っていたことを感じていると

一刀「馬超、わかってやれ！曹操は馬騰を殺してなんかないんだ」

そして一刀の言葉を聞いた馬超は

馬超「うっうっ…！」

涙を流していた。

馬超「ホントはあたしだって曹操は殺っていないかもって思ってたんだ。だけど父上が亡くなった原因を曹操に擦り付けるしかなかったんだよ！」

馬超が叫ぶと

ぼんっ

馬超に近付いた一刀は抱きついて背中に手を置くと

一刀「今までずっと我慢してたんだろ。俺の胸の中でおもいきり泣きな」

それを聞いた馬超は

馬超「うっ…うわーんっ！！」

一刀の胸の中で豪快に泣いた。

それを見た愛紗達は

春蘭「どうやらわかってもらえたようだな」

愛紗「そのようだ。（チクチクッ！）（何故だ？何故一刀殿と馬超を見ていると胸がちくちくするのだ？）」

愛紗は一刀に恋心を抱いていることに気付いてなかった。

そして翌日

鈴々「馬超は西涼に帰るのかなのだ？」

馬超「ああ西涼のみんなに事実を話さなきゃいけないからな。あんたら達に出会えてよかったよ」

馬超は愛紗達と別れて西涼に帰ることになった。

愛紗「今別れてもまたいずれ会うであろう」

星「その時を楽しみにしているぞ」

鈴々「さよならなのだ」

愛紗達が馬超に別れの言葉を言うと

馬超「あつ！そうだ北郷ちよつとこつちに来てくれよ」

一刀「何だ？」

馬超は一刀を呼び寄せると

馬超「昨日のことには礼を言っけどあたしが泣いたって誰にも話すなよ（ひそひそ）」

一刀「どうしようかな」

一刀が言った瞬間

ぶみっ！！

一刀「たぁーっ!？」  
「

馬超は銀閃の柄で一刀の足を刺した。

馬超「それじゃあまたな！」  
「

ダダッ!

そして馬超は駆けていった。

鈴々「お兄ちゃんどうしたのだ？」  
「

一刀「いたた! 別に何もないよ」  
「

そして愛紗は一刀を見つめると

愛紗「(でえいつ! 何故私は一刀殿のことを意識するのだノノノ)  
「

星「(ほほう、愛紗もやはり乙女のようなな)」  
「

一刀のことで赤面していた愛紗があることを思い出した。

愛紗「そういえば一刀殿、曹操が刺客に襲われそうになった時素早く来ましたがどうしてですか？」  
「

愛紗が聞くと一刀は

一刀「ああそれは目が覚めた後、星から話を聞いて先回りして愛紗

を守るために天幕の上に隠れてたんだよ。だけど愛紗が天幕に入ってきた瞬間服を脱ぎ出して裸になっていたのをそのまま見続けてさ、そしたら曹操まで裸になって二人がくつつこうとした時に隣が騒がしいんで見てみたら刺客でさ、そのまま刺客を退治に…」

ここで一刀が閉じていた目を開いてみるとそこには

愛紗「ほほう、私の着替えを覗いた上に曹操に襲われそうになっても助けずに覗きをするとはね」

ゴゴゴッ…!!

一刀の目の前には鬼の角が生えたら愛紗が偃月刀を構えていた。

一刀「いや…あの…!?ごめんなさい!」

ピューッ!

一刀は愛紗から逃げ出した。が…

愛紗「待てこのエロ男がー!!」

ドドオーッ!!

愛紗は物凄い勢いで一刀に迫っていく。

鈴々「ずるいのだ。愛紗とお兄ちゃんだけで鬼ごっこするなんて!

鈴々もするのだ」

星「ふむ、では私も参加させてもらおうか」

ドドオーッ!!

愛紗から逃げる一刀と一刀を追う愛紗、二人を追う鈴々と星

四人の旅はまだまだ続く。

## 「馬騰殺害の事実」（後書き）

とりあえず第一章としての分が終わるまでは連続投稿してみます。

（新作を待っている人（いるのかな？）は少しの間お待ちください。

）次回は董卓が登場します

「トントン？」（前書き）

ついに十話を越えたー！

西森の中では十話を越えたらようやく長期掲載ということの意味します。これから頑張って更新しますのでよろしくお願いします。

何度も言いますがこの小説はアニメをもとに執筆していますのでアニメとは違う展開がちらほらあります。

「トントン？」

とある城

？「ゆえ〜！どこにいるの？」

ドタバタッ

とある城にて眼鏡をかけた緑髪の女の子がドタバタ廊下を走っていた。

？「おいおい詠<sup>えい</sup>そんなに慌ててどうしたと言うのだ？」

スッ

そこへ偶然通りかかった巨大な斧を持った影が薄そう…

？「だまれっ！」

もといプライドが高そうな女の子が賈<sup>カ</sup>馭<sup>ゴ</sup>（真名は詠）に聞くと

詠「華雄將軍、月<sup>ゆえ</sup>を見なかった？」

華雄「董卓様か？今日は見ていないが」

月とは董卓の真名である。

詠「あの子ったら『村の様子を見に行きます。なるべく早く帰りますので待っていてください』董仲穎<sup>トウチュウエイ</sup>って書き残して出掛けちゃっ

たのよ！ああもう自分の目で見たっていう志はいいけれど村近くの森には最近化け物が出るって聞いているのに心配だわ！？」

詠が一人で慌てていると

華雄「そう心配するな。董卓様だって子供では…」

華雄が心配をなくすため話しかけると

詠「うるさい！ あんたなんか何がわかるっていうの！こつしちやいられない早く搜索隊を編成しなくっちゃ！」

ダダダッ！

詠は慌てて走っていった。

詠が去った後

華雄「私に向かってあんただと？」

と？を浮かべて呆氣にとられていた。

その頃、一刀達一行は

一刀「痛いです」

ぼろ〜ん

愛紗「ふんっ！自業自得だろうが」

前回愛紗を助けずに覗きをした罰として一刀はボロボロな体にされていた。

鈴々「星、何で愛紗はお兄ちゃんをボコボコにしたのかなのだ？」

星「さあわからんな」それにしても裸を見られたくらいであればひどいと思うのだが」

前にも愛紗は一刀に裸を見られた（三話目参照）が今回はその時以上のお仕置きだった。

そして一刀達が歩いていると

？「やめてください！」

ビクンッ！？

遠くから女の子の声が聞こえてきた。

愛紗「あつちから声が聞こえる！鈴々、星いくぞ！」

鈴々「合点承知なのだ！」

星「うむっ！」

ダダッ！

声が聞こえてきた場所に急ぐ一行だが

一刀「ま…待ってくれよう！」

ボロボロな一刀は後から行くしかなかった。

声が聞こえてきた場所

？「やめてください！」

そこには白い髪のウェーブ（西森は髪型については素人です）の大人しそうな少女が三人のチンピラに囲まれていた。

アニキ「まあそう言うんじゃないよ」

チビ「俺達と一緒に遊ぼうぜ」

デク「だろ」

グイツ！

三人が少女の腕を無理矢理引っ張ろうとすると

バツ！

愛紗「止めぬか馬鹿者共め！」

鈴々「嫌がつている人に無理矢理はダメなのだ！」

そこへ愛紗達がたどり着いた。

アニキ「なんだデメエらは？」

アニキが聞くと

星「聞いて驚くな！この者こそ噂に聞くほど美人ではないが黒髪の山賊狩りだ」

ビシッ！

星は愛紗を指差しながら言う。

愛紗「どういう意味だ！」

愛紗がその事に怒っていると

アニキ「フンッ！確かに美人じゃないがたかが女三人に何ができる！」

チビ「逆にお前達が俺達の相手をしてもらうぜ」

デク「だな」

スッ

チンピラ達は構える。

愛紗「貴様らめ、誰が美人でないと もう許さん！」

ジャキンッ！

愛紗達も武器を構える。

とそこへ

ガサガサッ      バッ！

一刀「遅くなつてすまない」

ぼろ〜ん

ボロボロになつた一刀が現れた途端

チンピラ達『ギャーッ！！化け物だぁーっ！？』

ピューッ！

あまりにも一刀の顔が怖かったのかチンピラ達は去っていった。

一刀「何がどうなつてるの？」

しばらくして

バシャバシャッ！

一刀「お水ありがとうございます」

？「いいえ、私も助けてもらいましたから（顔がはつきりするとい顔してますね／＼／＼）」

一刀は助けた少女から水をもらい顔を洗つてようやくいつもの顔に戻った。

鈴々「そういえばまだ名前を聞いてないけど名前は何なのだ？」

鈴々が聞くと

？「私はとう…」

少女が名前を言い出そうとした時

？「（いけない。名前を言ったら襲われるかもしれないから偽名を使わなきゃ）」

少女は友達から言われた通り偽名を使うことにした。

トントン？「私はトントンです」

鈴々「トントン？何だか鈴々みたいな名前なのだ。鈴々は張飛なのだ」

愛紗「私は関羽だ」

星「趙子龍と申す」

一刀「俺は北郷一刀。よろしくねトントンちゃん」

トントン？「は…はい／＼／」

一刀「（何で顔が赤いんだ？）」

星「（北郷殿は天性の女誑しのようだな）（ニヤニヤ）」

そして一行はトントンを送りに村に行くことにした。

鈴々「そういえばトントンは何で村に行くのだ？」

鈴々が聞くと

トントン？「それはですね最近村に化け物が現れると聞いて城主としてではなく一度化け物を見てみたいと思ひまして」

愛紗・鈴々『化け物！？』

ゾクッ！？

トントンの化け物という言葉に怯える愛紗と鈴々

一刀「危ない目にあうかもしれないのに随分勇敢なんだね」

勇敢というより好奇心が強すぎるだけだと思ふのだが

そして一行が村にたどり着くと

愛紗「これは！？」

ズォーーンッ！

なんと村の民家の前のあちこちに巨大な岩が置かれていた。

星「何故このような岩が？」

鈴々「何かの儀式なのか？」

鈴々が言うと

村長「これも全ては化け物の仕業なのですよ」

村の民家から村長らしき男が現れた。

村長は一行を家に招き入れると

村長「ことの始まりは数カ月前、森の方から不気味な音が聞こえましてな、それから数日後突然民家の前に巨大な岩が置かれるようになったのです。そして村の若いものが不気味な音がした方に様子を見に行ったところ……」

トントン？「化け物が出たということですね」

村長「その通りですじゃ」

ゾクッ！？

化け物という言葉にまたも怯える愛紗と鈴々

そしてその頃、一刀はというと

一刀「（この岩じゃまだな）」

岩をじっと見つめて

一刀「せいのっ！」

ぐぐっ！

岩を持ち上げようとしていた。

一方、村長の家

星「ところで村長殿、その化け物とはどのような姿なのですかな？

」

村長「それが見たという村のものに聞くと…」

・ 血のように真っ赤な角を持つ

・ 不気味な音をながしながら迫り来る

・ 獣の鳴き声を発声する

村長「等々で逃げたため誰も化け物の姿を見たものがないのですよ」

村長が言つと

星「村長殿よ、いい時に我々が来たものだな。実は我々は皆武に自信があつてな、その化け物を退治してやろうではないか」

星が言つと

愛紗「な…何を言うのだ星！」

鈴々「勝手なこと言わないでほしいのだ！」

星に抗議する二人

星「おやおや、黒髪 of 山賊狩りと張飛が困っている人を見捨てると  
いうのか？まさか二人して化け物が怖いというのか？」

愛紗・鈴々『うっ！？』

凶星であつた。

愛紗「仕方がない村を助けるためだしな」

ブルブルッ

と言いながらも足が震える愛紗

鈴々「それにこっちには強いお兄ちゃんがいるから化け物になんか  
負けないのだ！」

ダッ！

鈴々は一刀を呼びに外に出る。

愛紗「あんな優男がなんの役に立つと言うのだ」

星「やれやれ」

愛紗はまだ一刀の実力を認めていなかった。

そんなとき

鈴々「大変なのだ！？お兄ちゃんがないのだ！？」

鈴々が慌てて家に入ってきた。

愛紗「まったく、一刀殿はいつもいつも」

ダッ！

愛紗達も外に出ていくと

トントン？「あれっ？岩がありませんけど？」

なんと！？さっきまであった巨大な岩が無くなっていた。

愛紗「どういうことだ？」

愛紗達が不思議に思っていると

村人「そこにあった巨大な岩ならあんたらと一緒にいた男が『邪魔だから山に返してくる』と言って持ち上げていったよ。しかしすごい男だな村人数人がかりでようやく持ち上げられる岩を一人で汗水流さず持ち上げたんだから」

愛紗達「えっ！？」

これには驚く愛紗達だった。

「トントン？」（後書き）

次回、怪物が現れる。

（もう正体がわかる人もいますけどね）

## 「化け物退治」(前書き)

時間が空きましたので連日投稿です。

## 「化け物退治」

化け物が潜むという森

結局愛紗達は化け物退治を引き受けることになってしまい一刀を置いて森にやって来た。

ゲヒヒツ！（カラスの鳴き声）

愛紗・鈴々『ひっ！？』

突然聞こえてきた声に怯える二人。

星「今のはカラスだ。まったく鬼をもびびらす力を持っていないながら化け物を怖がるとは情けない。少しは村娘のトントンを見習え！」

トントン？「へうゝ！？」

と言われながらもトントンも怖がっていた。

愛紗「仕方がなからう！私はお化けや妖怪の類いは苦手なのだ！」

鈴々「鈴々は愛紗が怖がっているから怖がってあげてるのだ！？」

星「情けないもの達だな一刀殿が見たら笑われてしまうぞ」

愛紗「うつ！？」

あんな奴に笑われてたまるか！と思う愛紗だった。

星「しかしトントンまで来なくてもよかったのではないか？」

星が聞くと

トントン？「私も城主…ではなく村娘として化け物の被害を食い止めたのです」

ということではトントンもやって来たのだった。

そして一行は化け物が現れたという場所にたどり着いた。

愛紗「鈴々、怖かったら抱きついて構わんからな」

鈴々「へへ〜んだ！愛紗だって怖かったら抱きついて構わないのだ

」

ガタガタブルブルッ

と言いながらも足が震える二人。

とその時！

？「くっちまうぞー！」

どこからか声が聞こえると

愛紗「ギャーッ！？」

鈴々「怖いのだ〜!？」

ガシガシッ

互いに抱き合う二人

星「ぷぷぷっ、今のは私の声だ」

さっきの声は星が愛紗達をからかうために出した声だった。

星がその事を白状すると

ゴツチーンッ!!

星は愛紗に殴られた。

星「私なりに緊張をほぐそうと思って…」

愛紗「ほぐれるか馬鹿者め！」

愛紗が星に説教していると

？「グルルーツ!!」

愛紗「いい加減にしろ!二度目を通じるとでも思っているのか!

」

愛紗は突然聞こえてきた声はまたも星の仕業だと思い怒鳴ると

星「私は何もしていないが？」

愛紗「じゃあ鈴々か？」

くるっ

愛紗は鈴々の方を向くと

鈴々「今は鈴々じゃないのだ」

愛紗「では…」

愛紗はトントンの方に首を向ける

トントン？「私じゃありませんよ」

愛紗「となると一刀殿だな！隠れてないで出てきなさい！」

愛紗が叫ぶと

ガササツ　　バビュンツ！

茂みの中から何者かが飛び出してきた。

鈴々「お兄ちゃんじゃないのだ！？」

星「何者だろうか？」

現れたのは一刀ではなく赤髪の触角のような二本のアホ毛が立った獣の仮面をつけた女の子が現れた。

トントン？「もしかしてこの人が噂の化け物さんでしょうか？」

愛紗「確かに赤い角のようなものがあるがお主がそうなのか？」

愛紗が聞くと

女の子「…食べ物持ってきたか？」

愛紗「は？」

すると女の子は

女の子「…持ってきていないなら持つてこさせる！」

ジャキンッ！

どこから出したのか女の子は物凄い戟を取り出すと

女の子「…食べ物よこせ」

ビュンッ！

いきなり攻撃を仕掛けてきた。

愛紗「なっ！？」

ガキンッ！

愛紗はとっさに青龍偃月刀で攻撃を防いだ。

鈴々「愛紗！？大丈夫かなのだ！？」

鈴々が愛紗を心配すると

ジーンッ！

愛紗「（受け止めたただけだというのに何で一撃だ。悔しいが一人で勝てる相手ではなさそうだな）」

愛紗がそう考えると

愛紗「鈴々、星、手を貸してくれ！こいつはたぶん三人でかからな  
いと勝てない」

愛紗が言うつと

星「お主がそういうのなら余程の使い手なのだろう」

鈴々「三VS一は卑怯だけど仕方ないのだ！」

ジャキンッ

二人は武器を構えて愛紗の横に立つ。

愛紗「トントンは下がっている！」

トントン？「は…はい！」

サッ

トントンが木の後ろに隠れると

鈴々「うりゃりゃーっ！」

シュシュシュンッ！

まず始めに鈴々が攻撃を仕掛ける。

だが

カキカキンッ！

女の子はすべて受け流した。

星「ならば助太刀するぞ鈴々！」

シュンッ！

星が鈴々を助けるべく出陣する。

星「セイセイセイッ！」

シュシュシュンッ！

星は高速の突きを繰り出すが

サササッ

軽く避けられていた。

星「馬鹿な！？我が突きを簡単に避けるとは！？」

それを見た愛紗は

愛紗「ならば私もいくぞ！」

バツ！

戦いに参戦した。

愛紗「ハアーツ！」

鈴々「うりゃりゃーっ！」

星「セイセイセイッ！」

三人の同時攻撃。普通ならばこれでたいていはやられるはずだが

ガガガガガンッ！

女の子はすべての攻撃を受け流していた。

女の子「…お前達、弱い」

ぐっ！！

女の子が戟を握る手に力を込めると

ブォンッ！！

戟を振るい物凄い衝撃を起こした。その結果

愛紗「ぐわっ!？」

鈴々「にやにやーっ!？」

星「ぐほっ!？」

バタッ!

三人は衝撃で吹き飛ばされてしまった。

トントン? 「皆さん!？」

これにはトントンも驚く

愛紗「ぐっ…」

愛紗は何とか立とうとするが体が痛くて立ち上がれない。

そしてそこへ

ザッ

触角の女の子が愛紗に迫る。

女の子「…食べ物くれないなら死ね」

ジャキンッ!

女の子の持つ戟が愛紗に迫る。

愛紗「（私はここで死ぬのか？せめて死ぬ前に一刀殿に会いたかった…）」

愛紗が死を覚悟したその時

ガキンッ！

一刀「待たせてごめんね愛紗」

ドンッ！

一刀が駆けつけて女の子の攻撃から愛紗を守った。

愛紗「一刀殿！？」

愛紗が驚いていると

女の子「（ぴくんっ）」

サッ

女の子の何かに反応して一刀から距離をとった。

スッ

そして一刀を指差すと

女の子「…お前強い。久々に本気が出せる」

愛紗達「!？」

愛紗達は驚いた。何故ならばさっきの戦いですら女の子に本気を出させていなかったのだから

女の子「…お前、名前は？」

スッ

女の子が戟を構え直して聞くと

一刀「北郷一刀だ。君もなかなかの強さだね」

女の子「…恋でいい」

スッ

二人は互いに構え、そして…

シュバンッ!

二人は互いに高速でぶつかりあった。

星「なんという早さだ!？早さならば我よりも早いぞ!？」

素早さに自信のある星が驚くくらい二人は早かった。

ガキガキンッ!!

互いにぶつけ合う一刀と恋

鈴々「お兄ちゃんってあんなに強かったのか!？」

愛紗「まさか、ただ早いだけだろう」

愛紗はまだ一刀の実力を認めようとしない。それもそのはず、普段からスケベでエッチな男を簡単に認めるわけには愛紗なりにいかなかったのだ。

そして互いに攻防を繰り返している二人だが

ピタッ

突如、恋の動きが止まった。

恋「…一刀、本気を出してない。まだまだ実力を隠してるからつまらない」

愛紗達「!？」

またも驚く愛紗達

一刀の実力は本気の恋以上のものだったのだ。

一刀「手を抜いているわけじゃないよ。ただ本気が出せない理由が…」

一刀が言おうとした時

グルルーツ！！

どこからか声が聞こえてきた。

愛紗「この声は化け物の叫び声！？」

鈴々「他にも化け物がいたのかなのだ！？」

愛紗達が驚いていると

グルルーツ！！

音は恋のお腹から聞こえてきていた。

すると一刀は

一刀「お腹空いてるなら食べなよ」

スッ

懐から握り飯を取り出して恋に差し出した。

恋「…いいの？」

一刀「もちろんさ」

一刀から了承を得ると恋は

タタッ！

茂みの方に走り

恋「…これ食べる」

ぽとんっ

茂みに握り飯を置いた。すると茂みの中から

わんわんっ！

たくさんの犬が現れた。

愛紗「もしかしてこれが言っていた獣の鳴き声を発声するなのか？

」

一刀「恋、この子達は？」

一刀が聞くと

恋「…みんな恋の家族。この子達のために村から食料求めたけど誰もくれなかった」

と言った。

鈴々「おかしいのだ。誰もそんなこと言ってなかったのだ」

恋「（ふるふるっ）…ちゃんと岩に書いておいた」

星「岩だと！？」

一刀「そういえば岩を持っていた時、『ごはんちょうだい』と小さく書かれていたな」

この世界は紙は身分の高いものしか使えない重要な物のためお金のない恋は岩に書いて送るしかなかったのだった。

一刀「だったらちゃんと『ごはんちょうだい』って村人に言わなきゃダメだよ」

一刀が言うと

恋「…わかった。ちゃんと言う」

恋は納得したようだ。

鈴々「それにしてもこの犬達はどうするのだ？」

愛紗「ふむ、この森の中でいつまでも暮らすというのには無理があるだろうしな」

愛紗がその事を言うと

トントン？「だったら私の家に置いてあげますよ。もちろんあなたも一緒に」

トントンが恋に向かって言うと

一刀「トントンってそんなにでかい家にすんでるの？」

トントン？「ええ、だって私は…」

トントンが最後まで言おうとすると

詠「ゆえ〜！！」

パカパカッ！

詠が馬に乗りながら現れた。

トントン？「詠ちゃん！？」

キキィーッ！

馬はトントンの前で止まると

バサッ

詠「月<sup>ゆえ</sup>、心配したんだからね無茶しないでよ」

詠は馬から降りてトントンに話しかけた。

愛紗「何をいつてるのだ？この者の名はトントンのはずだが」

愛紗が突っ込むと

詠「トントン？ふざけないでよ！このお方をどなところえる…」

一刀「天下の副將軍・水戸…」

詠「うっさい！」

詠の名前が賈馱なだけにナイスなボケである。

詠「この人はこの先の城主董卓仲穎様よ」

一刀「董卓!？」

愛紗達「城主!？」

ドォーンッ!

一刀は驚いた。董卓といえば三国志の中でも有名な悪人であり最後は部下の呂布に殺されるのだ。

月「皆さんすみません!騙すつもりはなかったんですがなかなか言い出せなくてつい偽名を」

トントン改め月が謝ると

月「そうだ詠ちゃん。一人雇ってほしい人がいるんだけど」

詠「まったく、まあ月の頼みなら聞いてあげるわよ。誰なの?」

スッ

月は恋を指差す

月「それと…」

スッ

更に月は恋の足元にいた犬達を指さした。

詠「犬っ！？犬はダメよ！」

詠は犬を飼うことを拒否しようとするが

月「だゝめ♪詠ちゃんさっき私の頼みなら聞いてあげるわよって言  
ったもん♪」

詠「月」

以外と腹黒い月であつた。

しばらくして

恋は村人に謝つた後、犬達と一緒に月に引き取られ、月は城に帰つていった。

そして一刀達は

鈴々「お兄ちゃん何で強いのに黙っていたのだ？」

一刀「そ…それは、昨日まで弱かったけど今日になったらいきなり強くなつたんだよ！」

あきらかに嘘であるが

鈴々「おお～！お兄ちゃんはすごいのだ！」

鈴々を誤魔化すのにはちょうどよかったりする。

星「愛紗、お主も気になるのか一刀殿の力が？」

愛紗「私は別に」

星「まあ私はあれこれ追究する方ではないので別に構わんがいずれわかるだろうしな」

愛紗「うむっ」

一刀達の旅はまだまだ続く。

## 「化け物退治」(後書き)

次回は軍師・諸葛亮が登場します。

「諸葛亮孔明登場」(前書き)

早いものでこの小説の話もアニメでいうなら無印の6話を迎えるようになりました。

「諸葛亮孔明登場」

あてもなく旅を続ける一刀達は

モワーン

深い霧がかかる林の中をさ迷っていた。

愛紗「こうなったのも全て鈴々が悪いのだぞ！」

愛紗が鈴々を叱ると

鈴々「鈴々は悪くないのだ。悪いのは蛇矛なのだ！」

自分の武器のせいにする鈴々

こうなった原因は数時間前に遡る（さかのぼる）。

数時間前

一刀「道が分かれてるな」

一刀達は二本の分かれ道にたどり着いた。

星「さてどちらに進もうか？」

みんながどっちの道に行こうか迷っていると

鈴々「こうなったら鈴々の占いで決めるのだ！」

一刀「鈴々に占いができるのか？」

鈴々「お兄ちゃんあまり鈴々をバカにしないでほしいのだ！それでは占い開始なのだ！」

そして鈴々は

ドンッ！

道の真ん中に蛇矛を置くと

バターンッ！

蛇矛が倒れ

鈴々「鈴々の占いだところちなのだ」

ビシッ！

鈴々は蛇矛が倒れた方向を指さした。

愛紗「あてになるのか？」

一刀「まあ今は鈴々の占いを信じるしかないな」

そして信じた結果

愛紗「こんな深い霧がかかる林に出会ったというわけだ！」

鈴々「愛紗だつて最終的に信じたのだ！」

二人は口喧嘩を始めた。

一刀「落ち着きなつて二人とも、星も何か言つてやつてよ」

くるっ

一刀は星のいる後ろを見ると

一刀「あれっ？」

鈴々「どうしたのだお兄ちゃん？」

一刀の変化に気付いた鈴々が聞くと

一刀「星がない！？」

ドォーンッ

何とさっきまで一刀の後ろにいたはずの星が姿を消したのだ。

一刀「この霧のせいではぐれたのかもな」

愛紗「まったく！鈴々の占いを信じたせいで大変な目に…」

愛紗が最後まで言おうとすると

コテンッ！

愛紗「うわっ！？」

ボタンッ！

愛紗は石につまづいて転んでしまった。

一刀「大丈夫か愛紗」

鈴々「いつまでも鈴々のせいにするからバチがあたったのだ」

鈴々が愛紗をからかうと

愛紗「私は別になんとも…」

すくっ

愛紗が立ち上がろうとしたその時

ズキンッ！

愛紗「くっ！？」

愛紗は足をおさえた。

一刀「大丈夫か！？見せてみるよ」

スッ

一刀は愛紗のソックスらしきものを脱がすと

バンッ！

「刀「ひどい腫れじゃないか！？これじゃあ歩くことすら難しいぞ」

一刀が言うと

愛紗「心配するなこんな腫れくらいで…」

スッ

愛紗は無理に立ち上がろうとするが

ズキンッ！

愛紗「くっ！？」

足に痛みが走ってすぐにしゃがりこむ

それを見た一刀は

「一刀「仕方ないな。ほらよ愛紗」

スッ

一刀がおんぶの体勢をとると

愛紗「何の真似だ？」

聞いてくる愛紗に対し

一刀「何の真似って？足が痛いならおんぶするしかないだろ」

一刀が言うと

カーッ！！

愛紗の顔が一瞬で沸騰したヤカンのように赤くなり

愛紗「バ…バカなことを言うな！どうせ一刀殿のことだから私と密着していい気持ちになりたいだけだろう！／＼／＼」

愛紗が言うと

一刀「俺がこんなときにそんなこと思うわけないだろ！」

ホントは少し思っていた一刀だった。

一刀「足が痛くて歩けないのならおんぶしかないだろう！」

愛紗「うっ！？」

数分後

愛紗「もし下心があると感じたら殴るから覚悟しておけよ！／＼／

」

一刀「はいはい」

鈴々「愛紗だけずるいのだ」

結局愛紗が折れて一刀に背負われることになった。

そして三人が歩いていると

鈴々「お兄ちゃん、霧の向こうにおうちが見えるのだ」

一刀「助かった。とりあえずそこで休ましてもらおう」

そして三人は霧の向こうにあった家にたどり着くと

コンコンッ！

一刀「すみません旅ののですが一晩泊めてください」

一刀が扉にノックすると

鈴々「お兄ちゃん何で扉を叩くのだ？」

一刀「そうかノックを知らないのか。いきなり入ったら相手が驚くからだよ」

鈴々「なるほど」

鈴々が新しい発見をしたとき

ガチャリッ

家の扉が開き

？「どなたでしょうか？」

キラーンッ

中から美人の女性が出てきた。

一刀「すみません連れの者が足を腫らしてしまいましたー晩泊めてくれませんか？」

背中に愛紗がいなければすぐにでも飛びかかっていた一刀だがここはぐつとこらえて用件を言うつと

？「まあそれは大変ですね！？どうぞお入りください」

スッ

女性は一刀達を家に招き入れた。

？「朱里、ちょっと来てくださいな」

女性が名前を呼ぶと

とたたーっ

？「何か用ですか水鏡先生？」

帽子を被った金髪ショートの子がやって来た。

水鏡「申し遅れました。私の名は水鏡。この子は諸葛亮といいます。  
朱里、お客さんを案内しなさい」

水鏡先生は諸葛亮（真名は朱里）に言う

朱里「わかりました皆さんこちらにどうぞ」

朱里は一刀達を家の中に案内する。

そして愛紗をベッドに寝かせると

朱里「改めてご紹介させていただきます。私は諸葛亮孔明と申します」

鈴々「鈴々は張飛なのだ。よろしくなのだ」

愛紗「関羽だ。助けていただき感謝する」

一刀「俺は北郷一刀。よろしくね孔明ちゃん」

一刀が言う

朱里「はわわ〜！こちらこそはじめましてでしゅっ！」

噛みまくりで言う朱里であった。

さて、それから数日が過ぎ

一刀「よっ！」

パカッ！

水鏡「すみませんねえ、薪割りしてもらっちゃって」

一刀「なあにお世話になってるんだからこれくらいしますよ」

あんなことや

朱里「関羽さん、汗をふきますので服を脱いでください」

愛紗「うむっ」

スッ

愛紗は服を脱ごうとするが

じーっ

視線を感じてやめる。そしてその視線の先には

一刀「（じーっ）」

一刀が愛紗を見つめていた。

そして

ドガッ！！ 三

愛紗「一刀殿は外に出んか！」

一刀「はい…」

朱里「はわわ！？」

トボトボ

愛紗に殴られて一刀は洪々部屋を出ていくのだった。

そんなこともあったが

ただ一人不機嫌な人がいた。

鈴々「ブーツ！愛紗を孔明に取られて悔しいのだ！この辺には獲物がいないから暇なのだ」

鈴々だけが膨れっ面をするのだった。

「孔明、旅に加わる」

一刀達が水鏡先生の元に訪れてから三日目

朱里「なかなか足の腫れがひきませんねどうしましょうっ？」

朱里が悩んでいると

水鏡「そうだわ、確か腫れに効く薬草がこの辺りに生えていたはずですけど」

水鏡先生がひらめくと

鈴々「だったら鈴々が取りに行くのだ！」

バツ！

鈴々は手をあげるが

一刀「鈴々、薬草がどんな姿をしているのか分かってるのか？」

一刀が鈴々に質問すると

鈴々「わからないのだ」

スッ

鈴々はあげていた手を下げていった。

朱里「だったら私が行ってきますよ」

朱里が言うと

水鏡「ダメです。あの薬草が生えている場所は危険ですし、たどり着くまでも大変ですからね。あとで私に取りに行きますよ」

水鏡先生が言うと

朱里「それじゃあダメですよ。水鏡先生はこれから近くの村に看護しに行く予定じゃないですかその後で薬草を取りに行ったら夜になつてしまいますよ。今からいけば夕方頃には帰ってこれますし私が行ってきます」

ダダッ！

そして朱里は走り出していった。

水鏡「ああ朱里！？もうっ言い出したら聞かない子なんですから」

水鏡先生が朱里を心配すると

一刀「鈴々、こっそり孔明の後をついていつてくれないか？」

一刀が鈴々に言うと

鈴々「何故なのだ鈴々は絶対嫌なのだ！」

断る鈴々だが

一刀「鈴々だつて愛紗の役に立ちたいだろう。薬草を取ってくれば愛紗だつて喜んでくれるしさ」

一刀が言つと鈴々は

鈴々「仕方ないのだ！お兄ちゃんがそこまで言つなら鈴々がついていってあげるのだ！」

実は鈴々は愛紗が休んでいる間何もできなかったことに不満を抱いていたのだ。

愛紗「（一刀殿は鈴々の扱い方がわかってきたようだな）」

一刀のその点だけは感心する愛紗だつた。

そして鈴々は朱里の後をこつそりついていった。

外

がさがさっ

朱里「ぷはっ！ようやく草むらを抜け出せましたね」

体が小さな朱里にとって草むらは困難であつた。

朱里「でもあと少しで薬草のあるところですから頑張らないと！」

タタッ！

朱里が行つた数分後

ガサッ！

鈴々「ぷはっ！苦しかったのだ」

朱里の後をついてきた鈴々が現れた。

鈴々「孔明のやつこんな道を通るなんて意外とやるかもしれないのだ」

タタッ！

そして鈴々は朱里の後を追いかける。

すると

ボロ〜ンッ

今にも崩れそうな吊り橋の上を

朱里「はわわ！？下を見なければ怖くないでしゅ」

ブルブルッ

朱里が震えながら歩いていた。

実は朱里は高所恐怖症なのだ。

鈴々「あいつもしかして高いところが苦手なのかなのだ？」

鈴々がその事に気づいていたその時！？

ブチチツ… ブチンツ！

吊り橋のロープが切れてしまい

朱里「はわわゝ！？」

ヒューツ！

朱里は下にある川の方に落ちてしまう

だが朱里が落ちようとした時

鈴々「うりゃーっ！」

ピョンツ！ ガシツ！

隠れていた鈴々が飛び出して朱里の腕をつかむと

鈴々「止まるのだゝ！」

ぐっ！

ギューイーーンツ！！

鈴々は蛇矛を岩に突き刺して

ピタッ

何とか川までの落下を防いだ。

鈴々「間に合ってよかったのだ」

鈴々が言うと

朱里「はわっ！？張飛ちゃんどうしてここに！？」

鈴々「お兄ちゃんが孔明が心配だからこっそり手助けするようにと  
言っていたのだ」

鈴々が正直に言うと

朱里「はわ、会って数日しか経っていない人に心配される私って

」

がつくーん

落ち込む朱里であった。

鈴々「それより早く上るのだ」

鈴々は落ち込む朱里を気にせずに上ろうとするが

鈴々「あれっ？」

朱里「どうしたんですか？」

朱里が聞くと

鈴々「どうやってのぼったらいいのだ？」

現在の鈴々の状況は片手で朱里の腕をつかみ、もう片方で蛇矛を掴んでいるため手が使えないのであった。

更に残念なことに

鈴々「腕がしびれてきたのだ」

蛇矛を掴んでいる鈴々の手がしびれてきた。

朱里「はわわっ！？張飛ちゃんもう私に構わず手を離してください  
そうすれば上れますから」

鈴々「嫌なのだ！この手は絶対に離さないのだ！」

そして

シュルシュルッ

蛇矛を掴んでいた鈴々の手が離れていき

パッ！

ついに鈴々は蛇矛を離してしまった。

鈴々「うわーっ！？」

朱里「はわわっ！？」

ヒューッ！！

仲良く落ちていく二人

だがその時！？

ガシッ！

鈴々の手が何かに捕まれた。

鈴々「何が起きたのだ！？」

落ちたはずなのに落ちないことに疑問を感じた鈴々が手の先を見てみると

一刀「今引き上げてやるからな！」

バンッ！

そこには一刀がいた。

ずるずるっ

そして一刀は鈴々と朱里を引き上げると

鈴々「何でお兄ちゃんがここにいるのだ？」

鈴々の質問に一刀は

一刀「二人が心配になったから様子を見に来たんだよ」

と言うと

朱里「はあ、またも心配されちゃうなんて私ってそんなにドジ何でしょうか？」

またも朱里が落ち込み始めた。

そんな朱里に一刀は

一刀「俺が心配したのはかわいい鈴々と孔明が怪我してないかと思つたからだよ別に孔明がドジだから心配したわけじゃないさ」

ニコッ

一刀が朱里にスマイルすると

ボンッ！

朱里「はわわ／＼／＼」

朱里は顔を一瞬で赤くした。恐るべし一刀の女たらしのスキルである。

しかし当の本人である一刀は

一刀「（何で顔を赤くしてるんだ？）」

この鈍感野郎！と言いたくなるくらい朱里の変化に気づいてなかつ

た。

しばらくして

朱里「それにしてもどうしましょう。関羽さんを治す薬草は橋の向こうにあるのですが橋は壊れちゃいましたし別の橋もありません」

朱里が悩んでいると

一刀「向こう岸までだいたい十メートルってどこか」

一刀は向こう岸までの距離を計測すると

ガシッ！ ガシッ！

鈴々「にやっ！？」

朱里「はわっ！？」

いきなり鈴々と朱里を脇にかかえて

一刀「孔明、怖いかもしれないから目を閉じときな」

朱里「えっ？」

朱里は何が起きるかわからなかったが

タタタッ！

一刀は二人を抱えたまま少し後ろに下がると

「刀、いくぜーっ！」

ドダダーッ！！

全速力で走り出して

ぴょーんっ！！

向こう岸までジャンプしていった。

鈴々「うおーっ！」

朱里「はわっ！？」

ドンッ！

そして見事にたどり着いて着地すると

「刀、やっぱり飛べたな」

スッ！

「刀は朱里の方を見ると

朱里「（ブクブクッ）」

そこには泡を吹いて気絶した朱里がいた。

一刀「大丈夫か孔明！？」

鈴々「お兄ちゃんもう一回お願いなのだ！」

更にしばらくして

気絶から立ち直った朱里は何とか薬草を入手して帰りも一刀に抱えられていくのであった。（今度は気絶するまでには至らない）

そして帰り道

一刀「フンフンッ！」

ザザッ！

一刀は木刀を振るいながら草むらを避けていた。

鈴々「これで歩くのが楽になったのだ」

朱里「・・・」

そして帰り道、朱里は一人で考え事をして黙っていた。

その後、家についた三人は朱里が取ってきた薬草で薬を作り、無事愛紗に届けるのであった。

その日の夜

朱里の部屋

朱里「どうしたんだろう私？一刀さんのニコツとした顔を見たら赤くなるだなんてどこおかしいのかな？」

小さい頃から水鏡先生に預けられた朱里は男との恋愛を経験していなかった。

朱里「これってもしかして！？／／／」

だがそこは女の子。徐々に恋愛感情が出てきたようだ。

そして愛紗の腫れもひき一刀達が旅立つ日

愛紗「どうもお世話になりました」

一刀「感謝します」

鈴々「ありがとうなのだ」

水鏡「いえいえこちらこそ薪割りやら雨漏りした屋根の修理をしてもらって嬉しい限りですよ」

そして一刀達が旅立とうとした時！

朱里「はわわ！待ってくださいーい！」

ダダッ！

荷物を用意した朱里が一刀達のところに駆け出てきた。

朱里「皆さん私を旅につれていってくれませんか？」

朱里が言うと

愛紗「お主には水鏡殿がいるだろう」

と愛紗が言い返すと

朱里「水鏡先生には昨日お話しして了解を得ました。どうか私を連れていってください」

ペコリッ

朱里は頭を下げると

鈴々「鈴々は別に構わないのだ」

一刀「いいんじゃないの来るものは拒まずって感じでさ」

二人に言われた愛紗は

愛紗「いいだろう来ても構わないぞ」

朱里を旅につれていくことを了承した。

朱里「皆さんよろしくです」

こうして新たに朱里が一刀達の旅に加わった。

「喧嘩別れ その2」

一刀達の旅に新しく孔明（真名は朱里）が加わり旅を続ける一行は

一刀「道が分かっているな」

二本の分かれ道に差し掛かった。

鈴々「こういう時は鈴々の占いで決めるのだ！」

パッ！

そう言つて鈴々は手に持っていた蛇矛を放すと

カラッ

蛇矛は右の方向に倒れた。

鈴々「こつちなのだ」

そして鈴々が右の方向に行こうとすると

愛紗「待て鈴々！左の道を行くぞ」

スッ

愛紗が鈴々とは違う道を指差すと

鈴々「何でなのだ？鈴々の占いでは…」

愛紗「お前の占いはあてにならん前の失敗を忘れたのか！」

前にも鈴々がこの占いをしてその道を行った結果、危うく迷子になりかけたのだった。

鈴々「今度は大丈夫なのだ！」

愛紗「お前的大丈夫はあてにならん！」

愛紗と鈴々が口喧嘩をしていると

朱里「はわわゝ！？一刀さん止めなくていいのでしゅか？」

初めてこの光景を見た朱里は驚くが

一刀「孔明、よく覚えた方がいいよ。あの二人に口出しすると怒りの矛先がこっちに向けられるからね」

朱里「そうなんですか！？」

二人の口喧嘩を見てきた一刀は落ち着いていた。

だが二人の口喧嘩はどんどんエスカレートしていき

鈴々「だったら愛紗達は左の道をいけばいいのだ！鈴々は絶対に右の道に行くのだ！」

愛紗「好きにしろ！我々は左の道に行くからな！」

ダッ！

二人はそれぞれ別の道をいくことになった。

朱里「はわわ〜！？どうすればいいんでしゅか！？」

一刀「まさかこうなるとはな。とりあえず鈴々を一人にするわけにはいかないから孔明は愛紗の方を頼む」

朱里「わかりました！」

ダッ！

そして一刀は鈴々に、朱里は愛紗についていくことになった。

鈴々サイド

鈴々「愛紗はいつも鈴々に対して説教ばかりなのだ！ご飯食べてる時も『静かに食べる！』とか『箸の握り方がおかしい』とか説教ばかりなのだ！」

鈴々が愛紗に対して愚痴を言っていると

一刀「愛紗は鈴々が大好きだから説教するんだよ。好きでもない人を説教しないだろ」

いつもの鈴々なら『ああ、なるほど』と納得するのだが

鈴々「お兄ちゃんはどうちの味方なのだ！」

今日の鈴々は一筋縄ではいかなかった。

一刀がどうしようか悩んでいると

一刀「んっ！鈴々あれを見てみるよ」

一刀は立て札を見つけた。

鈴々「なになに、『参加費無料肉マン大食い大会開催！一番多く食べた人には賞金あげます。（ただし途中で諦めた人は食べた分の肉マン代金を支払ってもらいます）』なのか」

一刀「大食らいの鈴々なら優勝できるんじゃないか？」

一刀が言うと

鈴々「ようしっ！愛紗への怒りを食欲に込めてやるのだ！」

ゴォーッ！！

鈴々が燃えていると

？「あれっ？一刀と張飛じゃないか」

どこかで聞いたような声が聞こえてきた。

そして一刀と鈴々が声が聞こえてきた方を向いてみると

一刀「馬超！？」

鈴々「馬超なのだ!？」

そこにいたのは以前出会った馬超（真名は翠）であった。

一刀「久しぶりだな。確か故郷に帰ったんじゃないのか？」

翠「確かに帰って故郷のみんなにすべて話してきたよだけど旅をしたいから一人旅しているのさ」

翠は以前父である馬騰を殺した曹操を狙って旅をしていたが馬騰殺害の事実を知って故郷である西涼のみんなに話すべく帰っていったのだ。

翠「それより関羽と趙雲はどうしたんだ？」

翠が聞いてくると

鈴々「ふふーんだ!愛紗なんて知らないのだ!」

ぷくーっ!

鈴々は膨れっ面をした。

翠「なあ、いったいどうしたんだ？」

一刀「話せば長くなるけど」

一刀は翠に事情を話すと

翠「なるほどな、それより張飛は大食い大会に出場するようだな」

鈴々「もちろんなのだ！絶対優勝してやるのだ！」

鈴々が意気込むと

翠「残念だけど優勝は無理だね。何故ならあたしも大会に出場するから優勝はあたしがもらったね」

ピクンッ！

この言葉に鈴々が反応した。

鈴々「ふふーんだ！馬超には絶対負けないもんねなのだ」

ピクンッ！

そしてこの言葉に翠が反応し

翠「だったら勝負しようじゃないか！絶対張飛には負けられないからな！」

鈴々「のぞむところなのだ！」

バチバチッ！

今、二人は互いに激しい火花を飛ばしていた。

一刀「（この二人って似た者同士なのかな？）」

と一刀は感じるのだった。

そしてついに

わぁーっ！わぁーっ！

陳琳「さあ始まりました肉マン大食い大会！果たして優勝するのは誰なのでしょう？実況はわたくし陳琳がお伝えします！」

肉マン大食い大会が開始された。

翠「張飛には負けないぜ！」

鈴々「馬超には絶対負けたくないのだ！」

バチバチッ！

まだ火花を飛ばす二人

一刀「二人とも頑張れよ」

そして一刀は客席から二人を応援するのだった。

その頃、分かれ道の逆を行った愛紗と朱里は

愛紗「これは…！？」

朱里「はわわ！？」

ドォーンッ！

二人が行った先には崖が待ち構えていた。

朱里「どうやら鈴々ちゃんの方が正しかったようですね」

ちゃっかりと鈴々の真名をもらっていた朱里。

愛紗「どうやらそのようだな…」

これには愛紗も黙るしかなかった。

「大食い少女とさらし女」

陳琳「さあーっ！それでは肉マン大食い大会開始です！」

ゴォーンッ！！

会場に一齐に銅鑼の音が響き渡ると

バクバクッ！

選手達は一斉に肉マンに食らいついた。

しかしこの肉マンは普通より二倍のボリュームがあり

ばたりっ      ばたりっ

次々と選手達が倒れるなか

翠「がつがつ！」

鈴々「もぐもぐっ！」

翠と鈴々はまるで電気掃除機のごとく肉マンを食べ続けていた。

パパパッ！

あっという間に二人の蒸籠（せいろ・肉マンを入れる籠のようなもの）から肉マンが消えていく！

翠「がつがつ！張飛には負けないぞ〜！」

鈴々「もぐもぐっ！馬超には負けたくないのだ！」

どうやら二人も限界らしい、勝者はこの二人にしばらくられるかと思いきや

ゴォーンッ！

陳琳「それまで！勝者決定です！」

全員『！？』

これに全員が驚いた。何故なら鈴々と翠の蒸籠にはまだ肉マンが残っているのにいきなり終了になったのだから

だが陳琳は

陳琳「勝者は許緒選手です！」

ドォーンッ！

翠と鈴々の隣の席にいた桃髪の女の子の勝利を宣言した。

許緒「ふーっ！お腹一杯だよ」

ドタバタンッ！

みんな翠と鈴々の迫力に夢中でその隣にいた女の子を見ていなかったのである。

一刀達を含めて陳琳を除く全員がずっこけた。

その後、

鈴々「負けて悔しいのだ〜！」

翠「あともう少しだったのによ〜！」

一刀「ハハハ…財布が軽いや」

肉マンを食べられなかった分の代金二人分を支払ってしまい一刀の財布は風が吹けば飛ぶくらい軽くなっていた。（翠がお金を持っていなかったため一刀が支払うことになった）

そんな三人のもとに

許緒「ちよつとすみません」

肉マン大食い大会で優勝した許緒（真名は季衣）が近寄ってきた。

季衣「お金を支払った人は誰ですか？」

季衣が聞いてくると

一刀「俺だけど何か用？」

一刀が答えると

季衣「これ少ないけどもらってください」

スッ

季衣は一刀にお金の入った小袋を渡した。

一刀「もらっていいの!？」

季衣「うん、ぼくはお腹が空いたから出場しただけだからお金なんていらないんだ」

なんて天使のような女の子だろう

鈴々「お前意外といい奴なのだな」

季衣「意外とは余計だけどぼくはお金なら他で稼いでるしね」

一刀「他？」

こんな小さな子を雇ってくれるところがあるのだろうか?と一刀が思っている

季衣「何か少しムカつくことが聞こえたような気がするけど…」

季衣がそう感じていると

男の子「許緒さん!」

ダダッ!

季衣のもとに男の子が駆け寄ってきた。

季衣「君は昨日泊めてもらった家の子供、どうしたの？」

季衣が聞くと

男の子「大変だよ！うちに昨日許緒さんが追いついた借金取りが現れたんだ！」

男の子が言つと

季衣「あいつらまだ懲りてなかったのか！ぼくがぶつとばしてやる！」

ダダッ！

季衣は男の子が来た方向を駆け出していった。

一刀「どうやら厄介ごとらしいし、お金のお礼として行ってくるわ」

鈴々「お兄ちゃんが行くなら鈴々も行くのだ！」

翠「あたしを置いていくなよ！」

ダダッ！

そして一刀達も季衣のあとを追っていった。

男の子の家

借金取り「おいおい借りたお金は返すのが礼儀だろ」

借金取りが男の子のお母さんに詰め寄ると

お母さん「そんなこと言っただけでもう元金は支払ったじゃないですか」

妹「そうだよ！返したんだから帰ってよ！」

男の子のお母さんと妹が反発すると

借金取り「黙りやがれ！借りたら利子がつくもんだよ！」

お母さん「だからといって借りたのは1000元なのに利子がついて1000元だなんて横暴ですよ！」

お母さんが反発すると

借金取り「黙りやがれ！さっさと払えばいいんだよ」

ジャキンッ！

借金取りは剣を抜いた。

とそこへ

季衣「おばさん！」

季衣が駆けつけてきた。

借金取り「お前は昨日のチビッ子！？昨日はよくも邪魔してくれたな」

季衣「なんだよ！まだぶつとばされたりないのかい？」

スッ

季衣が構えると

借金取り「へんっ！今回はお前を倒すために用心棒を雇ったんだよ！先生出番ですぜ！」

借金取りが叫ぶと

？「ようやくウチの出番のようやなあ」

ザッ

そこに偃月刀を持って胸にさらしを巻いた関西弁を話す女が現れた。

借金取り「張遼先生、あいつが例のガキです」

張遼（真名は霞<sup>しあ</sup>）が借金取りから聞くと

霞「なんやアンタ大人のくせにあんなガキにやられたんかいな！？まあ金もらった以上アンタには恨みはないが相手してもらおうで！」

シュンッ！

霞は季衣に速攻を仕掛けるべく早足で移動する。

季衣「ガキガキってバカにしないでよね！」

スッ

季衣は武器をとろうとするが

スカッ

季衣「しまった！？朝出るときに武器を家に置いてきちゃったよ！？」

季衣はすっかり武器を家に置いてきてしまった。

霞「なんや武器出さへんのやったらいてまうでー！」

シュンッ！

霞の速攻が季衣に迫る。

季衣「ちいっ！」

スッ

季衣は素手で相手をしようとしたその時！？

ガキンッ！

季衣「えっ！？」

驚く季衣が目を開けてみると

ぐぐぐつ…

季衣の目の前には一刀がいて霞の攻撃を防いでいた。

一刀「許緒ちゃんだったね、お金のお礼として助太刀するよ！」

ブオンツ！！

霞「うおっ！？」

一刀は霞を吹き飛ばすと

鈴々「お兄ちゃん無事なのかなのだ！？」

翠「いきなり駆け出すなよ！？」

鈴々と翠が追いついてきた。

霞「ほう、さっきのガキよりそっちのあんちゃんの方が手応えありそうやんか、ウチの相手してくれへんか？」

借金取り「ちよつと先生！？それでは約束が…」

借金取りが言おうとすると

霞「だまらっしゃい！ウチが相手決めて悪いっちゅうんかい！」

借金取り「いえ別に…」

霞の迫力におされてたじろぐ借金取りだった。

霞「そんじゃあ了解も得たようやし相手してもらおうか！」

一刀「女を相手にするのは気が引けるけど、どうやら相手しなきゃ許してもらえそうにないね」

スッ

一刀と霞は構えると

シュンッ！

二人は一斉に駆け出した。

カキカキンッ！

そして互いに高速の連撃を繰り返す。

鈴々「お兄ちゃん早いのだ！？」

翠「北郷ってあんなに早かったのかよ！？」

季衣「兄ちゃんすごいね！？」

三人が驚いているうちに

ガキンッ！

霞「なっ！？」

霞の飛龍偃月刀が一刀の木刀に弾かれた。

ジャキンッ！

一刀は木刀を霞の喉元のどもとに向ける

一刀「まだやる気？」

一刀が言うと

霞「ウチの負けや」

霞が降参した。

これで終わったと思いきや

借金取り「テメエら動くんじゃねえぞ！」

借金取りが突然叫び出した。しかも借金取りの手には

妹「はなせー！」

いつの間にか男の子の妹が捕まっていた。

一刀「しまった！？」

霞「人質は卑怯やで！ウチが負けたんやから放しや！」

借金取り「じやかましい！何が用心棒だ。そんな優男に負けやがって！一歩でも動いたらこのガキ殺すぞ！」

ジャンツ！

借金取りは妹に剣を突き立てる。

人質をとられて身動きできない一刀達

だがその時！？

ヒュンツ！      ザクツ！

借金取り「ぐわっ！？」

借金取りの手に蝶の姿をした簪かんざしが突き刺さった。

そして借金取りは一瞬妹から手を放した。

そしてその隙に

シュンツ！

何者かが妹を救出した。

借金取り「誰だ！？」

借金取りが叫ぶと

？「天が呼ぶ、地が呼ぶ、人が呼ぶ！助けてと叫ぶ少女の声、美々

しき蝶が悪を討つ！我こそは正義の使者 華蝶仮面！  
」

バーンッ！

突然謎の人物が現れたが明らかにその正体は蝶の仮面を着けただけの星だった。

翠「なああれって趙雲じゃないか？」  
」

一刀「あれでバレてないって感じてるのかな？」  
」

一刀と翠にはバレていたが

鈴々「かつこいいのだ」  
」

鈴々にはバレていなかった。

華蝶仮面「さあ一刀ど…、青年よ今のうちだ！」  
」

もはや言いかけている。

一刀「確かに突っ込むひまはなし！」  
」

シュバッ！

一刀は高速で借金取りに迫ると

ズバッ！

借金取りに一撃を食らわした。

借金取り「ぐはっ!？」

ばたりっ

借金取りが倒れると

ザッ

霞「お前、覚悟せいや！ウチは卑怯もんが一番大嫌いなんや！」

ドガバキッ！

借金取りが倒れたところに霞が近付いて霞は借金取りをボコボコにぶちのめした。

しばらくして

霞「悪かったなどうやらウチが間違ってたみたいや」

一刀「わかってくれればそれでいいよ」

ガシッ！

一刀は霞と握手すると

霞「そんじゃさらばやで！」

ダッ！

霞は去っていった。

季衣「それじゃあばくもこいつを警備隊に引き渡さなくちゃならないからまたね」

スッ

季衣は借金取りを軽く持ち上げて去っていった。

翠「結局あたしは何もできなかったな、まああたしも旅を続けるからまたな」

ダッ！

そして翠も去っていった。

一刀「それじゃあ鈴々、俺達も…」

くるっ

一刀が鈴々の方を向くと

男の子「お母さん、妹、助かってよかったね」

お母さん「もうお前達に苦勞はかけないからね」

妹「よかったね」

鈴々「（じ〜）」

鈴々は親子の様子を見ていた。

一刀「鈴々、行くよ」

鈴々「！？わかったのだ」

ダッ！

鈴々は驚いて一刀のあとを追っていった。

道中

一刀「鈴々は愛紗と仲直りしたいんじゃないの？」

鈴々「何を言ってるのだお兄ちゃん！？鈴々は愛紗のことなんて別に……」

鈴々が言おうとすると

朱里「はわわ！一刀さん！」

前の道から愛紗と朱里が現れた。

愛紗「鈴々！」

鈴々「（ビクッ！？）」

愛紗の言葉に鈴々が驚いていると

愛紗「その…なんだ…お前の占いもたまには当たる時もあるのだな」

愛紗が焦らしながら言うと

鈴々「（ニヤツ）そうなのだ鈴々の占いは百発百中なのだ！だから愛紗もこれからは鈴々の占いを信じるのだ！」

調子にのる鈴々に

愛紗「調子にのるでない！このお調子者が！」

鈴々「鈴々は別にのってないのだ！偉そうに言わないでなのだ！」

ギャーギャーッ！

朱里「はわわ！？また口喧嘩しちゃいましたね！？」

一刀「巻き込まれるのも嫌だし、ほっといた方がいいかもな」

朱里「いいんでしょうか？」

「大食い少女とさらし女」(後書き)

次回、黄忠と孫小香登場

「食い逃げ姫と弓の名手」(前書き)

今回はまだはつきりと紫苑が登場しません。

「食い逃げ姫と弓の名手」

旅を続ける一刀一行

今日のはのんきに山道を歩いていると

？「ちよつと！離してよ〜！」

男「ダメだ！こっちに來な！」

男が嫌がる女の子の手を引つ張っていた。

鈴々「女の子が連れ去られようとしているのだ！？」

愛紗「なにっ！？いくぞ鈴々！」

鈴々「応なのだ！」

ダダッ！

女の子を救うべく男の元に急ぐ愛紗と鈴々

一刀「ちよつと待ちなつて二人とも！？」

朱里「はわわ〜！？」

一刀と朱里が止めるのも気にせず二人は男の元に急いでいった。

？「いい加減に離してよ〜！」

男「黙りやがれこの食い逃げ…」

男が最後まで言おうとすると

愛紗「そのもの、手を離すがよい！」

鈴々「弱いものいじめは許さないのだ！」

バンツ！

愛紗と鈴々が男のところにたどり着いた。

男「何だよあんたら！？」

パツ

そして一瞬男の手が女の子から離れた瞬間

？「ラッキー♪」

ダッ！

女の子は愛紗達が来た方に逃げていき

ドシンツ！

？「きゃんっ！？」

一刀とぶつかった。

一刀「大丈夫？」

スッ

一刀が手を差し出そうとすると

パシンッ！

？「ちよつと邪魔よ！」

ダダッ！

女の子は差し出された一刀の手をはたいて走り去っていった。

男「ああ！？逃がしちゃった！？」

そして男が驚いていると

愛紗「少女をいじめる極悪人め成敗してくれる！」

ブオンッ！！

男「ギャーッ！？」

ドガッ！

愛紗は男に天誅を下した。

しばらくして

愛紗「申し訳ない！」

鈴々「ごめんなさいなのだ」

愛紗と鈴々は殴った男に頭を下げていた。

男「だから言おうとしたんだよ！団子を食い逃げしようとしたあいつを捕まえようとしたただけだって」

これが真相であり男は殴られ損であった。

男「ほらよっ！」

スッ

男は愛紗に手を差し出すと

愛紗「この手は一体？」

男「決まってるだろ食い逃げをあんたらが逃がしたんだから食い逃げが食べた分の団子代を払ってもらうよ」

ビシッ！

男の方が正論であった。

愛紗「仕方がない」

スッ

愛紗が財布から団子代を出そうとすると

一刀「おじさん、代金の代わりにこれあげるから見逃してくれない？」

スッ

一刀が先に懷から金色の髪飾りをおじさんに差し出した。

男「こいつは確か隣村で一番高いやつじゃないか！？よしっ！今日のところはこいつで手をうつてやるよ」

何とかおじさんに許してもらった一刀達だった。

そして道中

鈴々「お兄ちゃんいつの間にあんな高いもの持っていたのだ？」

朱里「私たちの貯金を全て合わせても足りないと思いますけど」

朱里と鈴々が聞いてくると

一刀「あああれか、あれは食い逃げから掏った（すった）ものだよ」

実は一刀が女の子とぶつかった時に女の子が怪しいと思った一刀はこっそり女の子の髪から髪飾りを掏っていたのだ。

朱里「はわわ！？じゃああの髪飾りは盗んだものじゃないですか！？」

鈴々「相変わらずお兄ちゃんは素早いのだ」

愛紗「感心してる場合か鈴々！一刀殿、人から盗んだものを売るなんて最低ですよ！」

一刀「別に売ってないよ代金払うまでおじさんに預けた…」

愛紗「同じようなものです！」

ギロリッ！

愛紗が一刀を睨み付けると

？「ああーっ！やっと見つけた」

タタタッ！

一刀達の後ろから食い逃げした女の子が走ってきた。

？「ちよつとあんた達シヤオの髪飾り知らない？あんた達と出会った時に落としたようなんだけど」

女の子が聞くと

朱里「あのがそれですねえ」

朱里は女の子にわけを話すと

？「何よそれ！人のものを盗るのは泥棒じゃないそのお兄さん  
シャオの髪飾り返してよ！」

女の子が一刀に迫ると

一刀「食い逃げ犯に言われたくないなあ」

？「何ですってー！」

ジャキンッ！

女の子は懷からチャクラムのような武器を取り出すと

？「これでもくらいなさーい！」

シュシュンッ！

一刀目掛けて投げてきた。

朱里「はわわ！？一刀じゃん！？」

朱里が噛みながら驚くなか

鈴々「孔明、心配するなのだお兄ちゃんは簡単には死なないのだ  
」

愛紗「まだ孔明殿は一刀殿の強さを知らないのだから無理もないが  
」

普通にする二人であった。

そしてその二人が安心して理由を朱里はすぐわかることになるのだった。

カキンッ

朱里「はわわ!？」

何と一刀は投げ出されたチャクラムを打ち返したのだった。

？「うわっ!？」

サッ

辛うじてチャクラムをよける女の子だが

スッ

？「ひっ!？」

目の前に一刀の木刀が現れた。

一刀「まだやる気？」

一刀が言うと

？「ポッ／／／」

突如女の子の顔が赤くなった。

？「髪飾りは諦めるからシャオと結婚してね／／／」

ガバツ！

一刀「うわっ！？」

女の子はいきなり一刀に抱きついた。

朱里「はわわ！？」

鈴々「お兄ちゃんはモテるのだな」

愛紗「（ぴしっ）そのようだな」

愛紗は何故自分が怒っているのかわからなかった。

シャオ「私の名前は孫小香。シャオって呼んでいいよお兄さん／／」

一刀「何でこうなるの！？」

そして一行はシャオを連れて近くの村の飯屋に立ち寄った。

朱里「じゃあシャオさん……」

シャオ「ちよっとお兄さん以外は呼ばないでよねチビツ子2号！」

鈴々「キャハハッ！朱里はチビツ子2号なのだ」

朱里「あの、私が2号なら鈴々ちゃんが1号だと思いますけど」

いつの間にか真名を交換しあった二人であった。

鈴々「鈴々はチビツ子じゃないのだ！」

愛紗「落ち着け鈴々、それでホントなのか小香殿が孫家の姫君だといふのは」

愛紗が聞くと

シャオ「本人が言ってるんだから間違いないじゃない」

シャオがそう言つと

ガタッ

一刀達は円を作るように並んだ。

愛紗「ホントなのだろうか？」

一刀「食い逃げするくらいだから嘘じゃないの？」

朱里「でももしホントならすごいことですよ」

鈴々「おへそ丸出しの言うことなんて信用できないのだ」

シャオ「ちよつと！わざと聞こえるように話さないでよね！」

ガタンッ！

シャオがテーブルを激しく叩くと

ヒューッ      ガチャンッ！

コップが落ちて割れてしまった。

愛紗「ああもう何をしているのだ」

愛紗が割れたコップを集めていると

女将「ほらよ新しいコップだよ」

トンッ

店の女将が新しいコップを持ってきてくれた。

一刀「すみません。これ少ないですがコップの弁償代に」

一刀が財布からお金を渡そうとすると

女将「別に構わないよ。これから大儲けできるんだからさ」

鈴々「何故なのだ？」

鈴々が聞くと

女将「この街の長の娘と隣街の長の息子が結婚式をひらくんだよ。

そんでもって婿がとんでもない美形だというもんだからそれを見るために旅人がこの街に集まってくるのさおかげでこっちは大儲けだよ」

女将が言う

愛紗「結婚とはめでたいではないか」

シャオ「お兄さんとシャオの結婚式も負けなくらい豪華にしようね」

一刀「え」と

愛紗「（ピシッ）」

またも苛立つ愛紗であった。

女将「ところが大変かもしれないんだよ。なんでも婿の命を狙う暗殺者がいるみたいなんでねえ、まあ当日は警護の人間が山ほどいるから大丈夫だろうけど」

と女将は言うのであった。

そして飯屋を出た一行は

朱里「暗殺だなんて物騒ですね」

愛紗「でもまあ女将の言うように警護の人間がたくさんいるから大丈夫だろうが」

鈴々「愛紗の言う通りなのだ、それよりも早くこのお金で宿に泊まるのだ」

スッ

鈴々が財布を上に掲げる（かかげる）と

キラッ

財布の金具がキラリとひかり

キーンッ！ バシッ！

カァーッ！

一羽の鳥が鈴々の持っていた財布を奪っていった。  
カラス

鈴々「この泥棒カラス！財布を返すのだ！」

アホーッ

鳥は鈴々をバカにするかのごとく飛んでいく

愛紗「くっ！逃げ足の早い奴め！」

一刀「こんのっ！」

スッ

そして一刀は持っていた木刀を鳥目掛けて投げようとしたその時！

シュンツ！ ザシュツ！

突然矢が飛んできて命中はしなかったが飛んできた矢は烏の頭を掠めて（かすめて）いった。

ヒューツ！ パシツ！

鈴々「取ったのだ」

だが烏から財布を奪うにはちょうどよかった。

愛紗「あの矢はどこから飛んできたのだろうか？」

愛紗が辺りを見渡すと

バンツ

遠くの宿から矢を構えている女性がいた。

愛紗「（あそこからここまで三里半（一里が約3キロなので約10キロメートル）だというのにすごい腕だな）」

そして一刀達は宿に泊まることにした。

次の日

シャオ「ふあゝ、眠いよう お兄さんおんぶして」

一刀「頑張りなよシャオ」

朱里「なるべく早く次の街にいきたいですね」

愛紗「そのために早起きしたわけなのだが」

鈴々「人が多すぎて歩きにくいのだ」

ずらーんっ

道には結婚式を見るためなのか早朝にもかかわらず人がたくさんいた。

愛紗「しかしこの大通りは見事なものだ。遠くの宿まではつきりと……」

とここで愛紗が何かに気がついた。

何とこの大通りは遠くの宿から見通しがいいのだ。

愛紗「（もし暗殺者が婿を狙うなら遠距離のはず、ここから宿まで六里（約18キロ）まであるがこの場所にとどく者がいるとしたら）……」

とここで愛紗は昨日のことを思い出した。さらに奥にある宿は昨日矢を放った人が泊まっている宿であった。

愛紗「もしかして！……」

ダダッ！

そして愛紗は宿の方に駆けていった。

鈴々「どうしたのだ愛紗？」

鈴々が聞くと

愛紗「少し用がある。みんなは後からついてきてくれ」

そして愛紗は宿に向けて走るのであった。

「阻止せよ暗殺計画」

一刀達が宿に着くと

宿の人「あんたにお客さんだよ」

？「私に客人ですか？」

その部屋には見事な胸をした美女がいた。

そして愛紗が部屋に入ると

愛紗「我が名は関羽という。昨日は義妹の財布を盗もうとした烏を追ひ払ってくれてすまなかったなそのお礼にまいったのだ」

愛紗が言うつと

？「わざわざお礼だなんて私の名は黄忠、字は漢升あせなと申します」

黄忠（真名は紫苑）が言うつと

ガラリッ

愛紗はいきなり窓を開けて

愛紗「この窓から通りがよく見えるものだな、だがこの窓から媚を狙えるとしたら相当な弓の使い手だろうな」

愛紗が言つた途端

紫苑「くっ！」

ガチャリッ

紫苑は愛紗の偃月刀を手にし、愛紗に向けようとするが

スッ！

紫苑「！？」

愛紗がいち早く紫苑の持っていた弓・颯鵬くほうを構えて紫苑の方に向けた。

愛紗「長物（偃月刀やなぎなた等）の扱いは弓よりうまくないらしいな」

愛紗が言つと紫苑は観念したのか

カラッ

偃月刀から手を離すと

紫苑「申し訳ありませんでした！」

バタンッ！

突然頭を下げた謝った。

愛紗「貴方のような優しい方が暗殺なんてするはずがない訳を話し

てくれないか？」

愛紗が聞くと

紫苑「わかりましたお話しします」

と紫苑が言った途端

愛紗「もういいぞ鈴々入ってくれ」

愛紗がそう言つと

ガラッ！

扉の外には鈴々達が待ち構えていた。

愛紗「安心してくれみんなは私の仲間だ。それより事情を話してくれないか？」

紫苑「わかりました」

そして紫苑は訳をなしはじめた。

紫苑「夫を早くに亡くした私は幼い娘の璃々と二人仲良く村に住んでいました。ところがある日買い物から帰ってくると娘は預かった返してほしけりや指定の場所に一人で来いと書かれていたので私は向かったのです」

紫苑がはなしていると

一刀「（じゅっ）」

一刀がいつになく真剣な目付きで紫苑を見ていた。

愛紗「（一刀殿も珍しく真面目に話を聞くのだな）」

愛紗は感心していたが一刀の目線を見てみると

ドォーンッ！

一刀の目線の先には紫苑の爆乳があった。どうやら一刀は紫苑の爆乳を見ていたようだ。その事に愛紗が気づくと

ゴッチーンッ！！ ミ

愛紗「大事な話の最中に何を見ているのだ！」

一刀「すみませんでした」

シャオ「ちよつと！シャオの媚を殴らないでよね！」

鈴々「いつからお兄ちゃんはお前のものになったのだ！」

朱里「はわわっ！？皆さんお静かにっ！？」

一刀達が騒いでいると

紫苑「あのう、話を続けてもよろしいですか？」

紫苑が聞いてくると

愛紗「すまない続けてくれ」

と愛紗は一刀をボコリながら答えるのだった。

そして紫苑は話を続ける。

紫苑「私が指定された場所に行くところには一人の男がいて、『娘の命を助けたければある街の婿を暗殺しろ！さもなければ娘の命はないと思え！』と言われて仕方なく私は暗殺を引き受けたのです」

ほろっ

紫苑が涙を流すと

愛紗「人質をとるとは許せない奴だな。黄忠殿、ここであつたのも何かの縁だ。我々も娘の救出を手伝わしてもらおう！」

愛紗が言つと

鈴々「悪い奴は見過ごせないのだ！」

一刀「協力させてもらうよ」

一刀達が次々と言い

紫苑「皆さんありがとうございます」

紫苑はお礼を言うのだった。

シャオ「でもさあー監禁場所が分からないんじゃないあ救いようがないじゃん」

シャオの言う通りであった。

鈴々「ところでこの落書きは何なのだ？」

みんながどうしようかと考えている時、鈴々が机の上にあった紙に興味をもった。

紫苑「それは誘拐犯が娘が無事な証にと娘が書いた絵です」

一刀「どれどれ」

一刀達が紙を見てみると

朱里「あれっ？」

朱里が一枚の紙に興味をもった。

朱里「皆さんこの書かれている人に見覚えありませんか？」

朱里が聞くと、紙にはどこかで見たようなおじさんが描かれていた。

一刀「この絵は団子屋のおやじ！」

シャオ「道理で人相が悪いと思ったら悪人だったのね！」

あわれな団子屋のおやじ

だが朱里は

朱里「違いますよ。犯人がわざわざ仲間の似顔絵を送るなんて居場所を知らせるようなものです。これはきっと黄忠さんの娘が見たものを書いたんですよ」

朱里が言うと

鈴々「そういえばあの店の近くに古い建物があったのだ!？」

愛紗「そうとわかればいくぞ！」

ダダッ！

愛紗達が外に出ようとすると

紫苑「娘の居場所に心当たりがあるんですか!?! ならば私も一緒に!」

紫苑も出ていこうとするが

朱里「ダメですよ黄忠さんは顔を知られてますからここにいてください!」

ダダッ！

出ていこうとする紫苑を何とか引き留めて一刀達は宿を出るのだった。

一刀達が去って数分後

男「黄忠、そろそろ出番だから準備しろよ。もししくじったら娘の命はないからな」

男がやって来て紫苑に宣告してきた。

紫苑「（こうなったら後は頼みますよ関羽さん達）」

もはや紫苑にできることは愛紗達が成功するのを祈ることだけだった。

さてその頃、愛紗達は

鈴々「あれっ？お兄ちゃんがないのだ」

いつの間にか一刀の姿が消えていた。

愛紗「ほっておけあんな奴がいなくても我々だけで何とかなる！」

だが愛紗は一刀をほっとくことにした。

団子屋

男「あの兄ちゃんからもらった髪飾り早く売りにいかないとな」

団子屋のおやじが暇そうにしていると

トントンッ！

勝手口からノックの音がした。

男「何の音だ？」

おやじが勝手口に行くと

愛紗「何だそれは鈴々？」

鈴々「お兄ちゃんから教わった『のつく』なのだ。これなら脅かさずに人を呼べるのだ」

朱里「はわわ！？すごいですね」

そこには騒いでいる愛紗達がいた。

男「あんたら何しに来たんだ？」

おやじ言うのも無理もない。

愛紗「申し訳ない、実はだな…」

愛紗がおやじに事情を話している頃

向かいのボロ屋

チビ「しかしまあこんなガキを見張るだけで金がもらえるなんて楽な仕事ですね」

デク「俺達を雇ってくれたあの人に感謝だな」

アニキ「そういえば大将の名前って確かりゅ…」

アニキが言おうとすると

？「ひつくひつく」

小さな女の子が泣いていた。

アニキ「うるせえ！ピーピー泣くなぶつ殺すぞ！」

この泣いている女の子こそ紫苑の娘の璃々である。

団子屋

男「えっ！？向かいのボロ屋に人質が！？」

おやじが驚いていると

愛紗「そうなのだ。つきましてはあなたに手伝ってほしいのだが」

男「俺に？」

向かいのボロ屋

チビ「それにしても金が来るまで暇だな」

チビが暇そうにしていると

男「お前がやったんだろう！」

シャオ「シャオが盗むわけじゃないじゃない！」

外から声が聞こえてきた。

男「前に食い逃げしたくらいだ、お前が店の売上金盗んだに違いない！」

シャオ「だったら裸にでもして調べればいいじゃん！」

バサッ！

シャオは上着を脱ぎ捨てて下着姿になった。

チビ「おおっ！」

アニキ「うるせえぞチビ、どうした？」

チビ「アニキもデクも見てくださいなすごいものが見れますよ」

アニキ「すごいもの？」

スッ！

アニキとデクが外を見ると

男「まだ下があるだろ！」

シャオ「わかったわよ！」

バサッ！

シャオはスカートを脱ぎ捨てた。

シャオ「これで満足でしょ！」

だが調子に乗ったおやじは

男「まだだ！下着が残っているだろう全裸になりな！」

台本にない台詞を言い始めた。

シャオ「（ちよつと予定と違うじゃない！）」

そして三人が外に夢中になっている隙に

愛紗「男というものは皆こういう性格なのか？」

鈴々「わからないけどお兄ちゃんはある性格なのだ」

パンツ！

いつの間にか愛紗と鈴々がボロ屋に侵入し、

愛紗「天誅っ！」

鈴々「なのだ！」

ビシバシッ！

三人をこらしめるのであった。

しばらくして

朱里「関羽さん馬を借りてきましたから急いでください！」

愛紗「さすがは孔明殿、準備がよろしい。では璃々殿行くぞ！」

璃々「うんっ！」

スッ！

愛紗は璃々を馬に乗せると

愛紗「せいやっ！」

パカパッ！

馬を走らせて街に急ぐのだった。

その頃、街では

ズンチャッチャッ

今まさに隣街から婿がやって来ていた。

男「さあ黄忠よ、準備しな！」

男が紫苑に言うと

紫苑「わかりました」

スッ！

紫苑は颯鵬を構える。

狙いは婿のいる台座

男「あの位置なら外しはしねえ、もし外したら娘の命はないからな

」

紫苑「わかってますよ！」

チャキツ！

紫苑は狙いを定める。

紫苑「（関羽さん達は間に合わなかったようですね、ごめんね璃々、人殺しのお母さんで）」

ちょうどその時

愛紗「間に合ったか！？」

愛紗が街にたどり着いた。

愛紗「くそっ！この人混みでは宿まで着くのに時間がかかりすぎる！？」

愛紗がどうしようか考えていると

シュパンッ！

愛紗「！？」

矢は無惨にも婿に放たれた。

キーンッ！

放たれた矢が婿に迫る！

だがその時、ものすごいことが起きた。

パシッ！ ビュンッ！

何と婿は高速で放たれた矢をつかみ、投げ返したのである。

キーンッ！

投げ返された矢は

ブシュッ！

男「がはっ！？」

バタッ！

紫苑の隣にいた男に命中した。

紫苑「いったい何が！？」

ちなみにこの出来事は一瞬でやられたので相当な武人でしか何が起きたのかわからないくらいだった。

しばらくして

璃々「お母さん」

紫苑「璃々っ！」

ぎゅっ

紫苑は飛び付いてきた璃々をぎゅっと抱きしめた。

愛紗「何が起きたのかわからんが一件落着だな」

鈴々「めでたしめでたしなのだ」

ところがそうもいかず

朱里「はわわ！？ところで一刀しゃんはどこでしゅか！？」

朱里が聞いてくると

一刀「おーいみんな！」

ダダッ！

遠くから一刀がやって来た。

愛紗「一刀殿！我々が大変な目に遭っていたのにどこほつつき歩い

てたんですか！  
「

鈴々「お兄ちゃんずるいのだ！  
「

シャオ「おかげでシャオだって恥ずかしい目に遭ったんだからね！  
「

みんなに責められる一刀

だが紫苑は

紫苑「（あらつ、あの手の傷は）  
「

一刀の手のひらに矢でかすったような傷があるのを発見した。

そして紫苑は気づいた。

実はあの婿は一刀の変装であり、万が一間に合わなかった時のため  
一刀が婿の身代わりになっていたのだ。

紫苑「（ありがとうございますね一刀さん）  
「

だが紫苑はあえてみんなにこの事を伝えないでおくのだった。

そして別れの時

愛紗「黄忠殿、また会う日まで  
「

鈴々「璃々もまた会う日までさよならなのだ  
「

璃々「うん関羽お姉ちゃん達もまたね」

璃々が元気に言うと

紫苑「すみませんね親子の旅を邪魔してしまつて」

この紫苑の言葉に

愛紗「親子？」

愛紗は不思議に思った。

紫苑「だつて

愛紗——一刀

—

鈴々

でしょ？」

紫苑が言うと

愛紗「なっ！？絶対にちがう！／＼／＼」

愛紗は顔を赤くして叫ぶのだつた。

「温泉を探せ」

とある麗羽の城

カポーンッ

この城で袁紹（真名を麗羽）がお風呂に入っていた。

麗羽「やっぱり一日の疲れをとるのはお風呂が一番ですわ」

疲れといっても大抵の仕事は猪々子と斗詩にやらせていて麗羽は判子押ししかやっていない。

そんな麗羽がゆったりとお風呂に入っていると

ガラッ！

猪々子「麗羽様、のんびり風呂に入っている場合じゃないですよ！

」

勢いよく文醜（真名を猪々子）が入ってきた。

麗羽「何ですの猪々子？わたくしは今入浴中…」

麗羽が言おうとすると

猪々子「そんなことより早く見てもらいたいものがあるんですよ！  
さあこっちに！」

麗羽「えっ！？」

グイッ！ ザバッ！

猪々子は風呂に入っていた麗羽を無理矢理風呂から出した。

すると当然のごとく

麗羽「ちょっと猪々子！わたくしは裸ですよ！」

ピコピコッ

タオルも身に付けず裸の麗羽を猪々子が部屋につれて歩く（さいわいこの城には男はいない）

猪々子「大丈夫ですってどうせ小説なんだから絵はないんですし」

麗羽「後で映像化されたらどうしますの！」

それはあり得ない。

猪々子「大丈夫ですってどうせ麗羽様の裸なんて誰も興味はない…」

「

麗羽「いいから止まりなさい！」

ガッンッ！ ミ

猪々子「ぐげっ！？」

猪々子は麗羽に殴られてしまった。

玉座の間

麗羽「それでわたくしに用とは何ですか？つまらなかったらお仕置きですわよ」

バスローブを身に纏った麗羽が玉座に座ると

斗詩「実は倉を整理していたらこのような地図が見つかりまして」

バサッ

顔良（真名を斗詩）が地図を麗羽に見えるように広げると

斗詩「この地図によると山の奥深くにお宝がねむっているらしいです」

猪々子「そのお宝さえあれば日頃の麗羽様による無駄遣いも解消できますよ！」

ピキンッ

猪々子の言葉に麗羽が怒った。

麗羽「誰の無駄遣いですって」

猪々子・斗詩『ひいっ！？』

麗羽の迫力に怯える二人

麗羽「まあお宝あると聞いて黙ってはいられませんわ！早速行きま  
すわよ！」

猪々子・斗詩『あらほらさっさ！』

そして麗羽達はお宝めがけて旅立っていった。

次の日の朝 道中

華琳「なかなかいい天気じゃない絶好の温泉日和だわ」

曹操（真名を華琳）が夏侯惇（真名を春蘭）と荀イク（真名を桂花）  
を連れて温泉に向かっていた。

春蘭「ハア」

華琳「どうしたのよ春蘭？」

ため息を吐く春蘭に対して華琳が聞いてみると

春蘭「秋蘭もつれてくればよかったと思ひましてね」

春蘭の妹、夏侯淵（真名を秋蘭）は城で留守番しているのだ。

華琳「仕方ないじゃない我が軍の主要が全員行くわけにはいかない  
しさ、まあ秋蘭は帰ったらおもいきり可愛がってあげるからね」

ニヒヒッ

不気味に笑う華琳だった。

そして華琳と春蘭が話しているのを見た猫耳フードを着けた荀イクこと桂花は

桂花「ちよつと脳筋（春蘭）！華琳様と長く話さないでよね！」

桂花は華琳命の毒舌家であり大の男嫌いであつた。

春蘭「誰がノーコンだ！」

何故その言葉を知っている！？

そしてその頃、旅を続ける一刀達は

鈴々「くんくんっ！何だか臭うのだ」

愛紗「くんくんっ！確かに何か臭うな」

シャオ「何よこの卵が腐つたような臭いは！？」

朱里「この臭いは…！？」

朱里が最後まで言おうとすると

一刀「すまん俺の屁だ」

ズコッ！

全員がずっこけた。

鈴々「もうお兄ちゃんのおならは臭いのだ！」

シャオ「ちよつと幻滅、お兄さんってばこんな卵が腐ったようなおならするんだ」

一刀「えっ！？卵が腐ったような臭いだって！？すまんが最近鼻づまりで臭いがわからないんだ」

一刀が言うと

朱里「おならなわけじゃないですか！この臭いは硫黄ですよ近くに温泉があるんです」

鈴々「温泉ってことはお風呂が近くにあるのかなのだ！？」

シャオ「やったー！久しぶりのお風呂だあ！」

愛紗「仕方がない旅の疲れを癒すためにも立ち寄るとするか」

一刀「やつほーいっ！」

一刀が喜んでいると

愛紗「わかつてると思いますが一刀殿、覗いたら殺しますからね」

ゴゴゴッ……！！

冗談ではなく本気の目をする愛紗であった。

そして一行は温泉にたどり着いた。

鈴々「鈴々が一番先に入るのだ！」

シャオ「ずるいシャオが一番なんだからね！」

ダダッ！

幸い男湯と女湯に分かれていたので分かれた愛紗達が入ると一番に鈴々とシャオが服を脱ぎ捨てて温泉へと駆ける。

愛紗「こら二人とも！風呂場で走るんじゃない！」

愛紗が止めようとするが二人は聞かずに

鈴々「そ〜れっ！」

シャオ「負けないんだから」

ぴよんぴよんっ！

温泉へと飛び込んだ。

だが

ドッシーンッ！！

温泉にお湯が入ってなく二人はお尻をぶつけた。

シャオ「何でお湯が入ってないのよう！」

シャオが叫ぶと

鈴々「お兄ちゃんそっちはどうなのだ？」

鈴々が男湯にいる一刀に聞いてみるが

一刀「こっちにもお湯がないよ」

男湯にもお湯がなかった。

とそこへ

華琳「あら、どこかで聞いた声がすると思ったら」

パンツ！

女湯に華琳達が現れた。

愛紗「曹操殿！？」

バツ！

愛紗は華琳に襲われないように構えると

華琳「あら関羽は相変わらずしっとりつやつやね」

じ

愛紗「ひっ！？」

ガバッ

華琳に見られていると知りすぐさま体を隠す愛紗だった。

温泉の外

華琳「どうやら偶然我が軍と関羽達が出会ったようね」

温泉から出た一行は温泉近くの茶店で一休みしていた。

桂花「華琳様から聞いたけど男なんて汚いやつと行動してるってホントだったのね！？」

ちなみに桂花は一刀達とは初対面である。

シャオ「それにしてもどうして温泉がないのよう！」

シャオが温泉に入れなかったことに対して怒ると

主人「この辺はもう枯れちまったのさ」

茶店の主人が話しかけてきた。

主人「前はこの辺にも温泉があっただがこの間の日照りで湯は枯れて、源泉も出なくなっちゃったからな。もしかしたら隣にある鉱

山を掘れば温泉が出るかもしれないがな」

主人が言うと

華琳「なるほどね、それならここにいる関羽達と私達とで温泉堀対決をしようじゃないの！」

華琳が提案すると

愛紗「別に我々は…」

愛紗が断ろうとするが

シャオ「面白い！呉の姫君として受けてたつわよ！」

勝手にシャオが勝負を受けてしまった。

華琳「両者同意で決定ね。我が軍が勝ったら関羽をもらうつわよ！」

ビシッ！

勝手に賞品にされる愛紗

愛紗「ちよつと待て！何で私が…！？」

愛紗が最後まで言う前に

シャオ「いいわよ！関羽くらい一人でも二人でもあげるわよ！そのかわりこつちが勝ったらあんたのそのくるくる髪ほどいてやるんだから！」

シャオがまた勝手に引き受けてしまった。しかもシャオの要求は確実に興味によるものだった。

華琳「いいわよ！それじゃあ温泉堀対決開始よ！」

愛紗「ちよつと待て！私の意思はないのか！？」

こうして愛紗の意思に関係なく愛紗とくるくるほどきを賭けた対決が始まるうとしていた。

だが一行が向かった山には

麗羽「どこにお宝があるのかしら？」

宝を探しに来ていた麗羽達がいた。

猪々子「その地図古いですからね。地形変わってるんじゃないの？」

斗詩「文ちゃん、麗羽様のやる気を消しちゃ……」

斗詩が最後まで言おうとしたその時

斗詩「麗羽様、文ちゃん隠れてください！」

サッ

斗詩は隠れながら二人に言うが

猪々子「斗詩、何で隠れるんだ？」

麗羽「かくれんぼしている場合じゃありませんのよ！」

隠れない二人に対し

斗詩「いいから隠れてください！」

ドオンツ！

斗詩は顔を大きくしながら二人に怒鳴った。

麗羽「わかりましたわよ隠ればいいんですよ」

猪々子「一体どうしたんだよ斗詩？」

サッ

二人が隠れると

斗詩「あれを見てくださいよ」

スッ

斗詩はある一点を指差した。

猪々子「きれいな指だな。アタイとは大違いだ」

斗詩「指じゃなくて指の先だってば！」

ビシッ！

今度こそ二人は斗詩が指差した先を見てみると

バンッ！

そこには一刀達と華琳達がいた。

麗羽「あれは生意気なくるくる小娘！」

猪々子「あっちの赤髪の子ビ（鈴々）は前に試験を受けにきたやつ！？」

麗羽「きつとあの人達もお宝を狙ってますのね！」

実際は違っのだが

斗詩「どうします麗羽様、曹操さんがいるんじや勝てませんし、あのお子ビちゃん（鈴々）も強いって聞きましたよ！？」

猪々子「あきらめて帰りますか？」

しかし麗羽は

麗羽「お黙りなさい！なぜわたくしが帰らなくちゃいけないの！そうですわ、連中が宝を見つけたらあの中で一番弱そうな人を人質にしましょう」

斗詩「となると軍師の荀イクさんかあちらの金髪おチビちゃん（朱里）ですかね？」

しかし猪々子は

猪々子「何言つてんだよ斗詩、あそこにいる優男（一刀）が一番弱そうじゃなか！」

麗羽「確かにわたくしもブ男さんは嫌いですからね猪々子、あの男を人質に……」

麗羽が最後まで言おうとすると

鈴々「でつかい岩なのだ！？」

一刀達の通路に道を塞ぐ大きな岩が現れた。

華琳「春蘭、破壊できるかしら？」

春蘭「すいませんが無理です。足場が悪く跳んだだけでも崖から落ちてしまいます。こんな岩を持ち上げるなんてできませんし」

春蘭が言うと

桂花「役に立たない脳筋ねえ」

春蘭「何だと！　だったらお前が知恵を使ってどかしてみろ！」

華琳「やめなさい二人とも！」

二人は喧嘩を始めた。

スッ

華琳「んっ？」

そして一刀が岩の前に立つと

一刀「ふんぬっ！」

ググッ！

一刀は岩を持ち上げようとした。

朱里「はわわっ！？無理ですよ一刀さん！？」

シャオ「そっだよこんな岩が持ち上がるわけ…」

二人は心配するが

ガバッ！

一刀は岩を持ち上げた。

朱里・シャオ「・・・！？」

華琳達「・・・！？」

一刀の怪力に驚くほとんどの人達

そして一刀は

一刀「せいやっ！」

ポイツ！

持ち上げた岩を滝の方に落としていった。

そしてそれを見ていた麗羽達は

麗羽「人質に男はいりませんわ！？」

猪々子「そうっすね！？」

斗詩「別の人にしましょう！？」

一刀の怪力に恐怖を感じるのであった。

桂花「フンッ！実は岩が軽かっただけよ！脳筋が持つのを嫌がったから岩の重さがわからなかっただけよ」

春蘭「何だと！」

二人はまた喧嘩を始めた。

一刀の力を桂花は疑っていたが

華琳「（関羽もいいけどこの男もいいかもね♪）」

華琳は一刀を狙っていたのかもしれない。

## 「危険な温泉探し」

愛紗を賭けて温泉を探しに山にやって来た一刀達と曹操（真名を華琳）達、ところがその山には袁紹（真名を麗羽）達が宝を探しに来ていた。

華琳サイド

華琳「桂花、それは何なの？」

華琳は桂花が握っているし字型の針金に興味を持った。

桂花「これは駄<sup>ダウジング</sup>字神具という和の国（日本）から取り寄せたものです。これで水脈を探すことができますよ」

ダウジングは昔水道管を探すのにも使われていたもので金属探知機にもなるのだ。

フリントッ！

すると桂花の持っていたダウジングが開き始めた。

桂花「華琳様、温泉はこの地下に眠ってますよ！」

桂花が示したのは切り株のところであつた。

春蘭「よしっ！早速私が掘り起こしてやる！」

春蘭がスコップを持って掘ろうとするが

華琳「待ちなさい春蘭！」

華琳がそれを止めた。

その理由は…

華琳「私は喉<sup>のど</sup>が乾いたは、近くに川があったからお茶にしましょう」

ドテッ！

ただの水分補給であつた。

普通なら目の前にある温泉をほうっておけると突っ込むだろうが

桂花「そうですねお茶にしましょう！」

春蘭「温泉は逃げたりしませんしね！」

華琳命であるこの二人が突っ込むはずがなかった。

そして目の前に温泉を残しながら華琳達は去っていった。

だがその様子を見ていた人がいた。

ガサッ！

麗羽「おーほっほっほっ！宝を目の前にして去るだなんてマヌケな連中ですね！」

突然茂みから麗羽達が飛び出てきた。実は麗羽達はこっそり華琳達のあとをついてきていたのだ。

猪々子「そんじやお宝はアタイ達が」

斗詩「いただきますね」

ザクザク！

そして文醜（真名を猪々子）と顔良（真名を斗詩）は切り株を掘始めた。

そしてついに

カッンッ！

斗詩「何かに当たったようだよ」

猪々子「お宝かな？」

グイッ！

そして二人で引っ張ってみると

猪々子「何だこれ？」

斗詩「ボロボロの剣？」

そこには錆びてボロボロになった剣が埋められていた。

そして剣の下には

わらわらっ！

たくさんがの虫がいた。

その虫を見てしまった三人は

麗羽達『ぎゃーっ！？』

ひどく叫んだという。

ちなみに桂花のダウジングの反応は剣に反応していた。

一刀達サイド

ザクザク！

一刀達は華琳達とは別のルートで探すことになり、辺りを掘り返していた。

愛紗「孔明殿、ホントにこの辺りでいいのか？」

愛紗が孔明（真名を朱里）に聞くと

朱里「この辺は以前温泉が噴き出た場所なんです。だからまだ温泉が眠っていると思ひましてね」

朱里が言うと

鈴々「それはわかるのだ！　だけどサボってないでお前も掘れなのだ！　」

ビシッ！

鈴々はみんなが掘っているにもかかわらず一人サボっているシャオに怒鳴ると

シャオ「シャオはお姫様だからやらなくていいんだもん」

勝手なことを言うシャオに

鈴々「ふざけるなのだ！　」

鈴々が怒鳴るが

一刀「ほっておけよ鈴々、働かざる者入るべからず。温泉を掘当てたら絶対シャオは入れないからさ」

一刀が言うと

シャオ「お兄さんが言うなら仕方がない。シャオも手伝ってあげるわ！　」

すくっ！

そしてシャオが座っていた石から降りてスコップを取ろうとすると

シャオ「きゃあっ！？」

突然シャオの悲鳴が聞こえてきた。

鈴々「どうしたのだ!？」

くるっ！

そして一刀達が声が聞こえてきた後ろを振り向くと

麗羽「おーほっほっほっ！」

シャオ「はなしなさいよう！」

シャオが麗羽達に捕まっていた。

一刀「あんたは確か!？」

麗羽「あら、あなたわたくしをご存じで？」

一刀は驚くが

一刀「誰だっけ？」

ずこっ！

全員がずっこけた。

前に一度一刀は遠目だが麗羽に会っているのであるが早く忘れた方がいいと考えて忘れていた。

麗羽「そんなことはどうでもいいですわ！　あなた達、この小娘を返してほしけりや宝を渡しなさいな」

シャオ「ちよつと！私は孫家の末娘なのよ！こんなこととして後でただじゃおかないんだから！」

シャオは叫ぶが

猪々子「うそつけ！あんたみたいなおちびが孫家の姫なわけないだろが」

斗詩「いくら助かりたいからって嘘ついちゃダメだよお嬢ちゃん」

全然信じてもらえなかった。

麗羽「さあどうしますの？」

麗羽が聞いてくると

ザザッ！

一刀達は作戦会議を開くため円陣を組む。

朱里「宝ってなんのことでしょうか？」

一刀「多分温泉のことじゃないの？」

鈴々「あいつ（シャオ）はうるさいから渡した方がいいのだ！」

愛紗「こら鈴々、いくらなんでもひどすぎるぞ！」

ガヤガヤ

一刀達が作戦会議をしていると

ぴくんっ！

朱里「えっ！？」

くるっ

朱里が後ろに気配を感じて振り向いてみると

朱里「はわわ！？」

一刀「どうした孔明？」

愛紗「なにか後ろにいるのか？」

くるっ

朱里が驚くのを見て一刀達も後ろを振り向くと

愛紗「あああ！？」

鈴々「くくく！？」

麗羽「うるさいですね！何だと言いますの？」

くるっ！

そして麗羽達も振り向いてみるとそこにいたのは

ドオンッ！

一匹の大きな熊だった。

熊「グルルーツ！」

熊は吠え出すと

猪々子「熊だー！？」

愛紗「早く逃げない！？」

誰もが逃げようとしたその時

鈴々「ランラン！？」

タタッ！

鈴々が熊に近づいた。

鈴々「みんな大丈夫なのだ。この熊は鈴々の友達のランランなのだ」

モワッ

鈴々がランランとの思い出にひたっている

「一刀「鈴々、そいつはホントにランランか？」」

一刀の質問に鈴々は

鈴々「ホントにランランなのだ。だってランランなら左手の裏に白い跡が…」」

スッ

鈴々は熊の手をしてみるが

ぽつんっ

そんな跡があるはずがなく

鈴々「逃げるのだー！？」

ドピューッ！！

鈴々が逃げると同時に一刀達と麗羽達も熊から逃げ出した。

麗羽「猪々子何とかしなさいな！？」

猪々子「あんなでかい熊無理ですよ！？」

愛紗「死ぬ気で走るんだ！止まったら食われるぞ！？」

一刀「朱里は俺に捕まって！？」

朱里「はいっ！？」

ガシッ！

シャオ「シャオもっ！」

ガシッ！

一刀達は熊から逃げ出そうと走り出すが

ドドッ！

熊「グルルーツ！！」

熊は猛スピードで追いかけてきた。（熊は人間より足が早いので逃げても捕まってしまう。死んだふりをしても熊は雑食性なので逆効果。おまけに木に登れるので木に逃げたら逃げ道がない。こういう時は鈴を鳴らして熊に人が近くにいることを教えるといいらしい。危険ですので絶対しないでください）

そして一刀達が逃げていると

猪々子「げげっ！？滝だ！？」

ドドーツ！！

運悪く目の前には崖になっている滝があり逃げ道がなかった。

だが一刀は

一刀「愛紗、鈴々、俺に捕まれ！」

愛紗「えっ！？」

鈴々「お兄ちゃんを信じるのだ！」

ガシッ！

愛紗と鈴々が一刀に捕まると

ダダダッ！！

一刀はどんどん走る速度を早めて

一刀「ホップ！ステップ！…」

だんだんと早く走ると

一刀「ジャンプ！！」

ダッ！！　ピョーンッ！！

崖の端から跳んでいった！？

そして

ダダンッ！！

見事向こう岸まで到着した。

麗羽「わたくしは夢を見ているの！？」

斗詩「人が四人も抱えてあそこまで50メートルも跳ぶだなんて！？」

猪々子「夢に違いない！？」

麗羽達が一刀の跳躍力に驚いていると

麗羽達『はっ！？』

すでに麗羽達の足元に地面はなく

麗羽達『あれーっ！？』

ピューッ！！ ドボンッ！！

麗羽達は滝壺に落ちていった。

一刀「あいつら大丈夫か！？」

愛紗「わかりませんね」

シャオ「お兄さんってすごいんだねー！？」

鈴々「お兄ちゃんにできないことはないのだ！」

朱里「はわわ！？怖かったです！？」

しばらくして

麗羽「う…うん」

猪々子「麗羽様気がついたんですね!？」

斗詩「よかったです」

奇跡的に滝壺から落ちた三人は生きていた。

だが麗羽は

麗羽「生きていたじゃありませんわよ!ムカつきますわね!」

ドカツ!!

麗羽はムシャクシャして近くの岩に蹴りを入れると

ゴゴゴツ…!!

麗羽達『えっ!?!』

突然地鳴りが聞こえてきて

ブシューッ!!

岩の下から温泉が噴き出してきた。

またしばらくして

いつの間にか全員が集まり湧いて出てきた温泉に浸っていた。

麗羽「おーほっほっほっ！服を脱げば我が軍の圧勝ですわ！この温泉はわたくしが出したのですからわたくしに感謝しなさいな」

麗羽が言うつと

華琳「偶然が重なっただけじゃない」

桂花「図々しいったらありやしない」

そして一刀は

愛紗「一刀殿、わかつてると思いますが覗いたら殺しかねますので注意してくださいね」

一刀「へいへい」

ぽつんっ

みんなが温泉に入っているのに対して一刀は一人外で待っていた。

そして温泉では

華琳「だいたい胸の大きさを勝負するのがおかしいのよ」

桂花「それがわからないだなんて胸がでかいとバカになるってホントなのね」

春蘭「ちよつと待て！それでは私も馬鹿みたいではないか！」

何やらおかしい争いが始まっていた。

麗羽「あらあら胸が貧しい人が何か言ってますわよ。大きさ、形、感度等どれをとってもわたくしの胸が一番ですわ」

桂花「あら感度なら華琳様が一番よ！」

華琳「！？／／／」

シャオ「ちよつと待ちなさいよ！感度ならシャオが一番なんだからね！」

いつの間にかシャオまで加わっていた。

鈴々「大きさなら愛紗だって…」

愛紗「余計なことを言うな鈴々！お前にはまだ早すぎる！」

愛紗が鈴々に言うつと

？「ハーハッハッハ！」

何処からか声が聞こえてきた。

？「このように愉快に話しているというのにたかが胸くらいでもめるとはバカなやつらめ！」

バンッ！

声が聞こえてきた方向を見てみると

そこには華蝶の仮面以外を脱ぎ捨てて裸になった華蝶仮面（星）が岩の上に立っていた。

華蝶仮面「そんな騒ぎを起こすやつはこの華蝶…」

華蝶仮面が最後まで言おうとすると

鈴々「あつ！変態仮面なのだ！」

ズコッ！

華蝶仮面は危うくこけそうになった。

華蝶仮面「変態仮面ではない！華蝶仮面だ！」

と華蝶仮面は言うが

愛紗「だがその姿はどう見ても変態仮面でしかないのだが」

華蝶仮面「えっ！？」

バツ！

愛紗に言われて華蝶仮面が改めて自分の体を見ると

見事に何も着ていなかった。

華蝶仮面「ハーハッハッハ！ではさらばだ！」

シュンッ！

そして華蝶仮面は去っていった。

愛紗「あいつは何しに來たのやら」

一刀「全くだな」

愛紗「そうですね一刀殿」

しゅん

愛紗「って！何で普通に入ってるんですか！？」

いつの間にか温泉に一刀が入っていた。

一刀「覗いたら殺すって言ったからさ堂々と入ろうと…」

そして一刀が最後まで言う前に

ドガバキッ！！

一刀「ぎゃーっ！？」

その場にいたほとんどの人から集団リンチをうける一刀であった。

猪々子「それにしても宝って温泉のことかな？」

斗詩「案外そうかもしれないね」

ところがそうでもなく

一刀達が出会った熊の巣の奥深くに

熊「グルッ？」

キラキラッ

たくさんのお宝があったという。

「危険な温泉探し」（後書き）

次回、孫呉の一団が登場。

## 「呉の国の騒動」

ここは海を渡った先にある呉の国

この国では今、大変なことが起きていた。

ダダッ！！

玉座の間へと走り抜ける一つの影

バタンッ！

その影は玉座の間の扉を勢いよく開けると

蓮華「姉様、大丈夫ですか！？」

そこに入ってきたのは呉の国の次期王、孫権（真名をれんぷあ蓮華）であった。

蓮華は玉座に座っている呉の国の王であり姉の孫策（真名をしえれん雪蓮）に話しかけると

雪蓮「心配しなくても別にいいわよ、ただ油断して腕を少し傷つけられただけなんだからさ」

雪蓮は包帯を巻かれた腕の傷を蓮華に見せると

蓮華「よくありません！姉様はいつもいつも戦のことばかり少しは周りの人のことも考えてください！」

蓮華が言つと

？「口を慎むのだ蓮華！」

バンッ！

雪蓮の隣にいた孫静（雪蓮達の母である孫堅の妹、雪蓮達にとっては叔母に当たる人物）が蓮華をしかりつけた。

孫静「雪蓮は国のために戦をしているのだ。それを少しはわかってやれ！」

孫静が蓮華に説教していると

冥琳「お待ちください孫静様」

同じく雪蓮の隣にいた周瑜（真名を冥琳）が孫静を静めた。

冥琳「蓮華様はまだ次期王としての自覚が足りないのですからお許しください」

ぺこりっ

冥琳が頭を下げると

孫静「お前が頭を下げるならば仕方がない今回だけは許してやる」

説教はおさまった。

そしてその頃、一刀達一行はというと

ザッパーンッ！！

鈴々「大きな海なのだ〜！  
」

朱里「さすがは長江ですね  
」

一行は呉の国に向けて長江を渡っていた。

シャオ「凄いでしょ長江が見れたんだからシャオに感謝しなさいよね  
」

別にシャオが威張ることではない

愛紗「にしてもいいのか小香（真名を小蓮<sup>シャオ</sup>）殿、お主は確か家出中だろう帰ったら説教されるのではないのか？  
」

愛紗がシャオに聞くと

シャオ「ご心配なくどうせ今ごろ、『シャオ、いなくなって寂しかったわ！』って泣き叫んでるんだから（それにお姉ちゃん達に一刀を紹介しなくちゃね。なんたって将来の家族なんだから）  
」  
くるっ

そんなことを思いながらシャオは一刀を見てみると

一刀「オエ〜っ  
」

一刀は船酔いしていた。

一刀は船にかかわらず陸から離れた乗り物（飛行機等）に乗るとき  
まっつて気分が悪くなるのだった。（ただし足が地面につけばすぐに  
治る）

そして一行は呉の国にたどり着き城についたのだが

孫静「この馬鹿者が！」

シャオ「うつ！？」

城に帰ったシャオを待っていたのは泣き叫ぶ声ではなく孫静の説教  
であつた。

孫静「こんな大事なときに家出だなんてなに考えてるのですか！お  
前には呉の第三王という自覚が足りないぞ！」

シャオ「はいはいわかってますよ」

孫静「はいは一回！」

そんな説教をうけるシャオに助け船が出された。

雪蓮「まあまあ孫静殿、説教はそれくらいにしないか、でないとも  
た家出してしまつぞ」

シャオの姉の雪蓮である。ちなみに孫静を叔母と呼ばないのは人前  
だからである。

雪蓮「それよりも関羽（愛紗）殿、張飛（鈴々）殿、孔明（朱里）殿、北郷殿、妹が迷惑をかけたな妹に代わって礼を言わせてもらう」

ぺこりっ

雪蓮は一刀達に頭を下げた。

愛紗「とんでもない頭をあげてください孫策殿！？」

朱里「私達は別に迷惑だとか！？」

鈴々「大迷惑なの…むっ！」

一刀は鈴々の口をふさいだ。

一刀「迷惑だとか思ってますから」

そして一刀達が言うと

シャオ「そうだお姉ちゃん達に紹介しなきゃいけないんだった」

雪蓮「誰を？」

雪蓮が聞くと

グイッ！

シャオ「この北郷一刀ってのはねシャオのお婿さんなんだよ」

シャオは一刀の手を引つ張って言うと

蓮華「なっ！？／／／」

冥琳「何ですと！？／／／」

愛紗「（ピキッ！）」

驚く二人に対して（一人は嫉妬）

じっ

雪蓮は一刀の顔をじっとみると

雪蓮「点数は１００点中３０点ね」

バンッ！

面を向かつてはつきりと言われた。

シャオ「どうして３０点なのよ！」

シャオが抗議すると

雪蓮「見た感じ武力が無さそうだから０点よ、顔はまあまあだから  
３０点がいいとこね」

厳しい審査である。

シャオ「ふーんだ！シャオの中では１００点だから別にいいの！後

で頂戴ちやうだいと言ってもあげないからね！

雪蓮「そんなの別にいらないわよ」

あげくの果てにそんなの呼ばわりされる一刀であった。

蓮華「そんなことよりも妹を送ってくれたお礼に今夜は宴うたげを開くから参加するがよい」

蓮華が言つと

愛紗「そうだな参加させてもらおうか」

ピクピクッ！

この時、愛紗のこめかみにうつすらと青筋が出ていた。

愛紗「（一体私はどうしたというのだ？何だか一刀殿が他の女とイチャイチャしていると妙にイラついてくる）」

愛紗はこの感情が嫉妬によるものだと思つていなかった。

そして一刀は

一刀「俺って30点なのか」

ガッケン

雪蓮にはっきりと30点と言われて落ち込んでいた。

そして宴の時

ズラーリッ！！

たくさんのごちそうが並ぶなか

鈴々「うおーっ！？ごちそうがたくさんならんでいるのだー！」

食いしん坊の鈴々は浮かれていた。

愛紗「こら鈴々！意地汚いからやめ…」

愛紗が最後まで言おうとすると

シャオ「はい一刀、アーンして♪」

一刀「アーン」

パクッ！

イチャイチャする一刀を見た途端愛紗は

ボキッ！！

朱里「はわわ！？」

握っていた箸を折ってしまった。

雪蓮「それにしても喉が乾いたわ、伽留牙お酒持ってきて」

雪蓮が言うと

高蘭「はいはい」

タタッ！

呉の国の副料理長である高蘭（真名を伽留牙）がお酒を持ってやってきた。

高蘭「雪蓮様、お酒でございます」

雪蓮「ありがとう」

スッ　　グビッ！

雪蓮は渡された徳利とっくりを勢いよく飲むと

雪蓮「ぶーっ！？」

ブバッ！！

雪蓮の口からお酒が噴出された。

高蘭「ぷははっ！雪蓮様引っ掛かった」

雪蓮「伽留牙！あなた徳利に酒じゃなくて酢を入れたわねー！！お仕置きするからまちなさい！」

高蘭「ヤダですよ」

ドタバタッ！！

宴の会場を走りまくる二人に

蓮華「姉様！伽留牙！客人の前でやめてください！冥琳も何か言ってくれ！」

こつという騒ぎの時に二人を静めるのが冥琳の役目である。

蓮華は冥琳を呼ぶが

蓮華「あれ？冥琳はどこだ？」

冥琳の姿はなかった。

その頃、呉の城の軍義室では

重役A「まったく近頃の孫策様ときたら戦に明け暮れておる」

重役B「これというのも周瑜の監督不屈きだな。まったくあの若僧が我ら古株を出し抜くなんて憎らしい」

呉の国の重役達が何かを話していた。

するとそこへ

張昭「お揃いのような皆の衆」

重役達『張昭殿！？』

呉で一番古株の張昭が現れた。

張昭「このまま孫策様についていたら呉は滅んでしまう、どうだ皆の衆よ！　そのこと謀反でも起こさないか？」

張昭が言つと

重役A「張昭殿の言う通りだ！」

重役B「謀反を起こして孫策、周瑜を殺してやろう！」

重役達の心は一つになった。

張昭「では同盟の証しとしてこの紙に署名してもらおうか」

スッ

張昭が一枚の紙を出すと

重役A「それくらい簡単なことだ！」

重役B「みてろよ孫策に周瑜め！」

スラスラッ

そして重役達は次々と名前を書き始めた。

張昭「（ニヤリッ）」

次の日

蓮華「冥琳、客人の関羽達の姿が見えないがどこにいったのだ？」

冥琳「孔明殿は陸遜（真名を穩）と共に書庫へ、関羽殿と張飛殿はシャオ様と一緒に山に狩りに案内役として甘寧（真名を思春）がついております」

蓮華「北郷殿は？」

冥琳「確か高蘭と共に調理場だと思いますが気になりますか？」

冥琳が蓮華に聞くと

蓮華「バツ：バカなことを言うな！？あんな男は別に気にもしていないがシャオの婿として来るなら私の義弟になるかもしれんからな／／／」

と言いながらも顔を赤くする蓮華であった。

書庫

ズラーリッ！！

朱里「はわわ！？！？たかさんの本がありますね！？これだけあると（読むのに）興奮してしまいますね」

朱里が言つと

穩「そうですね、私も（読んでる途中で）興奮しちゃうんです」

呉の軍師・陸遜伯言、彼女は本を読むと興奮する体質だった。

山

愛紗達が山道を歩いていると

バササーッ！

一羽の鷹が飛んでいった。

シャオ「よーしっ！」

ぐぐっ！

シャオは弓を構えると

ピシュンッ！

放たれた弓は

スカッ

見事に鷹から外れた。

シャオ「ちょっと西森！ アニメなら当たっていたじゃないの！

」

これはアニメを元にした話なので多少の違いはある。

思春「シャオ様、私が弓をとってきますのでお待ちください」

シュンツ！

そして思春は外れた弓を取りに一人で向かっていった。

鈴々「にやははっ！おっぱい小さいうえに矢もへたつぴだなんて最悪なのだ」

カチンツ！

この鈴々の言葉にシャオがキレた。

シャオ「おっぱいが小さいのはあんただって同じじゃないの！だいたいシャオの方がおっぱい大きいんだからね！」

鈴々「鈴々の方がおっぱい大きいのだ！」

二人がもめていると

愛紗「二人とも、たかが胸の大きさくらいで喧嘩するでない」

愛紗が止めに入るが

シャオ「おっぱい勝ち組は黙ってて！こうなったらどっちが大きいがあっちで勝負よ！」

鈴々「のぞむところなのだ！」

ザッ！

二人は愛紗を置いて少しいった先の草むらに入ってしまった。

愛紗「まったくもうあの二人はいつも喧嘩ばかりだな」

愛紗がため息をついていると

愛紗「んっ！あれは孫策殿ではないか」

城のテラスのような場所で雪蓮が酒を飲んでいるのを発見した。

愛紗「しかし一刀殿が30点とはな呉の王も男を見る目がないな」

タタッ！

そして愛紗が去ったすぐ後

バタンッ！

突然雪蓮が倒れたのだった。

「呉の国の騒動」(後書き)

ちなみに高蘭を他のキャラのように台詞が真名でないのは真名だと分かりにくそうだと思ったからです。

高蘭(真名を伽留牙<sup>きやるが</sup>)

「雪蓮暗殺事件」(前書き)

やはり高蘭も真名で書くようにしました。

## 「雪蓮暗殺事件」

孫家の城で孫策（真名を雪蓮）が何者かに襲撃をうけた。

そしてみんなは玉座の間に集められた。

タタッ！

朱里「ハアハア！？  
」

バタンッ！

兵士から報告を聞いた朱里が玉座の間にたどり着くと

そこにいたのは孫権（真名を蓮華<sup>れんぷあ</sup>）、周瑜（真名を冥琳）、甘寧（真名を思春）、陸遜（真名を穩）、孫小香（真名を小蓮・通称シャオ）、鈴々、孫家に仕える双子の大橋と小橋、副料理長の高蘭（真名を伽留牙・通称伽留<sup>キヤル</sup>）、孫静、一刀、そして手錠をかけられた愛紗がいた。

朱里「どうして関羽さんに手錠がかけられてるんですか！？  
」

朱里が聞くと

蓮華「それは関羽殿が雪蓮姉様を暗殺しようとした疑いがあるからだ。何故ならば姉様が倒れた時に一人でいたのは関羽殿だけだから  
」

蓮華が言うつと

朱里「でも確か関羽さんには鈴々ちゃんと小香さんが一緒だったはずです！」

くるっ

朱里は二人の方を見ると

シャオ「それが…」

鈴々「一度だけ愛紗から離れた時があったのだ」

ガーンツ！？

その事に朱里はショックを受ける。

蓮華「これでわかっただろう、姉様を暗殺することができるのは…」

「

蓮華が最後まで言おうとすると

朱里「待ってください！」

朱里が蓮華の言葉を止めた。

朱里「一人になった人が疑われるというのなら甘寧さんだって一人になりましたよね」

ギロリッ

思春「貴様、何が言いたい」

思春は朱里を睨み付ける。

朱里「孫呉の人だからって信用できるわけではありませんし、内心は孫策さんの暗殺を…」

朱里が最後まで言おうとすると

シュンッ！

思春「貴様っ！」

ジャキンッ！

思春は得物の幅広の刀・鈴音りんいんを朱里に向けて迫ってきた。

朱里「はわわ！？」

軍師である朱里が避けられるはずがない

蓮華「思春、やめろ！」

蓮華が思春を止めようとするが間に合わない！？

愛紗「孔明（朱里）！？」

鈴々「朱里！？」

思春の鈴音が朱里に直撃しそうになったその時！

ガキンッ！！

全員『！？』

思春「なっ！？」

みんなが驚いたのは

一刀「そんなにキレると逆に疑われるよ甘寧さん」

バーンッ！

思春の鈴音を受け止めている一刀がいた。

思春「（こやつ、私の早さより早く動いたというのか！？いや、偶然に違いない）」

思春が考えていると

孫静「思春、止めんか！貴様は呉に恥をさらす気か！」

ビシッ！

孫静が思春を叱りつけた。

孫静「ともかく、今疑われておるのは関羽殿と思春なのは事実だ。すまないが二人とも牢に入ってもらうぞ！それでよいな蓮華？」

孫静が蓮華に言う

蓮華「孫静様の言う通りだ。二人は疑いが晴れるまで牢に入ってもらう！」

ザザッ！ ガシッ！

蓮華の命令で兵士達が二人をとらえる。

蓮華「すまないが思春も頭を冷やせ」

思春「わかりました蓮華」

鈴々「愛紗く！？」

愛紗「心配するな鈴々、私はすぐ戻ってきてやるから」

ザザッ！

そして二人は牢に連れていかれた。

蓮華「さてすまないが疑いが晴れないので一刀殿達には関羽殿が出てくるまで監視をつけさしてもらおうぞ」

一刀「まあそれは仕方ないな」

鈴々「監視つきだなんて嫌なのだ」

朱里「鈴々ちゃん、私達が関羽さんの脱獄に協力させないためには仕方ないことです。大丈夫ですよ関羽さんが悪いことするはずない

じゃないですか」

そう言つて朱里は鈴々を静めた。

そしてその日の夜

カツンカツンッ

ギイッ！

何者かが雪蓮が療養している部屋に入ってきた。

？「死ぬがいい雪蓮！」

ギランッ！

何者かは持っていた刀を光らせる。

ちなみに余談であるが何者かは某薬で小さくなった高校生探偵に出  
てくる犯人のように黒スーツであった。

ブンッ！ ザクッ！

？「これでこの国は私のものだ！」

何者かが雪蓮を刺して喜んでいと

？「やっぱりあなただったのね」

？「！？」

後ろから声が聞こえてきたので何者かが振り向いてみるとそこにいたのは

雪蓮「もう正体はわかっているのよ」

バンッ！

そこにいたのは療養しているはずの雪蓮だった。

雪蓮「冥琳、みんな、明かりをつけていいわよ！」

雪蓮が言うつと

パッ！　パッ！　パッ！

部屋中の明かりが一気につけられる。

？「うつ！？」

部屋に明かりがつくにつれて何者かの正体が明らかになってきた。

雪蓮「前々からあなたは怪しいと思っていたのよね、孫静叔母様」

孫静「くっ！？」

バンッ！

何と！？雪蓮の命を狙った人物は雪蓮の叔母の孫静だった。

冥琳「申し訳ありませんがこちらはあなたが日頃から我々のことを憎いと感じているのに気づいてましてね」

伽留「私もお茶くみにいく時に何度も聞きましたよ」

蓮華「姉様を殺害しようとしてその罪を関羽殿に着せた罪を思い知ってください叔母様！」

ババツ！

雪蓮に続いて冥琳達も現れて

ザザツ！

城の兵士達が孫静の回りを囲っていった。

これで孫静も終わったかと思いきや…

孫静「フッフツ…アハハツ！」

何がおかしいのか孫静は急に笑い出した。

雪蓮「人<sup>きつちじんち</sup>って窮地になるとおかしくなるって聞いたけどホントだとわね！？」

雪蓮が笑い出す孫静を不思議に感じていると

孫静「私は正気だとも、いやなに、ここまである男がいつていたこととあっているとはな」

孫静が言うと

兵士「ぐはっ!？」

バタバタッ!

雪蓮達と一緒にいた兵士達が次々と倒れていき

又ウゝ

兵士達の後ろから見知らぬ兵士達が現れた。

雪蓮「あいつら何者よ!？」

冥琳「我々の策が失敗するだなんて!？」

突然のことに驚く雪蓮達

孫静「フッフツ…、冥土の土産にいいことを教えてやる。貴様らが私を捕らえることは最初からわかっていたのだよ!ある男から聞いてなあ」

実は数時間前、こんなことがあったのだ。

孫静「さてと、雪蓮の息の根を止めてやるとするか」

孫静が雪蓮を殺害するための準備を部屋でしていると

謎の男「暗殺するなら少し話を聞け」

孫静「！？誰じゃ！？」

くるっ

孫静が振り向いた先には

バアンッ！

どこから侵入したのかわからないが黒のローブを身に纏った男が立っていた。

謎の男「忠告してやるよ、孫策は生きている。このままいけばあんたが捕まるぜ」

謎の男「何なら俺が手を貸してやるよどうだ？」

男が言うと孫静は

孫静「貴様、何が目的で私に協力するのだ？金か？物か？」

孫静が聞くと

謎の男「そんなものはいらないさ、俺はただこの世界をメチャクチャにしたいだけだからな」

孫静「なるほど、よからう協力を頼む」

そして孫静が少し目を離れた隙に

スッ

いつの間にか謎の男は兵を残して消えていた。

孫静「そして貴様らはまんまと罠にかかったというわけさ、やれ兵士共！奴らを殺してしまえ！」

ズシズシンッ！

孫静の命令に従ってじりじりと雪蓮達に迫り来る兵達

雪蓮「くっ！？」

いくら雪蓮が武力が強いといっても多勢に無勢、しかも仲間がいるのでいつものように暴れるわけにはいかなかった。

伽留「雪蓮様！？」

蓮華「姉様！？」

冥琳「雪蓮！？」

雪蓮「うっ！？」

そしてみんなは壁に追い詰められた。

兵士「くたばるがいい！」

ブオンッ！！

兵士の持っていた剣が雪蓮達に降り下ろされる。

雪蓮「くっ！？」

そして雪蓮達が目を閉じたその時

ドンッ！！

雪蓮「えっ！？」

雪蓮達に斬りかかってきた兵士がいきなりぶっ飛ばされた。

雪蓮「どうなってるの！？」

驚いた雪蓮が辺りを見てみると

一刀「どうやら間に合ったようだな」

バンッ！

何と！？目の前には一刀がいた。

冥琳「一刀殿！？あなた達には危険が及ばぬよう見張りをつけていたはずだが！？」

冥琳が言うと

一刀「悪いけど見張りなら撒いてきたよ」

その頃、一刀を見張っていた兵が逃がしてしまったことにショックを受けていたという。

一刀「孫権達はよそ者だからって客人を疑うような人達じゃないから怪しいのはあの孫静というおばさんと思っただけさ。そしたら案の定、あのおばさんが黒幕だったとわね」

一刀が言うと

孫静「私はまだ　ピー　歳だ！兵士達よ、あやつを殺せ！」

ズズズシンツ！

兵士達は狙いを一刀に変えて襲いかかってくる。

だが

ドガバキンツ！

一刀の前では10越えの兵士達も意味がなかった。

孫静「何と！？あやつは化け物か！？」

そして孫静が驚いてる間に

ギュツ！

孫静「なっ！？」

いつの間にか孫静は縛られていた。

冥琳「敵を目の前にして油断しすぎですよ孫静様」

孫静「くっ！？」

こうして孫静は反逆罪で逮捕されることになった。

一刀「さすがに少し疲れたな！？」

一刀があらかた兵士達をやっつけて休んでいると

雪蓮「かゝずとっ」

むぎゅっ

いきなり雪蓮が抱きついてきた。

雪蓮「この前は30点だなんて言ってごめんね、あなたはもう10点満点よ」私の婿にならない？」

一刀「えっ！？」

困る一刀であった。

蓮華「姉様は一刀殿をいらないと言ったじゃないですか！」

伽留「雪蓮ずるい！」

そして夜中にもかかわらず騒ぎだすみんなであった。

しばらくして 地下室

張昭「周瑜殿、これが孫靜派の名を集めた署名じゃ」

冥琳「張昭殿にはすまないな、裏切り者の芝居させてしまつて」

冥琳が言つと

張昭「なあに、老い先短い年よりはこれくらいせねばな」

そして次の日の朝 一刀達の出港の日

雪蓮「関羽殿、迷惑かけてすまなかつわね」

ぺこりっ

雪蓮は愛紗に頭を下げる。

愛紗「迷惑だなんてそんな！？」

シャオ「今度会つた時までにはおっぱい大きくしてるから覚悟しなさいよね！」

鈴々「鈴々だつて負けないのだ！」

そんななか

朱里「ところで一刀さんの姿が見えませんが知りませんか？」

朱里が聞くと

雪蓮「一刀ならうち（呉）に来てもらっわよ。だから代わりといっ  
ちやなんだけど高蘭をあげるわ。」

花いちもんめしているわけではない

伽留「よろしく願いします！」

鈴々「お兄ちゃん来ないのかなのだ？」

朱里「何だか寂しいですね。」

一刀が来ないことにショックを受ける二人だが

愛紗「別に一刀殿のことは気にしなくてもよかつ

と言いながらも

ブルブルッ

組んでいた両手が震えていた。

ザザーッ！

そして一刀を残したまま船は出港していった。

蓮華「姉様、いいんですか一刀殿を渡さなくて！」

蓮華が言つと

雪蓮「蓮華、私は欲しいと思ったら必ず手に入れるのは知ってるでしよ、早く一刀と子作りして次期王を作って隠居したいし」

それが本音である。

シャオ「お姉ちゃんは一刀をいらないっていったじゃない！一刀はシャオの婿よ！」

雪蓮「私がいつそんなこと言った？いつ？何時何分何秒？地球が何回回ったとき？」

この時代ではまだ地球が丸いことさえわからないはずだが！？

そんなことはさておき雪蓮とシャオが言い争っていると

ドドッ！！

ものすごい勢いで一刀が走ってきた。

そして一刀は

ダッ！ ピョーンッ！！

高く飛び上がると

ドンッ！！

出港していった船に着陸した。

愛紗「一刀殿！？」

鈴々「お兄ちゃん！？」「

朱里「はわわ！？一刀さん！？」「

伽留「うわっ！？すごい！？」「

ちなみに岸から船まではだいたい80メートルはある。

そして

一刀「またな孫策！」「

一刀は手を振りながら別れをいうのだった。

雪蓮「キーツ！！一刀、戻ってきなさいよー！」「

シャオ「でないと今度来た時ひどい目にあわせるからねー！」「

蓮華「やれやれ」「

さすがの蓮華もあきれのしかなかった。

一刀達の旅はまだまだ続く。

「雪蓮暗殺事件」(後書き)

次回、劉備あらわる！

## 「劉備玄德」

呉の国を飛び出した一刀達は新たに高蘭（真名を伽留牙、通称・伽<sup>キ</sup>留<sup>ヤル</sup>）を仲間に加え旅を続けていた。

そして一行が洞穴で一夜を過ごしていると

愛紗「う…うん」

愛紗が何やらうなされていた。

愛紗の夢の中

幼い愛紗「兄上、どうでしょう！？」

愛紗は夢の中で小さい頃を思い出していた。

愛紗の兄「大丈夫だ愛紗、兄上がお前だけは助けてやる！だからお前は寝台の下で隠れてなさい」

愛紗の兄が言うと

幼い愛紗「兄上はどうするのですか！？」

すると愛紗の兄は

愛紗の兄「大丈夫、兄上は無敵だから必ず愛紗の元に帰ってくるさ！だから愛紗は寝台の下に隠れてなさい」

幼い愛紗「わかりました」

ササッ！

幼い愛紗は素直に寝台の下に隠れて目を閉じていた。

だが

次に愛紗が目を開いた時に見たものは！？

バアンッ！！

幼い愛紗「あ…兄上！？」

変わり果てた姿となった実の兄であった。

幼い愛紗「兄上、いつものように私を驚かせようとしているんですよ？もうその手には引っかけられませんから目を開けてください」

愛紗の兄「・・・」

幼い愛紗は大好きな兄上がすでに亡くなっていることが信じられなかった。

幼い愛紗「兄上…兄上ー！」

そしてその日、幼い愛紗は涙が枯れるまで泣き続けたという

愛紗は幼い頃、実の兄を賊に殺されてしまいそれ以来賊を憎むようになったのだ。

愛紗「兄上！？」

ガバッ！

そして勢いよく愛紗が起き上がると

愛紗「ここは洞穴の中！？そうか、また私は過去の夢を…」

実は昔はしょっちゅう過去の夢を見続けた愛紗であった。

愛紗「そういえば最後にあの夢を見たのは一刀殿に出会う前の夜だったな」

スッ

愛紗は寝ている一刀の方を見てみると

鈴々「むにゃむにゃ、もう食べられないのだ」

伽留「むにゃむにゃ、追いついてみるよ雪蓮」

朱里「一刀さん」

一刀「うゝん、動けない！？」

ズッシリ！

一刀の体は三人に申し掛かられていた。

愛紗「まったくもう一刀殿らしいというか」

いつもの愛紗なら一刀を殴っているところだがそれをしないのには数日前に原因があった。

数日前

一刀が呉の国を飛び出してすぐのこと

愛紗「どうして呉の国に残らなかったのですか？あのままいれば一刀殿は呉の国王になれたかもしれないのに、それにあなたの大好きな巨乳もあるでしょう」

と愛紗が一刀に聞くと

一刀「そんなの決まってるだろ！国王なんかでいるよりも俺は愛紗と旅がしたかったからさ」

愛紗「（ドキンッ！／＼／）」

鈴々「お兄ちゃん、鈴々は？」

朱里「はわわ！？私は？」

伽留「私は？」

一刀「もちろんみんなとも旅をしたかったからさ」

だが内心一刀は巨乳は惜しかったな〜と考えてるのだった。

愛紗「（私はどうしたというのだ！？旅をするのは当たり前のはずなのに一刀殿に言われると何故か顔が赤く！？／＼／＼）」

今まで恋をしたことがない愛紗はこれが恋心だとわからなかった。

ということがあったのだ。

愛紗「さて、まだみんな寝ているし私も寝るとするか」

愛紗が再び寝ようとする

わあーっ！ わあーっ！

急に外が騒がしくなってきた。

愛紗「何事だ？」

スッ

愛紗が外の様子を見ようと出ようとする

わあーっ！ わあーっ！

外では戦いが繰り広げられていた。

愛紗「こうしてはおれん！」

サッ

愛紗は急いで穴の中に戻ると

愛紗「一刀殿、起きてください！」

ユサユサッ！

一刀を起こすべく揺さぶるが

一刀「うゝん、愛紗ゝみんなの前でなんて格好するんだよゝ」

と寝言を言った瞬間

ゴチンッ！！ ミ

愛紗に殴られて一刀は気絶してしまった。

愛紗「孔明（真名を朱里）殿、起きてください！」

愛紗は次に真面目な朱里を起こそうとすると

朱里「うゝん、もう朝ですか？」

愛紗「寝ぼけてる場合ではない！外で戦いが繰り広げられているのだ！私は行くから鈴々を起こしてくれ！」

愛紗が言うと

朱里「はわわ！？わかりました！」

ダッ！

そして愛紗は偃月刀を片手に持ち、外に飛び出していった。

愛紗「（片方の鎧は義勇軍のものでもう片方は賊の鎧か）」

愛紗が現場を見ると

賊「死ねやーっ！」

ブオンツ！！

賊の一人が愛紗に剣を降り下ろした。

だが

ガキンツ！

賊「なっ！？」

愛紗は賊の一撃を受け止めると

愛紗「私を甘く見るな！」

ズバツ！

賊「ギヤーツ！？」

逆に賊を切りつけた。

愛紗「我が名は関羽！黒髪 of 山賊狩りだ！」

ババンッ！

愛紗が名乗りをあげると

賊達『嘘つけ！黒髪の山賊狩りはものすごい美人だと聞いたぞ！』

ズコッ！

賊達に突っ込まれた。

愛紗「ええいつ！もうどうでもよい！ともかく齒向かう者は偃月刀の餌食になるがよい！」

ダダッ！

愛紗はそう言って賊の中心に走っていった。

愛紗「ハアーツ！」

ズバズバッ！

賊達『ぐわーっ！？』

愛紗が偃月刀を振るう度に吹き飛ばされていく賊達

さらに

鈴々「おりゃおりゃーっ！」

ド力カツ！

朱里に起こされた鈴々も愛紗と共に戦うため参上した。

愛紗「ではいくぞ鈴々！」

鈴々「悪いやつは成敗するのだ！」

ジャキンッ！

武器を構えて背中合わせに立つ二人

だが一刀はというと

一刀「ふがーっ！」

まだ寝ていた。

朱里「はわわ！？起きてください一刀しゃん！？」

朱里は一刀を揺さぶるがなかなか一刀は起きない。

そんなとき

賊「おいっ！穴の中に誰がいるぞ！」

ダダッ！

朱里「はわわっ！？」

ついに賊が穴の中に入ってきてしまった。

賊「ちび一人（朱里）に巨乳一人（伽留）と男が、八つ裂きにしてやるぜ！」

ジャキンッ！

賊達は一斉に武器を取り出す。

朱里「はわわゝ！？」

伽留「んっ？朝なの？」

賊達『くたばりやがれー！』

ザザッ！

賊達は一斉に向かってくるが

ピタリッ

急に進むのをやめて立ち止まった。

朱里「えっ！？」

伽留「何で襲ってこないの？」

二人が不思議に思っていると

賊「（何だよこれは！？あの寝ている男を見た途端足が動かなくなっちゃった！？）」

ゴゴゴッ…!!

賊達は動かないのではない動きたくても動いたら男（一刀）に殺されると感じているのだ。

一刀「ZZZ」

ガタガタッ!?

賊達は一斉に震えだすと

賊「ガキくらい見逃してやるよ!？」

ダダッ!

一斉に洞穴から逃げていった。

朱里「どうしたんでしょう？」

伽留「あたしにびびったのかな？」

二人はまったく一刀から出された覇気に気づかなかったという。

そして外で戦っていた愛紗と鈴々は

賊達「退却!?!」

ブーブーッ…!!

賊達は愛紗と鈴々の強さには敵わないと感じて逃げていった。

鈴々「あと少しで壊滅できたのになのだ！」

愛紗「歯応えのない賊であつたな」

逃げ去る賊を見ていると

パチパチッ

二人の後ろから拍手の音が聞こえてきた。

？「助けてくれてありがとうございます」

くるっ

愛紗「別に礼を言われることでは…」

愛紗が振り向いて言おうとすると

愛紗「！？」

愛紗は驚いた。何故ならその男の顔が

バアンッ！

賊に殺された愛紗の兄にそっくりだったのだ。

？「どうしましたか？」

しかも声までそっくりだった。

鈴々「愛紗、どうしたのだ？」

愛紗「ハッ！？」

ようやく鈴々の声で正気に戻る愛紗だった。

愛紗「（兄上に似ているだけで私の心が揺れ動くとはな！？）」

愛紗が感じていると

？「私はこの先にある桃花村で義勇軍隊長をしているり…」

男が最後まで言おうとすると

朱里「皆さん大丈夫ですか！？」

ずりずり

朱里と伽留が未だ寝ている一刀を引っ張ってやってきた。

一刀「ぐおーっ！」

鈴々「お兄ちゃんまだ寝てるのだ」

伽留「いくら叩き起こしても起きないから大変よ！？」

愛紗「まったくもう！我々が大変なときに！」

アハハッ！

愛紗達が騒いでいると

？「あのう…」

男が話しかけてきた。

愛紗「！？失礼したな別に忘れていたわけでは！？」

今のは完全に忘れていた。

？「構いませんよ、それより見たところあなた達は強いと感じます。庄屋（村長）に紹介したいので一緒に桃花村に来てくれませんか？」

男が言うと

愛紗「では行きましょう」

鈴々「久しぶりに暖かい布団で寝られるのだ」

朱里「旅の疲れも癒せますしね」

伽留「美味しいもの」

一刀「ぐおーっ！」

一刀達一行は桃花村に立ち寄ることになった。

その途中

鈴々「そういえばまだおじちゃんの名前を聞いていなかったのだ」

？「おじちゃん！？」

どう見ても一刀より少し年上の外見でおじちゃん呼ばわりは痛い！

愛紗「こら鈴々！お兄ちゃんだろう！」

愛紗が注意すると

鈴々「ダメなのだ！鈴々のお兄ちゃんはお兄ちゃん（一刀）だけなのだ！」

男をどうしてもお兄ちゃんと呼ぶことに反対な鈴々

？「まあ小さな子が言ったことですから気にしてませんよ」

ホントは気にしまくっていた。

？「確かに私の名前をいっていませんでしたね、私の名前は…」

劉備「劉備玄德と申します」

## 「桃花村の義勇軍」

劉備「私の名は劉備玄德です」

劉備玄德。三国志を知ってる人もそうでない人も名前くらいは知っている人物。

何故なら劉備は関羽と張飛と義兄弟の契りを結び、三度孔明の所に行って孔明を仲間にした人物で蜀の国の王である。

劉備の案内で一刀達は桃花村にやって来た。

桃花村・庄屋の屋敷

庄屋「いやーっ、劉備殿がこの村に来てからというものこの村に攻めてくる賊の数が減りましてなあ劉備殿には感謝しています」

劉備「とんでもないですよ庄屋さん、私は困っている人を見過ごせないだけですよ（ニコッ）」

劉備が笑顔でにっこりすると

愛紗「（ドキンッ！／＼／）」

鈴々「何で愛紗の顔が赤くなるのだ？」

愛紗「えっ！？別になにも！？」

愛紗はすごく動揺していた。

それというのも劉備の顔が愛紗の兄とそっくりだったことが原因である。（愛紗はブラコンであった。）

劉備「しかし最近是我々義勇軍が何とか食い止めているものの賊の勢いが強まってきていてな。どうですかあなた達さえよければ我が義勇軍に加わってくれませんか？」

劉備が聞くと

愛紗「正義のためですからね」

鈴々「悪いやつは倒すのだ！」

朱里「軍略は任せてください！」

伽留「料理なら任せてよ！」

義勇軍への参加を決めた愛紗達

だが一刀はというと

一刀「ぐおーっ！」

未だに寝続けていた。

そしてその日の夜

愛紗「ハァ」

愛紗はため息を吐いていた。

愛紗「いくら兄上に似ているとはいえ劉備殿のことを思うとは武人として情けない」

スッ

今、愛紗の頭の中は劉備のことを考えていたが

スッ

すぐに一刀の顔へと変わった。

愛紗「！？いかんいかん！なぜ一刀殿のことを考えてしまうのだ！？」

ブンブンッ！

愛紗が必死に頭を振っていると

劉備「関羽殿、どうされました？」

劉備が通りかかった。

愛紗「劉備殿！？いや別に何も！？」

愛紗は誤魔化そうとするが人目見ればバレバレである。

だが劉備は

スッ

愛紗に近寄ると

劉備「顔が赤い関羽殿は素敵だな」

愛紗「えっ！？／／／」

キザな台詞を言われて思わず顔が赤くなる愛紗

劉備「今宵の月は美しいが関羽殿の前ではその輝きは無に等しい」

愛紗「なっ…何を言うのです冗談はお止めください！／／／」

武人として生きていた愛紗にとって初めて聞く言葉に愛紗が照れていると

劉備「冗談ではない！私は一目見たときからあなたのことが好きになりました。噂に高い美人、煌めく黒髪、どれをとってもあなたは美しい！あなたさえよければ是非とも我が妻になってもraitたい」

ギョッ！

愛紗「えっ！？」

劉備は愛紗の手を握り益々顔が赤くなる愛紗

そして愛紗のとった行動は！？

愛紗「いやーっ！／＼／」

ドンッ！！ ドカッ！

劉備「ぐほっ！？」

愛紗は劉備を突き飛ばすと

愛紗「申し訳ない！／＼／」

ダダーッ！

その場から直ぐ様逃げ出した。

劉備「ふっ！照れるなんてかわいいお人だな」

それから数日経ち

愛紗「でえいつ！」

ドカッ！

鈴々「うりゃりゃーっ！」

ドカッ！

賊達『ぐわーっ！？』

バタバタッ！

愛紗達が加わった義勇軍はもはや敵なしの状態だった。

鈴々「今日も完勝なのだ」

愛紗「最近の賊は手応えが無さすぎだな」

朱里「皆さんが頑張っているからですよ」

賊の討伐の帰り道

鈴々「うにやつ!？」

愛紗「どうした鈴々？」

鈴々「あっちの方になにか気配を感じるのだ」

ガササッ!

鈴々が気配のする茂みの中に入っていくと

鈴々「あっ!？」

翠「うゝん…」

バンッ!

そこにいたのは頭に大きなキノコを生やした馬超（真名を翠）が木にもたれていた。

愛紗「こいつは馬超殿!？」

鈴々「頭に大きなキノコが生えているのだ!？」

愛紗と鈴々がキノコに夢中になっていると

朱里「これってマンダラタケ（架空の毒キノコ）です!？食べると頭からキノコが生えて食べた人の栄養を吸い取るんですよ!？」

朱里に言われて翠を桃花村に連れていくことにした。

桃花村

翠「（バクバクッ!）」

朱里の治療によりキノコが取れた翠は飯をガツガツ食べ始めた。

ガチャーンッ!

翠「ごっそさん!味はともかく腹はふくれたぜありがとよ!」

愛紗「馬超殿は相変わらずのようだな」

鈴々「前会った時と全然変わってないのだ」

翠「うるせえな!そっちは新しい顔がいるようだけどな」

スッ

翠は初対面である朱里と伽留を見つめる。

朱里「はわわ！？私は諸葛亮孔明でしゅ！？」

伽留「私は高蘭よ、よろしくね」

翠「あたしは馬超孟起だ。よろしくな！」

翠が朱里達と挨拶していると

劉備「どうやらあなたは関羽殿達の仲間ようですね」

そこに劉備が現れた。

翠「あれっ？北郷、なんか雰囲気変わったか？」

劉備を初めて見る翠は劉備を一刀と間違えた。

鈴々「このおじちゃん（劉備）はお兄ちゃん（一刀）じゃないのだ！」

愛紗「鈴々！お前はまた劉備殿をおじちゃんなどと、せめて劉備お兄ちゃんと言え！」

劉備「まあまあ関羽殿、私は気にしていませんから」

ホントはすごく気にしていた。

翠「そういえば北郷はどこにいるんだよ？」

翠が聞いてくると

朱里「それが今眠ってしまして」

一刀はあれからまだ眠り続けていた。

翠「だらしがないなあ、あたしが起こしてやるよ！」

スッ

翠が立ち上がろうとすると

劉備「まあまあ北郷殿も長旅で疲れがたまっているのでしょう、そつとしてあげなさい。それよりも馬超殿も我が義勇軍に加わってくれませんか？」

翠の答えは

翠「まあ飯をごちそうになったし、仲間になってやるよ！」

ババンッ！

義勇軍に新しく翠が加わった。

そしてその日の夜

愛紗「まったくもう一刀殿はいつまで寝ているというのだ！」

愛紗が一刀を起こしに一刀の部屋に向かっていると

劉備「おや関羽殿」

偶然劉備と出会った。

劉備「北郷殿を起こしに行くのならやめておきなさい。さっき私が起こしに行ったのですがまだ眠ってますよ」

愛紗「起こしに行ったのですか！？すみません劉備殿に余計なことをさせてしまつて」

ぺこりっ

愛紗が劉備に頭を下げると

劉備「構いませんよ。それより夜の散歩に付き合ってくれませんか？」

愛紗「わかりました。お供させていただきます」

スッ

愛紗は一刀をほっておいて劉備との散歩に出掛けた。

劉備「（あんな男を起こしに行くわけがないだろう。全てはあなたと散歩したいだけの嘘さ）」

と劉備は心の中で思っていた。

庄屋の屋敷

翠「ううっ！？水飲み過ぎちまつたぜ早くかわや・トイレ厠に行かないと漏れちまうぜ」

タタタッ！

翠が厠に向かって急いでいると

翠「んっ！あれは関羽と劉備じゃないか」

偶然散歩をしている愛紗と劉備を見かけた。

劉備「関羽殿、北郷殿のことは忘れなさい！あんな寝ているだけの男は必ずあなたを不幸にしますよ！」

愛紗「でも…」

劉備の言葉にたじろぐ愛紗

劉備「その点、私のように顔もよし！統率力もある私ならば必ず関羽殿を幸せにする自信がある！どうか私の妻になってもらいたい！」

劉備の二度目の必死のプロポーズに愛紗は

愛紗「今は村を守る方が大事ですから少し考えさせてください！／／」

ダッ！

愛紗は顔を赤くしながら走り去っていった。

翠「いい展開じゃなかあの二人！おっと、早くしないと漏れちまうぜ！？」

ダダッ！

そして翠が厠に向かった後

劉備「関羽殿、私はあなたが欲しい！私は欲しいものは必ず手に入れますよ」

と言ったのであった。

そして翠が義勇軍に加わってからさらに三日が経った。

この三日の間も一刀はぐっすり眠っていた。（ただし何故か御飯は食べていた。）

もちろんほっておくわけにもいかなないので殴ったり、水をかけたりしたが一刀は起きなかった。

そして桃花村では

鈴々「へくちっ！」

愛紗「まったくもう！寝苦しいからといって頭から水を被れば風邪を引くのは当たり前だ！」

鈴々は風邪を引いてしまった。

そんなとき

ガチャンッ！

劉備「皆さん聞いてください！」

突然劉備が大広間に入ってきた。

劉備「最近活躍中の我らの名を聞いて何進將軍からお声がかかりましたよ！」

何進將軍は大陸でも有名な人物であり曹操（真名を華琳）よりも位の高い人物なのだ。

劉備「送られてきた手紙によると、『連合軍を倒すために協力を求む』だそうです。何進將軍に目をつけられるなんて今まで頑張ってきた甲斐がありました！もちろん我が軍は参加することにしますがどなたか来てくれませんか？」

劉備が聞くと

翠「あたしはついていってもいいぜ」

愛紗「私もついていきたいのだが…」

ちらっ

愛紗が鈴々を心配そうに見ると

劉備「大丈夫ですよ！張飛殿だって子供じゃあるまいし、もし賊が攻めてきたとしても孔明殿が張った罠で簡単には攻めてこない！」

愛紗「しかし…」

それでも鈴々を心配する愛紗

朱里「大丈夫ですよ。私がついていきますし鈴々ちゃんの看病と一刀さんの世話は任せてください」

伽留「私も残るしね」

二人がそこまで言うのでさすがの愛紗も納得した。

そして出陣の時

愛紗「それでは孔明殿、高蘭殿、鈴々のことを頼みました」

朱里「任せてください！」

劉備は愛紗と翠と義勇軍の兵士をすべて引き連れて何進將軍の元に向かった。

だが

賊「あれは義勇軍の奴らだな。どこかに出掛けるならまたとない機会だぜ！お頭達に知らせないとな」

義勇軍が出掛けるところを一人の賊に見つかってしまった。

そしてその頃、一刀はというと

一刀「ぐおーっ！」

未だに部屋で眠っていた。

「桃花村の義勇軍」(後書き)

愛紗達が不在の時に迫り来る危機！果たしてどうなるのだろうか！

「目覚めよ一刀！」

愛紗と翠が劉備に連れられて桃花村を出掛けてから数時間後

桃花村・庄屋の屋敷

朱里「一刀さ〜ん！いい加減に起きてくださいよ〜！」

ゆさゆっさ

朱里は未だ寝ている一刀を起こすため揺さぶるが

一刀「ぐおーっ！」

一刀は全然起きる気配がなかった。

朱里「こうなったら最後の手段として鼻をつまむしか！」

寝ている人の鼻をつまむと息ができないため人を起こすことができるのだ。（マネしないでください）

スッ！

そして朱里が一刀の鼻をつまむべく手を伸ばそうとすると

ガチャンッ！

伽留「大変だよ孔明（朱里）！？」

いきなり高蘭（真名を伽留牙、通称伽留<sup>キヤル</sup>）が部屋の中に入ってきた。

朱里「はわわ！？どうしたんですか高蘭さん！？」

朱里が聞くと

伽留「見張り台からの報告で賊の大群がこの村に攻めてくるらしいよ！？」

朱里「はわわ！？」

愛紗と翠はいなく、鈴々は風邪で寝込み、戦えるのが弓を使う伽留と数人の村人だけという厳しい状況であった。

朱里「とりあえず弓隊の皆さんは矢を放って賊が来るのを少しでも遅らせるようにしてください！それと誰か伝令を関羽さん達の所へ、その間に私は何とか策を考えてみます！」

伽留「わかった」

ダダッ！

朱里の話を聞いた伽留は直ぐ様駆け出していった。

朱里「（関羽さん、早く帰ってきてください！）」

桃花村が危機に陥る数時間前、愛紗達が向かった先では

劉備「何進將軍、桃花村義勇軍隊長劉備玄德、お呼ばれにつき参上しました」

スッ

劉備が何進將軍に対して頭を下げる

何進「堅苦しい挨拶は別によい、他のものもすでに来ておるから入るがよい」

何進將軍…大陸の中でもすごい権力をもつ人物であり曹操（真名を華琳）よりも高い位の人物。

翠「（この人が何進將軍！？）」

愛紗「（確かに偉い人だな！？）」

ゴゴゴッ…！！

愛紗と翠が何進將軍の出す覇氣オーラに驚いていると

華琳「あらっ、関羽に馬超じゃない」

バンッ！

そこには既に華琳達が来ていた。

愛紗「曹操殿！？」

華琳「へえ、しばらく見ていないと思ったらあなた達劉備に仕えていたのね、それにしても今日はちびっこと男がいないうつだけどこど

うしたの？  
「

華琳が聞いてくると

翠「張飛と北郷なら今村で休んでるぜ  
」

華琳「そう  
」

華琳が言つと

劉備「おやおや関羽殿、曹操殿達とはお知り合いでしたか？  
」

ぬっ

横から劉備が会話に入ってきた。

華琳「知り合いも何も関羽とは互いに裸を見せ合つた仲だもの  
」

愛紗「わーっ！わーっ！／＼／  
」

聞き方によつては誤解を招く言葉である。

劉備「それはすごい仲ですね！？  
」

さすがの劉備も少しばかり退いていた。

そして軍義が始まる。

何進「この先の砦に連合軍がいると聞く、その数はわからんが誰か  
向かうものはあるか？行けば褒美をたんまりとらせるぞ  
」

だが軍義に出ていた華琳をはじめとする将達は誰一人として名乗りをあげなかった。

華琳「（冗談じゃないわ！いくら褒美をくれるといっても敵の数がわからないのに出陣するわけじゃないじゃない！）」

他の人達も華琳と同じことを思っていた。

ところが

スッ！

劉備「何進將軍、その役目私にお任せください」

！？

いきなり劉備が手をあげたことにみんなが驚いた。

何進「おおっ、劉備とやら行ってくれるか」

劉備「はいお任せください」

劉備が何進に言つと

華琳「あなた何を考えてるの！敵の数がわからないのに出陣するなんて馬鹿じゃないの！」

華琳は劉備に言うが

劉備「我が軍をあなたのような弱虫の軍と一緒にしないでもらいたい」

華琳「なんですって！」

ジャキンッ！

華琳は死神鎌・絶を手にとって構える。

劉備「おやおや口では敵わないから武力でやるとはやはり弱虫のすることだ」

華琳「くっ！」

今この場で劉備を切り裂くことなんて華琳には簡単なことだが、もしそれをしたら華琳は弱虫扱いにされてしまう。なので華琳はうかつに斬りかかれなかった。

劉備「皆さんも知つての通り、我が軍には関羽と馬超がいる。この二人の豪傑がいれば連合軍なんて赤子に等しい！私は宣言します。何進將軍に勝利という二文字を差し上げましょう！」

バンッ！

劉備が言うと

何進「あっぱれじゃ劉備殿、連合軍を撃破したらお主に莫大な富（財産）を差し上げよう！」

劉備「ありがたきお言葉ありがとうございます！」

そして劉備軍天幕

翠「曹操の言う通りだよこの馬鹿！」

軍義での話をした劉備は翠に怒られた。

愛紗「止めないか馬超殿、劉備殿だって連合軍を倒したい一心で決めたことだ！」

劉備「そ…そうだとも！？」

もちろん劉備の狙いは別にある。それはやはり褒美が欲しいためだけである。

翠「関羽！あんたおかしいぜ、何故こんなやつに肩入れするんだ！こいつのことが好きなのかよ！」

愛紗「なっ！？／＼それは関係なかるう！」

口喧嘩をしだす愛紗と翠

とそこへ

兵士「ご報告があります」

一人の兵士が天幕に入ってきた。

劉備「何があつた？」

劉備が兵士に聞くと

兵士「桃花村が賊の襲撃にあい、至急帰還するようにと！」

愛紗・翠「！？」

さつきまで口喧嘩していたはずの二人が兵士の話を聞いて驚いた。

だが劉備は

劉備「帰還する必要はない！」

バンツ！

劉備が言い切ると

愛紗「何を言うのですか！？村には鈴々、孔明、高蘭、一刀殿や村人達がいるのですよ！」

愛紗は必死で劉備にいうが

劉備「だからどうしたというのだ？我々が今すべきことは連合軍を壊滅させることだ。そのためには村の一つや二つ犠牲にならないとね」

劉備が言つと

翠「こ…この野郎！」

ブオンッ！！

翠は劉備に拳を繰り出すが

愛紗「馬超殿、やめろっ！」

ピタッ！

翠の拳はもう少しで劉備に当たる直前に止められた。

劉備「さすがは関羽殿、私を助けてくださるとは…」

そして劉備が愛紗に近づくと

グイッ！！

愛紗は劉備の胸ぐらをつかんだ。

ギロリッ！！

愛紗は劉備を睨み付ける。

劉備「何だその目は！？私を殴ったら反逆罪で逮捕するぞ！？」

だが愛紗は

パッ　ドスンッ！

劉備の胸ぐらから手を離すと

愛紗「あなたには殴る価値もありません。私が殴る人は信頼する人物すなわち北郷一刀殿だけだ！」

バンッ！

愛紗は劉備に言い切ると

愛紗「失礼する！」

スッ！

そのまま立ち去っていった。

翠「関羽が帰るならあたしも帰らせてもらっぜ」

スッ！

そして翠も立ち去るのだった。

一人残された劉備は

劉備「・・・！？」

魂が抜けたように呆然とするしかなかった。

その少し前、桃花村では

シュシュンッ！

賊「ぐはっ！？」

伽留率いる弓隊が何とか賊の進行を遅らせていた。

賊「怯むな！盾で防げば弓なんて怖くない！」

カカカンッ！

だが賊達は盾で弓を防いで進行してくる。

伽留「くっそー！あいつら盾使うなんて卑怯じゃん！」

これも戦略といえよう

伽留「（こうなったら仕方がない）」

スッ パンッ！

伽留は弓を置いて手を合わせると

伽留「水よ、我に力を！」

伽留が言った瞬間

ブシューッ！！

桃花村の近くの川が勢いよく噴射し

賊達『ぐわーっ！？』

ドドドッ！！

賊達を一気に流した。

実は伽留には水を操る力があるのだ。

伽留「（いけないっ！これ以上水を使ったら川の水がなくなってしまっ！?）」

シュンッ

伽留は川の水がなくなってしまっを防ぐため操るのをやめた。

賊「おっ！水がおさまったようだぞ、それ進軍だ！」

だが水がおさまったのをチャンスとみた賊がさらに進軍をしてきた。

伽留「あーもっ！早く帰ってきてよ関羽！」

その頃、庄屋の屋敷では

ヨロヨロッ

鈴々「愛紗がない分鈴々が頑張るのだ！ゴホッ！」

鈴々が風邪で倒れている体に鞭を打って歩いていると

朱里「はわわ！？一刀さぐんいい加減に起きてくださいよう！」

ゆさゆっさ！

必死で一刀を起こす朱里を見かけた。

朱里「こうなったらホントに鼻をつまみますよ！」

スッ

朱里が一刀の鼻をつまむべく手を伸ばしたその時

鈴々「何するのだ朱里？」

後ろからいきなり鈴々の声が聞こえてきて

朱里「はわわ！？」

ずるっ！ ドシンッ！

驚いた朱里は一刀の服をめくりながら倒れてしまった。

朱里「もう鈴々ちゃん！いきなり驚かさないでくださいよ！」

鈴々「ごめんなのだ。ってあれ？お兄ちゃんのお腹に何かくっついてるのだ」

スッ

鈴々は一刀の腹を指差すと

朱里「はわわ！？これは！？」

バーンッ！

一刀の腹の上に一枚の葉っぱがあった。

朱里「この葉っぱは麻醉草（架空の植物）ですよ！？」

麻醉草…体のどこにでも張り付けるだけで眠らせる草。張り付いている間は剥がさない限り何をしても絶対に起きないし、張られた人も起きることができない。一種の麻醉薬だが今では滅多に手に入らない貴重種である。

鈴々「つまりこの葉っぱを剥がせばお兄ちゃんは目を覚ますのか？」

「

鈴々が朱里に聞いてくると

朱里「そのはずですよ！きっと洞穴で一夜を過ごした時に偶然一刀さんのお腹に張り付いたんでしょうね」

「

ベリッ！

そして朱里は勢いよく葉を剥がした。

ドクンッ！

その直後！？

桃花村・入り口

賊「さあて、とうとう村に到着だぜ！」

伽留の頑張りもむなく賊達は村の入り口に到着してしまった。

賊「よしっ！侵入だ」

ピタッ！

そして賊が門に触れた瞬間

ドッカーンッ！！

賊達『ぐわーっ！？』

いきなり賊達がぶっ飛ばされた。何故ならば

一刀「寝起きの運動にはちょうどいいな」

バンッ！

門には一刀が立ち塞いでいたからだ。

一刀「さあ！賊共、来るなら来いや！」

気合いを入れる一刀

そしてその頃、

紫苑「あのう、桃花村はどちらでしょうか？」

男「桃花村ならあっちだよ。それにしてもあんたみたいな子連れの

べっぴんさんがあの村に何か用か？」

男の質問に紫苑は

紫苑「嫌ですわべっぴんさんだなんて／＼前にお世話になった人がいるんです。さあ、行くわよ璃々」

璃々「うんっ！お母さん」

桃花村に向かう紫苑親子

星「ふふっ、皆に会うのも久しぶりだな」

同じく桃花村に向かう星

愛紗「待ってるよ鈴々！」

パカパカッ！

馬を急がせる愛紗と翠

今、豪傑のみんなが桃花村に急ごうとしていた。

## 「桃花村攻防戦」

愛紗達が留守の間に賊の集団が桃花村に攻めてきた。

迎え撃つ朱里と伽留だが二人だけで守れるはずがない絶体絶命の危機に陥るなか数日ぶりに一刀が目覚めたのだった。

そして愛紗と翠も劉備の元から立ち去り急いで桃花村に向かった。

ドカカーッ!!

賊達『ぐわーっ!?!』

村の入り口では賊の大軍が一刀一人にやられていた。

一刀「（どうやら寝ている間に大変なことが起きていたらしいな、でも）この村には賊を一人たりとも入れないぜ!」

バンッ!

いつになく強気な一刀だった。

賊「くそっ!なんて強い奴だ!?!」

賊「こうなったら立ち去るしかないぜ!?!」

ダダッ!

一人、また一人と賊が一刀を恐れて次々と逃げていく、

その時

？「びびってるんじゃないよ！」

ドンッ！

一人の賊の声が賊の大軍に響き渡った。

賊「あの人は『破壊僧』の異名を名乗る煌龍様だ！？」

煌龍という金色の龍の鎧を身に纏った大男は他の賊とは違いすごい気を纏っていた。

煌龍「小僧、他の奴の目は誤魔化せても俺の目は誤魔化せん、貴様は気の使い手だな」

一刀「ということはあんたもかよ」

実は今まで一刀が大岩を持ち上げたり、遠くまで飛べた理由は気を纏っていたからである。

煌龍「今までは何とかなったかもしれないが」

スッ

煌龍は首に巻いていた12個の宝玉を一刀に向けると

煌龍「この俺に出会ったことを不運だと思いな！」

シュシュンッ！

いきなり宝玉が勝手に飛んで一刀に襲いかかってきた。

もちろんこれも気を使うものだからこそ使える技である。

一刀「ちっ！？」  
「

サッ！

一刀は宝玉を避けようとするが

くくいつ！

宝玉には追尾機能がついているのだろうか一刀が逃げても追ってきた。

そして

めりっ！

一刀「ぐほっ！？」  
「

宝玉は全弾一刀に命中して一刀の体にめり込んだ。

煌龍「どうだ俺の『龍玉撃破弾』の威力は？今ので数本骨が折れたようだな  
「

いくら一刀が頑丈とはいえさすがに今のは煌龍の言う通り肋骨が数

本折れてしまったようだ。

だが普通の人が食らえば宝玉が体を貫く威力であり骨折程度でいられただけでもまだましだといえよう

一刀「うっ！？」

ガクッ

おもわず膝をつく一刀

煌龍「命拾いしたな貴様、普通ならば宝玉が貫いたものの骨折程度ですむとはな、だがしばらくは動けまい。テメエら、今のうちに村を攻めるぞ！」

賊達『おおーっ！』

賊達はもはや煌龍が頭領のような組織になっており門を通ろうとすると

ガシッ！！

煌龍「んっ？」

倒れていたはずの一刀が最初に村に入ろうとした煌龍の足をつかんだ。

一刀「ここから先には死んでも行かさねえよ！」

煌龍「ふんっ！その心意気は買ってやるが……」

スッ

煌龍が一刀の上に足をあげると

煌龍「いい加減うるせえんだよ！」

ブオンッ！！

ドガッ！！

一刀「ぐほっ！？」

一刀の体をおもいつきり踏みつけた。

煌龍「そんなに死にたいならさっさと殺してやるぜ！」

ジャラッ

煌龍「『龍玉撃破弾』！」

シュシュンッ！！

煌龍は一刀にとどめをさすべく再び技を一刀に仕掛けてきた。

すくっ！

だが一刀はボロボロの体で立ち上がると

一刀「まさか久しぶりにこの技を使うことになるとはな」

スッ！

一刀は木刀を構えると

ゴゴゴッ…！！

木刀に気を流し込んだ。

煌龍「（何だよこの気は！？俺よりもでかいじゃねえか！？このボロボロの小僧のどこにそんな力が！？）」

気の量は体の大きさだけでは分からないもの、体が大きくても気が少ない人もいれば、その逆もありえるのだ。

だが気は強者でしかわからないので

賊「煌龍さん一体どうしたんだ？」

賊「あの小僧もさっきから動かないでしょう」

気を知らないものはある意味幸せかもしれない。

ジャキンッ！

一刀「『俄龍…』」

一刀は木刀を構えると

一刀「『<sup>スーシンダン</sup>四神弾』！」

ドゴォッ！！

一刀の木刀から気でできた四頭の龍が飛び出してきた。

ズババーッ！！

賊「何だよこれは！？」

賊「あの小僧が木刀を振るった瞬間、あっちにいた仲間が切られていく！？」

力のないものは何が起きたのかもわからずに切られていくのだった。

バキバキンッ！！

煌龍「俺の宝玉が！？」

そして煌龍の宝玉も一刀の攻撃に打ち砕かれてしまい

ドガガガガッ！！

煌龍「ぐおーっ！？」

一刀の出した龍の気は煌龍を攻撃していった。

これが一刀が恋との戦いですら出さなかった本気の力である。ならば何故今まで使わなかったのかというと

ピキッ！      バキンッ！！

一刀の気の力が強すぎて木刀が耐えきれないためである。

一刀「ちっ！木刀が砕けちまった」

バタンツ！

一刀の木刀は砕けてしまったが煌龍を倒すことができた。だが

賊「あんな疲れきった小僧ならば俺達でも倒せるぜ！」

賊「くたばっちまえ！」

賊達は一刀が疲れきった隙を狙って一斉に襲いかかってきた。

一刀「くそっ！力を使いすぎた！？」

これが一刀が普段から本気を出さないもうひとつの理由、今の一刀でも気の量を調整するのが難しいのだ。

一刀「行かすわけにはいかないぜ！」

バツ！

だが一刀はボロボロの体でありながらも賊の進行を食い止めるべく立ちふさがるが

賊「邪魔なんだよお前！」

賊「疲れきったお前なんて怖くないんだよ！」

ド力カツ!!

賊達は疲れきった一刀に攻撃を仕掛けまくる。

賊「とどめだ! くだばりな!」

ブオンツ!!

賊の一人が一刀にとどめをさすべく斧を振り上げたその時!

ズバンツ! ドサツ!

斧を振り上げた賊の斧が地面に落ちた。

賊「へっ?」

賊が不思議そうにして手を見ると握っているのは斧の柄のみであり刃先は切り落とされていた。

そして賊達が後ろを向いてみると

バンツ!

愛紗「我が名は関羽、黒髪 of 山賊狩りだ!」

翠「あたしは西涼の馬超でい!」

そこにはようやくたどり着いた愛紗と翠がいた。

翠「おいっ！あそこにいるのは北郷じゃないのか！？」

翠が門の前で倒れている一刀を発見すると

愛紗「（遅かったか）貴様ら、よくも一刀殿を！生きてここから帰れると思つなよ！」

ドオンッ！！

賊達『ひいつ！？』

愛紗のただならない殺気にびびる賊達

賊「なあに、相手はたかが二人、こっちはまだ百人はいるんだぜ！

」

数の多さに強気になる賊だが

？「ならば三人ではどうか？」

賊達『！？』

愛紗「お前は星！」

賊達は星の気配に全く気付いてなかった。

賊「だがたかが三人……」

この状況でも諦めない賊がいたが

ヒュンツ！ ザクツ！

それを言った賊は矢に刺された。

そして矢が放たれた方向を愛紗達が見てみると

紫苑「四人ですわ」

璃々「違つよお母さん、璃々もいるから五人だよ」

バンツ！

そこには紫苑と娘の璃々ちゃんがいた。

愛紗「黄忠殿まで来てくれたのか！？」

紫苑「今こそ璃々を助けてくれた恩返しに来ましたわ」

賊「くそっ！まだ…」

それでも諦めきれない賊だが

バァーンツ！

急に門が内側から開かれるとそこにいたのは

村人「北郷さんがあんなにボロボロになっても戦っているのについてまでも隠れてなんかいられるか！」

村人「俺達の村は俺達を守るんだ！」

ババンッ！

武装した村人達およそ二百人が出てきた。

これで戦況は百人VS二百人と逆転してしまい

賊達『くっそー！覚えとけよー！』

ダダダッ！

残った賊達は逃げるしかなかった。

そして

愛紗「大丈夫ですか一刀殿！？」

ダッ！

愛紗はボロボロにされた一刀に肩を貸して立たせようとする。

一刀「愛紗…みんな…、俺が寝ている間に迷惑かけちゃったな」

愛紗「我々は別に迷惑だなんて思っていないません」

愛紗が言うつと

鈴々「その通りなのだお兄ちゃん」

朱里「眠っていたのは麻酔草が原因なわけですし」

伽留「一刀が気にすることないって」

いつのまにか村にいた鈴々達がやってきて一刀を慰めた。

一刀「みんな、ありが…」

一刀が最後まで言おうとすると

劉備「皆さん、探しましたよ」

ぼろ〜ん

そこにボロボロの姿になった劉備が現れた。

劉備「関羽殿達が勝手に出ていったせいで我が軍は進軍できずで私は何進將軍から重いお仕置きを受けたのですよ！こうなったら関羽殿と馬超殿には責任として自害して…」

劉備が最後まで言おうとすると

一刀「あんたがあのある有名な劉備か、はつきり見るのは初めてだったな。握手してもらえるか？」

スッ

一刀は劉備に握手を求めた。

劉備「ほう、私の名を知ってるなんて私も有名になったものだな」

スッ

そして劉備が一刀と握手しようと手を差し出すと

ぐっ！

劉備「えっ？」

一刀の手はパーからグーに変わり

ドグボッ！！

劉備「ぐぼべっ！？」

おもいつきり劉備の顔をぶん殴った。

ドシンッ！！

そして三回ほど錐揉み（きりもみ）回転して劉備が落ちてくると

一刀「今のは俺の仲間を苦しめた分だ。それくらいで勘弁してやるからうせろっ！」

ゴゴゴッ……！！

今、一刀はものすごい覇気を劉備に当てていた。

その結果

じょろろっ

劉備「あああ！？か様怖いよっ！」

劉備はあまりの一刀の恐ろしさに失禁して泣きながら逃げていった。

鈴々「ニヤハハッ！大人なのにお漏らしなんてサイテーなのだ」

翠「うっ！？」

翠には少し痛い言葉である。

愛紗「それにしても一刀殿、私の分まで劉備を殴ってくれてありがとうございました」

一刀「別に構わない…よ」

ヨロッ

気をほとんど使いすぎると力が抜けて眠ってしまうのが気の使い手の特徴だった。

そして一刀が倒れた先は

ぽよんっ

愛紗の胸の中だった。

そしてそのまま一刀は寝てしまった。

星「おっ！久しぶりに『何してるんですかー！』が見られるのか  
」

だが星の考えとは裏腹に

愛紗「疲れたでしょう。ぐっすりお休みください」

ぎゅっ

いつもなら突き飛ばす愛紗だが今回は逆に抱き締めた。

このまま終わればよかったのだが

一刀「うゝん愛紗」

一刀の寝言ですべてが崩れる。

一刀「みんなの前で裸で抱きついちゃダメじゃないか」

カチンッ！

愛紗「なんて夢を見てるんですかー！／＼」

ゴッチンッ！！

一刀「いつてー！？」

今回の一刀の最大ダメージは愛紗の拳骨だったという。

## 「桃花村攻防戦」(後書き)

次回は番外編としてOVAの学園が始まります。

## 「生徒会長争奪戦前編」(前書き)

今回の話はOVA一巻を元になっています。

設定が前までと少し違っているところがありますので注意してください。

「生徒会長争奪戦前編」

ここは聖フランチエス力学園。

今日この学園に新しい転校生がやって来た。

ダッ！

朱里「目標！人を前にしても上がらない！」

水鏡女学院からの転校生の諸葛亮朱里である。

だが彼女がいざ学園に入ろうとすると

カクンッ！

朱里「はわわ！？」

朱里は躓いて（つまずいて）倒れそうになるが

ガシッ！

倒れそうになった直前誰かに支えられて助かった。

朱里「あ…ありがとうござい…」

朱里が助けてくれた人にお礼を言おうとすると

一刀「大丈夫かい？」

パンツ！

今まで女学院で育っていた朱里にとって男を見る機会が少なくしかもその男が少し美形だったのだから

朱里「はわわゝ！？／＼／＼」

バタンツ！

一刀「えっ！？」

朱里は興奮して倒れてしまった。

しばらくして、昼休み

朱里「（ああ、顔を見ただけで倒れるなんて失格でしゅ。それにしてもこの学園に何で男の人がいるのでしょうか？）」

フランチエス力学園は女子校である。

そのことを朱里が考えながら昼食のパンを買いに購買部にたどり着くと

わらわらっ！！

購買部は人が溢れていた。

朱里「はわわ！？あの人達が買い終わるのを待っていたら昼休みが終わってしまいます！？」

割り込みができない朱里らしい答えである。

そして朱里がどうしようか考えていると

愛紗「そのきみ、どうしたのだ？」

くるっ

朱里が声の聞こえてきた方を向いてみると

愛紗「君は転校生か？」

黒髪のきれいな人がいた。

朱里「あ…あの…」

愛紗「その様子だとうやら購買のパンを買えなくて困っているらしいな。よし、多く買ってあるから分けてやろう。ついてくるがよい」

グイッ

朱里「えっ!？」

愛紗は朱里の手を引いて中庭に移動した。

中庭

愛紗「二人とも待たせたな」

愛紗が言つとすでに中庭には

翠「遅いぜ愛紗！」

星「どこにいつていたのだ？」

愛紗の同級生である馬超翠と趙雲星がいた。

愛紗「すまない、ちよつと購買部が混んでいてな、それよりこの子を加えてよいか？」

スッ

愛紗は朱里を前に出すと

朱里「はわわ！？はじめまちて転校生のしよかちゅりよう朱里でしゅ！？」

朱里は緊張して噛みまくっていた。

翠「何だか変わった子だな！？」

星「まあよいではないか。少し変わっている方がからかいがいがある人としてはいいものだ」

絶対からかう気である。

愛紗「ところで鈴々と一刀はどこだ？」

翠「鈴々は掃除当番、一刀ならいつもの場所だぜ」

スッ

そう言うとき翠は一本の木を指差した。

愛紗「またあいつはサボりか」

スッ

そして愛紗は木に近づくと

愛紗「一刀、昼食のパンだ！それより授業に出たらどうだ」

愛紗が言うとき

一刀「うるさいな、俺はどうせ関係ないから授業に出なくてもいいんだよ」

木に上っていた一刀が話しかけてきた。

朱里「あのう、関羽さんは誰と話してるんですか？」

朱里が星に聞くと

星「あの木に上っているのは学園長が呼び寄せたこの学園でも数少ない男子の北郷一刀であり…」

星「愛紗の婚約者だ」

星が言うと

ずるっ！ ドッシーン！

愛紗はすっころび、一刀は木から落ちた。

愛紗「星、何が婚約者だ勝手にいうでない！／＼／」

一刀「俺と愛紗はただの幼馴染だから！／＼／」

二人が星に迫ると

星「おや、違ったのか？てつきりそうかと思って学園中に言っておいたのだから」

愛紗・一刀『余計なことをいうな〜！！』

ちなみにその話を聞いた数名の生徒が怒ったのは別の話である。

朱里「（あれっ？この人どこかで見たような？）」

朱里は一刀を見て今朝のことを思い出そうとするが逆光だったため顔がよく見えなかったのだ。

そんなとき

ドドドッ！

遠くの彼方から土煙が上がっているのが見えてくると

鈴々「うりゃりゃーっ！」

遠くの彼方から愛紗の義姉妹である張飛鈴々が現れた。

鈴々「お腹ぺコぺコなのだ！パンを頂戴なのだ♪」

スッ

鈴々が手を出してパンを要求すると

愛紗「すまないな鈴々、お前の好物であるアナゴサンドは売り切れだ」

愛紗が鈴々に言った直後

鈴々「えーっ！？」

ショックを受ける鈴々

愛紗「代わりにウナギサンドを買ってきたから食べるがよい」

スッ

愛紗は鈴々にウナギサンドを差し出すが

鈴々「嫌なのだ！鈴々はアナゴサンドが食べたいのだー！」

じたばたっ

駄々をこねる鈴々に

愛紗「鈴々、文句をいうでない！」

愛紗が強く言うと

鈴々「愛紗がアナゴサンド買ってきてくれないのがいけないのだ！

」

反論する鈴々

愛紗「人を買わせておいて文句を言うな！」

鈴々「お姉ちゃんなら妹の好物を買ってくるのが普通なのだ！」

二人の口喧嘩はしだいにエスカレートしていき

鈴々「もう愛紗なんて知らないのだー！」

」

ダダッ！

鈴々は走り去っていった。

一刀「鈴々！？」

一刀は鈴々を追いかけようとするが

愛紗「あんな奴はほっておけ」

愛紗に止められた。

星「しかしよいのか愛紗よ、鈴々がいなければ生徒会長争奪戦に出られないぞ」

朱里「何ですかそれ？」

翠「転校生の朱里は知らなくて当たり前だよ。生徒会長争奪戦つてのは大将・武将二人・軍師の四人一組で行う大会で優勝した軍の大將が生徒会長になれるんだよ」

星「しかも今年は学園長の奮発ふんぱつで勝者の願いをひとつ叶えてくれるという副賞付きだからな」

朱里「はわわ！？学園長って太っ腹ですね！？」

一方、他の軍では

曹操軍

桂花「優勝は華琳様以外には考えられません！」

春蘭「我が軍の優勝は間違いなしです！」

秋蘭「頑張りましたよ」

華琳「そうよ、私以外の会長なんて有り得ないわ（会長になったら関羽と一刀を我が手に！）」

孫権軍

蓮華「冥琳、もう一度言ってみる！」

冥琳「何度でも言いましょう蓮華様、あなたが人の上に立つには早すぎます！」

バタンッ！

そして冥琳は出ていった。

思春「蓮華様、気を確かにしてください」

蓮華「私は間違っているのか？姉様、教えてください！」

バンッ！

蓮華が見上げた写真には蓮華の姉である雪蓮の写真が花に囲まれていた。

フランチェスカ学園学生寮

雪蓮「ちよっと！！死んだ風にしないでよね！」

フランチェスカ学園三年生雪蓮。留年生である

董卓軍

月「詠ちゃん、私頑張るね！（会長になって一刀さんとデートを！）」

詠「月がやけに燃えている!?」

袁紹軍

麗羽「おーほっほっほっ！わたくしが会長になるのは確かですわ。  
何故ならば秘密兵器がありますもの」

猪々子「斗詩、秘密兵器って何だ？」

斗詩「さあわからないや」

そして関羽軍

愛紗「確かに鈴々がいなくては我が軍は三人になってしまうな」

愛紗が言うと

朱里「あれ？愛紗さんと翠さんと星さんと一刀さんで四人じゃない  
ですか？」

朱里が数の間違いを指摘すると

一刀「俺は当日学園長から解説役を頼まれているから無理なんだよ  
」

この学園では学園長の命令は絶対である。もし破ればどんな目にあ  
わされるかわからない。

朱里「そうですか。ならばここであつたのも何かの縁ですし私が出  
ます！」

友達を多く作りたいために行動に出る朱里であった。

愛紗「それはありがたい。よしみんな絶対勝利するぞ！」

一刀以外『おーっ！』

しかしこの時一刀は見逃さなかった。わずかに星がにやっとしていたことを

一刀「（あの顔は絶対何か企んでいるな）」

そして生徒会長争奪戦当日

陳琳「皆さま、大変長らくお待たせしました。いよいよ生徒会長争奪戦開催です！それではまず選手入場！」

ダダダッ！

実況である陳琳が言つと選手達が行進してくる。

曹操軍

大将 華琳

武將 春蘭

秋蘭

軍師 桂花

孫権軍

大将 蓮華

武将 思春

小蓮<sup>シャオ</sup>

軍師 穩

董卓軍

大将 月

武将 恋

華雄

軍師 詠

公孫贊軍

大将 公孫贊

武将 季衣

霞

軍師 ゼブラ軍師（冥琳）

袁紹軍

大将 麗羽

軍師 斗詩

武将 猪々子

そして…

鈴々「にやはっ！」

愛紗「お前は鈴々！？何故袁紹軍に！？」

愛紗は鈴々が袁紹軍にいることに驚いていると

麗羽「おーほっほっほっ！張飛さんはアナゴサンド一年分で我が軍に入りましたのよ」

鈴々「愛紗なんて鈴々がやつつけるのだ！」

食い物で軍に加わった鈴々だった。

愛紗「鈴々め、だが負けるわけにはいかない！いくぞみんな！」

愛紗が言うと

翠「おうつ！」

朱里「はいっ！」

だがそこに星の声はなかった。

愛紗「星はどこにいった？」

翠「あれっ？いつの間に！？」

朱里「さっきまでいたんですけど」

姿が消えた星を探す愛紗達。

一方、星はというと

女子更衣室

星「やはりヒーローは遅れてくるものだからな。特別派手な姿で登場せねば」

星はもうひとつの姿である華蝶仮面に変身するための衣装選びに夢中になっていた。

そして更衣室の外では

一刀「こんなことだと思ったよ。星のやつ時間かかりすぎだったの」

星の行動を予測していた一刀が待ち構えていた。

一刀「早くしないと人数不足で愛紗達が失格になってしまふ!? こうなったら仕方ない！」

そして一刀は

星「うゝむ、やはり赤か白か迷ってしまうな」

星が服選びに夢中になっている隙に

シュンッ！      サッ！

部屋に忍び込んであるものを持ち去っていった。

そして会場では

陳琳「おーっと！関羽軍の選手が一人足りない。このままでは人数

不足で失格になります」

翠「くつそー！戦わずして負けるなんて悔しいぜ！」

朱里「はわわ！？」

愛紗「もはやこれまでか…」

関羽軍の誰もが諦めたその時

？「ハ―ハツハツハツ！」

どこからか声が聞こえてきた。

？「悲しみ溢れる美女の声、助けてと喚く（わめく）乙女の涙。美々しき蝶が助太刀いたす！」

バンッ！

声を出してきたものが舞台に降りてきた。

華蝶仮面Z「我が名は華蝶仮面Z！ただいま参上」

現れてきた者はどこからどう見ても蝶の仮面をつけた一刀だった。

女子更衣室

星「仮面はどこにいったのだ！？あれがないと出られない！？」

「生徒会長争奪戦中編」(前書き)

三部作の二部目です。

## 「生徒会長争奪戦中編」

生徒会長争奪戦にて参加を決める愛紗達。

だが愛紗と鈴々が喧嘩をしまい鈴々は袁紹軍に入ってしまう。

おまけに愛紗達の軍であった星が華蝶仮面として出るための準備に時間をかけてしまい危うく愛紗達は失格になりかけてしまう。

だが愛紗達の危機に現れた人物は

華蝶仮面Z「華蝶仮面Z推参！」

その人物は誰がどこから見ても華蝶の仮面を着けた解説のため参加できないはずの一刀であった。

全員『・・・！？』

全員が驚くなか

スタツ

華蝶仮面Zが愛紗達の方に立ち寄ると

華蝶仮面Z「私が来たからには安心したまえ」

と言った瞬間

ガシッ！

華蝶仮面Zは愛紗に胸ぐらを掴まれてしまい

愛紗「何をしてるんだお前は！」

翠「そんなバレバレの変装で出場できるわけないだろ！」

朱里「はわわ！？一刀さん！？」

華蝶仮面Z「何をいうのだね？私は北郷一刀という美男子ではないぞ」

責められた華蝶仮面Zがとぼけようとすると

愛紗・翠・朱里『とぼけ（るな・ないてください）！』

更に責められる華蝶仮面Z

だが

鈴々「あいつはいったい誰なのだ！？」

麗羽「まさか関羽軍に助っ人が現れるなんて！？」

学園長（貂蟬）「あらん、北郷君以外にもいい男がいたなんてねん」

意外とバレていなかったりする。

華蝶仮面Z「学園長、北郷君からの伝言で北郷君は腹痛のため解説

を休むそうです」

華蝶仮面Z（一刀）が言うと

学園長「腹痛じゃ仕方ないわねん。時間もないし、さっさと始めるわよん」

いろいろ騒動があったもののようにく生徒会長争奪戦が開始された。

陳琳「それでは組み合わせの発表です」

一回戦 第一試合

関羽軍 VS 董卓軍 ∴ A

一回戦 第二試合

公孫賛軍 VS 孫権軍 ∴ B

二回戦 第一試合

Aの勝者 VS Bの勝者

二回戦 第二試合

曹操軍 VS 袁紹軍

決勝戦

といった具合である。

（二回戦へのシードを華琳と麗羽が運で掴みとった）

陳琳「それでは最初は陸上競技です。皆さん体操着に着替えてください」

（着替え中）

パアンッ！

華琳「何で私達まで体操着に着替えるのかしら？」

秋蘭「おそらく妄想するための読者サービスでしょう」

絵がないのが残念である。

だが

華蝶仮面Z「おおーっ！今はほとんどお目にかかれない女子のブルマ姿だ〜！」

一人だけハッスルする華蝶仮面Z（一刀）だった。

そんな一刀には当然のごとく

ゴチンッ！！ ミ

愛紗「競技に集中しろ！」

愛紗のゲンコツが落ちるのだった。

陳琳「それでは一回戦第一試合、関羽軍VS董卓軍。種目は二人三脚です」

出場選手

愛紗・華蝶仮面Z

華雄・恋

陳琳「それではスタート！」

ピーッ！

そして競技が開始された。

愛紗「1・2・3・1・2・3」

華蝶仮面Z「1・2・3・1・2・3」

うまくテンポよく進んでいく愛紗と華蝶仮面Z（一刀）

翠「さすがは幼馴染みだぜ」

朱里「二人に任して正解でしたね」

もし華蝶仮面Zでなく二人のどちらかが走っていたら転んでいたに違いない。

対して董卓軍はというと

恋「…お腹空いた」

華雄「恋！さつさと走らんか！」

ずるずるっ

お腹が空いて動けない恋を華雄が引きずりながら進んでいた。

詠「ちっ！やっぱりあの二人に任せるべきではなかったか！こんな  
ったら月、恥ずかしいと思うけど頼むわよ！」

詠は月に指示を出す

月「恋さん、こっちを見てください！」

恋「…んっ？」

恋が呼ばれた先を見ると

セキト「くう〜んっ」

ビシッ！

月「早く来ないとセキトをひどい目に遭わせますよ！／＼／」

バーンッ！

そこにはゴール前にてボンテージスタイル（女王様）をした月が恥ずかしがりながらも鞭を縛られた恋の愛犬であるセキトに目掛けて

お仕置きしようとしていた。

それを見た恋は

恋「…セキト、助ける」

ビュンッ!!

華雄「えっ!?!うわーっ!?!」

セキトを助けるため恋は先程までが嘘のように猛スピードで華雄を引きずりながら走っていった。

詠「よしっ! 作戦成功よ!」

この時、詠は勝利を確信したが

ドビュンッ!!

恋「…!?!」

恋の横から物凄いスピードで華蝶仮面Zが愛紗を引きずりながら走り抜けていった。

何故かというと

華蝶仮面Z「月のボンテージ姿を間近で見たい!」

煩惱丸出しであった。

そして

陳琳「ゴール！！」

華蝶仮面Zが恋より早くゴールした。

月「ふえっ！？」

華蝶仮面Z「君のその姿をぜひ間近で！」

ダッ！

華蝶仮面Zが月に襲いかかるうとするが

ゴチンッ！！ ミ

愛紗「いい加減にしないかこのエロ男！」

間一髪、愛紗に助けられる月だった。

陳琳「さあーっ！続いて一回戦第二試合 公孫賛軍VS孫権軍の試合開始です」

この戦いは借り物競争となり、代表者は大将である公孫賛と蓮華に決まった。

蓮華「（冥琳、そんなに私が嫌いなのか）」

蓮華は選手控え場に立つ公孫賛軍軍師ゼブラ軍師（冥琳）を見つめる。

陳琳「それではスタート！」

そして競技が開始された。

しかし始まる直前までゼブラ軍師を見ていた蓮華は公孫賛に少し出遅れてしまった。

公孫賛「お先にいくぞ！」

パシッ！

公孫賛は蓮華よりいち早く借り物が書かれた紙を手を持った。

公孫賛「さて私の借り物は？」

パサッ！

そして紙を広げると

公孫賛「！？（カッチーン）」

公孫賛は驚きのあまり石になってしまった。何故ならば紙に書かれていた借り物は

『学園長（貂蟬）の下着』

これでは誰であろうと借りることができない。

蓮華「よしっ！」

パシッ！　パサッ！

出遅れた蓮華は公孫贇が石になっている間に紙を手に取り広げてもと

蓮華「（あやつしかないな）」

ダッ！　スッ！

ゼブラ軍師「えっ！？」

何を考えたのか蓮華は紙を見た後、ゼブラ軍師の手を取ってゴールに走っていった。

そして

陳琳「ゴール！！」

蓮華はそのままゴールした。

ゼブラ軍師「どう言うことですか？」

ゼブラ軍師（冥琳）が聞いてくると

蓮華「紙にこう書いてあったからな」

パサッ

蓮華が手に取った紙には

『あなたの成長に必要な人』

と書かれていた。

蓮華「私には冥琳、お前が必要なのだ。これからもよろしく頼む」

ゼブラ軍師「蓮華さま…」

仲直りをする二人であつた。

一方公孫賛は

公孫賛「あんなもの借りたら私は終わりだ〜!?」

すでに負けていることも忘れて叫んでいた。

陳琳「さあーっ！二回戦からの舞台は屋内プールで行われますので  
出場選手は水着に着替えてください！」

そして選手達は更衣室に移動する。

華琳「何のために体操着着たのかしら？」

愛紗「今の時期にプールとはな」

ぶつぶつ言いながらも女子更衣室に行く選手達

そしてその中には

華蝶仮面Z「さあ水着に着替えなくては！」

どさくさ紛れに華蝶仮面Zも女子更衣室に入ろうとするが

ドガバキッ！ ミ

愛紗「お前は男子更衣室だろうが！」

華蝶仮面Z「すみませんでした」

愛紗にボコボコにされる華蝶仮面Z（一刀）であった。

しばらくして、屋内プール

陳琳「さあーっ！全員水着に着替えたところで競技再開です！なお、解説の北郷君が欠席のため保険医の紫苑先生に来てもらっています

」

紫苑「よろしくね」

そして競技が説明される。

陳琳「二回戦第一試合 関羽軍VS孫権軍。種目は水中騎馬戦です

」

ルール

- ・三人一組で馬をつくり、最後の一人が一番上に乗る。
- ・馬役の人は手を使って妨害、鉢巻き取りをしてはいけない。
- ・先に一番上の人の鉢巻きを取った軍の勝ち

・決着がつかずに上の人がプールに落ちた場合落ちた軍の負けとなる。

関羽軍

馬役 先陣 華蝶仮面Z

両脇 愛紗

翠

上の人 朱里

孫権軍

馬役 先陣 穩

両脇 蓮華

思春

上の人 小蓮<sup>シャオ</sup>

陳琳「それでは始め！」

そして試合が開始された。

蓮華「悪いがこの勝負、勝たせてもらう」

シュバツ！

開始早々、蓮華達は後ろに回り込むと

シャオ「食らいなさい！必殺『長江の滝』！」

バシャシャーツ！！

シャオが起こした水しぶきが関羽軍に襲いかかる。

翠「どうなってるんだよこれ!？」

愛紗「人間業ではないぞ!？」

実はこれには秘密があった。

舞台裏

伽留「それぞれ」

舞台裏に隠れていた伽留が水を操っていたのだ。

ドババァッ!!

そうとは知らない関羽軍はまともに水を食らってしまう。

翠「ゲホッ!少し飲んじまったぜ」

朱里「はわわ!?!このままでは体力が削られて私達が不利です」

愛紗「何かいい手はないか!？」

考え出す関羽軍。そんなとき穏をじっと見ていた華蝶仮面Z（一刀）が

ピカーンッ!

何かをひらめいたようだ。

華蝶仮面Z「俺に一つ考えがある」

果たして華蝶仮面Zの考えとは！？

そしてその頃、女子更衣室では

星「どこだ！仮面！？急にみんなが入ってきたので思わず隠れてしまった。はて、では私の代わりに関羽軍に誰が入ったのだろうか？」

「

星は少し考えるが

星「そんなことより早く仮面を見つけないければ！」

その仮面は一刀が持ち去っているのを知らない星であった。

「生徒会長争奪戦後編」(前書き)

三部作の三つ目です。

## 「生徒会長争奪戦後編」

生徒会長争奪戦にて参加を決める愛紗達。

ところがメンバーであつた鈴々が愛紗と喧嘩して袁紹軍に入り、星は着替えに手間取つて関羽軍はあえなく失格になってしまう。

だがその危機を救つたのは解説役のため出場できなかったはずの一刀が華蝶仮面Zとして関羽軍に参戦。

その後、生徒会長争奪戦は着実に進んでいき準決勝第一試合 関羽軍VS孫権軍による水中騎馬戦が行われた。だが水を操る孫権軍に関羽軍は苦戦する。

そんなとき、華蝶仮面Z（一刀）は何かをひらめくのだつた。

華蝶仮面Z「そうだ！あの手しかないな」

華蝶仮面Zが何かをひらめくと

華蝶仮面Z「愛紗、翠、足を地につけないで浮かんでくれ！朱里は俺にしっかり捕まっていってくれ、そして合図したら鉢巻きを取るんだ！」

指令を出す華蝶仮面Zに

翠「何する気だ？」

愛紗「ともかく言う通りにするしかないな」

朱里「はわわ！？わかりました」

パッ！　パッ！　ガシッ！

華蝶仮面Zの指示通り愛紗と翠は足を地につけないで浮かんでいき、朱里は一刀にしっかり捕まっていた。

華蝶仮面Z「それじゃあいくぜ！」

シュッ！

すると華蝶仮面Zは

華蝶仮面Z「おりゃーっ！」

ぐるぐるーっ！！

孫権軍の回りを高速で回っていた。

蓮華「何をする気だ？」

思春「頭がおかしくなったのでしょうか」

ところが

華蝶仮面Z「そして次だ！」

キュルンッ！！

いきなり華蝶仮面Zは右回転から逆の左回転に高速で回りだした。

華蝶仮面Z「うおーっ！！」

華蝶仮面Zは右回転、左回転と次々と回っていく

穩「何する気ですかね？」

しかし、この時穩は気づいてなかった。

ゆさゆっさ！

華蝶仮面Zが起こした回転によって自分の巨乳が大きく揺れていることを

そしてついに…

ブチンッ！

穩「へっ！？」

穩の水着が揺れまくる衝撃に耐えきれなくなり

ぽろりっ♪

ちぎれてしまい穩の胸が丸出しになった。

穩「いや〜んっ／＼／」

サッ

慌てて手で胸を隠そうとする穩

だが騎馬戦で前を構える人の手が急に離れると

ぐらりっ！

シャオ「うわっ！？」

当然のごとく上の人がぐらつくことになり

華蝶仮面Z「朱里、今だ！」

朱里「はわわ！？はい」

この好機を逃すことなく朱里は目を回しながらも

バツ！

シャオ「あっ！？」

シャオの鉢巻きを取った。この瞬間

陳琳「小蓮選手の鉢巻きが奪われたことにより勝者関羽軍！」

関羽軍の勝ちが確定した。

しかし、ほとんどの人は何故こうなったのかわからなかった。だが観客席から見ていた冥琳は

冥琳「（なるほどな、人の体は水に浮かぶもの、それは女の胸だつて例外ではない。水に浮かんだ穩の胸は波立つごとに揺れていきそれを華蝶仮面Zが高速回転することにより波立ちが早くなっていき最後には穩の水着がちぎれるくらい揺れたというわけか）」

冷静に分析していた。

穩「すみませ〜ん。私の胸が大きいばかりに〜」

華蝶仮面Z「ハハハッ！正義は勝つのだ！」

ところがこの華蝶仮面Zの策には欠点があった。一つは目を回すこと、もう一つは…

ゴチンッ！！ガツンッ！！ ミ

愛紗「何が『正義は勝つのだ』だこの馬鹿め！　／／／」

翠「あたし達の水着まで流しやがってこのエロエロ魔神が！　／／／」

一緒に一刀に捕まっていた愛紗と翠の水着も回転により脱げてしまったことである。

華蝶仮面Z「すみませんでした」

水着が脱げてしまった二人に殴られる華蝶仮面Z（一刀）であった。

その後、愛紗と翠の水着も見つかりしばらくして

陳琳「さあーっ！色々ありましたが続いて準決勝第二試合、曹操軍  
VS 袁紹軍の戦いです！」

ズラリッ！

陳琳の宣言で並び立つ水着姿の両軍

華琳「麗羽、私はどんな勝負でもつけるわよ」

麗羽「おーほっほっほっ！そういうセリフは今のうちにたっぷり言  
っておきなさい！」

そして競技が説明される。

陳琳「競技は袁家に伝わる白鳥のまわしを締めた女同士の見相撲で  
す！」

陳琳が宣言すると

ズコッ！！

ずっこける曹操軍

華琳「何なのよその競技は！」

華琳が抗議しようとする

麗羽「あーら、曹操さんという人が一度宣言したことを捨てる気で  
すの？」

斗詩「文ちゃん、何て言っただけ？」

猪々子「確か『どんな勝負でもつけるわよ』だったよな」

鈴々「ここで逃げたら男がすたるのだ」

女である。

カチンッ！！

そして麗羽達の言葉にキレた華琳は

華琳「誰が逃げるといったの！受けてたとうじゃないの！」

参加をつけることにした。

しばらくして

バーンッ！

そこには白鳥のまわしを締めた両軍がいた。

秋蘭「さすがに恥ずかしいな／＼」

春蘭「華琳様の命令ならば仕方ないだろう／＼」

桂花「華琳様以外に見せたくないのに／＼」

華琳「まさかこんな姿を一刀に見せることになるなんてね／＼」

麗羽「おーほっほっほっ！さあいきますわよ！」

斗詩「文ちゃん、麗羽様って羞恥心無いのかな？／＼／」

猪々子「産まれたときに母親の体に置いてきたんだろうよ／＼／」

さすがの姿に麗羽以外恥ずかしがる両軍

華蝶仮面Z「これは！？是非とも記録せねば」

ガチャガチャッ

華蝶仮面Z（一刀）がビデオカメラを取ろうとすると

ゴチンッ！！ ミ

愛紗「このエロ助が」

華蝶仮面Z「すみません」

愛紗に殴られる華蝶仮面Zであった。

陳琳「それでは試合開始です！」

ルール

- ・まわし以外を身に付けてはいけない。
- ・押されてプールに落ちた人の負け

そして袁紹軍先鋒は

鈴々「鈴々なのだ！」

ドンッ！ 春蘭「うわっ！？」

ドンッ！ 秋蘭「うわっ！？」

ドンッ！ 桂花「ひえっ！？」

字数の都合で次々と落とされていく曹操軍

鈴々は羞恥心が無いのか胸を隠さないのに対し、胸を隠す曹操軍は両手が使えない。

そして残るは華琳一人となった。

華琳「こうなったら、恥ずかしいけどやるしかないわね！／＼／

バツ！

何と！？華琳は胸を隠していた両手を開放して戦う気だ！

華蝶仮面Z「おおーっ！／＼／

華蝶仮面Zは華琳を見つめるが

バンッ！

陳琳「何と！？華琳選手、乳首に絆創膏ばんそうこうを貼っています！？」

紫苑「これはルール違反では？」

貂蟬「これはこれでエロいからありよ！グッジョブよ」

どうにか認められたようだ。

華琳「両手が使えればこちらのものよ！」

鈴々「負けないのだ〜！」

ガシッ！

二人は手をつかみ合う。だが疲れている鈴々が不利のようだ。

麗羽「こうなったら猪々子、斗詩、あれをやりますわよ！」

猪々子「あれですか！？」

斗詩「やだな〜／＼／」

そして試合は

華琳「どうやら私の勝ちのようね！」

鈴々「うぬぬ〜！？」

もう少しで鈴々が落ちそうになったその時

ぴこんっ！　ぴこんっ！

ぴこぴこんっ！

麗羽達がまわしの白鳥を動かしていた。

猪々子「グワッ！」

斗詩「グワッ！」

そして白鳥（？）の声を出す猪々子と斗詩、そして

麗羽「アフ○ック！」

麗羽がつまらないことを言つと

華琳「ぷふっ！」

今の何がおかしかったのか急に笑い出す華琳

鈴々「今なのだ！」

華琳「えっ！？」

そしてその隙を鈴々が見逃すはずがなく

ドンッ！！ 華琳「きゃっ！？」

ドボンッ！

華琳はプールに落ちてしまった。

麗羽「フフフツ、曹操さんはつまらないギャグには弱いですからね」

華琳と幼馴染みの麗羽にしかできない手である。

しばらくして

陳琳「さあーっ！ながかった生徒会長争奪戦もいよいよ決勝戦！関羽軍VS袁紹軍の戦いです！」

ズラリッ！

そして選手達が並び立つ

鈴々「愛紗には負けないのだ！」

陳琳「それでは最終競技はやはり競泳です！」

関羽軍 翠・華蝶仮面Z・朱里・愛紗

袁紹軍 猪々子・斗詩・麗羽・鈴々

陳琳「それでは字数を減らすためにもスタート！」

そして競技が開始された。

猪々子「それっ！」

翠「負けないぜ！」

ザブンッ！

勢いよく飛び込む二人

猪々子「お先に〜」

翠「なっ！？」

二人の身体能力はほぼ互角のはずなのに何故か猪々子が翠を大きくリードしていた。

陳琳「何故でしょうかね？解説の紫苑先生お願いします」

紫苑「それはおそらく胸ね！水の抵抗で胸のある翠ちゃんより胸のない猪々子ちゃんの方が進みやすいのよ！」

猪々子「どうせあたいは胸がないよ！」

叫ぶ猪々子だった。

斗詩「そんなことより文ちゃん！」

猪々子「そうだった！？」

タッチ！

翠よりいち早く猪々子が次の斗詩にタッチした。

翠「くっ！？かず…華蝶仮面Z、頼むぞ！」

華蝶仮面Z「任せておけ！」

タッチ！

そして出遅れて翠も華蝶仮面Zにタッチした。

愛紗「あれっ？そっういえば一刀って」

ザブンッ！

華蝶仮面Zは勢いよく飛び込むが

華蝶仮面Z「ぶあっぷ！？ぶあっぷ！？」

華蝶仮面Z（一刀）は金づちだった。

翠「お前泳げなかったのかよ！？だったら歩いてもいいから行きやがれ！」

華蝶仮面Z「おっ！そうか！」

スッ

そして華蝶仮面Zは足をつけると

バシユンッ！

水の抵抗なんてお構いなしに進んでいった。

斗詩「うそっ！？」

そして斗詩に追い付いてしまった。

華蝶仮面Ｚ「頼むぞ朱里！」

斗詩「頼みます麗羽様！」

朱里「はいっ！」

麗羽「いきますわよ！」

ザブンッ！

勢いよく飛び込む二人。だが

朱里「はわわっ！？」

麗羽「おーほっほっほっ！」

バシャシャーッ！

二人は浮き輪を使っているためなかなか差がなかった。

朱里「愛紗さん！」

麗羽「必ず勝ちなさい！」

愛紗「任せておけ！」

鈴々「合点なのだ！」

そして二人は同時にアンカーである愛紗と鈴々にタッチした。

鈴々「うおーっ！アナゴサンドパワーなのだ！」

バシャシャーツ！

愛紗「なっ！？」

試合前にアナゴサンドを食べまくった鈴々は物凄い勢いで泳ぎまくる。

だが

プスッ！

鈴々「へっ！？」

アナゴサンドを食べ過ぎてしまいそこから元気が漏れてしまった。

鈴々「にゃ〜」

ブクブク〜

元気が漏れてしまい沈んでいく鈴々

愛紗「鈴々！？」

バシャーツ！

すぐさま鈴々を助けに行く愛紗

ザバツ！

愛紗「大丈夫か鈴々！？」

鈴々「あいしゃゝ…」

だがその瞬間

陳琳「おーっと！愛紗選手、鈴々選手を助けるためとはいえ妨害により勝者、袁紹軍です。よって生徒会長は麗羽さんに決まりました！」

麗羽「おーほっほっほっ！」

喜びまくる麗羽

鈴々「ごめんなのだ愛紗、鈴々のせいで…」

鈴々は愛紗に謝ると

愛紗「私は妹のお前を助けるのなら生徒会長にならなくてもよい」

愛紗が言うつと

鈴々「あいしゃゝ！」

ギョッ！

鈴々は愛紗に泣きながら抱きつくのだった。

華蝶仮面Z「どうやら仲直りしたようだな」

翠「めでたしめでたしだぜ」

ところが

星「かゝずとどど〜の〜！」

ヌッ！

華蝶仮面Z「星！？　」

星「私の大事な仮面をよくも、許しませんぞ〜！」

星が華蝶仮面Z（一刀）に迫っていく。

パッ！

一刀は仮面を星に渡すと

一刀「許してくれ〜！」

ぴゅーっ！

一刀は逃げていった。

星「待ちなされ〜！」

ドドーッ！

星は一刀を追いかける。

そしてその頃

麗羽「（副賞の望みはまだかしら？）」

麗羽が副賞を待っていると

貂蝉「副賞はあげるけど、私からのご褒美として…  
ブチューッ！」

ブチユッ♪

麗羽「ぎゃーっ！？」

この後、麗羽は気絶してしまい副賞はおじちゃんになったという。

「生徒会長争奪戦後編」(後書き)

さて次回から真・恋姫編

と言いたいところですが

この小説を楽しみに待っている人(いるのかな?)には悪いですが、第一期が終わりましたので次回より西森の新作が始まりますので再び不定期更新になります。なるべく早く投稿しますのでしばしお待ちください。

## 「守りの代償」(前書き)

久しぶりの投稿です。

本来なら鈴々と翠が喧嘩する話ですが一刀がいるといつこと少し話を変えてみました。

## 「守りの代償」

一刀達が桃花村にて賊の襲撃から村を守って二週間が過ぎた。

そして愛紗達桃花村義勇軍（愛紗・鈴々・朱里・伽瑠・一刀）の仲間に新しく趙雲（真名は星）、馬超（真名は翠）、黄忠（真名は紫苑）が仲間に入った。

そして一刀の覇気を恐れて失禁（お漏らし）しながら逃げ出した劉備の行方はわからずじまいだった。ちなみに劉備は紫苑の娘である璃々ちゃんを誘拐した黒幕であることがわかり、劉備という名も偽名ということが判明した。

そして村を救った一番の人物である一刀はというと

じゅっ！

庄屋の屋敷の屋根の上で折れた木刀を見つめていた。

賊達との戦いで本気を出した一刀の力に木刀が耐えきれず折れたのだった。

一刀「すまないな小百合姉」

この木刀は一刀が市大会優勝時、一刀の家の隣に住んでいる愛澤小百合からもらった木刀なのだ。

一刀「この世界に来てはや2ヶ月近く、あいつは俺に何をさせようとしてるんだ？」

一刀は2ヶ月ほど前、何処からか聞こえてきた声に『ある世界を平和に変えてほしい…』と言われてこの世界につれてこられたのだ。  
(1話参照)

一刀「俺がいないと小百合姉も心配するし、一刃も泣いてるかもしれないな」

スッ

一刀は懷から一枚の写真を取り出して見つめる。

その写真には一刀と小百合と一刃が写されていた。

一刀が写真を眺めていると

愛紗「一刀殿！」

ドキッ!?

いきなりの声に驚く一刀

声の出所は下から、すなわち部屋の中から聞こえてきた。

愛紗「一刀殿、祝勝会の宴が始まりますので来てください！でない  
と鈴々が騒いで困ります」

この黒髪ポニーテールの女性は関羽雲長（真名は愛紗）といい、一刀がこの世界に来て初めて出会った人物である。

一刀「ああ、今から行くから待っていてくれ」

愛紗「急いでお願ひしますよ！」

ちなみに愛紗は一刀に惚れている。

愛紗「余計なことを説明するでない！／＼／」

桃花村・庄屋の屋敷

庄屋（村長）「いやゝ、皆さま方の活躍は見事なものです。おかげで付近の賊はみな討伐されました」

この庄屋はたとえ小さな勝利であつても祝勝会を開こうとする性格である。

庄屋「特に孔明殿の策は見事ですな！」

朱里「はわわ！？私なんて別に！？」

この金髪ショートの子は諸葛亮孔明（真名は朱里）名軍師であり、驚くとはわわと言つてしまう。

朱里「私なんてまだまだですよ。皆さんがいたからこそその勝利です！？」

庄屋「またまたゝ、そんな謙遜しなくても」

庄屋が朱里をほめすぎていると

鈴々「ぶーっ！鈴々だって頑張ったのに朱里だけ誉めてずるいのだ！」

この赤髪の小さな女の子は張飛翼徳（真名は鈴々）、愛紗の義妹で元気なのが取り柄な怪力娘。子供っぽいところがある。

鈴々が拗ねていると

庄屋「張飛殿だって活躍は素晴らしいですと！豚にまたがって戦う姿は猛豚將軍と呼ばれているほどですよ」

鈴々「猛豚將軍…かつこいいのだ！」

ちなみにその時みんなの頭に浮かんだ猛豚將軍はまさに豚人間というような感じである。

伽瑠「次の料理ができましたよ」

この子は高蘭（真名は伽瑠牙（通称・伽瑠））。元呉軍の料理長であり弓の名手。水を操ることができ胸がでかい、そして…

翠「あたしがいただきますだぜ！」

ぱくっ！

翠は出された料理をすぐに食べる。ところが…

翠「かれーっ！！」

ゴオーッ！！

あまりの辛さに口から火を吐く翠

伽瑠「ふふふつ、唐辛子をたっぷり入れたんだよね」

いたずらっ子でもある伽瑠だった。

翠「テメエ！よくもやりやがったな！一発殴らせろ！」

伽瑠「やだよ」

ダダッ！

二人はおいかけてこを始める。

この茶髪ポニーテールの女性は馬超孟起（真名は翠）。西涼太守馬騰の娘である。以前は父を殺した曹操（真名は華琳）を憎んでいたが後にそれが誤解だとわかってからは恨んでいない。馬の扱いがうまく、ときおり失禁する。

星「あまりドタバタするでない埃がたつてご飯が食べられないではないか」

この落ち着きのある水色の髪の女性は趙雲子龍（真名は星）。冷静な性格だがよく人をからかう。身が軽く早さを得意とし、正義の味方、華蝶仮面に変装して正義をする（正体は鈴々と璃々ちゃん以外には知られている）。

星「まあ私はメンマさえ無事ならば別に構わぬ…」

星が最後まで言おうとする

翠「待ちやがれ！」

ドンッ！

翠が星にぶつかってしまい

ガチャンッ！

星の持っていたメンマ壺を割ってしまう

その瞬間…

星「よくも私のメンマをーっ！二人とも覚悟するがよい！」

星も争いに加わった。

普段はクールな星もメンマが関係していれば豹変するのだった。

ドタバタッ！

星が加わりドタバタ騒ぎをする三人に

ドンッ！

紫苑「食事中は静かにしなさい！」

薄紫色の髪であるこの女性は黄忠漢升（真名は紫苑）。弓の名手であり義勇軍の母親的存在。子持ちであり爆乳。一見大人しそだが

キレたら愛紗よりも恐い

紫苑が机を叩くと

シュンッ

直ぐ様騒ぎが収まるのだった。

紫苑「みんな静かにしていい子ね」

実はそうではなく、もしあのまま騒いでいたらこの場は地獄と化していたに違いないと感じて静かにした三人だった。

璃々「あつ！お母さん、関羽お姉ちゃんとお兄ちゃんが来たよ」

この子供は璃々。紫苑の娘であり義勇軍の癒し系。まだ5歳くらいの子供だが紫苑から教わった言葉を使うため見た目とは違う発言をする。

璃々が指差した先には愛紗と一刀がいた。

愛紗「遅れてすまないな」

一刀「待たしてゴメンね」

二人がみんなに謝ると

鈴々「遅いのだー！鈴々、お兄ちゃんが来るまでずっと待っていたのだ！」

一刀「それは悪かった」

一刀は鈴々に謝って椅子に座る

璃々「よいしょっと！」

スッ

そして当然のように一刀に座る璃々ちゃん

紫苑「こら璃々、そこに座ったら一刀さんが食べにくいから降りなさい」

璃々「いや、璃々ここに座るの〜！」

璃々ちゃんは一刀から降りようとしなない。

一刀「別に構わないよ黄忠さん。璃々ちゃん軽いからさ」

紫苑「まあ一刀さんが言うのでしたら」

星「一刀殿、食事が終わりましたら鍛練に付き合ってもらえますかな？」

先の賊達との戦いで隠していた一刀の力が明らかになった。はつきりいって一刀の実力はこの場にいる誰よりも強いのだ。

だが

一刀「俺はほら、武器がないからさ」

星「代わりの木刀ならいくらでも…」

一刀「あの木刀でしかダメなんだよ！」

ガタンッ！

全員『・・・！？』

突然の一刀の叫びに全員が驚く

ハッ！？

一刀は自分が何をしたのかを思い出すと

一刀「ごめん星、急に怒鳴ったりして俺は今日は飯いらないからさ

」

スッ

そして一刀は去っていった。

愛紗「一刀殿…」

鈴々「無理もないのだ。前に聞いたけどあの木刀はお兄ちゃんが別の世界から持ってきた大事なものののだ。それが壊れたら別の世界との繋がりが消えてしまうのだ」

朱里「大事な武器が壊れましたからね」

星「少しばかり軽く言い過ぎてしまったようだな」

確かに星の言う通り代わりの木刀ならいくらでもある。だが一刀の木刀は一本しかないのだ。おまけに普通の木刀だと一刀の力が強すぎてすぐ壊れてしまうのだ。

みんなが一刀に同情して暗い気分になる。

さすがにこの状況では庄屋も明るくするわけにはいかなかった。

そしてみんなが暗くなったとき

ドンッ！

愛紗が机を叩くと

愛紗「少し出てくる」

スッ

愛紗が外に出ていこうとする。

翠「どこ行くんだよ関羽？」

翠が聞くと

愛紗「こういう気分になったのも全て一刀殿が落ち込むせいだ！私があやつのうじうじした根性を叩き直してやる！」

スッ

そして愛紗は出ていった。

紫苑「今は関羽さんに任せるしかないわね」

みんなは愛紗に任せることにした。

しかし少しばかり何かがおかしいような気がする。実はみんなは一部を除いて真名を交換しあっていないのだ。

「真名交換」(前書き)

お待たせしました31話目投稿です！

## 「真名交換」

星の何気ない一言に怒った一刀が飛び出した後

愛紗が一刀を追っていった。

そして他のみんなは

璃々「お母さん、お兄ちゃんは何で怒鳴ったの？」

璃々が母親である紫苑に聞くと

紫苑「それはね、趙雲お姉ちゃんが一刀くんの大事にしているものを他のを使えって言ったからよ」

紫苑が璃々に言うと

璃々「じゃあ星お姉ちゃんが悪いのか」

この璃々の一言に

紫苑「ダメじゃないの璃々！ちゃんと趙雲お姉ちゃんって言わなきゃ！というより何で趙雲お姉ちゃんの真名を知っているの！？」

紫苑が璃々に聞くと

璃々「鈴々お姉ちゃんから教えてもらった」

じっ！

みんなの視線が鈴々に集中する。

鈴々「だって鈴々達は仲間だから教えてあげたのだ。仲間なら真名くらい教えるのが普通なのだ」

真名くらいという鈴々だが真名を許可もなく言ってしまうと首を斬られてもおかしくないのだ。

翠「でもまあ張飛の言う通りだよな」

伽留「確かに今まで一緒に戦ってきて真名を交換してないのはおかしいよね」

朱里「もしかして私達の真名は一刀さんにとって木刀と同じくらい大事なものかもしれませんね」

星「フツ！ならば私は真名を失ったら別の真名を使えといったようなものか、それなら一刀殿が怒るのも無理もないな」

ガタツ！

そして全員が椅子から立つと

全員『（行くか・行きましょう）！』

ダダッ！

全員が飛び出していき

庄屋「皆さんどちらにいくのやら？」

一人残された庄屋は首を傾げる（かしげる）のだった。

鈴々達が飛び出す前、一刀を追って出た愛紗は

愛紗「一刀殿はどこにいったのだろうか？」

一刀を探していると

愛紗「あれは！？」

泉近くの木の下に一刀が座っているのを愛紗が見つけた。

愛紗「かず…」

愛紗が一刀を呼ぼうとすると

キラッ      ぼたりっ

一刀が小刀を手に持ち、一刀の手首から血が流れていた。

愛紗「バカなことはやめろ！？」

ダッ！

見ての通り一刀が自殺しようとしているのを見て急いで一刀の元に行く愛紗

一刀「んっ…愛紗か…」

そして一刀が愛紗に気付いて振り向いた瞬間

バチンッ！

一刀「ぐほっ！？」

一刀は愛紗の平手打ちを食らってしまった。

愛紗「このバカ者が！いくら大事なものが壊れたからって自殺する奴があるか！」

バツ！

愛紗は一刀が握っていた小刀を奪い取る。

一刀「返してくれよ！俺は死んでもあの世界に帰るんだ！」

もはや一刀は気が狂っていた。

ガシッ！

一刀は愛紗の持つ小刀を奪い取ろうとする。

愛紗「やめぬか！木刀が壊れたくらいで死に急ぐでない！」

一刀「あれはただの木刀じゃない！俺にとっては唯一あつちの世界と結ぶ大事なものなんだ！」

一刀と愛紗はもみ合いになる。

愛紗「一刀殿の気持ちは私にもわかるから落ち着け！」

愛紗が言うと

一刀「嘘つけ！愛紗は大事なものを失ったことがないから平気で言えるんだよ！そんな愛紗に俺の気持ちがわかるものか！」

一刀が言った瞬間

バチンッ！！

愛紗が一刀の頬を叩いた。

ぐいつ！

そして愛紗が一刀の胸ぐらを掴むと

愛紗「大事なものを失ったことがないだと、ふざけるな！一刀殿はたとえ別の世界だとしても肉親がいるだけましではないか私なんて家族がいないんだぞ」

愛紗は小さい頃に両親を病で亡くし、たった一人の肉親である兄も賊に殺されたのだった。

愛紗も一人ぼっちだったのだ。

愛紗「一刀殿、私が約束してやる！必ず何があろうともあなたを元の世界に帰してやる！だから自殺なんてするんじゃない！」

ほろりっ

そんな愛紗の目からは涙が流れていた。

愛紗の叫びを聞いた一刀は

一刀「ありがとう愛紗、俺が弱虫だったんだよ」

ぎゅっ！

一刀は折れた木刀を握ると

一刀「木刀が折れたからって、俺がよわよわしていたんじゃ小百合姉や一刃に笑われちまうもんな」

そして一刀は

スッ

小刀を取り出すと

シャシャシャッ！

折れた木刀を小刀で削り取っていき

ジャーンッ

一個のお守りを完成させた。

くるっ

一刀「ありがとう愛紗」

ニコッ

一刀は愛紗に笑顔を見せると

愛紗「（ボンッ！／／／）」

愛紗の顔が茹で蛸のように真っ赤になった。

愛紗「（いきなりあの顔は反則だろうが／／／）礼なぞ言わなくてよい！我々は仲間なのだか…」

愛紗が最後まで言おうとすると

スッ

一刀が愛紗に顔を寄せる。

愛紗「（なっ！？／／／）」

一刀「愛紗、動かないで」

スーッ… ガシッ！

そして一刀は愛紗にゆっくりと手を近づけて押さえる。

愛紗「（もしかしてこれは接吻<sup>キス</sup>なのか！？でも一刀殿になら…／／／）」

ぱちりっ

愛紗は一刀を受け入れるように目を閉じる。

そして二人の体は一刀の方からどんどん接近していき…

愛紗「（一刀殿、私はあなたを愛し…）」

ピタリっ！

だがここで一刀の動きが止まり

スッ

愛紗に手を伸ばすと

スッ！

一刀「大きなゴミだったな」

愛紗「へっ！？」

一刀が愛紗に近づいた理由、それは愛紗の頭についていたゴミを取るためだったのだ。

するとその時

ドターッ！！

愛紗の後ろの草むらからいきなりみんなが倒れてきた。

翠「紛らわしいことするなよ！」

星「まあ一刀殿に展開を求める方がおかしいと思ったがな」

紫苑「今度しつかり教えなきゃね」

伽留「うまくいけたらネタにしてからかってあげようと思ったのに  
く！」

朱里「はわわ！？それはいけませんよ！？」

いきなり現れたみんなを見た一刀と愛紗は

愛紗「どこから見てたんだ？」

愛紗が聞くと

璃々「愛紗お姉ちゃんがお兄ちゃんをぶったところだよ」

ほとんど始めの方である。

愛紗「お前ら！！」

恥ずかしいところを見られて怒りだす愛紗

そんなとき

鈴々「鈴々達だってお兄ちゃんのこと心配だからついてきたのだ

！  
「

鈴々が言うと

星「一刀殿、先程の発言を詫びさせてもらいます」

一刀「別に構わないよ！木刀が折れたところであつちに帰れないわけじゃないしさ」

一刀が言うと

星「それでは私の気持ちが晴れませぬ！一刀殿の大事なものを侮辱した代わりに私の真名を預けます！」

星が言うと

紫苑「と言っていますが実はさつき真名を交換しあつてない事実に気づきまして」

翠「折角だから交換しあおうって話になつてな！」

鈴々「お兄ちゃんの大事な木刀の代わりに鈴々達の大事な真名をあげるのだ！」

朱里「私達があげられる大事なものは真名しかありませんしね」

みんなの話を聞いた一刀は

一刀「ありがとうみんな」

ぐずっ！

涙を流しながら感謝していた。

伽留「泣くのはまだ早いって！ほらお酒持ってきたから乾杯ついでに真名を言い合おうよ」

愛紗「それもそうだな」

スッ！

そしてみんなは酒の入った杯を上げると

愛紗「我が名は関羽雲長！真名を愛紗だ！これからもよろしく頼む！」

鈴々「鈴々は張飛翼徳！真名は鈴々なのだ！」

星「我が名は趙雲子龍！真名は星！以後よろしく！」

翠「あたしは馬超孟起！真名は翠だ！よろしくな！」

朱里「私は諸葛亮孔明！真名は朱里です！よろしくでしゅ！」

紫苑「私は黄忠漢升！真名を紫苑と言いますわ！」

璃々「璃々は璃々だよ」

伽留「私は高蘭！真名は伽留<sup>きやるが</sup>牙、伽留<sup>きやる</sup>って呼んでね」

そしていよいよ一刀の番になった。

一刀「俺は北郷一刀！あだな字と真名はない一刀って呼んでくれ！」

と言った瞬間

星・朱里・翠・紫苑・伽留「へっ！？」

いきなり朱里達が驚きだした。

星「これは驚いた！？まさか真名がなかったとわな！？」

璃々「お母さんこれでもうみんなを真名で呼んでもいいよね？」

紫苑「ええ、いいわよ璃々」

璃々「やったー！」

みんなの真名を堂々と言えるようになって喜ぶ璃々ちゃんだった。

そして一刀達はようやく互いに真名を交換しあったのだった。

「真名交換」(後書き)

次回、本物の劉備(桃香)が登場

「訪れた二人連れ」(前書き)

本物の劉備(桃香)とオリキャラの劉雷が登場します。

「訪れた二人連れ」

？「ハアハア…」

？「劉備様、急いでくださいよ！」

一刀達がいる桃花村に桃色の髪をしたほんわかそうな女の子（西森のイメージ）とバカとテストと召喚獣の木下秀吉の顔をして胸にサラシを巻き、三國無双5のリョ統の服装（知らない人は調べてください）をした男装した女の子が向かっていた。

？「海ちゃん、ちょっと待ってよ」

海「早くしてください！噂によればこの先の桃花村に劉備様の名を語る男がいるんですよ！みつけしだいボコボコにぶちのめしてやらなきゃ私の気がすみません！」

その頃、桃花村では

朱里「それでは愛紗さん、一刀さん行ってきます」

朱里達は村の警備にいくのであった。

星「愛紗よ、一刀殿と二人つきりだからといっていちゃいちゃするでないぞ」

愛紗「なっ！？／＼何をいうのだ星！」

鈴々「愛紗の顔が赤いのだ」

二人をからかう星と鈴々

紫苑「大丈夫ですよ璃々もいますし」

翠「だよな、さすがに一刀がエロエロ魔人でも子供が見てる前でエツチなことはしないよな」

伽留「一刀ならわからないけどね」

一刀「そんなに俺って信用ないの!？」

璃々「？」

そして愛紗と一刀と璃々を残してみんなは村の警備に行くのであった。

璃々「愛紗お姉ちゃん、おしっこ！」

愛紗「えっ!？仕方がない一刀殿、私は璃々を厠<sup>トイレ</sup>に連れていきます」

一刀「わかった。俺は薪を割っておくよ」

しばらくして

一刀「よっ！」

パカッ！

一刀が薪を割っていると

？「ムキーツ！！」

何処からか声が聞こえてきた。

一刀「誰の声だ？」

そして一刀が声のする方にいってみると

海「何なのよこの村は！おじさんばつかで若い男なんか一人もいないじゃない！こうなったら若い男をみつけしだいぶん殴ってやる！」

？「海ちゃん、女の子なんだから言葉も女の子っぽくしなきゃダメだよ。そんな性格じゃ好きな男の子ができないよ」

桃色の髪をした女の子が海に言うと

海「ご心配なく！私は劉備様命なので男には興味ありませんから！」

聞き方によつてはおかしい言葉である。

そんなとき

一刀「誰がいるの？」

バツ！

一刀が二人の前に現れた。その瞬間

海「若い男ーっ！」

バツ！

若い男である一刀を見かけた海が一刀めがけて飛びかかってきた。

？「海ちゃん！？」

一刀「えっ！？」

海「くたばれーっ！」

そして

ドンッ！！

海は一刀に拳を繰り出した。

？「海ちゃん！？」

海「私の拳を食らって立っていた奴は一人もいな…」

ところが

バンッ！

一刀「いきなり殴ってくるなんて危ないな！？」

海「なっ！？」

一刀は海の拳を受け止めていた。

海「このっ！このっ！このっ！」

シュシュシュッ！

海は一刀に拳の連撃を繰り出すが

一刀「いきなり何するの！？」

パパパパシッ！

一刀はそれをすべて受け止めていた。

？「あの人、海ちゃんの拳を受け止めるなんてすごいなあ〜！？」

桃色の髪をした女の子が二人の戦いを見ていたその時

ドンッ！　ぐらりっ！

？「えっ！？」

ドバッ！

女の子はすっかり置いてあった材木に手が当たってしまい、材木が女の子に向かってきた。

？「きゃーっ！？」

そして叫び声を聞いて

海「はっ！？劉…」

気づいた海が叫んだその時

ビュンッ！！

海「へっ！？」

海の目の前を一刀がものすごい早さで走り抜け

ガララーッ！！

材木が崩れた時には

？「えっ！？」

バンッ！

女の子は一刀にお姫様抱っこされていた。

一刀「大丈夫怪我はない？」

にこっ！

そして一刀のスマイルを間近で見た女の子は

？「は…はい／＼」

ポッ！

顔を赤くするのだった。

一刀「顔を赤くして熱でもあるのかな？」

だが鈍感な一刀が気づくはずがなかった。

海「（私が見切れないなんてあいつ何て早さなんだ！？）」

海が一刀の早さに驚いていると

ガシャンッ！

一刀「（ドキッ！？）」

一刀の後ろから何かが割れる音がしたので

ギギギッ…

一刀がブリキ人形のごとく首を後ろに回してみるとそこには

愛紗「（プルプルッ）」

お茶を落とした愛紗が震えていた。

一刀「あ…愛紗さん！？」

愛紗「一刀殿が薪割りを頑張っているので差し入れにお茶を持って

いったら薪を割らずに女の子を抱いているとはね…」

愛紗から見た一刀の姿は女の子をお姫様抱っこしているにしか見えないのだ。

一刀「こ…これには事情が!？」

一刀が愛紗に言おうとすると

愛紗「問答無用!」

ギンツ!!

ドカバキドスバコッ!! ミ

愛紗は女の子を傷つけないように一刀だけを狙い殴る。

一刀「ごはっ!？」

バタッ!

一刀の顔がキューブマン(キン肉マンのキャラ)のようになったところでようやく攻撃は止められた。

愛紗「まったく!お主は大丈夫だったか?」

一刀を殴り終えた愛紗が一刀に抱かれていた女の子を見ると

?「な…何でもないです!？」

怒りの愛紗を間近で見た女の子は愛紗に怯えていた。

海「ねえ、ところでさ」

愛紗「何だ？」

そんななか海が愛紗に話しかけてきた。

海「この村で一番偉い人のところに連れていってくれない？」

しばらくして

桃花村・庄屋の屋敷

この場には紫苑と翠を除くみんながいた。

星「一刀殿、確かに私は愛紗といちゃいちゃするなとは言ったが、他の女をつれてくるとは驚きですな」

一刀「誤解ですから」

顔をはらした一刀をからかう星

朱里「それであな達達は誰なんですか？」

朱里が二人に聞くと

海「私は劉雷、字は神王。記憶喪失のところをこのお方に助けられてから旅をしてるのよ」

ちなみに海は劉雷の真名である。

鈴々「それでお姉ちゃんは誰なのだ？」

鈴々が桃色の髪をした女の子に聞くと

？「私の名前は…」

劉備「劉備玄德です」

女の子が名前を言った直後

バタンツ！

翠「劉備だと！」

紫苑「劉備ですって！」

朱里「はわわ！？」

いきなり紫苑と翠が入ってきた。

もちろん劉備という言葉に反応したのは二人だけではなく

一刀・愛紗・星・伽留『……！？』

鈴々「はにやつ？」

鈴々以外のみんなが武器を構えようとしていた。

しばらくして

翠「すまないな、劉備って言葉に反応しちゃってよ」

紫苑「お見苦しいところを見せてしまいましたね」

二人が劉備に謝ると

劉備「気にしないでください」

海「やっぱりあいつ劉備様の名を語って悪さしていたのね！で、あんたらは何されたの？」

海が聞くと

ピクンッ！

紫苑「何をされたかですか…」

プルプルッ！

紫苑の体が震え出して

紫苑「あの男は我が娘である璃々を人質にとって長の暗殺を企んだばかりか名声だけのためにこの村を利用した上に愛紗ちゃんの乙女心をもてあそび…」

一刀「朱里、璃々ちゃんに目隠ししておいてくれ」

朱里「わかりました！？」

紫苑の体にいち早く恐怖を感じた一刀が朱里に指示した直後

紫苑「もし見つけ出したら…耳を削ぎ、鼻を落として目を潰し…時間をかけて生爪を一枚一枚剥がしてから三枚におろし…っ！片身を薄く切ってさつと湯通しして骨は油でカラッと揚げて…っ！！」

ゴゴゴゴッ…！！

伽留「ひっ！？」

鈴々「紫苑の顔が怖いのだ！？」

普段は優しい感じの紫苑だが今の顔は地獄の鬼も裸足で逃げ出すくらいに形相だったという

一刀「落ち着いて紫苑！？璃々ちゃんもいるんだし！？」

ガシッ！

一刀が紫苑を後ろから押さえ込むと

紫苑「はっ！？ごめんなさいつい…あんっ！／＼／＼一刀さんどこかわっているんですか」

一刀「えっ？どこって…」

一刀が自分の手を見つめると

ガッシリ！ むにゅっ ♪

一刀の手は紫苑の爆乳をしっかりと掴んでいた。

一刀「ぶほっ！？」

その事に気づいた一刀が驚いた直後

ゴツチーンッ！！ ミ

愛紗「お前という奴は」

一刀は愛紗に殴られた。

劉備「あの人さつきから殴られてばかりですけど大丈夫なんですか！？」

星「心配無用、あれはいつもの夫婦漫才めおとですからな」

愛紗「め…夫婦ではない！」

海「そんなことより偽者の劉備はどこにいるの？会ったら私がぶん殴ってやるんだから！」

海が聞くと

伽留「たしかあいつは…」

伽留「お漏らししながら逃げていったっけ」

海「なにそれっ？」

26話『桃花村攻防戦』参照

劉備「その時その人、剣を持っていませんでしたか？」

劉備が聞くと

一刀「剣？俺は偽劉備には一度しか会っていないからな、みんなは知っているか？」

愛紗「さあ、私も知りませんが」

星「当然であろう、愛紗は偽劉備の腰ではなく顔を見ていたのだからな」

愛紗「なっ！？」

朱里「はわわ！？やめてください！話が先に進みませんよ！～！そういえば確かに見事な剣を腰にさしていたような気がします」

朱里が言うと

劉備「やっぱりそうでしたか！？あの剣は私にとって大事なものなんです！」

ドンッ！

劉備はいきなり机を叩いて立ち上がった。

## 「新たなる旅立ち」(前書き)

今話よりしばらくの間、三作品をローテーションで投稿していきます。

「新たなる旅立ち」

愛紗「劉備殿、そんなに興奮してどうしたのですか!？」

愛紗が突然立ち上がった劉備に驚くと

劉備「（ハッ!?!）すみませんでした興奮しちゃって」

海「興奮するのも当たり前よ!劉備様は偽者に大事な宝剣を奪われたんだから!」

星「ほほう、詳しくその話を聞かせてくれないか」

劉備「はい、実は…」

劉備は宝剣を盗られたいきさつを話す。

劉備が母に言われて村に筵（むしろ・藁を編んで作った敷物）を売りに行った帰りのこと

ある男（偽劉備）に出会い

偽劉備「腰の剣は見事なものですね、見せてくれますか？」

劉備「いいですよ」

スッ!

劉備「その剣は我が家に先祖代々伝わる宝剣なんです」

偽劉備「それはそれは…それであなたの名前を聞かせてもらえますか？」

劉備「えっ？劉備玄德ですけどそれが何か？」

そして名前を言った瞬間

偽劉備「劉備という名とこの宝剣はいただくぜ！」

ドンッ！

劉備「えっ！？」

ドッポーンッ！！

偽劉備は劉備を川に突き飛ばして宝剣を横取りした。

そして

海「劉備様、どうしたんですか！？」

劉備「ふえ〜ん！海ちゃん！」

川から脱出した劉備が何とか家にたどり着き

劉備「というわけなんです」

母に事情を説明すると

ピキンッ！！

劉備母「このバカ垂れーっ！！」

ブオンッ！！

劉備「きゃーっ！？」

ドボンッ！！

劉備は母に川に投げ落とされた。

海「劉備様！？」

劉備母「いいですか劉備！我が家の家宝を盗まれた責任として宝剣を探しにいきなさい！それが終わるまで家の敷居を跨ぐ（またぐ）ことは許しませんよ！」

劉備「そんな～！？」

こうして劉備は護衛に海をつれていくことを許され、偽劉備が奪った宝剣を探す旅に出たのだった。

海「風の噂で偽者がこの村にいることを聞いたけど一足遅かったとはね！？」

劉備「偽者のせいで川に落とされるし、危つく殺されそうになるし、踏んだり蹴ったりだよ」

劉備が言うと

一刀「あんたバカだな」

一刀が劉備に対して一言いった。

一刀「こつそり奪われたのならともかく自分から大事なものを渡すなんてバカのことなんだよ！」

翠「おい一刀！言い過ぎ…」

翠が一刀に抗議しようとするが

スッ！

紫苑「よしなさい翠ちゃん、一刀さんだって大事なものを失ったんだから大事なもののありがたみがわかっているのよ」

大事な木刀を失った一刀にとって劉備の自分から大事なものを渡すという行為が許せなかったのだ。

劉備「…って」

海「うん？」

劉備「私だって自分がバカなことをしたってわかっています！でもあなたに何でそこまで言われなきゃならないんですか！あなたに私の気持ちなんてわかるわけありません！」

ダッ！

海「劉備様！？  
」

そして劉備は泣きながら屋敷を出ていった。

屋敷の外

劉備「何でだろうな？あの人は間違ったことをいっていない！頭では理解しているのに涙が出ちゃうのは何でだろう」

ぽろぽろっ

劉備の目からは大粒の涙が流れていた。

そんな劉備の近くに

ザッ！

愛紗「劉備殿、少し話をよろしいか？」

愛紗が寄ってきた。

劉備「えと、あなたは…」

愛紗「私は関羽という。一刀殿のことも少しはわかってくれあいっただって大事なものを失ってしまったんだ」

劉備「どういうことですか？」

劉備が愛紗に聞くと

愛紗「前にこの村を賊の大軍が襲ってきたことがあってな、私は偽劉備と共に村を離れていたため大変だったのだ。その時一刀殿が村を守るため木刀が壊れるのも承知で力を使ってしまい大事な木刀を壊してしまったのだ。一刀殿だって大事なものを失ってしまったんだそれだけはわかってくれ！」

愛紗が劉備に言う

劉備「そうだったんですか、私知らないとはいえあの人にひどいことを言っちゃいました。あとで謝っておきます」

愛紗「一刀殿はそんなこと気にする奴ではないからほっておけ」

愛紗が言う

劉備「それにしても関羽さんって一刀さんの気持ちがわかるんですね。好きなんですか？」

愛紗「な…なにバカなことを！？／＼私はあんなスケベで変態な男なんて別になんとも思っていない…」

劉備「？」

愛紗の態度に？を浮かべる劉備だった。

それからしばらくの間、劉備と海は旅の支度が整えるまで桃花村にやっかいになるものの、

劉備は一刀に謝ることができないまま日が経ち、ある日のこと

朱里「劉備さんの探している宝剣ですが、手がかりが見つかりましたよ！」

劉備「ホントですか！？」

海「もったいつけずに教えてよ！」

朱里「実はお昼頃、本屋に寄ったときなんですけど…」

お昼頃、本屋

店主「はい諸葛亮さん、頼まれていた『ドキッ！男同士の合体』、性別なんて関係ない！』『同性愛の絆』の本が入荷しましたよ」

朱里「はわわ！？本の題名は言わないでくださいよ！？」

朱里が取り寄せた本をもって屋敷に帰ろうとすると

男「ホントかよその話！？」

男「ああ、何でも公何とかって太守が近くの賊を退治したときに宝剣を見つけたそうだぜ！」

朱里は男達の会話をちゃんと聞いていた。

朱里「というわけなんです」

お昼頃にあったことを話す朱里。ちなみにもちろん本のことは伏せてある。

朱里が劉備達にその話を話すと

劉備「その公何とかってきつとパイパイちゃんだよ！名前は確か公孫賛です！」

鈴々「公孫賛？どこかで聞いたことがある名前なのだ。星は知っているかなのだ？」

星「いや、残念ながら私も公孫賛なんて人物は知らないな」

愛紗「星、お前はわざとだろう」

星「はて？」

海「劉備様よかったですね、これでこの村ともおさらばですよ」

劉備「えっ！？」

劉備は一刀に謝っていないことを気にしていた。だが村を出る時の見送りの時に謝ればいいと考えていた。

しかし旅立ちの日の朝

愛紗「一刀殿はどうしたのだろう？」

翠「ほつとけよあんなやつ」

一刀は出迎えに来ていなかった。

劉備「（私、嫌われちゃったのかな？結局お別れどころか名前まで

聞いていなかったし」

真名のあるこの世界では劉備は一刀を真名だと思っていたため呼ばなかったのだった。

海「劉備様、いきますよ」

劉備「うん…。皆さんありがとうございました」

そして劉備と海は桃花村から去っていった。

鈴々「結局お兄ちゃんは来なかったのだ」

朱里「朝から探してみましたがどこにもいませんでしたしね」

愛紗「まったくあいつは！」

その頃、劉備達は

劉備「（謝れなかった）」

海「劉備様、何しよげてるんですか？早く公何とかのところにいきましょーよ」

二人が歩いていたとき

アニキ「よう、その胸のでかい姉ちゃん」

バンッ！

二人の前に賊の三人組が現れた。

チビ「そんな男なんかと一緒にしないでさ」

デク「俺達と一緒にしようなんだな」

彼らのいう男とは海のことである。海は男装した貧乳の女なので彼らは海を男だと思っていた。だが

カチンツ！！

海「私は女だよ！」

ドカツ！！

デク「ぐほっ！？」

その事が海の逆鱗に触れてしまいデクを蹴り飛ばす海

海「次はお前だーっ！」

チビ「ひっ！？」

ブオンツ！！

デクをぶっ飛ばした海が次はチビを殴ろうとしたその時！

アニキ「そこまでだ！それ以上暴れたらこの女の首を切るぞ！」

ジャキンツ！

劉備「海ちゃん！？」

海「劉備様！？」

ピタッ！

海が暴れている間にアニキは劉備を人質にしていた。そしてこのまま暴れたら劉備が危ないと感じた海は拳を止める。

アニキ「デク！そいつを押さえとけ！」

デク「だな！」

ガシッ！

海「くっ！？」

海はデクに押さえられてしまった。

劉備「海ちゃん！？」

アニキ「おつとお前は…」

ぐいつ！

アニキは劉備の服をつかむと

アニキ「俺達の相手をしてもらおうか！」

びりりーっ！　ぷるんっ♪

アニキは劉備の服を破き、劉備の胸は丸出しになってしまった。

劉備「きゃーっ／／／」

その頃、桃花村

劉備「きゃーっ／／／」

愛紗「今の声は劉備殿！？　」

星「何かあったのか？　」

鈴々「急ぐのだ！　」

朱里「はわわ！？　待ってくださいよー！？　」

劉備サイド

アニキ「ギャハハッ！　やっぱ形がよくて揉みごたえありそんな乳じゃねえか♪　」

劉備「いやーっ！　」

海「劉備様！？　」

スッ！

アニキの手が劉備の胸を揉もつとしたとき

シュッ！ ゴーンッ！！

アニキ「ぐへっ！？」

何かがアニキの頭に落ちてきた。

パッ！

そして劉備がアニキの手から解放されると

シュンッ！

劉備「えっ！？」

シュタッ！

劉備はあつという間にお姫様だっこの体制になった。

チビ「何もんだお前！？」

落ちてきたものの正体、それは…

一刀「誰かだつて？俺の名は北郷一刀だよ！」

バンッ！

一刀だった。

そして一刀が現れた瞬間

チビ「北郷だと！？」

デク「賊の大將を一人で蹴散らしたという！？」

急に一刀を見てびびる二人

賊退治の噂で一刀も少しは有名になっていたのだ。

一刀「三秒やる。さつさと消える！1…2…」

一刀が三つ数える間に

チビ・デク「し…失礼しましたー！？」

ぴゅーっ！

賊はアニキを担いで去っていった。

そして賊を追いついたあと

劉備「あのう、ありがとうございました！」

一刀にお礼をいう劉備だが

一刀「お礼なんて別にいいよ。それよりこれ着てくれない」

バツ！

一刀は自分の上着を劉備に差し出した。

劉備「えっ？何で上着なんか…」

スッ！

劉備が改めて自分の状態を見てみると

ぷりゅん♪

劉備の胸は丸出しのままだった。

劉備「きゃーっ／＼／」

ガバツ！

すかさず胸を隠してしゃがみこむ劉備

一刀「（気づいてなかったのか！？）大丈夫だからさ！ほんの少ししか見てないし」

フォローになっていない

そして一刀が劉備に近寄ったその時！

ガサツ！

愛紗「大丈夫ですか劉備殿！」

愛紗達がやって来たのだが

朱里「はわわ！？」

星「おやおや一刀殿も男だな」

愛紗達から見た一刀は

上半身裸の劉備に近寄ろうとしている＝変態

であつた。

一刀「こ…これは誤解で！？」

一刀は事情を説明しようとするが

愛紗「この馬鹿者ーっ！！」

バッチーンッ！！

一刀「へぶっ！？」

先に愛紗にぶたれてしまった。

しばらくして

劉備「ありがとうございます。え」と…」

一刀「俺のことは一刀でいいからさ」

劉備「では一刀さんありがとうございます」

劉備は一刀にお礼をいう。ちなみに今の劉備は一刀から借りた上着を着ていた。

愛紗「それにしてもいく先々で大変でしょう。特に予定もありませんし我々も旅に同行しましょう」

劉備「いいんですか!？」

愛紗「構いませんよ!この変態(一刀)がした罪の罪滅ぼしです」

鈴々「愛紗が行くなら鈴々も行くのだ!」

星「ならば私も同行しよう」

朱里「では私は桃花村の翠さん達に手紙を出しておきますね」

そして愛紗達もついていくことになり

劉備「皆さんありがとうございます!」

海「一刀以外はよろしくね」

一刀が劉備の胸を見たことを根にもつ海だった。

一刀「俺も責任とらなきゃな」

こうして一刀達の新たな旅が始まったのだった。

「宝剣争奪勝負前編」（前書き）

作品のローテーションは次のようになっています。

フランチェスカ↓乙女大乱↓オーズ↓フランチェスカの順です。

「宝剣争奪勝負前編」

劉備の宝剣探しの旅に付き合うことになった一刀、愛紗、鈴々、朱里、星

そして劉備は破かれた服の代わりとして愛紗のお古に着替え一行は宝剣を持つという公孫賛が住む町へと向かっていた。

朱里「桃花村の守りは翠さんと紫苑さんと伽留ちゃんに任せたから安心ですね」

念のため三人にも旅に出るかを聞いたのだが

翠「全員行くこともないだろ」

伽留「村に残った方がいいことあるかもしれないしね」

紫苑「愛紗ちゃんの邪魔したら悪いですもの」

という理由で旅には同行してこなかった。

海「いい！今度劉備様にエロいことしたらその顔おもいつきりぶん殴るからね！」

一刀「はい」

海は一刀が劉備の胸を見た聞いて一刀を殴ろうとしたがすでに一刀は愛紗に殴られていたので殴るのをやめた。

星「劉雷（海の名前）殿、そんな約束をしたら一刀殿が何回殴られるかわからんぞ」

一刀「俺ってそんなにエロいの!？」

鈴々「キャハハッ！お兄ちゃんはエロエロなのだ」

鈴々にまでからかわれる一刀だった。

愛紗「劉備殿、もう少しで公孫賛殿の町です。宝剣が手に入りますね」

劉備「はいありがとうございます」

そして一行は公孫賛の城に向かっていった。

公孫賛の城

公孫賛「おおっ！桃香（劉備の真名）、久しぶりだな」

昔の級友との再会を喜ぶ公孫賛

桃香「私だって久しぶりだよパイパイちゃん」

公孫賛「私の真名は白蓮ぱいれんだ！」

真名を教えあった友人に真名を忘れられる残念な人物であった。

白蓮「残念って言っな！」

白蓮が騒いでいると

愛紗「お久し振りです公孫賛殿」

鈴々「普通のお姉ちゃんお久し振りなのだ！」

一刀「しばらくだったね」

白蓮「お前達も久しぶりだな」

白蓮が一刀達に挨拶すると

星「これはこれはお初にお目にかかりますな」

白蓮「趙雲、相変わらずだな」

星「伯佳殿も相変わらず普通ですな」

白蓮「普通って言うな！」

知っている人の紹介が終わったところで

朱里「私は諸葛亮孔明です」

海「私は劉雷神王よ」

そして話は本題に戻り

桃香「あのね私達パイパイちゃんが宝剣を持っていると聞いて駆けつけたんだ。見せてくれる？」

真名を間違えながらも桃香が聞くと

白蓮「その事ならすまない！」

ガバツ！

いきなり土下座体勢をとって謝り出す白蓮

愛紗「どうしたのですか公孫贄殿！？」

白蓮「実は最近町で飢饉（ききん・農作物が不作のこと）が起きて民を救うために袁紹から食料を借りたんだが見返りとして宝剣を要求されてな渡してしまっただ」

白蓮から話を聞いたみんなは

劉備と海以外『えーっ！？』

あの袁紹に渡したことに驚く一刀達だった。

そして一刀達は宝剣を返してもらおうべく麗羽（袁紹の真名）の城に向かう

麗羽の城

麗羽「ああんっ」そこですわ、もう少し優しくしてくださいな。ああんっ」

一歩間違えば18禁になりかねない台詞を言いまくる麗羽

そんな麗羽の元に

バタンツ！

斗詩「麗羽様に客人です！」

猪々子「香油（こつゆ・ボディーオイルのよつなもん）なんか塗っている場合じゃないですよ！」

麗羽の側近文醜（猪々子）と顔良（斗詩）が現れた。

麗羽「なに騒いでいますの！わたくしはいま休暇の時ですよ」  
バンツ！

今の麗羽は裸で香油を塗られていた。

猪々子「いいじゃないですか、麗羽様はいつもあたいと斗詩に仕事を押し付けて毎日が休暇のようなもんじゃないですか」

麗羽「なんですって」

斗詩「そんなことより麗羽様、公孫賛さんお待ちですよ」

麗羽「公孫賛？ああ、あの心の広いわたくしが食料を分けてあげた貧乏太守でしたわね」

心の広い人は見返りに宝剣を奪ったりしない。

麗羽「あんな人に会いたくありませんわ、わたくしは不在だと言っ

ておきなさい」

居留守を使う麗羽だが

斗詩「あと公孫賛さんの他に関羽さんや北郷さん達も来てますよ」

麗羽「北郷？誰でしたっけ？」

猪々子「忘れたんですか、ほら前に麗羽様と宝探しに行った時に熊に追いかけられたあたい達を見捨てた男ですよ」

（ 20話『危険な温泉探し』参照）

猪々子の話を聞いた麗羽は

麗羽「あの男ですって！いいでしょうお会いになりますわ！」

ビシッ！

そして一刀達は案内されて玉座の間に通された。

麗羽の城・玉座の間

麗羽「これはこれは貧乏太守の公孫賛さんこのわたくしに何の用ですの？」

麗羽が白蓮に聞くと

白蓮「（相変わらず口の悪い奴め！）実は前に渡した宝剣を返しにもらいに来たんだ」

桃香「お願いです袁紹さん！宝剣を返してください！」

ぺこっ！

桃香は麗羽に頭を下げるが

麗羽「嫌ですわ」

ビシッ！

即答だった。

麗羽「あの宝剣は等価交換で成り立つものですもの、どうしても言うならばあの食料を返してくださいな！」

悔しいがこの場合は麗羽の方が当たっている。

鈴々「お兄ちゃん等価交換って何なのだ？」

一刀「互いに価値が同じものを交換しあうことだよ。つまり袁紹は食料をあげるから公孫贄は宝剣をあげたってわけさ」

一刀が鈴々に等価交換を説明すると

白蓮「あの食料ならいつか必ず返すから…」

麗羽「今すぐ返しなさい！　まてよ、ならば勝負しましょう」

全員『はっ？』

麗羽の言葉に全員が驚くと

麗羽「あなた方7人とわたくし達3人で勝負しますのよ！そちらが勝てば宝剣は無償で返しますわ！」

確かに無償で返してくれるなら嬉しい話なのだが

一刀「（あの袁紹がタダで返してくれるなんて何か裏がある）」

一刀は麗羽の言葉に疑問を感じていた。

桃香「わかりました受けてたちます！」

麗羽「おーほっほっほっ！わたくしに勝てるなんて思わないことですわね」

高笑いをする麗羽に

斗詩「麗羽様、そんなこと言っているんですか！？素直に宝剣は…」

「

麗羽「お黙り！わたくし達が勝てばいい話ではないの！あんな連中に負けるわたくし達ではないでしょう」

やはり麗羽達は何かを隠していた。

そして舞台は移り、大会場

陳琳「さあ始まりました！袁紹軍対公孫賛軍の宝剣争奪百番勝負の

開始です！  
」

鈴々「にやにやつ！？百回も戦っていたら話が終わるのがいつになるのかわからないのだ！？  
」

朱里「安心してください鈴々ちゃん、実際写されるのは数回だけなんですから  
」

鈴々「にや？  
」

ルールは簡単

これから百番勝負をして最終的に多く勝利した方の勝ち。出場選手以外の参加は即失格。最終的に引き分けの場合はサドンデス

陳琳「それでは最初の対決、知識対決といきましょう！出場選手は袁紹軍顔良選手、公孫賛軍孔明選手です！  
」

ワァーッ！

会場が大いに盛り上がる。

愛紗「頭の良い朱里なら楽勝でしょう  
」

鈴々「朱里ー！そんなおかつばお姉ちゃんなんて軽くやっつけるのだー！  
」

公孫賛軍の愛紗達は朱里の楽勝だと感じていたが

陳琳「それでは第一問…  
」

ゴクリッ！？

全員が陳琳を見つめるなか

陳琳「袁紹様の今日の下着の色は？」

ずこっ！？

陳琳が問題を言った瞬間ずっこける愛紗達

朱里「こんなのわかるわけないですー！？」

さすがの朱里も音をあげるが

斗詩「黒！」

ピンポーン！

斗詩は簡単に正解していく

ちなみに問題を用意したのはもちろん麗羽である。

愛紗「あやつらめ、自分達に有利な問題を出すなんて卑怯な真似を！」

鈴々「頑張るのだ朱里！」

誰もが麗羽達にしか解けないと思っていたが

一刀「やっぱ黒だったか」

ずこっ！

一刀だけはわかっていたようだ。

そしてその後も

陳琳「袁紹様の昨日の下着の色は？」

斗詩「赤！」

陳琳「袁紹様のお気に入りの下着は？」

斗詩「紐パンの花柄ピンク！」

麗羽に関する問題が出題され次々と斗詩が答えていき最終的には

陳琳「さあ全問題が出題されたところで結果発表！…と言いたいところですが」

結果は見るまでもなく

顔良 300点

孔明 0点

斗詩の圧勝だった。

だが

愛紗「まさか一刀殿まで満点とは！？」

海「さすがは変態ね」

星「問題があだとわかっていれば選手交替をしたのだから」

一刀「？」

一刀も満点をとっていた。

陳琳「では気を取り直して、次の対決といきましょう！」

そして次の対決が発表される。

陳琳「次の対決は鰻うなぎのつかみ取り！ただし手を使わずにおっぱいで取ってもらいます！」

うほーっ！！

対決が発表された途端声を出す男達

そして出場選手が決められる。

ポンッ！

星「愛紗よ、お主の出番だ」

星が愛紗の肩を叩くと

愛紗「何で私が出なければならなんだ！／＼／」

猛抗議をする愛紗

朱里「そうですね、私や鈴々ちゃん、海ちゃんのおっぱいではつかめませんものね…」

鈴々「おっぱい勝ち組の力を見せてやるのだ！」

海「今こそ、そのデカイおっぱいが役に立つ時だよ！」

貧乳トリオはひがみからか愛紗に出場するようにいいまくる。

愛紗「だったら私でなくても星がいるだろう！」

愛紗が言つと

星「それでは面白く…負けるかもしれندろう」

愛紗「お前いま面白くないって言おうとしたな！」

ギャーギャーもめて選手が決められない愛紗達に

スッ！

桃香「私がいきます！」

桃香が手をあげた。

海「劉備様が出ることはないですよ！この無駄にデカイ関羽にやらせ

てくださいな！  
」

愛紗「無駄にデカイとはなんだ！  
」

星「うむ、間違ってはいないな  
」

桃香「もとはといえばこの旅は私がなくした宝剣を取り戻すための戦いです。だったら…  
」

ぐっ！

桃香は服をつかむと

桃香「私がいきます！  
」

ガバツ！

桃香は大っぴらに服を脱いだがここにいるのは愛紗達女だけでなく

一刀「うほっ！？  
」

男の一刀もいた。

そして次の瞬間

ゴチゴチンッ！！ミ

海「この変態野郎！  
」

愛紗「お前という奴は  
」

一刀「何で愛紗まで…」

一刀は愛紗と海に殴られた。

そして互いに選手が決まり

陳琳「それでは袁紹軍顔良選手、公孫賛軍劉備選手のおっぱいで鰻のつかみ取り対決始め！」

対決が始まった。

斗詩「このっ！」

桃香「えいつ！」

二人は鰻をつかもつと奮闘するが素手でもぬるぬるしてつかめない鰻をおっぱいでつかめるわけがなく両者は苦戦する。おまけに…

桃香「あんっ！／／／そんなとこ入っちゃダメ／／／」

斗詩「黒くて大きいのが迫ってくる／／／」

一歩間違えば18禁になりかねない台詞を言いまくる二人

そして

ゴォーンッ！！

終了の合図が鳴り集計の結果

顔良 25匹

劉備 28匹

陳琳「勝者、劉備選手！」

桃香の勝ちが宣言された。

桃香「やったよみんな！」

ぷるんっ♪

桃香は喜びで胸を隠すのを忘れていた。

一刀「おほっ！？／＼／＼」

そして一刀が見ようとした瞬間

ドガバキンッ！！ ミ

海「よくも二度も劉備様の胸を！！」

愛紗「いい加減にしろこのエロ男！」

一刀「ふ…不可抗力なのに…」

再び愛紗と海に殴られる一刀だった。

麗羽「（これで一勝一敗ですわね！？何としても勝たなければヤバ

「イですわ!？」

果たして宝剣はどちらの手に!？

「宝剣争奪勝負後編」(前書き)

一刀がいるため少し内容が変わっています。

## 「宝剣争奪勝負後編」

麗羽の持つ桃香の宝剣をめぐり百番勝負の宝剣争奪戦が開催された。

2戦が終わり、今のところは1VS1で進むなかさらに袁紹軍VS公孫賛軍（一刀、愛紗、鈴々、朱里、星、桃香、海、白蓮）の戦いは続いていた。

### ・瓦割り対決

猪々子「せりやつ！」

バキバキンッ！

猪々子 30枚中25

海「中々やるじゃない、だったら私も…」

じーっ

この時、海は瓦を憎き一刀に見立てていた。

海「この北郷ーっ！」

ドガバキンッ！ ピシッ！

海 全部割り＋台座割り

### ・豆拾い対決

ひゅんひゅんっ！

斗詩「ささっとな」

ぽろっ

鈴々「にゃ、つかめないのだ！」

一刀「というより鈴々、グーでつかむからつかめないんだよ！」

ちなみに鈴々の箸の握り方は小さな子供が使うグーで持つやり方である。

・物真似対決

猪々子「おーほっほっほっ！斗詩、あなた少し太ったんじゃない？」

斗詩「文ちゃん！」

というより猪々子は麗羽のパネルを使用しているので物真似ではない

愛紗「鈴々は胸はぺたんこだけとお腹はぽんぽりんなのだ」

こちらは鈴々の服を着る愛紗だが

ずるりっ！　ぷるんっ

一刀「うほっ／＼／」

愛紗と鈴々では胸のサイズが違うため愛紗はポロリをしてしまった。

鈴々「鈴々はそんなこと言わないのだ！」

もちろんこの後、ポロリに気づいた愛紗に見てしまった一刀は殴られた。

一刀「ふ…不可抗力では…」

愛紗「うるさいっ！！」

#### ・歌唱対決

海「歌なら任せてよね」

チャララッ

一刀「この歌はまさか！？」

現代人である一刀はこの歌を知っていた。

何故ならこの歌は真恋姫無双のOPテーマ『闘艶結義』トウエンノチカイ』だったのだ。

だがこの世界の人が現代の歌を知っているはずがなく（なぜ海が知っている！？）

審査員「オリジナルの歌はダメなので失格！」

海「何でなのよ！」

失格扱いされてしまう海だった。

・にらめっこ対決

星「にらめっこしましょ」

猪々子「笑うと負けだぜ」

星・猪々子『あっぷっぷっ！』

パッ！

二人がおもしろい顔をした瞬間

猪々子「ぎゃーっ！？」

猪々子が急に怯えた。した。

星「はて、何をそんなに怯えてるのだろうか？」

後で猪々子に聞いた話ではものすごい顔だったという

・腕相撲対決

一刀「それじゃあいきますか！」

猪々子「へんっ！あたいが優男に負けるかよ！」

腕相撲対決は一刀が出ることになったのだが

海「何であいつなのよ！張飛が出た方がよくない？」

愛紗「言葉を返すが劉雷殿、一刀殿はスケベな性格だが力ならば…」

愛紗が最後まで言おうとしたとき

ドスンッ！！

一刀「ちよつと力を出しすぎちゃったな」

猪々子「いつてー！！」

腕相撲対決は一刀の圧勝に終わった。

愛紗「力ならば我らの中で一番の持ち主だぞ」

朱里「愛紗さんは一刀さんをよく見えますね」

星「それはそうであろう、夫のことをよく知るのも妻の役目だからな」

愛紗「そうそう…って誰が妻だ！」

遅れて星に突っ込みをする愛紗だった。

・貝合わせ対決

朱里「はわわ！？貝合わせですって！？／＼／」

ぼんっ！

いけないことを想像して顔を赤くする朱里に

一刀「あのね朱里、何を想像しているかはわからないけど貝合わせ  
つてのは裏返した貝の中から同じ絵柄の貝を当てるものだよ」

簡単にいうと神経衰弱である。

朱里「はわわゝ！？」

顔を赤くして損をした朱里であつた。

・早口言葉対決

斗詩「隣の客の袁術はよく蜂蜜なめる袁術だ！…」

一刀「赤巻き紙青がき…」

ブチンッ！

一刀「舌を噛んだーっ！？」

一刀は早口言葉が苦手だった。

・縄跳び対決

猪々子「よっ！ほっ！」

ぴよんぴよんっ！

軽やかに跳ぶ猪々子に対して

桃香「ふんふんっ！」

ぶるんぶるんっ！

跳ぶ度に胸を揺らす桃香。そんな桃香を見た審査員は

審査員「勝者・劉備！」

猪々子「何でだよ！」

勝手に桃香の勝ちにするのだった。

そんな対決が長々と続きあつという間に百番勝負は終わってしまい

陳琳「さあ、勝負が終わったところで得点を見てみましょう！」

そして得点を見てみると

袁紹軍 50

公孫賛軍 50

陳琳「何と引き分けです！？ということにより延長戦になります！」

「

進行役である陳琳によって延長戦が決定された直後

麗羽「おーほっほっほっ！延長戦となればやはり…」

スッ

麗羽は後ろからあるものを取り出した。それは…

ジャーンッ！

麗羽「この袁家に伝わる白鳥の回し（まわし）をつけた女相撲ですわ！」

麗羽が宣言すると

愛紗達『なっ！？／＼／』

驚く愛紗達だった。

麗羽「我が軍からはわたくしがいきますのでそちらも早く代表を決めなさいな！」

麗羽が言つと

ポンッ！

星「愛紗よ、お主の出番だ」

愛紗の肩を叩く星

愛紗「何で私がでなくちゃならないのだ！　そうだ鈴々は相撲好きだろ」

愛紗が鈴々を指名すると

鈴々「回しだけならいいけど白鳥は嫌なのだ」

愛紗「お前は前に白鳥の回しをつけただろう！」

29話『生徒会長争奪戦後編』参照

鈴々「何の話なのだ？」

だがあの話は番外編なので鈴々がわかるはずがない

愛紗「だったら劉備殿」

今度は桃香を指名すると

桃香「母の遺言<sup>ゆいご</sup>で回しだけはつけるなと言われてまして」

愛紗「劉備殿の母上は生きているだろう！　だったら朱里！」

次に朱里を指名する愛紗だが

朱里「はわわ！？　私は力がないから無理ですよ！　劉雷さんはどうですか？」

海「冗談じゃない！　劉備様だけに肌を見られるならともかくこいつにだけは絶対見せたくない！」

ビシッ！

海は一刀を指差すと

海「あんたは見られたって平気なんだから出なさいよ！」

確かに一刀が回しをつけても別に構わなそうなのだが

一刀「女相撲って言ってただろ！俺は男だぞ！」

一刀は男なので出られなかった。

海「今すぐチ○コ切りなさいよ！そしたら出れるでしょ！」

一刀「無茶いうな！」

愛紗「だったら星、残るはお前だけだ」

星「おや、愛紗は私に多くの男達の前で肌を見せろというのは私に対する友情がないのか！」

と星は言うが

愛紗「お前はさっき私を推薦しただろうが！」

星「そうだったけ？」

愛紗の言葉にとぼける星

ようするにみんな出たくないのだった。

麗羽「どうしましたの早く決めなさい！」

麗羽が急かすと

白蓮「こうなったら…」

白蓮「私が出るしかない！」

グッ！

白蓮が急に立ち上がった。

愛紗「正気か公孫賛殿！？　」

白蓮「もちろん本気だとも、もとはといえば私が袁紹に宝剣を渡してしまったのが原因だ。自分の不始末は自分でとる！」

バンッ！

珍しくいいことを言う白蓮だった。

白蓮「それに私には白馬の回しがあるからな！」

そして代表が決まり

バンッ！

舞台には回しのみを締めた麗羽と白蓮だけとなった。

鈴々「普通のお姉ちゃん頑張るのだ！」

桃香「パイパイちゃんががんばれー！」

桃香達が応援するなか

愛紗「いいですか一刀殿、私がいいと言っまで目隠しをつけていてください。もし外したら…」

一刀「わかってます！？」

一刀は目隠しをされていた。

陳琳「それでは最終戦開始！」

カーンッ！

そして開始のゴングが鳴ると

ドンッ！

まずは両者がぶつかり合う。

白蓮「私の力をなめるなよ！」

ぐぐっ！

白蓮が麗羽を土俵の外に出すべく踏み込むが

麗羽「おーほっほっほっ！普通の人がわたくしに敵うはずありませんわよ！」

スッ

麗羽は構えると

麗羽「それぞれーっ！」

シュシュシュッ！

麗羽は白鳥の回しで突きまくる！

白蓮「ぐわぁーっ！？」

ブォンッ！！

衝撃に耐えかねて場外に落ちてしまいそうになる白蓮

白蓮「（やはり私では無理だったんだ。桃香すまない）」

白蓮が諦めたその時

一刀「諦めるな公孫贄！」

目隠しされて見えないはずの一刀が叫び出した。

一刀「あんたなら絶対勝てるって俺は信じているぜ！」

一刀が言うと

スタツ！

白蓮は土俵の外に落ちずに立ち上がった。

白蓮「北郷！お前の期待に応えてやる！」

今まで期待されていなかった白蓮にとって一刀の言葉は白蓮に力を与えた。

白蓮「うおーっ！」

ゴゴゴッ……！！

麗羽「何ですのこの力は！？」

白蓮から溢れ出る力に麗羽が怯えていると

白蓮「くらえ袁紹！秘技『白馬彗星拳』！」

ドガッ！！ミ

麗羽「あれーっ！？」

ドシンッ！！

白蓮は麗羽に一撃を食らわし麗羽を土俵の外に出した。

陳琳「袁紹選手、場外により勝者・公孫賛選手！」

白蓮「へっ？」

白蓮が陳琳の宣言を聞くと

愛紗「一刀殿、目隠し外しても構いませんよ！」

シュルツ！

愛紗に言われて目隠しを外した一刀は

一刀「よくやったな公孫賛！」

白蓮を呼ぶと

白蓮「北郷…私は勝ったぞ〜！」

ガバツ！

白蓮は一刀に向かって手を振るが

ぷるんっ  
♪

手をあげたせいでおっぱいが丸見えなことに気づいていなかった。

愛紗「一刀殿ーっ！！」

一刀「何で！？」

ガツンッ！！ ミ

結局一刀は愛紗に殴られてしまった。

そして桃香達が勝利したので宝剣をもらうことになったのだが

愛紗「宝剣が無いだと！？」

斗詩「スミマセン！実は先日麗羽様の従妹の袁術様の使いの者が来まして馬鹿には見えない服と宝剣を交換してしまったんです」

朱里「だったらあの対決は！？」

麗羽「仕方ないでしょう！あなた達が負けてくれればよかったのですよ。まあいい暇潰しにはなりましたわ」

白蓮「袁紹！お前って奴は！」

麗羽「いいではありませんの、たかが剣くらいならうちにくらでもありますので好きなものを持っていきなさい」

麗羽のこの言葉に

ドッゴーンッ！！

一刀以外全員「・・・！？」

一刀「テメエふざけるんじゃないぞ」

ゴゴゴッ…！！

一刀は怒りで柱をぶっ壊し、前に偽劉備に向けて出した覇気を出し

た。

麗羽「ひいつ!?!」

一刀「お前は一発ぶん殴る!」

そして一刀が麗羽を殴ろうと近付いたとき

桃香「やめてください!」

桃香が一刀を止めた。

桃香「仕方がないよ。早く袁術さんのところに行って宝剣を返してもらいにいこうよ」

スッ

そして桃香は城を出ようとするのだった。

海「劉備様!?!」

愛紗「劉備殿!?!」

出ていった桃香を追いかけるみんな

そしてみんなが城を出た時

斗詩「待ってください!」

斗詩が追いかけてきた。

斗詩「これ、役に立つかわかりませんが麗羽様の手紙です袁術様に渡してください。皆さんすみマセンでした！」

そして斗詩は謝って去っていった。

次の日

袁術のところに行くため白蓮と別れる一刀達

白蓮「すまないな桃香、もとはといえば私のせいで宝剣が…」

桃香「もういいよ、さよならパイパイちゃん」

スッ

そして一行は袁術のところに向かうのだった。

桃香「（怒った時の北郷さん、怖かったけど私のために怒ってくれてありがとう）」

海「（あいつがあんな覇気を出すだなんて人は見かけによらないね）」

「宝剣争奪勝負後編」(後書き)

次回はアイドルのあの娘達が登場します。

「数え役満姉妹」

麗羽の馬鹿のせいで渡してしまった宝剣を取り返しに袁術のところに行くことになった一刀達一行

そんなある日

一行がとある街を訪れていると

ガヤガヤ

一刀「何だか街の様子が騒がしいな」

愛紗「祭りでもあるのでしょうか？」

一刀達が街の様子を不思議に思っていたその時

桃香「あーっ！？」

桃香が急に叫び出した。

鈴々「劉備お姉ちゃんどうしたのだ！？」

星「強盗でも見かけたのか？」

だが実際桃香が見たものは

バアンッ！！

一枚のポスターだった。

朱里「この張り紙がどうしたんですか？」

海「ちよつと文章を読んでみなさいよ！」

そして文章を読んでみると

一刀「何々…数え役満姉妹シスターズ本日講演決定」

ようするにライブのポスターである。

鈴々「数え役満姉妹って何なのだ？」

鈴々が聞くと

桃香「知らないんですか！？いま大陸全てが応援している人気者ですよ！」

とはいっても桃花村はどちらかというと田舎いなかの村なので知るわけがなかった。

桃香「張三姉妹っていう姉妹の一団なんですけど歌がすごくうまくてかわいい衣装も人気が高いんですよ！」

海「劉備様は数え役満姉妹の支持者ファンだからね」

桃香「キラリとした表情で眼鏡をかけた人和こと張梁、盛り上げ役の地和こと張宝、そしていつも明るい天和こと張角の三姉妹なんですよ！まさかこの街で講演やるなんて感激ですー！！」

一人で熱くなる桃香に

愛紗「あのう劉備殿、我々は一刻も早く宝剣を取り戻さなければ…」

愛紗が目的を言うと

桃香「（うつうつ）」

愛紗「うつ！？」

チワワのような瞳で見に行きましょうよ。という桃香に愛紗は勝てず

愛紗「まあ少しくらい寄り道をして大丈夫でしょう」

桃香「やったー」

寄り道を認めてしまふのだった。

その頃、数え役満姉妹の舞台である会場の控え室では

控え室

天和「付き人<sup>マネージャー</sup>に聞いたけど今日もお客さん一杯だね」

地和「やっぱりみんなちいを見に来たのよ」

人和「姉さん達、あともう少しで開演するから準備しないかね」

数え役満姉妹の三人が準備をしていると

天和「それにしても私達がこうして人気者になれるなんて昔だった  
ら考えられないよね」

地和「それもみんなあいつのおかげよね」

実は彼女達は今でこそ大陸人気のアイドルだが前まではただの奇術<sup>マジック</sup>  
師<sup>ヤン</sup>だったのだ。

どうしてこうなったのかという話は数カ月前に遡る（さかのぼる）  
。

数カ月前

天和「ではこの何もない箱に人が入ります！」

人和「しばらくすると入った人が箱から消えます」

スッ！ ガチャンッ！

一人が入れる箱の中に地和が入って扉を閉めると

天和「1・2・3！」

パカッ！

箱を開けてみると中に入っていたはずの地和の姿がどこにもなかった！？

ガチャンッ！

人和「それではもう一度1・2・3」

パカッ！

一度箱を閉じてまた開けてみると

ジャーンッ！！

地和「地和ちゃんだよ」

箱の中から地和が現れた。

ここで種明かしをしよう。実はこの箱は二重になっていて後ろの方に扉がついている。地和は箱の後ろに姿を隠しただけなのだ。

天和「どうもありがとうございました！」

観客にお礼を言う天和だが

シーンっ

誰も見ていなかった。

地和「もうっ！何で誰も見てないのよ！」

人和「そりゃあ同じネタを何度もすれば飽きる人も出てくるわよ」

実はこのネタはすでに十回以上繰り返されていた。

天和「だったら新しい奇術を考えるしかないよね」

地和「たとえば剣を何本刺しても平気だとか、帽子から鳩が出るやつとか」

古くさい奇術である。

人和「予算がないから無理よ」

だが予算の都合で出来なかった。

天和「仕方ないけど次の村で稼ぐしかないよね」

地和「あーもうつ野宿は嫌！大金稼いでお布団で寝たい！」

地和が叫んでいると

？「ちょっとよろしいですか」

人和「何ですか？」

眼鏡をかけた導師服を着た男が人和に話しかけてきた。

于吉「私の名は于吉といいます。先ほどの奇術を見てあなた達にプレゼントしたいのです。是非受け取ってください」

スッ！

そう言つて于吉は張三姉妹に一冊の本を渡した。

地和「何よこの古くさくて黴<sup>カビ</sup>がはえていそつな本は？」

たぶん本にカビははえない

于吉「その本は太平要術といつて持ち主の願いを叶える書物です。  
では私はこれで」

ササッ！

そして于吉が去つていったあと

人和「この本どうする？」

地和「あいつなんか胡散臭そつな雰囲気だし燃やして薪<sup>たきぎ</sup>がわりにし  
たほうがよくない」

地和が言つと

スッ！

天和「燃やしちゃダメだよ！願いを叶えるのがホントだつたら…」

パラッ…

二人から本を奪つた天和はページをめくろうとする。

地和「ちよつと姉さん！？」

人和「勝手に開けたら大変だよ!？」  
┌

妹達は天和を止めようとするが間に合わない!

天和「私達が大陸で一番の人気者になりたいなあ」  
┌

パラッ!

そして天和がページをめくった瞬間

パーツ!!

太平要術から光が放たれて

シャキンッ!

三人の服が変わっていく!?

そして光が弱まると

人和「何なのよこの服!？」  
┌

地和「目立ちまくりじゃない!？」  
┌

天和「かわい〜い」  
┌

ジャーンッ!!

三人の服は普段の町娘のような服からアイドルが着そうな服に変わった。

地和「おまけに何だか知らないものが出てきたわよ」

スッ

天和がそれを拾って

天和「何だろうねこれ？（高音）」

地和「姉さんの声が急に大きくなった！？」

人和「どうやらそれは声を大きくする道具のようね！？」

ちなみに天和が拾ったのはマイクである。

天和「じゃあこれを使って大好きな歌を歌おうよ」

地和「歌か」

人和「いいかもしれないわね」

実は彼女達は歌がうまいという能力があった。だが声が大きく出せないというので断念したのだ。

天和「私達の歌を大陸中に広めちゃおう！」

三人「おおーっ！」

こうして今では一部を除いて大陸中で知らない人はいない数え役満姉妹が誕生したのだった。

現在

地和「よーしっ！今日も観客をちいの虜とらにしてあげるんだから！」

やる気の上がる地和だが

ガタッ！

人和「姉さんどこいくの？」

天和がいきなり立ち上がった。

天和「ちよつと会場近くを見に行ってくるよ」

人和「ちよつと姉さん、時間が…」

天和「すぐに帰るからさ」

ダッ！

そして天和は控え室から出ていった。

人和「まったく、姉さんはいつまでたっても天真爛漫（てんしんらんまん・無邪気ということ）ね」

地和「姉さんが天真爛漫なのは治らないって、まあ普段着だから私達だとわからないでしょ」

その頃、一刀達は

ガヤガヤ

数え役満姉妹のコンサート会場に来ていた。

桃香「早く早く！早くしないと入場券が売り切れちゃいますよ！」

数え役満姉妹のコンサートを見るには入場券が必要なのだ。

鈴々「あっちのお菓子を食べたいのだ！」

愛紗「二人とも落ち着け！」

入場券を買いたい桃香とお菓子を食べたい鈴々で意見が分かれている。しかもどちらか片方をとればもう片方が手に入らない状況だ。

一刀「だったら別行動にしないか？それぞれ行きたいところがあるらしいしさ、開演の時間前に集合したらいいじゃん」

一刀が提案すると

朱里「その手がありましたね」

海「あんたって意外と頭いいじゃない」

というよりも単純すぎて朱里が思い付かなかったただけなのだが

桃香「賛成！そうと決めたら海ちゃん、趙雲さん一緒にいこう！」

ビュンッ！！

鈴々「愛紗と朱里は鈴々についてくるのだ！」

ビュンッ！！

そしてこの場に一刀だけが残ると

一刀「作戦通り（にやりっ）」

一刀の目的は何がなんでもそれぞれ別行動にすることだった。その理由は…

一刀「愛紗がいると『無駄遣いしてはいけません！』って怒るかな、さっき見かけた抱き枕を買ってこよっと」

誰にも気づかれず抱き枕を買ったためだった。

そして一刀が抱き枕を売っている店に向かっている

？「放してください！」

どこかで女の子の悲鳴が聞こえてきた。

一刀「いまの悲鳴は？」

きよろきよろっ

一刀が悲鳴の出所を探していると

バンッ！

女の子が二人の男に襲われていた。

？「放してください！」

男「いいじゃねえか」

男「俺達と一緒に遊ぼうぜ胸のでかい姉ちゃんよう！」

ぐいっ！

嫌がる女の子の手を無理矢理引き寄せる男達。周りの人は巻き込まれたくないとばかりに知らん顔。

？「（やっぱりいちちゃん達と一緒に待ってればよかったよ）」

もう分かっている人もいると思うがこの女の子は天和である。会場近くを見に来たところ男に絡まれたのだった。天和が泣いていると

ドカツ！ ミ

男「ぐえっ！？」

バタリッ！

天和の手を握っていた男が急に倒れた。

天和「何が起きたの！？」

スッ

天和が倒れた男の後ろを見てみると

一刀「女の子を泣かしちゃいけないよ」

バンッ！

そこには一刀が立っていた。

男「この野郎！正義の味方気取りかよ！」

ジャキンッ！

男「死にやがれ！」

シュッ！

天和「きゃっ！？」

男は懷に隠していた小刀で一刀を切りつけようとするが

サッ！

一刀「遅すぎ…なんだよ！」

ドグボッ！！

男「ぐほっ！？」

小刀を軽く避けた一刀は男の腹に一撃を食らわした。

一刀「大丈夫でしたか？」

男達を倒した一刀が天和に聞くと

天和「はいっ！ありがとうございます！／＼／」

一刀「（何で顔が赤いんだ？）」

どうやら一刀の姿を見て惚れてしまったようだが鈍感な一刀が気づくことはなかった。

天和「あの、よかつたらお礼を…」

一刀「やべっ！？急がないと売り切れるかも！？それじゃあまたね！」

ダッ！

そして一刀は本来の目的である抱き枕を購入しにいった。

一刀が去った後

天和「あの人、かつこいいな」

また一刀に惚れた人が増えたのだった。

## 「会場での騒動」

宝剣を取り戻しに袁術のところに行く途中ちよつと寄り道として数え役満姉妹シスターズのコンサートを見ることになった一刀達一行

数え役満姉妹の控え室

天和「はあゝ、さっきのイケメンな人は誰なのかな？」

天和はついさっき助けてもらった一刀に惚れてしまっていた。

地和「ちよつと！姉さん何ぼんやりしてるのよ！」

人和「そろそろ開演するから準備してください！」

妹の二人が言うところ

天和「わかつてるよ〜！」

せつせつせつ！

すぐさま準備をする天和だった。

さてその頃、一刀達は

桃香「一刀さん遅いですね」

愛紗「まったくあいつはどこで道草を食っているのやら」

集合時間になっても一刀がまだ来ていなかった。

星「一刀殿のことだからおそらく女の尻でも追いかけているのだろうな」

鈴々「お兄ちゃんならあり得るのだ」

確かに！？

海「遅れた罰として先に入りましょうよ！でないといい席とられちゃいますよ」

桃香「それはちょっと…」

朱里「大丈夫ですよ。入場券は渡してありますからすぐ入れますしね」

愛紗「では先に入っておこう！」

スッ

そして愛紗達は先に会場に入っていた。

何故時間になっても一刀が現れないのかというと

一刀「チケットはどこ行っただ？こんなことならあの時慌てなければよかったぜ」

一刀は無くしたチケットを探していた。

そして一刀の背には包装された天和の抱き枕が背負われていた。

実は抱き枕を見つけた時、最後のひとつだったので急いでしまいその時チケットを落としてしまったのだ。

一刀「もう集合時間も過ぎているし、愛紗なんて『一刀殿！こんなもの（抱き枕）を買うために遅くなったのですね！今日という今日は許しませんお仕置きです！』って言うかもしれないな！？急いで探さなくちゃ愛紗に殺されかねない！？」

ササッ！

急いでチケットを探す一刀だった。

その頃、コンサート会場

愛紗「クシュンッ！」

朱里「はわわ！？愛紗さん風邪ですか？」

愛紗「いや、たぶん誰かが私の噂をしているのだろう」

星「おそらく一刀殿が『ああ、愛紗はなんてかわいいんだろう。さすがは俺の愛紗だよ』と愛紗をほめているのだろう」

愛紗「なっ！？／＼／バ…バカを言うな！一刀殿が私のことをかわいいだなんて…」

桃香「しっ！静かにしてください！もうすぐ開始しますよ！」

そしてそろそろライブが始まり

フッ！

明かりが消えると

バツ！バツ！バツ！

いきなり三人の影が出現し、

タタタツ！

舞台に降りた瞬間

パツ！

天和「みんな大好き」♪「

観客達『天和ちゃん！！』

地和「みんなの妹」♪「

観客達『地和ちゃん！！』

人和「とってもかわいい」♪「

観客達『人和ちゃん！！』

彼女達の登場と共に明かりが照らされ観客達が大いに盛り上がる。

朱里「はわわ！？すごい盛り上がりですね！？」

愛紗「さすがにこの熱気にはついていけないな」

ところが

桃香「天和ちゃん！！」

鈴々「盛り上がるのだ〜！！」

約二名盛り上がっている人もいた。

天和「それでは歌いますから精一杯応援よろしくね〜」

観客達『応援するする！！』

地和「それじゃあ始めるよ〜」

観客達『うおーっ！！』

ジャジャッジャーンツ！！

こうしてライブは非常に盛り上がり

ライブは終了した。

天和「みんなありがとう〜」

観客達『うおーっ！！』

地和「これからも応援よろしくね」

観客達『するする!!』

人和「それでは最後に…」

ライブが完結を迎えようとしたとき

スッ！　ガシッ！

天和「きゃあっ!？」

会場の後ろから男が現れて天和を襲いかかった。

人和「天和姉さん!？」

地和「ちよつとあんななんなのよ！」

地和が聞くと

男「天和ちゃんは俺のものだ!近づくんじゃねえ！」

この男はいわゆる危ないファンであった。

男「近付いたらぶっ殺すぞ！」

ブンブンッ！

男は小刀を振りまくる。

愛紗「くっ！あの男を取り押さえるのは簡単なのだがそうすれば天和殿が危ない！？」

なので愛紗達も動けずにいた。

男「さて、それでは天和ちゃんのおっぱいでも揉ませてもらうとするかな」

天和「キヤーツ！？（あーん！どうして今日はこんなばかりなの！）」

スッ…

そして男の手が天和の胸に触れようとしたとき

キンッ！

男「へっ？ぐほっ！？」

ドコッ！

男の顔に何かが投げ込まれた。

観客「何だよあれは！？」

観客「鉄柱か？球体か？」

観客「いやあれは…」

男に投げられたものは

観客達『抱き枕だ！？』

ドオンッ！！

男にぶつかったものは天和の抱き枕だった。

天和「なんだかわからないけど今のうちに」

ササッ！

天和は男が倒れている間に逃げようとする。

男「あっ！逃がすかよ！」

ギユッ！

だが男は天和を逃がすまいと服をつかむと

ビリリーッ！

天和の服が破かれてしまった。

天和「きゃあっ！？／＼／」

慌てて体を隠す天和

男「こうなったら天和ちゃんを全裸にしてやるぜ！」

スッ

そして男が天和に近づくと

？「人質をとる場合、人質から離れた時点で失格である」

男「はっ？」

何処からか声が聞こえてきた瞬間

ドグボツ！！

男「ぐえっ！？」

メリッ！

男は会場の屋根を貫いて外に投げ出された。

そして舞台にいたのは

一刀「by北郷一刀」

バンッ！

男の代わりに一刀が舞台に立っていた。

愛紗「一刀殿！？」

鈴々「お兄ちゃんのだ！？」

一刀の登場に驚く愛紗達

そして一刀は天和に近づくと

パサッ！

天和「えっ！？」

一刀「後で返してね」

ひょいっ！　ダッ！

天和に上着を被せて抱き枕を背負い天井の穴から脱出した。

天和「（ポツ！）一刀／＼／」

そしてこの後、会場で騒ぎがあつたのはいつまでもない

しばらくして会場外の木々の中

一刀「せっかく買った抱き枕が！？」

ぼろーんっ

一刀が買った抱き枕は男にぶつけたせいで痛んでしまい、男の鼻血で汚れてしまっていた。

一刀「俺って慌てると自分でも何しているのかわからなくなるからな、遅れて会場に入った後、女の子が男に襲われていたんで、つい持っていた抱き枕を夢中で投げちまった後、回りに気づかれずに舞台に近付いちまったからな」

一刀が自分の行動を反省していると

？「なるほど、やはりあの破廉恥な枕は一刀殿の物でしたか」

破廉恥<sup>ハレンチ</sup>とは言っても水着姿である。

一刀「破廉恥だなんてそんな、ビキニは男のロマンなんだ…」

一刀が聞こえてきた声に返事を返ししながら振り向くと

愛紗「ほうっ」

ドォーンッ！

そこには鬼の角を生やして仁王立ちした愛紗がいた。

一刀「あ…愛紗さん何故ここに！？」

愛紗「一刀殿の行動なんてすぐにわかりますよ。それにしても…」

ギュッ！

愛紗は青龍偃月刀を握りしめると

愛紗「あれほど無駄遣いしてはいけないと言っておきながらあんなものを買っなんて！今日という今日はその体に叩き込んであげます！」

一刀「ギャーッ！？」

ドカバキンッ ミ

桃香「止めなくていいんですか？」

海「いいに決まってるじゃありませんか、自業自得ですよ」

星「それにもう少し見ておきたいからな」

一刀がボコられているのを見続ける星達。そんなとき

天和「あのう、すみません」

変装した天和が一刀達の前に現れた。

桃香「あーっ！？数え役満姉妹のてん…」

バツ！

桃香「むぐっ！？」

朱里「大きな声を出したら目立つちゃいますよ！？」

朱里が桃香の口を押さえていると

天和「あのう、さっき私を助けてくれた男の人がこちらに来ませんでしたか？」

どうやら一刀に会いに来たようだ。

星「その者なら、ほれあそこに」

スッ

そして星が指差した先には

ぼろーんっ

見事に愛紗にボコられた一刀がいた。

天和「大丈夫ですか！？」

天和が一刀に近づくと

サッ！

一刀「平気だよ」

さっきまでやられていた傷があっという間に消える一刀だった。

天和「これを返しに来ました」

スッ！

天和は一刀に上着を渡すと

一刀「ああ、ありがとう…」

一刀が上着を取ろうと天和に近づいたとき

チュッ！

一刀「えっ！？／／／」

とつさに一刀の頬にキスをする天和

天和「二度も助けてくれたお礼だよ。またどこかで会おうね一刀」

「

サッ！

そして天和は去っていった。

一刀「キスされた…／／／」

ポッ！

一刀の顔が赤くなっていると

愛紗「かゝずとどくの」

一刀「ひっ！？」

愛紗「あなたという人は！」

一刀「俺が悪いの？ギャーッ！？」

再び愛紗にボコられる一刀だった。

「会場での騒動」(後書き)

次回、あの熱い男が登場！

「熱血医師と二人の軍師」

宝剣を取り戻しに袁術のところに行く一刀達

愛紗「道草を食い過ぎましたけど早く袁術のところにいきましょう」

「

桃香「はあ、本物の天和ちゃんに会えたなんて感激です」

海「よかったですね劉備様」

朱里「この森を抜けたところに町があるみたいですよ」

星「ならば今夜はその町に泊まるとするかな」

いつものように何気ない会話をする愛紗達の後ろで

一刀「少し重いな!？」

ズツシリッ!

一刀が抱き枕を買った罰として全員の荷物を持たされていた。

そしてその一刀の後ろでは

とぼとぼ

身軽なはずな鈴々がゆっくり歩いていた。

一刀「どうしたんだ鈴々？いつもの鈴々なら先に歩いているのに」

一刀が聞くと

鈴々「お腹の調子が悪いの…」

鈴々が最後まで言おうとした時

バタリッ！

急に鈴々が倒れた。

一刀「鈴々！？」

ドサッ！

慌てて一刀は荷物を放り出して鈴々に近寄ると

鈴々「お腹が痛いのだ…」

急にお腹を押さえて苦しむ鈴々

一刀「みんな大変だ！？鈴々が！？」

一刀は慌ててみんなを呼ぶのだった。

その頃、森の中では

パチパチッ！

赤髪の男が火の側で何かを考えていた。

？「早くあの本を見つけ出して処分しなければ大変なことになるな

」

男が考えていると

ガッツ！

愛紗「申し訳ない、連れの者が苦しんでいるので火に寄らせてくれないか」

愛紗達が現れた。

？「別に構わないが」

愛紗「忝ない（かたじけない）。さあ一刀殿、鈴々をこちらに」

一刀「わかった」

スッ

そして鈴々を背負っていた一刀が鈴々を火の側に置くと

鈴々「お腹が痛いのだー！！」

」

いまだに腹が痛む鈴々

とその時

？「どうやら病人のようだな。よかつたら見せてくれないか」

桃香「どういうことですか？」

桃香が聞くと

シャキンッ！

？「俺は医者だ！」

男は懷から針を取り出した。

そして男は鈴々を診察する。

？「腹が痛いようだが昼は何を食べた？」

男が聞くと

鈴々「鰻<sup>うなぎ</sup>のどんぶりと赤くて小さいすっぱいものを一緒に食べたのだ」

鈴々が言っているのは鰻井と梅干しである。

鈴々が言つと

？「（ここか？ここじゃない、ここだな！）」

男は鈴々のお腹を調べてみると何かを発見し

ジャキンッ！

針を掲げる（かかげる）と

？「我が力、神針に集中し病魔を滅殺すべし！」

ゴゴゴッ…！！

一刀「（何だ！？あの男の針に気が集中している！？）」

この中で気を使える一刀が驚くと

？「病魔退散、五斗米道！」

キラッ！　ブスッ！

男が鈴々の体に針を突き刺すと

バシユンッ！！

男から物凄い風が吹き始め、気づいた時には

鈴々「あれっ？もうお腹が痛くないのだ」

鈴々の病気が治っていた。

？「食い合わせが悪いもの食べたから腹が痛くなったんだ」

マジで鰻と梅干しを同時に食べると危険ですので真似しないでください！

愛紗「ありがとうございます。是非名前を聞かせてください」

愛紗が男に名前を聞くと

？「俺の名か？俺の名は華佗って言っんだ」

男が名前を言うと

一刀「華佗だつて！？」

朱里「はわわ！？華佗さんですか！？」

一刀と朱里が同時に驚いた。

星「おや、二人は華佗殿を知っているのか？」

一刀「名前だけだけどね」

華佗といえば三國志の中でも有名な医者である。ますい麻酔を最初に発明し、大陸の中でもすごい医術を持っていた。

朱里「水鏡先生に教えてもらいました。ごとべ…」

朱里が最後まで言おうとすると

華佗「ちっがーうー！ごとべいどうじゃない、ゴッドヴェイドオーだ！」

華佗が激しく突っ込んだ。

桃香「ことべ…」

海「こつとべ…」

この時代の人に横文字は難しい。

みんなが苦戦するなか

一刀「ゴッドヴェイドオーだろ」

一刀が正しく発音すると

華佗「おぉーっ！？俺は今、猛烈に感動している！俺と師匠以外でゴッドヴェイドオーを正しく発音する人は初めてだ！お前の名前は！？」

一刀「北郷一刀だけど！？」

華佗「一刀か！よし一刀、俺とお前は今から友達だ！お前の頼みならば俺は例え悪人だとしても無料で治療してやるぜ！」

一刀「ははぁ…」

華佗の勢いに乗せられて勝手に友達扱いされる一刀だった。

朱里「それにしても華佗さんはこんな森の中で何してるんですか？」

「

華佗「俺か？俺はとある用事で曹操殿に会いに行く途中だ」

華佗が言つと

愛紗「曹操殿だと!？」

華佗「曹操殿を知っているのか？」

星「それはもう大変な知り合いだとも、何せこの関羽は曹操と裸を見せ合つた仲だからな」

10話『馬騰殺害の事実』参照

愛紗「星、お前!？」

星「事実であろう」

鈴々「それで華佗のお兄ちゃんは曹操に何の用なのだ？」

鈴々が聞くと

華佗「実は曹操殿が太平要術の書を必死で探していると聞いたので止めに来たんだ」

海「何でなのよ？」

華佗「太平要術の書はとっても危険なんだ。持ち主のありとあらゆる願いを叶えてくれる恐ろしい書で使い方を間違えば大陸を滅ぼしてしまうという書なんだ。そこで俺は書を封印しにやって来たというわけさ」

華佗が太平要術について説明すると

一刀「持ち主の願いを叶える本が、確かに恐ろしそうだな」

鈴々「袁紹のバカが手に入れたら大変なのだ」

確かにその通りである。

愛紗「だが曹操殿ならば大丈夫だろう。あの方はそのような書に頼るほど愚かではない」

星「ほう、さすがは曹操殿と裸を見せ合っただけのことはあるな」

愛紗「関係無いだろう！」

そしてそんなこんなで一夜が過ぎ、愛紗達も曹操の地を通るということと一緒にいくことにした。

鈴々「らんらからん」

星「昨日はあんなに苦しんでいたというのに、華佗殿の医術は大したものだな」

華佗「子供は元気が一番。一刀も子供が無事でよかっただろう」

一刀「えっ!？」

華佗「違うのか？俺はてつきり一刀と関羽殿の子供なのかと…」

愛紗「なんで私が母親なんだ！それに私は子を作る行為なんてしたことが…」

そんなとき

ぴくんっ

一刀「んっ！」

一刀が何かを感じ取った。

鈴々「お兄ちゃんどうしたのだ？」

海「あんたのことだから美女でも見つけたんじゃないの？」

一刀「そんなもんじゃない、血の臭いがするんだ！」

ダダッ！

愛紗「一刀殿！？」

桃香「待つてよー！？」

一刀が駆け出した後、一刀を追いかけるみんな

ザッ！

一刀「ここかつ！」

そして一刀がたどり着いた先には

バアンッ！

眼鏡の女の子が鼻血を出して倒れていた。

朱里「はわわ！？<sup>ほくさつ</sup>撲殺事件ですか！？」

華佗「すごい血の量だな！？俺が診てやろう！」

そして華佗が女の子に近づこうとすると

又ッ！

？「心配無用なのですよ」

華佗「わっ！？」

華佗の前にいきなり太陽の塔のようなものを頭に乘せたのんびりした感じの女の子が現れた。

？「ほらほら稟ちゃん、皆さんが驚いているので起きてくださいよ」

ゆさゆさっ

女の子が鼻血を出して倒れていた女の子の体を揺すると

むくっ！

一刀達『ひっ！？』

あれだけの量の鼻血を出しながら女の子がすぐ立ち上がったことに

一刀達が驚くと

凵「ここは？そうでした。また鼻血を噴いてしまって倒れてたんですね。ところであなた達は誰ですか？」

平然と聞く凵

一刀「あのさあ、きみ物凄い鼻血出してたけど大丈夫なの！？」

普通の人なら貧血で立ち上がれないほどのだが

凵「ご心配なく、いつものことですから血液は余分に補充してますので」

いつも物凄い鼻血を出しているのか！？

？「凵ちゃんは桃色妄想すると鼻血を噴き出す体質なのですよ。さつきも曹操様のことを考えて鼻血を出しただけなのですよ」

凵「ちよつと風！そつえば自己紹介がまだでしたね。我が名は郭嘉と申します」

風「風は程イクと言うのですよ」

そして最後に

宝ケイ『オレは宝ケイって言うんだ。よろしくだぜ！』

風の頭に置いてあつた人形が喋りだした。

鈴々「すごいのだ！？人形が喋っているのだ！？」

実際は風の腹話術である。

愛紗「それより先程曹操殿と聞いたのだが用があるのか？」

稟「ええ、私達二人は曹操殿に仕官（人に仕えること）しにいくんです」

風「曹操様は才能のある人ならば誰でも雇う人ですし、風達は軍師として仕官しにいくのですよ」

星「だったら森には何が起きるのかわからんし、我々も曹操殿の地を通るので一緒にいかないか？」

稟「それはありがとうございます」

風「それでは早速…」

ぴょんっ！

風は飛び上がると

ガシッ！

一刀「なっ！？」

一刀の背中に飛び付いた。

風「風は歩き疲れたのでお兄さんにしがみつくですよ」

ぎゅっ！

風は一刀にしがみついて離れようとしな

稟「風！さつき合ったばかりの人に失礼ですよ！」

一刀「まあまあ、程イクちゃんは軽いから平気だよ」

風「それでは曹操様の地に行くのですよ！」

そして一刀達一行は曹操のいる地に向かうのだった。

「熱血医師と二人の軍師」(後書き)

プチ予告：次回、華佗が殺されそうになり、稟の鼻血が噴きまくる。  
(予定)

## 「華琳の病と風呂騒動」

宝剣を探しに行く途中、曹操（華琳）のところを通るので途中で出会った華佗、郭嘉（稟）、程イク（風）と一緒に行くことになった一刀達。

そして華佗は一刀達と分かれて先に華琳のところに行くことにした。

### 華琳の城

華佗「お初にお目にかかる曹操殿、俺の名は華佗と申す医者です」

華琳「あなた、私に用があるらしいけど何の用なの？」

華琳が聞くと

華佗「実は曹操殿が太平要術を探しているという噂を聞いて危険性を伝えに来たのです」

華佗は華琳に太平要術がどんなに恐ろしいものなのかを説明すると

華琳「そう、そんなに危険なものだなんて知らなかったわ、残念だけど諦めることにしましょう」

華琳は太平要術を諦めることにした。

華佗「ところでひとつ聞いていいか、何故曹操殿は太平要術を欲しがっているんだ？関羽殿から聞いた話では太平要術に頼る人ではないと聞いたのだが」

華佗が言うと

華琳「あなた関羽に会ったの!？」

華佗「ああ、今は町の飯屋で曹操殿に会いたい人と一緒にいるようだがやはり知り合いというのは間違い無さそうだな」

華琳「そう、飯屋にいるのね」

華佗「それより教えてくれ!何故あなたのような人が太平要術を欲しがるんだ？」

華佗が聞くと

華琳「いいわ、教えてあげる。但し(ただし)、この事は他言無用よ!」

華佗「絶対誓う!」

華琳「じゃあ…ないのよ(小声)」

華琳が小声で何かを言うと

華佗「声が小さくて聞き取れない!もっと大きい声で言ってくれ!」

華琳「あれが…ないのよ!」

華佗「・・・」

華佗は少し考えると

ポンッ！

手を叩きながら

華佗「ああ、べんぽ……」

何かを言おうとした時

ジャキンッ！

首に絶の刃を突きつけられた。

華琳「ご飯食べながら読んでいる人がいたらどうする気よ！」

「ご飯食べながら読んでいる人はスミマセン！m（＿）m

華佗「すまない！？言葉に気を付けるから許してくれ！成程、あれがないから太平要術に頼ろうとしたわけか」

華琳「どうしようもなかったからね」

そんなことに使われる太平要術って一体！？

華佗「そんなことなら医者である俺に任せとけ！いい治療法がある

」

華琳「ホント！？私にできることなら何でもするわ！」

華琳が言うと

華佗「簡単なことだ。曹操殿にしてもらつことはただひとつ、それは…」

華琳「それは…！？」

ゴクリツと華琳が唾を飲み込んだ時、華佗から出た一言は…

華佗「俺に向かつて尻を突き出してくれればいい」

華琳「は？よくわからないから説明してくれない」

華佗「いいとも！曹操殿の病気の治療法は尻に刺激を与えればいいんだ。つまり曹操殿が下穿き（パンツ）を下ろして俺に尻に突きだす。そこに俺が気を集中させた指で刺激を与えれば…」

ようするにカンチョーである。

そして華佗が言い終わる前に

ジャキンッ！

華琳の絶の刃が華佗の首に突きつけられた。

華琳「あなたって人は私をからかいに来たようね」

ゴゴゴッ…！！

しかもめちやくちや怒っていた。

華佗「す…すまない！今のは冗談だ！？」

華佗は華琳に謝るが

華琳「私は冗談が嫌いなのよーっ！」

ブオンツ！！

華佗「ひっ！？」

サツ！ ドッゴーンツ！！

華琳が降り下ろした絶を必死で避ける華佗

華琳「覚悟しなさい！」

華佗「わあーっ！？」

逃げる華佗、追う華琳の命を懸けた追いかけっこが始まった。

華佗「（一刀がいったことはこの事か！？）」

実は一刀達と分かれる前、華佗は一刀から『曹操に対して言葉を気を付けるよ』と忠告を受けていたのだが

一刀以上に鈍感な華佗はカンチョーが女にとってどんなに怒らせることなのかを知らなかった。

したら絶対怒られるので絶対真似しないでください。

華佗「暴れるほど元気ならば治療の必要はない。さらばだ！」

ダッ！

そして華佗は窓から逃げ出した。

華琳「待ちなさいあの変態医者！今度会ったら首をはねてやるから覚悟しなさい！　そういえばあいつ、関羽が私に会いたい人と来てるって言っていたわね」

にやりっ！

何かを企む華琳だった。

その頃、一刀達は

鈴々「がつがつっ！」

桃香「もう張飛ちゃんったら、そんなに一杯食べてまたお腹が痛くなっても知らないよ」

鈴々「その時は華佗のお兄ちゃんに治してもらうのだ！」

朱里「華佗さんが聞いたら呆れちゃいますね」

鈴々達が話をしている横で

星「おや一刀殿、そんなに何を考えているのですか？」

一刀が何かを考えていた。

一刀「華佗が俺の言った忠告を守ってくれたのかなってね」

残念だが守られていない。

一刀「それと…」

一刀が後ろを見てみると

一刀「未だに程イクちゃんが離れてくれないのを考えていたのさ」

バンッ！

一刀の背中には未だに風がしがみついていた。

一刀「程イクちゃん、いい加減に離れてくれよ。背中にしがみつきのながら食べてるから食べこぼしが背中にくっついてるよ」

しかも風は背中にしがみつながら食べているので一刀の背中は風の食べこぼしでいっぱいだった。

風「風も離れたいのですがお兄さんの背中が気持ちよくて離れたくないですよ。それに当たっているから気持ちいいでしょ」

ぎゅっ！

風は一刀の背中に胸を当てるが

一刀「何が当たってるって？」

一刀は気づいていなかった。

プチっ！

そして風は少しキレて

ギューッ！

一刀「いたたっ！？程イクちゃんやめてくれ！」

風「乙女心のわからないお兄さんにお仕置きです」

ギューッ！！

一刀の背中をつねる風

そんなとき

バタンッ！

秋蘭「失礼する！ここに関羽はいるか？」

飯屋の扉が開いて秋蘭が入ってきた。

愛紗「これは夏侯淵殿、私に何か用ですか？」

夏侯淵とは秋蘭の名前である。

秋蘭「実は華琳様が関羽殿達とお供の者達を城に連れてくるようにと申されてな、あとそこにいる華琳様に会いたい人も一緒に来てほしいそうだ」

稟「ついに曹操殿と対面できるんですね!？」

ずるゝっ

風「稟ちゃん、鼻血が流れてるのですよ」

そして一刀達は店を出ようとする。

一刀「ごちそうさん!ありがとう、うまかったよ」

?「いえ、どうもご来店ありがとうございました」

ダッ!

そして一刀達が出ていくと

?「んっ?さっきの男の人のかな?」

パサッ

店主である大きなリボンをした緑の髪をした女の子が一刀が置き忘れたメモ帳を見ると

?「こ…これはっ!？」

メモの内容に驚く女の子だった。

しばらくして、華琳の元に招かれた一行

そして華琳の元に招かれた一行だが

桂花「華琳様が風呂場で謁見（えっけん・身分の高い人に会うこと）を行うのです。華琳様に会いたい人と関羽は風呂に入りなさい」

愛紗「ちよつと待て！何故私まで風呂に…！？」

桂花「華琳様の命令です。でなければ謁見はなしのことよ。他のものは待機してください」

稟「スミマセン関羽殿まで巻き込んでしまつて」

風「まあ別にいいではないですか」

愛紗「だが…」

愛紗は華琳と裸で一緒にいたらどんな目に遭わされるかで不安だったが

愛紗「郭嘉殿と程イク殿のためだ！一肌脱いでやろう！」

稟と風のため頑張る愛紗だった。

愛紗「それと一刀殿、言っておきますが覗いたりこっそり入ったら殺しかねないので注意してください」

ビクッ！？

一刀「わかってるって！？」

大浴場

愛紗「手ぬぐい（タオル）を巻けば安心だろう」

華琳に裸を見せたくない愛紗はタオルを巻いて大浴場に行くと

華琳「あらっ、いらっしやい」

パンツ！

そこにはタオルすら巻いていない華琳がいた。

稟「（曹操殿の裸…）」

っ

風「稟ちゃん、鼻血が出てるのですよ」

稟「（いけないいけない！？）」

幸い湯気で眼鏡が曇っていたので鼻血の大放出は避けた稟だった。

華琳「私もさつき来たばかりなの、ではお風呂に入りましょうか」

愛紗「（ほっ）」

このまま風呂に入るだけと聞いて愛紗は安心するが

ビシッ！

華琳「もちろん手ぬぐいを湯につけたらダメだからね」

愛紗「なっ！？」

タオルを湯につけるのはマナー違反だそうです。

はらりっ　ちゃぽんっ

しかたなくタオルを外して風呂に入る愛紗達

稟「（お湯が乳白色でよかった）」

もし普通の湯ならば今頃湯が鼻血で真っ赤になっていただろう。

華琳「さてそれではあなた達は私に仕官しに来たようですが詳しく話なさい」

稟「は…はいっ！？わ…私は…」

華琳を前にして上がりまくる稟

そのとき

バツ！

刺客「曹操、覚悟！」

天井から刺客（暗殺者）が現れて華琳を狙う！

愛紗「しまった武器がない！？」

当然風呂場に武器を持つてくるはずがない！

刺客「お命頂戴！」

華琳「くっ！？」

華琳が一瞬怯んだその時

ザバアッ！

一刀「そうはさせるかよ！」

全員『なっ！？』

お湯の中から一刀が飛び出してきた。

一刀「うりゃーっ！」

ドカッ！

一刀は刺客を殴り飛ばす。

刺客「お前は前に曹操の暗殺を邪魔した男！？」

第9話『馬超、曹操を狙う』参照

「一刀、あの時の刺客か！曹操が入る前にお湯に隠れていたのがよかったぜ！今度は逃がさないから覚悟しやがれ！」

だがその前に

愛紗「かゝずとどくの」

「一刀「はっ！？」

愛紗「あなたという人は」

「一刀「あゝ！？でも今回は俺の方が早かったわけだし…！？」

愛紗「そういう問題ではありません！」

「一刀「ギャーッ！？」

ドカバキンッ ミ

愛紗にぼこられる一刀だった。

刺客「何だかわからないがまあいい！曹操、覚悟！」

バツ！

刺客が再び華琳を襲おうと迫る

華琳「ちっ！郭嘉、程イク、あなた達は逃げなさい！」

ガバツ！

華琳は二人だけでも逃がそうとする。だがその時

むにゅんっ  
♪

華琳の胸と稟の胸が接触した。その直後

稟「曹操殿の柔らかい胸が私と接触…ブハァーッ！！」

ぶばっ！！

稟の鼻から勢いよくものすごい鼻血が出され

べちゃっ！

刺客「なんだこれは！？」

刺客の目をふさいだ。

その直後

愛紗「これでもくらえーっ！！」

ブォンッ！！ ゴツチーンッ  
ミ

刺客「がはっ！？」

バタッ！

倒れた一刀を武器にした愛紗の一撃を食らった刺客はのびてしまった。

しばらくして

華琳「ありがとう関羽、あなたに借りができたわね」

愛紗「借りだなんてそんな」

あの後、風呂から出た愛紗達によって刺客は取り押さえられたのだった。

華琳「それとその男にもね」

スッ

華琳が見た先にいたのは

ぼろ〜ん

愛紗にボコボコにされた一刀がいた。

華琳「さてと、郭嘉、程イク、騒動があつたにもかかわらず逃げなかったその勇気を評価して二人とも我が軍に入れてあげるわ」

稟「はっ！感激です！」

風「どもどもなのですよ」

華琳「それじゃあ役職についてだけど、程イクは頭が良さそうだから

ら軍師に決定ね！」

風「ありがとうございますよ」

人を見かけで判断しないのが華琳のすごいところである。

華琳「郭嘉は…刺客を追い払ってくれたんだから私の親衛隊に任命するわ」

稟「はっ？あもう、私は軍師として…」

華琳「期待しているわよ」

華琳にこう言われては

稟「頑張らせていただきます！」

こう答えるしかない稟だった。

「華琳の病と風呂騒動」(後書き)

次回、料理対決が始まる (予定)

## 「嵐の料理対決」

郭嘉（稟）と程イク（風）を曹操（華琳）のところに連れていった  
一刀達は

桃香「それでは曹操さん、私達はこれで失礼します」

再び宝剣探しの旅に出るため出掛けようとしていた。

華琳「待ちなさい！命の恩人に礼もしないまま帰らせる私じゃないわよ。今日は私が腕をふるってご馳走するから食べていきなさい」

鈴々「ごちそう！？だったら遠慮なくいただくのだ」

愛紗「こら鈴々！」

桃香「まあまあ関羽さん、せっかくだからごちそうになりましょうよ」

愛紗「劉備殿まで！？」

桃香がごちそうになるうと言つので仕方なくごちそうになるみんな  
だった。

しばらくして

ズラリッ！

一刀達『おーっ！？』

テーブルの上にはごちそうがズラリツと並べられていた。

華琳「おかわりはたくさんあるから遠慮なくいただきますい」

鈴々「それじゃあありがとうございますいただきますなのだ」

がつがつ！

華琳の料理の腕は大陸でも上位に入るほどの腕前である。

朱里「おいしいですね」

星「さすがは曹操殿、よいメンマを使ってなさる」

海「フンツ！まあまあってとこね」

桃香「海ちゃんの料理も美味しいものね」

ちなみに一刀達の食事はいつも海が作っている。（そのため一刀の分は本の少しのみ）

一刀「じゃあ俺も食べようかな」

スッ…

一刀も料理を食べようと手を伸ばすが

サッ！

桂花「華琳様の裸を覗こうとしたあんたに華琳様の料理を食べる資格なんてないわよ！」

食べようとしたところを桂花に奪われた。

愛紗「それは同感ですぞ荀イク（桂花）殿」

一刀「そんな〜！？」

桂花の言葉に賛同する愛紗だった。

そんななか

カチャリッ！

急に鈴々が箸を置いた。

華琳「どうしたのお腹一杯？」

華琳が聞くと鈴々は

鈴々「典韋<sup>てんゐ</sup>の料理の方が美味しかったのだ」

ピシッ！

鈴々の一言に怒る華琳

一刀「典韋って前に食べた飯屋の女の子か？確かにあの料理はうまかったな」

ピピシッ！

度重なる言葉に怒る華琳はついに

華琳「春蘭、秋蘭！典章とかいう娘をここに連れてきなさい！この私より典章とかいう娘の料理が美味しいだなんて認めないわよ！料理対決をしてやるんだから！」

華琳が燃えていると

海「面白そうじゃん」私もやってやるわよ！」

海まで参戦することになった。

しばらくして

典章「あのう、私に何か用ですか？」

緑色の髪をして大きなリボンをした典章（流琉）が聞くと

華琳「あなたは料理の腕前が高いと聞いてね、私と料理対決をしないさい！」

海「私だつてやるんだから！」

流琉「え〜っ！？」

訳がわからぬまま料理対決をすることになった流琉だった。

華琳「審査員は7人、一人の持ち点が10点で70点で満点よ。審

査員は公平に判断すること、いいわね桂花、春蘭！」

桂花「（ギクリッ！？）も…もちろんですよ！？」

春蘭「（ギクリッ！？）ひ…ひき鼻<sup>び</sup>肩<sup>か</sup>なんてしませんよ！？」

言わなかったら絶対鼻<sup>び</sup>肩<sup>か</sup>していた二人

審査員は桂花と春蘭の他に秋蘭、桃香、愛紗、鈴々、一刀の七人となった。

一刀「俺達の方が人数多くていいのかな？」

華琳「いいわよ別に、それくらいの不利の方が実力の出しがいがあるしね」

華琳が言うと

星「それではこれより料理対決を開始する！制限時間は1時間、お題は公平なように炒飯チャーハンとする。よりうまい炒飯を作った人の勝ちとする！実況・解説は我、趙子龍とはわわ軍師孔明がお送りする！」

朱里「はわわ…！？はわわ軍師じゃないですよ…！」

どこから見てもはわわ軍師である。

星「それでは始め！」

ドォーンッ…！！

ノリノリの星が銅鑼<sup>どろ</sup>を鳴らすと

ダダッ！

流琉「えっ！？」

流琉を置いていち早く飛び出す華琳と海

星「おおーっと！典韋選手出遅れてしまった！これではいい食材を取られてしまう危険があるぞ！」

案外星は実況に向いているのかもしれない

流琉「とりあえず急がなくちゃ！？」

ダダッ！

二人より出遅れて流琉も飛び出した。

ササッ！

星「さあ先に具材を選ぶ劉雷（海の名前）選手に対し…」

じゅっ

星「米をよく見て選ぶ曹操選手！」

さすがは料理のプロである二人。二人が選んだものはどれも新鮮高級なものばかりである。

流琉「え〜っと、これはいい形をしているし、これは艶つやがいい」  
だが流琉も負けていない。しっかり基本通りにいいものを選びまくる。

流琉「え〜っと、あれはあるかな？あつた！」

そして流琉はあるものを見つけて料理に加えるのだった。

そんなこんなで1時間は過ぎていき

ドォーンッ！！

星「そこまで！」

調理終了の銅鑼が鳴ったが

ズラリッ！

三人ともそれぞれ料理は完成していた。

朱里「それではこれより審査員による食事をおこないます！まずはじめは曹操さんの料理でしゅ！」

朱里は噛んでしまったがそんなことは気にせずに料理が審査員に並べられる。

バンッ！

華琳の炒飯は高級な蟹かにを使った蟹炒飯だ。

華琳「どうぞ召し上げ」

華琳が言うと

審査員達『いただきます』

パクッ！

一斉に食べる一刀達

春蘭「この炒飯は…うまい！さすが華琳様の炒飯だ！国1の味だな！」

桂花「あら、あなたの評価はその程度なの？私は大陸1の味よ！」

この二人は置いといて

鈴々「美味しいのだ」

愛紗「見事な味だな」

桃香「これは海ちゃんもヤバイかもね」

高く評価する三人に対し

一刀「・・・」

何かが物足りないと感じる一刀だった。

そして点数は一刀以外が満点で69点

海「それじゃあ次は私の番ね！」

スッ！

海の炒飯は新鮮な野菜を使った野菜炒飯

海「食べてごらん」

そしてお味の方はというと

秋蘭「見事な味だな」

春蘭「悔しいが華琳様と同じくらいうまい」

桂花「同感よ」

魏の軍ですらも誉める海の料理の腕前だが

一刀「・・・」

またも一刀は何か物足りないと感じていた。

そして点数はまたも一刀以外が満点で69点

海「あんたどういふつもりよ！」

華琳「私の料理に満足しない人なんて初めてなんだけど！」

満点をいれない一刀に抗議する二人

一刀「俺的に何か物足りないと感じたから満点にしなかったただけだよ」

一刀は言うが納得のいかない二人だった。

海「（今度あいつの食事に毒をいれてやる！）」

華琳「（これで次も9点だったら覚悟しなさい！）」

そしていよいよ流琉の番がやってきた。

流琉「ど…どうぞ」

流琉が作ったのは基本的な普通の炒飯だ。

春蘭「何だか見た目が普通だな」

鈴々「何だか公孫贄のお姉ちゃんみたいな炒飯なのだ」

つまり普通ということである。

愛紗「まあ味勝負なのだから食べてみよう」

桃香「そくだよね。せっかく作ったんだから食べないとね」

パクッ！

そして全員が炒飯を口に入れた瞬間

全員『・・・！？』

秋蘭「このような炒飯は初めて口にする！？」

鈴々「この炒飯を公孫贇のお姉ちゃんだなんて言った鈴々がバカだったのだ！？」

全員が流琉の作った炒飯を絶賛した。

一刀「（見事な味だぜ）」

そしてみんなが点数をいれろと

ジャンツ！

何と！？一刀も満点をいれて流琉が70点満点で一番になった。

海「ちよつと待ちなさいよ！」

華琳「何故その子の炒飯が一番なのよ！」

当然のように抗議する二人

一刀「二人も食べてみなよ」

スッ！

一刀が流琉の作った炒飯を二人に差し出すと

パクッ！

二人が食べた瞬間

海「こ…この味は！？」

華琳「何という美味なの！？」

神の舌を持つ華琳ですらも驚くほど美味しいものだった。

海「これに比べたら私達の料理なんて！？」

華琳「典韋！あなたどこでこの作り方を学んだの！？」

華琳が流琉に聞くと

流琉「え…つと、すみません！私が学んだものじゃなくてこの書に書かれていたものを私なりに作ってみたんです」

スッ！

すると流琉は懷から一冊のメモ帳を取り出した。

鈴々「あっ！？それって確かお兄ちゃんが持っていたものなのだ」

愛紗「そっついえばそうだな」

この世界では紙が貴重なためこのように紙を大量に使うメモ帳を持っているのは一刀しかないのだ。

パツ！

華琳は流琉からメモ帳を奪い取ると

華琳「すごい！？私ですら知らない調理法や食材の利用が色々書いてある！？」

実は一刀は元の世界でも料理は得意な方だったのだ。（本人いわく、妹の一刀を満足させる料理を作っていたらいつの間にかうまくなったということ）

華琳「これを作ったあの男もすごいけどこれを理解する典章もなかなかのものだわ！？典章、私に仕えない？」

流琉「えっ！？私が曹操様に仕えるんですか！？そんな私のような……」

流琉が最後まで言おうとすると

ドドドオーツ！！

牛「モオーツ！！」

兵「曹操様、大変です。食材用の牛が暴れました逃げてください！？」

だが牛は猛スピードで華琳に迫る。

春蘭「華琳様！？」

春蘭が華琳のところにいこうとしたその時

スッ… ガシッ！

華琳の前に流琉が現れて暴れ牛の角を掴むと

流琉「どりゃーっ！！」

ブォンッ！！

牛「モォー！！？」

ドガッ！！

牛を柱に投げ飛ばした。

流琉「大丈夫ですか曹操様！？」

流琉が華琳を心配すると

華琳「欲しい…」

流琉「えっ？」

華琳「私にはあなたのような娘が必要よ！是非親衛隊に入りなさい！」

流琉「えっっ！？」

驚く流琉だった。

華琳「もちろんこんな美味しい料理を考え付く北郷も私に仕えなさい！」

ビッ！

華琳は一刀の方を向くが

しゅん

一刀達はすでに去ったあとだった。

華琳「この私から逃げるだなんて覚えてらっしゃい！」

「異種格闘大会前編」(前書き)

今回はアニメにはない拠点の話です。

「異種格闘大会前編」

宝剣を取り戻しに袁術の所に行く一刀達一行

そんな一行はというと

鈴々「お兄ちゃん、鈴々はお兄ちゃんの料理が食べたいのだ」

一刀の料理の腕前が高いと知った鈴々があれ以来一刀の料理を食べたいと言いまくるようになった。

一刀「はいはい、また今度作ってあげるから今日は劉雷のご飯を食べようね」

鈴々「えーっ！劉雷のご飯は飽きたのだ！」

海「何だとこのチビ！！」

朱里「はわわ！？喧嘩しちゃダメですよー！？」

鈴々を殴ろうとする海を必死で止めようとする朱里

星「それにしても一刀殿が実は料理が上手だなんて初めて聞きましたぞ」

桃香「別に隠す必要なかったのですのにどうしてですか？」

一刀「まあ、いろいろと事情があってね」

ホントは一刀も早めに言いたかったのだが言えない理由があった。

それはまだ一刀が愛紗と鈴々の三人旅をしていた時のこと

鈴々「お腹空いたのだ〜！」

一刀「次の町でご飯にしようか」

一刀達が言っていると

愛紗「それはいけません！大切な路銀（ろぎん…旅費）を無駄遣いしたらダメです！この間飯屋に行って鈴々が食べ過ぎたせいでお金足りなくなり散々飯屋で皿洗いしたのを忘れたのですか！」

一刀「すみません」

鈴々「そうだったのだ」

その事を思い出して反省する二人

愛紗「というわけで私が料理を作ります！」

鈴々「おおーっ！」

一刀「愛紗って料理ができたの!?」

愛紗「そんなに驚かないください。武を極めた私にとって料理なんて赤子の手を捻る（ひねる）より簡単なようなものです！」

武と料理は関係無いような気がするが

しばらくして

ジャーンッ！

一刀「うまそうな炒飯じゃないか！？  
」

鈴々「いただきますのだ！  
」

愛紗「おかわりはたくさんありますからね  
」

ぱくっ！

そして見た目が旨そうな愛紗の炒飯を口に入れる一刀と鈴々

だが

ポカンッ！！ シュッッ！

炒飯を口に入れた瞬間二人の頭が爆発し、煙が出てきた。

愛紗「炒飯は初めて作りましたから自信はないのですがどれどれ…  
」

ぱくっ！

そして愛紗も炒飯を口に入れた瞬間

ポカンッ！！ シュッッ！

愛紗も頭が爆発し、煙が出てきた。

一刀「（こうなったら俺が作るしかないな）なあ愛紗……」

一刀が愛紗に話しかけようとすると

愛紗「炒飯のような簡単なものも作れないなんて私は愚かだ！」

炒飯を作れなかったことを落ち込む愛紗

愛紗「一刀殿も料理はできませんよね！？」

一刀「えっ！？」

愛紗「できませんよね！？」

愛紗が涙目しながら一刀に近寄り、一刀は

一刀「……もちろん、俺は料理なんてできないさ」

愛紗「そうですか、よかったです。男の一刀殿にまで料理で負けたら自殺ものですからね」

一刀「あっはっはっ！？」

それ以来、ご飯を食べる時には皿洗いをしてでも店で食べるようになった一行だった。

というようことがあったのだ。

だが先の一件で一刀の料理が上手ということがバレてしまい

愛紗「・・・」

愛紗はさっきから黙ったままだった。

一刀「あ…あのさ愛紗、俺だって最初は物凄く下手だったんだからさ!？」

これは嘘であり昔から料理が上手な一刀だった。

愛紗「・・・」

だが愛紗は返事を返さない。

一刀「愛紗？」

じーっ！

愛紗が気になった一刀が愛紗の顔を見てみると

一刀「顔が赤い！？熱があるぞ!？」

全員「えっ!？」

しばらくして

愛紗「ハアハア…」

海「こんなひどい熱をほっておくなんて!？」

星「愛紗は怪我をしても話さない性格だったからな」

鈴々「どうなのだ朱里!？」

幸い医者である朱里がいたので診てもらおうと

朱里「手持ちの薬草じゃ役に立ちませんね。次の町で医者に診てもらわないと」

桃香「でも医者に診てもらおうようなお金がないよ」

最近お金を使いすぎたため医者に診てもらおうようなお金が無いのだ  
った。

朱里「早く診てもらわないと大変です!？」

みんなが困っていると

一刀「仕方がない、町に行って路銀を稼ぐしかないな。劉備さんと  
劉雷と鈴々と朱里は愛紗と一緒にいてくれ!俺と星が路銀を稼いで  
くる!」

星「ほほう、考えましたな一刀殿」

鈴々は愛紗の側から離れたくないだろうし、桃香は稼ぐには役立た  
ず、海も桃香から離れたくないだろうし、朱里は万が一に備えて愛  
紗を診てもらおう。稼げそうなのは一刀と一人旅をしていた星くらい  
のようなものなのだ。

「一刀「なるべく急いで帰るからな！いくぞ星！」

星「御意！」

ダダッ！

そして一刀と星は近くの町に働きにいった。

だが世の中そんなに甘くない

「一刀「くっそー！ここも人手がありすぎかよ！？」

星と二手に分かれて働きにいった一刀だが運悪くこの町は景気が良すぎて人を雇わなくてもいいくらいだった。

「一刀「この分じゃ星も働いていないだろうし困ったな」

「一刀が困りながら歩いていると

「一刀「んっ！」

とある看板を見つけた。

看板には…

『我こそはという腕自慢の男よ来たれ！異種格闘大会！賞金は1万円』

と書かれていた。

看板を見た一刀は

一刀「1万元！？愛紗を医者にみせてもお釣りが山ほどくるぜ！？  
よしっ！これだ！」

ダッ！

一刀は直ぐ様異種格闘大会の会場に急いだ。

会場

ズラリッ！

そこには数々の力自慢の男達がいた。

一刀「けっこう人がいるな、ライバルは多たって訳か！？」

一刀が回りの男達を見渡していると

男A「おい見ろよ！？」

男B「何でこんな大会にやつらが出てるんだよ！？」

男達の視線の先には

バンッ！

物凄い気を纏った三人の男達がいた。

九龍「たくさん人がいるけどみんなザコばかり」

鳳賀「俺達の誰かの優勝で決まりだな」

男A「あそこにいる見た目が怖そうな奴は骸<sup>がい</sup>亜<sup>あ</sup>（九龍）って奴だぞ！？噂では一人で山賊を数百人倒したそうだ！？」

男B「隣にいる眼鏡は李鳥（鳳賀）っていう雷使いだ！？だが奴らの中で一番恐ろしいのは中央にいる氷室（蒼魔）だぞ！？」

バンツ！

蒼魔「鳳賀、九龍、油断して負けたら承知しねえぞ！俺達は勝つことが約束された鬼神党の頭なんだからな！」

九龍「わかってるけど」

鳳賀「こんな大会に出ても俺達の優勝は間違いないじゃねえか」

大会を軽く見る二人だが

蒼魔「ザコばかりじゃなさそうだが、あそこにいる輝く衣を着た奴を見てみなよ」

ビシッ！

蒼魔は一刀を指差すと

鳳賀「あんな優男がどうしたんだ？」

九龍「あれじゃあ予選落ちは確実だぜ」

蒼魔「馬鹿野郎！お前達は気を計る力が弱いからわからねえんだよ！俺の見立てじゃあの男はお前達よりは強いし、もしかすると俺より強いと感じるぜ」

鳳賀「蒼魔より強いかもしれないだなんてそんな馬鹿な」

九龍「蒼魔の気のせいだ」

蒼魔「馬鹿野郎！俺が言ったことが間違ったことがあるか…」

蒼魔が最後まで言おうとすると

男「やめてくれっ!？」

何処からか男の叫ぶ声が聞こえてきた。

声の聞こえてきた方を見てみると

孤狼「やめろだと？お前から俺に喧嘩売ってきたんじゃないかよ！

」

そこには見た目が不良な感じの男が男を痛め付けていた。

男A「あいつは確か楠舞（孤狼）じゃないか！？群れるのを嫌って一人旅をしているっていう!？」

」

男B「そんな男に喧嘩を売ってきたあの男も災難だよな!？」

回りにいる男達が観戦していると

男「頼む見逃してくれ！うちには病気の母ちゃんがいて賞金で医者に診てもらいたいんだよ！」

男が必死で頼むと

孤狼「病気の母ちゃんだと、なら仕方ねえ見逃してや…」

そして孤狼が男から目を離した瞬間

男「この馬鹿が！」

ガッンッ！

男は孤狼を大槌（巨大ハンマー）で頭から殴った。

男「母ちゃんが病気だなんて嘘に決まっているだろう！お前のような騙される馬鹿はとっとくたばりな！」

男は孤狼を仕留めたと思っていたが

孤狼「なるほど、嘘だったとわな」

男「なっ！？」

孤狼にはあまりダメージを与えられなかった。

男「この化け物め！もう一撃食らいやがれ！」

ブォンッ！！

男は大槌を振り上げるが

孤狼「遅いんだよ！」

ドグボツ！！

男「ごふっ！？」

男が大槌を降り下ろすスピードより孤狼のスピードの方が速かった。

男「み…見逃してくれ！？」

男は再度見逃してくれるよう頼むが

孤狼「仏の顔は三度までだが、俺の顔は一度までしかねえんだよ！

」

ドグボツ！！

男「がはっ！？」

バタンツ！

孤狼の拳を顔面に食らった男はそのまま気絶した。

蒼魔「（フツ！ザコばかりの大会だと思っていたが手応えのある奴らがいて楽しくなってきたぜ！）」

一刀「（どいつもこいつも強い奴ばかりだな！？だけでも愛紗の治

療費を稼ぐためだ！本気で優勝しないとな！」

孤狼「（まだまだこんなもんじゃ暴れたりないぜ！誰でもいいから強い奴と戦いてえよ！）」

各自で燃える三人だった。

「異種格闘大会前編」（後書き）

蒼魔達各キャラについてはフランチエス力学園物語を見てください

「異種格闘大会中編」(前書き)

フランチエス力学園物語では書かれなかった夢の対決があります。

## 「異種格闘大会中編」

宝剣を取り戻しに袁術の所に行く一刀達一行

ところがその道中愛紗が熱を出してしまい医者に診てもらったためのお金を稼ぎに来た一刀だが、どこも雇ってくれそうないところがない。困った一刀が歩いていると目についたのは異種格闘大会の看板、賞金目当てに一刀が会場に行くとそこには蒼魔や孤狼等強い奴らがわんさかしていた。

各選手達の気合いがヒートアップするなか、いよいよ大会が始まる。

陳琳「それではこれより第一回異種格闘大会を始めます！ルールは簡単、この会場にいる男すべてを倒し、最後に残った人の優勝です。武器の使用は了承です」

一刀「またあの人（陳琳）が実況か、いつでもやってくるんだな！？」

一刀達の行く先々で現れる陳琳に一刀は驚いていた。

陳琳「ではまず始めに人数を分けるため皆さんを各ブロックに分けます。お手持ちの玉を見てください」

一刀「玉ってこれかな？」

一刀は受付の際、もらった玉を見てみると

『弐』

玉には弐(2)と書かれていた。

一刀「これがブロック分けてわけか」

スッ！

玉の指示通りに弐と書かれたゲートに向かう一刀

そしてそこには

ズラリッ！

蒼魔達はいないものの屈強そうな男達がたくさんいた。

じろりっ！

しかも何故か全員が一刀を見つめている。

一刀「(何でみんな俺を見つめてるんだ？あっそうか！俺ってば桃花村を襲ってきた賊を倒したから有名になったんだな)」

ところが実際はそうでなく

男達「(あいつが一番弱そうだな)」

全員が見かけで一刀が弱いと判断していたからだった。

陳琳「それではルールの説明です。ルールは簡単、各ブロックで分けられた人全員を枠の外に落としてください。最後まで残っていた

人が準決勝進出です」

簡単に言うとバトルロワイヤルである。

陳琳「それでは試合開始！」

ドォーンッ！

そして陳琳が銅鑼ひつを鳴らすと

男達『おりゃーっ！』

ババッ！

一刀「えっ！？」

第式ブロックでは銅鑼が鳴ったと同時に男達が一刀目掛けて一斉に襲いかかってきた。

ドドォーンッ！！

男達の集団は一刀を取り押さえるが

ブワッ！！

男達『うわぁーっ！？』

一刀「ふう〜、あぶなかった！？」

一刀に吹き飛ばされた男達が一気に飛ばされた。

ぼとぼとっ！

そして枠の外に落ちていく男達であった。

陳琳「おーっと！第弐ブロックはもう決着がついたようだ！番号1  
60番北郷一刀選手すごい！」

単なる力自慢では一刀の相手になるはずがない。

そして他のブロックでは

蒼魔「そいやっ！」

九龍「がああーっ！」

バキバキンッ！

陳琳「こちらにもすごいぞ！番号121番氷室選手、123番骸亜選  
手予選通過だ！」

蒼魔「当然だろ」

九龍「俺達には誰も勝てやしない！」

この二人は順調に勝っていたが

残り最後のブロックでは

鳳賀「まさか予選であんと出会っなんてな」

孤狼「お前は強いのか？」

鳳賀と孤狼が同じブロックにいた。（他の選手は全滅）

鳳賀「俺だつて鬼神党の三大頭の一人なんだぜ。強いに決まってるだろ」

孤狼「フツ！俺は強い奴と戦うのが好きなんだ！お前が強いことを祈っているぜ！」

スツ！

二人は互いに構えると

鳳賀「『プラズマショット電撃砲撃』！」

シュツ！

鳳賀が短刀から雷の塊を出して先手をとった。

鳳賀が放った雷が孤狼に襲いかかる！

孤狼「フンツ！こんなものが俺に効くかよ！」

バチチーッ！

だが孤狼は避けるどころか自分から雷に当たりに行った。

鳳賀「おいおい、俺の雷に当たって平気だった奴はいないぜ。かわ

いそうに、奴はもう終わったな」

ところがだ

バチバチッ！

鳳賀「なっ！？」

孤狼は少し黒こげになりながらも生きていた。

孤狼「お前の電気のおかげで肩こりが治ったぜありがとよ！」

鳳賀「こいつ！？俺の電気をマッサージがわりにしたのかよ！？」

これには驚くしかない鳳賀だった。

鳳賀「こうなったらこんな大会では使いたくなかったが仕方ない！

」

スッ！

鳳賀は短刀を重ねる。

それを見た蒼魔達は

蒼魔「あいつこんなところであの技を使う気かよ」

九龍「鳳賀のやつ相当あせってる」

そして鳳賀は

鳳賀「『溶撃波』！」  
ナイトキャノン

シュバツ！

短刀から強烈な気を放った。

孤狼「あらよっ！」

サツ！

今度は受けずに避ける孤狼

ドォーンッ！

そして孤狼が避ける前にいた場所に気が当たると

シューッ！

孤狼「なっ！？」

地面がいきなり溶け出した。

一刀「あの気、もしかして溶かす能力があるのかよ！？」

一刀の言う通り鳳賀が短刀から出した気は本気を出せば鉄をも溶かす溶解液になるのだ。

いくら孤狼でもあんなものを食らえばおしまいだ！？

鳳賀「うまく避けるじゃないか、あんたのことだから避けずに受けると思っていたのによ」

孤狼「生憎だが俺は危険感知能力が高くてな、受ける攻撃と受けない攻撃は俺が決めるんだよ」

鳳賀「だったら次は避けられないようにしてやるぜ！」

スッ！

鳳賀はまた短刀を重ねる。

だが

孤狼「この俺に同じ攻撃は二度も通用しねえぜ！」

シュンッ！

鳳賀「なっ！？」

孤狼は一瞬で鳳賀の懐に入ると

孤狼「何故なら俺は直ぐ様相手の攻撃の攻略法を探るからだ！ちなみにその技の攻略法は…」

スッ！

孤狼は拳を構えると

孤狼「発動するのに時間がかかりすぎるとこだぜ！」

ドグボツ！！

鳳賀「がはっ！？」

孤狼は無防備な鳳賀の腹目掛けて拳を繰り出した。

バタリッ！

そして鳳賀は倒れるのだった。

陳琳「おーっと！最後のブロックでも決着がついたようだ！番号9番楠舞選手、鬼神党の一人である鳳賀選手をくだして予選通過です！」

これで準決勝に進む四人が決定した。

そして組み合わせはくじによる結果

第一試合 一刀VS九龍

第二試合 蒼魔VS孤狼

となった。

一刀「相手はあの怪力男かよおつかないな！？」

蒼魔「九龍、油断するんじゃないぞ！」

九龍「何となくわかる。予選通過するだけで多少の実力はある。油

断しないから決勝で会おうぜ！」

蒼魔「任しとけ！」

そしていよいよ一刀と九龍の試合が始まろうとしていた。

陳琳「さあーっ！それでは準決勝第一試合、北郷一刀選手VS骸亜選手の試合を始めます！」

この組み合わせは西森が同時掲載している聖フランチェスカ学園物語でも実現していない夢の対戦である。

陳琳「それでは試合開始！」

ドォーンッ！

陳琳が銅鑼を鳴らすと同時に試合が始まった。

一刀「（あいつの試合は見ていたけどとにかくわかることが一つだけある。それは…）」

一刀が考え事をしていると

九龍「がああーっ！」

バツ！

いきなり九龍が襲いかかってきた。

一刀「あぶねっ！？」

サッ！

何とか九龍から逃げられた一刀だが

スッ！

九龍が一刀を捕まえようとして出した拳が地に触れた瞬間

ドグボツ！！

地面がえぐれた！

一刀「（あいつの腕はパワーシヨベルかよ！？あんなのをくらった  
ら終わりかもな！？）」

接近戦は不利だと考えた一刀は九龍から距離をとるが

九龍「甘いつ！」

スッ！

九龍は構えると

九龍「ギガフレイム巨大炎！」

ゴォーッ！！

口から強烈な炎を出した。

一刀「なっ！？」

サッ！

一刀は何とか空中に避けるが

バツ！

九龍「引つかかった！」

一刀「！？」

一刀が避けた先に九龍が待ち構えていた。

九龍「くらえっ！『ブラスタースマッシュ破滅爪』！」

ブオンッ！！

九龍は両手につけられている鋼の爪「龍殺牙」で一刀に攻撃を仕掛ける。

一刀「（あんなのくらっちゃおしまいだったの！？）くそっ！」

バサッ！

一刀はフランチエスカ学園の上着を脱ぐと

一刀「そりゃっ！」

バサッ！

九龍「ぬっ！？」

そのまま九龍の顔に被せる。

九龍「前が見えない！？」

スカッ！

目を塞がれたことによつて前が見えなくなった九龍の攻撃は一刀を外し

ドンッ！

そのまま地面に当たるが

ドカンッ！！

地面が碎けてしまった！

一刀「危なかった！？あんなの食らったら体がバラバラになるぜ！  
？それにしてもすごい威力だな、地面が碎けて…そうか！その手が  
あつたか！」

九龍攻略法を見つけた一刀だった。

バサッ！

九龍「こんな小細工に引つ掛かるなんて」

九龍はフランチェスカ学園の制服を外すと

九龍「もう許さないぞ！」

ドドオーッ！！

一刀に攻撃を仕掛ける。

だが一刀は避ける気配を感じさせない

九龍「くらえっ！『ブラスタースマッシュ破滅爪』！」

ブオンッ！！

九龍は一刀に攻撃を当てようとするが

サッ！

一刀はギリギリで攻撃をかわし

ドグボッ！！

九龍の外した攻撃は地面を粉碎する！

九龍「ちっ！避けてばかりいやがって！次は必ず……」

ところがだ

ゴォーンッ！

いきなり銅鑼の音が鳴り響き

陳琳「試合終了！勝者、北郷一刀選手」

一刀の勝利が宣告された。

九龍「何故だ！？俺はまだ負けてない！」

九龍が不思議がっていると

一刀「足元を見てみなよ」

九龍「足元？」

じーっ

九龍は自分の足元を見ると

バンッ！

九龍「あっ！？」

九龍の足場が無くなり、場外に出ていた。

一刀「お前が勝手に自分の足場を破壊したからそうなったんだよ」

九龍「あっ！？しまったー！？」

自分で墓穴を掘ってしまった九龍だった。

「異種格闘大会中編」(後書き)

果たして一刀と戦うのは蒼魔か？孤狼か？どちらでしょう？

## 「異種格闘大会後編」

宝剣を取り戻しに袁術の所に行く一刀達一行

だがその途中愛紗が熱を出してしまい一刀と星は村に降りてアルバイトを探すが雇ってくれそうないところがない

困った一刀が歩いていると見つけたのは異種格闘大会の看板。賞金目当てに出場した一刀であった。

だが周りは強者揃い、予選をなんなく突破し、一刀は準決勝一回戦の相手である骸亜（九龍）を破って一回戦を突破するのだった。

一回戦終了後

九龍「くっそー！あんな奴に負けるなんて悔しいぜ！」

鳳賀「バーカ。今のは完全に頭の悪いお前の敗けだろうが、俺が相手だったらあんな奴楽に倒せるのによ」

鳳賀達が話していると

蒼魔「バカなのはお前も同じだ」

鳳賀・九龍「蒼魔！？」

後ろから蒼魔が話しかけてきた。

蒼魔「前にも言ったがあいつ（一刀）はなかなかの手練れだ。ただ

頭がいただけなら九龍の攻撃を避け続けられる訳がねえだろう」

九龍「それもそうだな」

鳳賀「蒼魔はあいつ（一刀）を過大評価しすぎだったの、ただあいつが避けるのがうまいかもしれないだろ。九龍だって油断してたかもしれないし」

九龍「確かに俺は少しばかり油断してたかもしれないが…」

蒼魔「もういいっ！俺が次の試合で勝ってあいつの強さを見せてやるぜ！」

蒼魔達が会話をしている横では

孤狼「（それは無理だな。何故ならあいつ（一刀）と戦うのは俺だからだ。体が早くあいつと戦わせると言いまくってるぜ！）」

孤狼もまた一刀の力を理解していた。

陳琳「さあーっ！それでは舞台の修復が終わったところで第二試合の開始です！」

ワァーワァーッ！！

次の試合の組み合わせに白熱する観客達

男A「次の試合どっちが勝つかな？」

男B「鬼神党三大将の中でも一番強い氷室（蒼魔）と向かってくる

敵は全て倒しまくる楠舞（孤狼）の対決だからどっちが勝つかかわからないしな！」

観客達が熱狂するなか、両者が舞台に立つ

蒼魔「楠舞、あんたの噂を知ってるぜ！うちの若い奴が俺達を裏切ってあんたに仕えようとしたくらいだからな」

孤狼「あー、確かにそんな奴がいたっけな、だが俺の入隊試験に不合格だったんですぐに出ていったけどな」

スッ！

戦いを前に両者が構える！

陳琳「それでは試合開…」

そしてまもなく試合が始まろうとしたその時！

男「大変だあゝ！？」

会場に一人の男が慌てて駆け寄ってきた。

村人「お前は見張り役…一体どうしたんだよ！？」

村人が聞くと

見張り役「この村めがけて賊の大軍が攻めてきてるんだよ！？その数は軽く見ても10万はいるぞ！？」

見張り役の男が言うと

一刀「賊だって!？」

蒼魔「どうやら勝負はお預けのようだな」

孤狼「ちっ!仕方ねえな」

スッ!

村の入り口の方に向かう三人に

村人「あんた達どこ行く気だ？」

村人が行き先を聞くと

一刀・蒼魔・孤狼『賊を退治しにいくんだよ!』

ダッ!

そして三人は村の入り口に向かつていった。

その少し前

賊頭「がっはっはっ!いいところに村があつたもんだぜ!お前ら、食い物と金目のものを根刮ぎ(ねこそぎ)奪ってしまえ!」

数万人の賊達が村で暴れまくっていた。

賊「でもお頭、こんなに暴れていいんですか？」

賊頭「何が言いたいんだ？」

「

賊「だってこの村は確か異種格闘大会を開いているから猛者がたくさん揃ってるんですよ！そいつらが相手じゃ勝てませんよ！？」

一人の賊がお頭に言う

賊頭「大丈夫だったの！誰が相手だろうとこっちには先生がいるんだぜ！奴らは手も足も出せないんだよ！なあ先生」

「

？「そうだとも、私にかかればどんな奴でも手も足も出せないのさ」

「

賊頭がカーテン付きの台座に乗った先生という者にいう

賊「お頭、大変です！？」

「

一人の賊がお頭に慌てて駆け寄ってきた。

賊頭「そんなに慌ててどうしたんだよ？」

「

賊頭が聞くと

賊「村の方からめっぼう強い奴らが出てきてるんですよ！？」

「

賊頭「何だと！？それで数は何人だ？五十人か？百人か？」

「

ところが返ってきた答えは

賊「それが三人です！？」

賊頭「はあ！？ふざけるんじゃないよ！ たかが三人くらい簡単に倒してしまえ！」

賊「三人は三人でもめちゃくちゃ強い奴らなんですよ！？とにかくあれを見てください！」

ビシッ！

そして賊が指差した先にいたのは

一刀「おりゃーっ！」

蒼魔「そらよっ！」

孤狼「くたばりやがれっ！」

ドガバキンッ！！

次から次へと向かってくる賊を簡単に倒していく一刀達だった。

ザッ！

そしてついに一刀達は賊頭の前に来てしまった。

一刀「どうやらあいつが親玉らしいな」

蒼魔「あんな奴数秒で倒してやるぜ！」

孤狼「俺の戦いを邪魔しやがって！ただですむと思うなよ！」

ギロリッ！！

賊頭を睨み付ける一刀達

賊「ひいつ！？お頭、どうしましょう！？」

賊頭「あゝ慌てるんじゃないやねえよ！こっちは無敵の先生がいるんだぞ。先生、お願いします！」

賊頭が叫ぶと

？「やれやれ、もう私の出番がやってくるとはな」

スッ！

誰かが台座から出てこようとする。

そして降りてきた人物は

バンッ！

偽劉備「我が名は劉備玄德！中山靖王劉勝の末裔（まつえい・子孫）のものであるぞ！」

この旅を始めるきっかけを作った偽劉備だった。

ビシッ！

そして偽劉備は蒼魔達を指差すと

偽劉備「お前達！この私に逆らうことがどんなことだかわかっているのか！」

誰がお前なんかの言うことなんて聞くか！と言いたいとこだが

蒼魔「中山靖王の末裔が相手かよ！？」

孤狼「ちっ！手の出しようがないぜ！」

逆らわない蒼魔達

何故ならば中山靖王劉勝は偉大なる人物であり逆らえばどんな目にあわされるかわからないのだ。（桃香は劉勝がどんな人物であることを知らない）

偽劉備「わかったらさっさとこの村から去れ！」

偽劉備が威張っていると

一刀「久しぶりだなお前」

偽劉備「んっ？」

くるっ！

偽劉備が声のした方を向いた瞬間

ドグボツ！！

偽劉備「がはっ！？」

偽劉備は一刀にぶん殴られた！

全員『！？』

この一刀の行動に回りにいた全員が驚いたが

一刀「心配するな、こいつは劉備の偽者だよ。なあそうだろ？」

スッ！

一刀は笑顔で偽劉備を見つめるが

ゴゴゴッ……！！

その後ろには鬼の幻影があった。

偽劉備「お……お前は確か！？」

偽劉備は一刀に殴られたことと、鬼の幻影で必死で忘れていた一刀のことを思い出した。

偽劉備は以前にも一刀に殴られ、物凄い気をあびたせいで失禁しながら去っていったのだった。

一刀「偽者だよな？」

ゴゴゴッ……！！

一刀が鬼の幻影を出しながら偽劉備に聞くと

偽劉備「ごめんなさい！私は劉備なんかではないんです！」

ガバツ！

いきなり土下座して謝る偽劉備

全員『えっ！？』

それを聞いて一刀以外の人が驚いた。

偽劉備「それでは私はこれで！？」

ピューッ！！

偽劉備は謝るとすぐに逃げていった。

賊頭「ちょ…ちょっと先生そりやないぜ！？」

賊頭が慌てていると

ぽんっ！

誰かに肩を叩かれ振り向いてみると

蒼魔「村を攻めて覚悟はできてるだろうな！」

孤狼「俺を騙した罪は重いぜ！」

ゴゴゴッ…!!

賊頭「ひっ!? ギャーッ!?」

この後、賊達はボロボロの姿で村外れに捨てられたという。

そして異種格闘大会はというと

蒼魔「ほらよっ、受け取りな!」

パスッ!

一刀「えっ!?」

蒼魔は賞金を一刀に渡した。

蒼魔「楠舞とも話し合ったんだがその金は先に勝利したお前にやるよ!」

孤狼「お前のような奴は久しぶりに見たぜ!」

一刀「ありがとう!」

ダッ!

そして一刀は直ぐ様賞金を持って医者を訪ねるのだった。

しばらくして

愛紗「ん…」

ここは森の中、愛紗が目覚めると

鈴々「愛紗が起きたのだ！」

愛紗「鈴々、私はどうしてたのだ？」

ガバッ

いきなり起き上がろうとする愛紗に

朱里「はわわ！？ダメですよ愛紗さん。病み上がりなんですから安静にしないと！」

愛紗「病み上がり？」

鈴々「覚えてないの？愛紗は高い熱を出して倒れたのだ」

桃香「お医者さんによると旅の疲れだそうです」

海「あんたは無茶すぎなのよ」

星「しかし無茶すぎなのは一刀殿だろう、愛紗を医者に見てもらったために格闘大会に出場してお金を稼いだあげく、医者の送り迎えまでしたのだからな」

星が言うつと

愛紗「一刀殿がそんな無茶を！？それで一刀殿はどこだ！？」

鈴々「お兄ちゃんならそこなのだ」

スッ！

鈴々が指差した先には

一刀「ZZZZ」

木にもたれながら眠る一刀がいた。

愛紗「一刀殿…」

スッ

愛紗は眠る一刀に手を当てると

愛紗「あなたは本当に私が近くにいないと無茶をする人ですね」

愛紗が笑顔で言うと

一刀「むにゃむにゃ…」

一刀が寝言で何かを言おうとしていた。そして

一刀「愛紗、みんなが見てる前で裸になって抱きついちゃダメじゃないか」

と言った瞬間

ブチンッ！！

愛紗「なんて夢を見ているんですかーっ！！」  
「

バッチーンッ！！

一刀「ギヤーツ！？」  
「

愛紗に叩かれる一刀だった。

「異種格闘大会後編」(後書き)

次回より本編に戻ります。

## 「鈴々のクリスマス」(前書き)

今日がクリスマス(12月25日投稿)ということで特別編にしました。

## 「鈴々のクリスマス」

宝剣を取り戻しに袁術の所に行く一刀達一行

そして道中を歩いていると

ポツ！

鈴々「にやにやつ！？鼻の頭が冷たいのだ！？」

朱里「それは雪ですよ。もう季節は冬ですからね」

海「この間まで普通の気候だったのに作者の季節感がおかしすぎよ！」

すみません

一刀「冬か。もうそんなに月日が経つんだな」

実際はそんなに経っていない気がするが一刀がこの世界にやって来  
てから月日が大分経ち、冬を迎えていた。

愛紗「こんなに寒くては明日は雪が積もるかもしれないな。早めに  
近くの村で宿をとった方がよいかもしれないな」

星「同感だな。それにしてもこんなに寒い日はやはり熱<sup>あつかん</sup>爛に限るな  
！」

朱里「星さんはそればかりですね」

星「仕方なかるう。そういえば一刀殿の世界でも寒い時はやはり熱燗で過ごしますかな？」

星が一刀に聞くと

一刀「いや、俺の世界では未成年は飲酒禁止だから飲めないよ」

一刀はまだ十七歳である。

お酒は二十歳を過ぎてからにしましょう。

一刀「寒い時の過ごし方っていったら…」

一刀は自分の過ごし方を思い出してみる。

一刀「炬燵こたつで横になって蜜柑みかん食べながら親に隠れて買ったエロ本読んでたなあ…」

一刀が言うと

鈴々「ずるいのだ！炬燵が何なのかは知らないけど暖かそうだからお兄ちゃんだけずるいのだ！」

この世界に電化製品である炬燵があるはずがないので鈴々は炬燵を知らない。

愛紗「あなたはそっちの世界でもエロ本を読んでいたのですね」

ピキピキンッ！

一刀の一日を聞いて青筋を浮かべる愛紗

一刀「待ってくれ愛紗！？冬で他にといえば…そうだクリスマスがあつたな！」

愛紗をこれ以上怒らせないため話題を変える一刀だった。

海「何よ、その苦しめますってのは？嫌がらせする日なの？」

鈴々「違うのだ！栗酢鱒マスっていうくらいだから栗とお酢と鱒を食べまくる日なのだ！」

どちらも違う

一刀「クリスマスっていうのは家族や恋人同士で仲良く過ごしたり、美味しいものを食べる日なんだよ」

この一刀の一言に

鈴々「美味しいもの！どんながあるのだ？」

美味しいものと聞いて目を光らせる鈴々

一刀「例えばチキンという鶏の骨付き肉とかケーキかな」

朱里「けーきですか？」

一刀「西洋のお菓子だよ」

一刀が次々にいいまくと

鈴々「やっぱりお兄ちゃんはずるいのだ！鈴々もちきんとけーきが食べたいのだ！」

ガバツ！

一刀「うわっ！？」

羨まし（うらやまし）すぎる一刀に飛びかかる鈴々

愛紗「止めぬか鈴々！」

桃香「それで一刀さん、そのクリリン飛ばすってのは他に何があるの？」

一刀「クリスマスね、他には寝ている良い子の家にサンタクロースっていう赤い服を着たお爺さんが贈り物をするんだよ」

一刀が言うと

鈴々「贈り物！鈴々は今日から良い子になるのだ！」

プレゼント欲しさに良い子になる宣言をする鈴々

愛紗「家の中にサンタクロースという者が侵入するなんて警備が甘いですね！」

一刀「サンタクロースね」

確かに家の中に四本腕の大男が侵入すると恐ろしい。　サタンクロスについてはキン肉マンを参照

星「贈り物をしてくれるとは良い老人ですな。ちなみに私は酒をもらいますぞ」

桃香「じゃあ私はお洋服が欲しいな！」

海「私は劉備様を…じゃなかった！？何でもいいですよ！」

一刀「言っておくけどみんな、サントクロースは子供にしか贈り物しないからね」

どう見てもみんなは大人である。

一刀「このメンバーでいうなら鈴々と朱里かな」

朱里「はわわ！？私は子供じゃないですよ！」

鈴々「鈴々だって子供じゃないけど今日だけ子供になるのだ！」

どうしても贈り物が欲しい鈴々

愛紗「みんな！そんなことよりも早く宿を探さねば凍え死ぬぞ！？」

「

全員『あっ！？』

ビューッ！

話は一旦置いて、宿を探す一刀達だった。

しばらくして

あの後何とか村を見つけて宿に泊まることができた一刀達

鈴々「お兄ちゃん、三田苦労するはどこから来るのだ？」

一刀「サンタクロースだよ、寒いところだから北極かな？」

鈴々「北極ってどこなのだ？」

この世界の人は中国の大陸しか知らないため北極を知らない

一刀「え〜つと！？とにかく北の方だよ！ずっと北の方！」

説明が難しいので簡単にすます一刀

一刀「そして煙突から入ってくるんだよ」

鈴々「煙突…」

じーっ！

鈴々は天井を見つめると

鈴々「この宿には煙突がないから洗濯老酢が来れないのだ！？」

ガックリ

落ち込む鈴々に

一刀「サンタクロースだよ！それに煙突がなくてもサンタはやって来るからね！？」

一刀が言うと

鈴々「そうなのか！？安心したのだ」

安心する鈴々だった。

そしてあっという間に夜が来て

愛紗「鈴々、明日も早いからさっさと寝ろ！」

ところが鈴々は

鈴々「嫌なのだ！鈴々はサンタに会うまで起きとくのだ！」

強情な鈴々は一度言ったら簡単にはいうことを聞かない

一刀「あのね鈴々、サンタは寝ていないと来ないんだよ」

鈴々「にやにやつ！？だったら寝るのだ！」

ガバッ！

直ぐ様ベッドに入る鈴々だった。

そしてその後

鈴々「スースー」

鈴々がぐっすり寝ていると

キッ！

扉が開いて

一刀「鈴々は寝てるようだな」

サンタの変装をした一刀が現れた。

一刀「あんなこと言ってサンタが来なかったなんて知ったらショックを受けるだろうしな」

スッ！

そして一刀は鈴々の枕元にプレゼントである上着を置くのであった。

一刀「さすがに食べ物を置くと腐っちゃうかもしれないしな」

一刀らしい判断である。ちなみにこの上着は前に一刀が出た大会の賞金のお釣りで買ったものである。

一刀「いつも鈴々には世話になっているからな」

スッ！

そして一刀が部屋から出た後

鈴々「むにゃ、お兄ちゃん大好きなのだ」

寝言を言う鈴々だった。

一刀「さてと鈴々にプレゼントを渡したことだし変装を解くか」

スッ…

一刀が変装を解こうとすると

一刀「んっ！確かこの部屋は愛紗の部屋だったな」

愛紗の部屋を見つけ

一刀「愛紗にもプレゼントを渡さなくちゃなあ」

（にやりっ）

何かよからぬことを企む一刀

キッ！

一刀「お邪魔します！」

そして一刀が愛紗の部屋に入ったその時！

グイッ！

一刀「うわっ！？」

バタッ！

入り口に結んであったロープに足をとられて一刀がこけると

ジャキンッ！

目の前には偃月刀があった。

愛紗「おのれっ！貴様がサタンクロスだな！私が成敗してくれる！

」

部屋が暗いのと変装のおかげで一刀だとバレていない。

一刀「待ってくれよ愛紗！？」

」

愛紗「貴様、私の真名を言ったな！首を切ってやるから覚悟しておけ！」

ブンブンッ！！

一刀「ひっ！？」

部屋の中で偃月刀を振るいながら一刀を追いかけて回す愛紗、そして必死で逃げる一刀

一刀「さ...さらばっ！？」

バッ！

追い詰められた一刀は窓から逃げ出した。

愛紗「あっ！？窓から逃げるなんてバカな奴め！？」

それもそのはず、何故ならここが二階だからである。

ドッシーンッ！

一刀「ギャーッ！？」

愛紗「くたばったのか？まあいい、サタンクロス討ち取ったり！ハハッ！」

そして落ちた一刀はというと

一刀「とんだクリスマスだ！？」

体が頑丈なおかげで多少の傷ですんだのであった。

そしてその上空では

シャンシャンッ

？「何をやってるんだあの男？」

赤い服を着たサンタクロースのお爺さんが一部始終を見ていた。

サンタ「さて、張飛ちゃんにはあの男がプレゼントをしてくれたからいいとして、次は桃花村の璃々ちゃんにプレゼントを贈らなければ！」

シャンツ！

そしてサンタは桃花村の方角に向かっていった。

そして次の日

鈴々「お兄ちゃん、サンタから贈り物がきたのだ！」

一刀「よかったね鈴々」

愛紗「それはそうと一刀殿、その怪我はどうしたのですか？」

バンツ！

一刀の体は傷だらけだった。

愛紗を襲いに行ったなんて言ったら殺されかねないので

一刀「き…昨日の夜、階段から派手に転げ落ちたんだよ！？」

愛紗「気をつけてくださいよ！」

誤魔化す一刀だった。

「鈴々のクリスマス」(後書き)

次回よりホントに本編に戻ります。次回、呂布との再会

## 「呂布との再会」

宝剣を取り戻しに袁術の所に行く一刀達一行

そしてついに…

バンッ！

一刀達は袁術の国にやって来た。

愛紗「ようやく袁術の国にやって来ましたね」

一刀「まるで天竺についた三蔵法師のような気分だぜ！」

海「何いつてるのよあんた？」

星「しかしそれにしても…」

ぼろっんっ

町の様子はすっかり衰えており、痩せ劣った人や怪我人が大勢いた。

朱里「噂によると袁術は民達から高い税金を取りまくったりしていて悪評が高いそうです」

民達だって文句の一つも言いたいのだがそんなことをすれば打ち首は確実なので文句が言えないのだった。

桃香「町についてすぐ宝剣を返してもらったのもあれだし、この町で

「買い物をしようよ」

鈴々「賛成なのだ！璃々にお土産を買いに行くのだ！」

そして一行は土産物屋の前に来たのだが

鈴々「あつ！」

ダッ！

土産物屋の前にたどり着いた瞬間鈴々が走り出した。

一刀「おい鈴々、どこにいくんだ？」

一刀が鈴々に聞くと

鈴々「お兄ちゃん！愛紗！早くこっちに来るのだ！」

一刀達『？』

鈴々に言われるがまま一刀達が鈴々の所に行くと

鈴々「でっかいキ〇タ〇なのだ！」

どーんっ！！

鈴々が指差したのは大きなタヌキの置物だった。

朱里「はわわ！？」

愛紗「何をいつているのだ鈴々！　／＼／　」

星「そくだぞ女子がキ〇タ〇だなんてはしたない！他に言い方があ  
るだろう。鞆丸だとか…」

海「ストップ！それ以上言ったらダメよ！？」

一刀「と…とりあえず中に入ろう」

誤魔化すため店の中に入る一刀達だった。

店内

桃香「うわぁーっ！？色々なものが置いてあるね！？　」

店に置いてある物に驚く桃香

海「ちよつとあんた！そんなに木刀買ってどうする気よ！？」

愛紗「いやぁ、一刀殿をボコるのに偃月刀を使うのは勿体ないので  
木刀を使おうと思ってな」

ズラリッ！

そう言いながら木刀を十本以上持つ愛紗

朱里「この湯飲みは素敵ですね」

朱里が湯飲みを選んでいると

星「その湯飲みもなかなかよいが朱里にはこちらの湯飲みもいいのではないか？」

スッ！

そして手に持った湯飲みを朱里に薦める星。星の湯飲みには美女が描かれていた。

星「この湯飲みは中にお湯を入れると美女の服が透けて裸になるというものなのだ。朱里にはぴったりだろう」

朱里「何がぴったりなんですか！そんなもの買う人はいませんよ！  
／／／」

と朱里が怒鳴る隣で

一刀「この湯飲みくれ！」

ズコッ！

一刀が星の選んだ湯飲みを買うのを見てずっこける朱里だった。（この後、運悪く湯飲みを買ったところを愛紗に見つかり殴られる一刀だった）

そして鈴々はというと

鈴々「うーん、なかなか璃々へのお土産が決まらないのだ」

まだ璃々へのお土産が決まっていなかった。

とその時

鈴々「にやにやつ!? あれは!？」

鈴々は一つの商品を見つけた。

スッ!

鈴々「これを璃々へのお土産にするのだ!」

鈴々が選んだのはコーギーのストラップである。

そして鈴々がストラップを手にとった直後

パシッ! パッ!

鈴々「にやにやつ!？」

ストラップは鈴々の手から消えた。

鈴々がストラップの行方を探して辺りを見ると

?「これは呂布殿にいい土産ができたのです!」

ストラップはパンダが書かれた帽子を被った緑の髪をした小さい女の子の手にあった。

鈴々「それは鈴々が先にとったから鈴々のものだから返すのだ!」

鈴々が小さい女の子に言う

？「そんなの早い者勝ちなのです！」

ダッ！

鈴々「あっ！？」

女の子はそのままレジの方に向かっていく

鈴々は追いかけるが間に合わない！

とその時

一刀「うう、ひどい目にあった」

スッ！

レジの少し手前に一刀が現れた。

鈴々「お兄ちゃん、いいところに現れたのだ！そいつから商品を取り返してほしいのだ！」

一刀「えっ？」

一刀が鈴々の声が聞こえた方を向くと

？「フンッ！お前のような奴に捕まるねねではないのです！」

トンッ！

女の子は一刀に少し当たりながらも捕まらなかった。

ねね「ねねの勝ちなのです！店主、これをくださいなのです！」

スッ！

ねねは店主に手のひらを見せるが

店主「お嬢ちゃん、くださいって何をだい？」

ねね「えっ！？」

ねねが手のひらを見ると

ジャーンッ！

手のひらにあるはずのストラップが消えていた。

ねね「な…なんですとーっ！？」

ねねが驚いていると

一刀「ほらよ鈴々」

鈴々「お兄ちゃん、ありがとうなのだ」

ねね「！？」

ねねが鈴々の方を向くと

バンッ！

鈴々の手にはストラップがあった。

ねね「な…何故なのです！？」

実は一刀とねねがぶつかった時、とっさに一刀が掏ったのである。  
忘れている人もいると思うがこの小説の一刀は強いだけでなく掏り  
（スリ）のスキルもあるのだ。（第17話食い逃げ姫と弓の名手参  
照）

ねね「ねねのものを返せなのです！」

バッ！

一刀「うわっ！？」

ねねは一刀にのし掛かると

ねね「このこのーっ！！」

ガリガリッ！

一刀「いたたっ！」

一刀の顔を引っ掻きまくるねね

鈴々「お兄ちゃんをいじめるなのだ！」

バッ！

鈴々が入り込みねねと取っ組み合いの喧嘩を始めた。

海「うるさいわね何の騒ぎよ！」

朱里「静かにしないとお店の人に迷惑ですよ」

騒ぎを聞いて集まるみんな

愛紗「やめぬか鈴々！」

星「お主もやめなされ」

ひょいっ ひょいっ

そして鈴々とねねは愛紗と星に持ち上げられた。

鈴々「はなすのだ愛紗！」

ねね「はなすのです！」

愛紗「いいからことの始まりを言え！」

ドンッ！

愛紗の怒鳴り声で二人は事情を話した。

愛紗「なるほどな」

星「今回は鈴々に悪気はなかったようだな」

朱里「あなたには悪いですが先に手を出したのは鈴々ちゃんですし諦めて…」

ねね「嫌なのです！ねねは絶対あれが欲しいのです！」

鈴々「鈴々だつて欲しいのだ！」

再び口論を始める二人に

一刀「そつだ！同じものがあるか店主に聞いてみよう！」

ところが

店主「悪いけどあれは一つしかないんだよ。次に入荷するのは一ヶ月後だな」

鈴々「そんなに待てないのだ」

ねね「ねねもなのです」

一刀「まあとりあえず他に奪われないように買っておこう。おじさんいくらだ？」

一刀が値段を聞くと

店主「その小人形は安いが店の修理代も払ってもらつてよ！」

ボロッ

店の中は鈴々とねねが暴れたせいでボロボロになっていた。

一刀「すみませんでした」

しばらくして

ねね「お前達のせいで小人形が買えなかったのです！どうしてくれるのですか！」

鈴々「別に鈴々達のせいじゃないのだ！お前が邪魔するからいけないのだ！」

再び口論を始める二人

ねね「へんつ！お前達は武力に自信があるようですがあのお方が相手ならばお前達なんか束になっても勝てないのです！」

星「あのお方とな？」

とその時

？「…陳宮」

ねね「この声は！？」

ねねが声のする方を向くと

バンッ！

ねね「恋殿ーっ！」

そこには恋こと呂布がいた。ねねは恋に向かっていく

愛紗「あやつは確か呂布！？」

海「何だかわからないけどあいつから物凄い闘気を感じるわ！？」

前に愛紗達は愛紗、鈴々、星の三人がかりで戦ったが恋に勝つことができなかったのだ。（第12話化け物退治参照）

ねね「恋殿、聞いてくだされ、あいつらがねねをいじめたのですぞ！」

ビシッ！

ねねが恋に言いつけると

恋「…陳宮いじめちゃだ…」

恋は直ぐ様愛紗達を切りつけようと構えるが

恋「…一刀！」

一刀の姿を見つけて構えを解いた。

一刀「久しぶりだな恋」

そして一刀が言った直後

ねね「ちんきゅうキーク！」

ドグボッ！！　　ミ

一刀「ぐほっ！？　」

ねねが一刀の腹めがけて蹴りを繰り出した。

ねね「恋殿の真名を勝手にいいやがって！お前は首斬り確定で…」

ねねが最後まで言おうとした時

ゴッソッ！

恋の拳がねねの頭に直撃した。

ねね「恋殿…！？　」

恋「…一刀には真名を許したから別にいい」

ねね「なんですとーっ！？　」

恋の言葉に驚くねね

恋「…一刀、また会えて嬉しい。けどどうしてここに？」

一刀「ちょっとこの町に用があつてね、恋は？」

恋「…恋は交尾しに来た」

一刀「そうか交尾か…交尾！？　」

恋の言葉に驚く一刀

鈴々「朱里、お兄ちゃんは何で驚いているのだ？」

朱里「はわわ！？鈴々ちゃんにはまだ早いですよ！？」

星「確かに鈴々にはまだ早いな、交尾ならば愛紗であろう」

愛紗「なっ！？／＼／」

一刀「（愛紗の交尾…）」

（一刀の妄想）

愛紗「あっ…あんっ一刀殿／＼／」

ドグボツ！！ ミ

一刀「な…何でいきなり！？」

一刀が妄想した途端、愛紗が一刀の顔面を殴った。

愛紗「鼻の下が伸びていましたよ！」

「恋とねねの出会い」(前書き)

2011年最後の投稿になりました。

## 「恋とねねの出会い」

一刀「な〜んだ。交尾は交尾でも犬だったのか!？」

恋が交尾しにきた相手が犬だとわかり驚く一刀達

恋「…張々の相手が袁術の所にいると聞いて来たけど相手の犬が張々を恐がって交尾してくれなかった」

という恋の後ろには

ドォーンッ!

ねねの相棒のセントバーナードである張々がいた。

一刀「確かに相手がセントバーナードじゃ少し怖いかもな」

恋「…せんとばーな〜ど？」

一刀「張々みたいな犬のことだよ」

恋「…一刀物知り」

一刀と恋が仲良くしているのを見た愛紗は

愛紗「(ムッ!)」

朱里「はわわ!?!愛紗さん怖いでしゅ!?!」

怒ったような顔をしている愛紗を見て驚く朱里

星「しかし呂布よ、その陳宮とは誰なのだ？」

話を変えるべく星がねねについて聞くと

恋「…陳宮とは旅で出会った家族」

ねね「そうなのです！恋殿とねねは固い絆で結ばれているのです！  
あれは数カ月前のこと…」

ここで話はねねの昔話に変わる。

数カ月前、ねねと張々が村で暮らしていると

ゴオーッ！！

突然火事が発生した。

その後辛うじて（かろうじて）火は消し止められたが

村人A「さっきの火事、どうも放火らしいぜ」

村人B「誰が火をつけたんだ？」

村人達が考えていると

村人C「俺は見たぞ！村外れに住む陳宮が家に放火していたのを！  
？」

じっ！

村人達は一斉にねねを睨み付ける。

ねね「な…何でねねを睨み付けるのですか！？」

村人A「お前はいつも村人達から仲間外れにされてたしな」

村人B「お前ならいつもの仕返しとばかりに放火してもおかしくないんだよ！」

ねねは疑われていた。

ねね「ねねは無実なのです！話を聞いてほしいのです！」

ねねは無実を主張するが

村人A「放火犯は村から出ていけ！」

村人B「出てけ！」

村人達はねねを責め続ける。

村人達『出てけーっ！出てけーっ！』

次々と村人達からくる出てけコールにねねは耐えきれなくなり

ねね「くっ！」

ダッ！

とうとうねねはその場から逃げ出してしまった。

そしてねねは張々を連れて村から出ていったのだった。

ねね「張々、ねねは悪くないのです。お前だけはねねを信じてくれますよね？」

ねねが張々に聞くと

張々「わんっ！」

張々はまるで『信じてるよ』と言わんばかりに吠えた。

ねね「張々、お前だけはねねが守るのです！」

ギョッ！

そういつて張々に抱きつくねね

それからしばらくの間

ねねと張々は次々と村から村へと移動していたが

村人「あの子が例の村の放火犯だってよ」

村人「恐ろしい子だな！？」

ねねが放火したという噂が広がり続けあまり長居はできなかった。

それから数日後、ある寒い日

バタリッ！

ねね「もう動けないのです…」

到頭ねねは力尽きて倒れてしまった。無理もないしばらくの間、村が見つからず飲まず食わずの生活が続き、家を見つけてもお風呂にも入れないのでねねの体は真っ黒だったため家の人から冷たく突き放された日々が続きねねの体力はもはや限界だったのだった。

張々「クウン…」

ぺろぺろっ

ねねが倒れたので舐めて起こそうとする張々

ねね「張々、もういいのです。ねねはこのまま死ぬのですよ」

張々「クウン…」

ギュッ！

張々はせめて少しでも寒さを凌がせ（しのがせ）ようとねねにまわりつく

ねね「死ぬ時は一緒というわけですか…お前は最高の相棒なのです」

パチリッ！

そしてねねの目が閉じてしまった。

その時！

ザッ！

ねねと張々の前に一つの人が止まったのだった。

しばらくして

ねね「うん…」

ねねの目が開くと

ジャンッ！

そこには焼き魚があった。

ねね「目の前に食べ物か！？ここは天国なのですか！？」

ねねが驚いていると

恋「…ここは天国じゃない」

又ッ

そこに恋が現れた。

ねね「もしかしてあなたが助けくれたのですか！？せっかくだけ

ど余計なお世話なのです！ねねはいない方がいいのです…」

ちらっ

言いまくるねねが恋の方をちらりと見ると

パクパクっ

恋「…なに？」

ずっっ！

恋は食べるのに夢中でねねの話を聞いていなかった。その様子を見て思わずずっこけるねね

ねね「さっきの話を聞いていなかったのですか！」

恋「…ごめん。もう一度言って」

仕方なくもう一度同じ話をするねね

そして今度こそ話を聞いた恋は

恋「…いない方がいいなんて言っちゃダメ！生きていれば必ず自分を必要としてくれる人が現れる！」

と言っがねねは

ねね「ねねを必要としてくれる人なんていないのです！」

強く言い張るねね

恋「…恋も前は自分は必要とされていないって思ってた。でも色々な人と出会って考えが変わった」

恋は一刀や月に会うまでは一人ぼっちで誰からも必要ないと感じていたのだった。

恋「…いくとこないなら恋のどこ来る」

ねね「いいのですか!？」

恋「（こくりっ!）」

そして月の城

詠「恋! 賊討伐にどのくらいかかっていたのよ!」

恋は賊討伐の帰りだったのだ。

恋「…ごめん。この子達を拾ったら遅くなった」

スッ!

ねね「どうもなのです」

張々「わんっ!」

恋がねね達を指差すと

詠「あんたまた拾ってきたのね！ この間は野良猫、その前は野良猿、その前は野良猪と拾いまくりじゃないの！ でも人じゃ捨てるわけにもいかないからお風呂で洗ってきなさい！」

恋「…（こくりっ）わかった」

## 風呂場

恋「…もつと強く洗う！」

ねね「あんっ！そこはダメなのです／＼」

## 風呂場の外

詠「まったく恋の拾い癖にも困ったものよね！」

月「でもなんだかんだ言っても詠ちゃん飼ってあげてるよね」

華雄「賈駆も丸くなったものだな」

## 二人が茶化すと

詠「な…何を言っているのよ！／＼それはあいつがちゃんと世話しているからよ！世話しなかったら飼ってあげてないんだから！」

月「でもこの前、恋さんが賊討伐に行っている間詠ちゃんが世話してあげていたよね」

詠「月」

そしてそれ以来ねねは命の恩人である恋に仕えることになったのだ。

現在

恋「…という訳」

恋がねねとの出会いを話すと

一刀「(何だか前半がどこかで聞いた話に似ているような気が、確かフランダ―…)」

一刀が何かを思い出そうとすると

恋「…あつ！そろそろ帰らないと詠に怒られる。陳宮、帰る」

ねね「わかったのです」

急いで帰ろうとする恋とねね

その時

星「おやつ呂布よ、お主の戟の石突き(柄の端)についてあった犬の人形はどうしたのだ？」

説明不足だが恋の方典画戟の石突きには犬の人形ストラップがついていたのだ。

恋「…前に賊討伐した時に無くした」

鈴々「(ハッ!)」

それを聞いた瞬間、鈴々は

スッ！

一刀の前に来ると

鈴々「お兄ちゃん、さっきの人形貸してほしいのだ」

すると一刀は鈴々が何をするのかがわかったのか

一刀「ほらよっ」

スッ！

犬のストラップを鈴々に渡した。すると鈴々は

鈴々「おいお前！」

ねね「んっ？」

ねねを呼ぶと

スッ！

鈴々「急にいらなくなったからお前にやるのだ！」

ねねに犬のストラップを渡した。

ねね「ホントにいいのですか？」

鈴々「鈴々は大人だから構わないのだ！」

するとねねは

ねね「もらっておくのです！」

スッ！

ストラップを懷にしまった。

一刀「それじゃあまたな恋！」

そして恋と別れようとする

恋「…待って一刀！」

一刀「なに？」

恋が一刀を呼んで一刀が振り返ると

チュッ！

全員「！？」

恋は一刀の唇くちびるにキスをした。

恋「…また会ったためのおまじない。それじゃあまたね一刀」

ダッ！

そして恋は去っていった。

そして一刀は

一刀「唇にキスされた／＼」

ぽ

顔が赤くなっていると

ドドオーツ!!

突然遠くから土煙が発生していた。

ねね「よくも恋殿の唇をーっ！」

土煙の正体は走ってくるねねだった。

バツ！

ねね「ちゅんきゅんーキーツ……」

そしてねねが一刀めがけて陳宮キックを繰り出そうとする

愛紗「愛紗キック！」

ドグボツ!! ミ

一刀「がはっ!？」

バタリッ！

愛紗のねねのマネをして一刀に後ろから飛び蹴りを食らわした。  
（キーククという言葉はねねの真似）

一刀「あ…愛紗、何で！？」

愛紗「知りません！ それよりも早く袁術の所にいきましょう！」

ダッ！

怒りながら先をいく愛紗

海「いい気味よ！」

星「一刀殿はもう少し女心をわかった方がいいですよぞ」

一刀「？」

鈍感な一刀にはわけが分からなかった。

ねね「この蹴りは誰にぶつければいいのですか？」

そして蹴りの構えを出したが繰り出せなかったねねだった。

## 「恋とねねの出会い」（後書き）

次回、美羽と七乃が登場

実をいうと小説を書いてから一年が経ち、作品も通算333話目となりました。2012年も頑張ります。

## 「袁術の城にて」

恋と別れた一刀達は袁術の城に向かっていた。

一刀達が袁術の城に着く少し前のこと

袁術の城

袁術「にやはは〜！もつと歌うのじゃ！騒ぐのじゃ！」

民達が貧しく暮らしているなか、袁術は昼間から踊り子を呼んで贅ぜい沢三昧たくさんまいしていた。

袁術「うにゅ〜っ！妾わらわはお腹が空いたのじゃ！蜂蜜水を持ってきてたもう！」

袁術が言つと

張勳「いけませんよ美羽（袁術の真名）様！さっき蜂蜜水を飲んだばかりじゃないですか！それ以上飲んでこの間のようにぼんぼん（お腹）が痛くなってもしりませんよ！」

美羽「うっ！？それは嫌なのじゃ！？しかし最近楽しいことがなくて退屈なのじゃ！」

張勳「だったら芸者さんでも雇いましょうかね。また村の人から税金を搾り（しぼり）取ってパァーッとやりましょうよ！」

美羽「そうなのじゃパァーッとやるのじゃ！」

二人して悪徳三昧であつた。

その時！

兵「申し上げます！劉備という者が袁術様に会いたいといっておりますが」

美羽「劉備？誰なのじゃ七乃（張勲の真名）？」

七乃「さあどこかの田舎者じゃないですか？」

仕方がなく会うことにした二人

玉座の間

桃香「お初にお目にかかります袁術様、我が名は劉備と申します」

美羽「早く用件を言つてたもう、妾は忙しいのじゃ！」

さつきまで退屈だつたくせに

桃香「実は袁紹様から譲られた宝剣を返してもらいに來ました。これがその令状です」

スッ！

桃香が前に斗詩からもらった令状を渡すと（35話『宝剣争奪勝負後編』参照）

七乃「どれどれ、この令状によると…『お渡しした宝剣は劉備殿のものですから至急返してください』と書いておりますね」

美羽「嫌じゃ！あれは妾が麗羽に『バカには見えない服』と交換で手に入れたものじゃ！」

何がなんでも宝剣を渡したくない美羽

桃香「そこをなんとかお願いします！」

美羽「嫌じゃと言っておるじゃろう！とつと帰るのじゃ！」

このままでは追い出されかねないと思われたその時！

鈴々「愛紗」

愛紗「静かにしろ鈴々！何の用だ！？」

鈴々「今気付いたけどお兄ちゃんの姿が見えないのだ」

愛紗「えっ？」

愛紗は辺りを見渡してみるがこの場にいたのは

愛紗、鈴々、桃香、星、海、朱里、美羽、七乃しかいなく一刀の姿がなかった。

星「そういえばいつの間にか一刀殿の姿が見えませぬ」

朱里「一刀さんって案外脱走の名人ですからね！？」

だから周りに気にされず女湯に行ったりすることができるのである。  
う。

海「この城がデカイから迷子になってるんじゃないの？」

桃香「でも確かに城に入る前までは一緒だったよ」

みんなが一刀を探していると

ガラッ！

兵「袁術様！？」

美羽「何なのじゃ？」

兵「突然厨房（台所）に怪しげな男が入ってきて料理をしています  
！？」

愛紗「もしかしてそれって！？」

ダダッ！

愛紗達は厨房の方に向かう。

するとそこには

一刀「シュッ！シュッ！」

何かを作っている一刀がいた。

しかもその手には

美羽「ああゝ！？妾の大事な蜂蜜を！？」

調理師「すみません！あの男が蜂蜜を使えば良いものが作れるというので少し渡しました」

一刀「よしっ！完成！」

そしてそうこうしている間に一刀の調理が終わった。

鈴々「お兄ちゃん、何を作っているのだ？」

一刀「おわっ！？鈴々じゃないか！？」

いきなり一刀に乗る鈴々

愛紗「まったく！急に姿を消したかと思ったら何をしていたんですか！」

一刀「ごめんごめん！？歩いていたら厨房から蜂蜜の臭いがしたからあれが作れるかなと思ってさ！？」

鈴々「あれって何なのだ？」

スッ！

一刀が指差した先には

ジャンツ！

ホットケーキがあつた。

美羽「何なのじゃこの菓子は？」

一刀「ホットケーキっていうお菓子だよ」

鈴々「掘つとけ木？」

一刀「まあともかく食べてみなよ」

美羽「どれどれ…」

パクッ！

美羽が一口食べてみると

美羽「うっ…うまいのじゃ〜！？仏木なんて物は知らないが美味すぎるのじゃ」

ぱくぱくっ！

次々とホットケーキを食べていく美羽

美羽「美味しかったのじゃ」

そして美羽はホットケーキを完食すると

美羽「このような食事を作ってくれた礼に話を聞いてやるのじゃ」

一刀のホットケーキのおかげで上機嫌の美羽

桃香「本当ですか！？ありがとうございます！」

再び玉座の間

美羽「じゃがのう、タダで宝剣を渡すわけにはいかぬのう」

鈴々「お兄ちゃんの掘つとけ木食べといて凶々しい奴なのだ！」

愛紗「落ちつけ鈴々！」

話は簡単には進まない。

そんなとき

七乃「（ポンッ！）」

七乃が何かをひらめいた。

七乃「お嬢様、確か森の奥深くに古くさいお堂がありましたよね」

美羽「ああ、あのボロか。それがどうしたのじゃ？」

七乃「近々取り壊す予定なんですけど最近お堂に化け物が出てきて困っているという報告があるんですよ」

美羽「何とな！？」

七乃「ですからこの人達に化け物を退治してもらおうというのはどうでしょうか？」

美羽「おお、さすが七乃なのじゃ！というわけだから化け物を退治してくれば宝剣を返すぞよ」

美羽が言うと

桃香「わかりました。おまかせください！」

引き受ける桃香だが

愛紗「えっ！？」

鈴々「勝手に決めないでほしいのだ！？」

桃香を止めようとする二人

星「おやゝ、まさか鬼が裸足で逃げ出す程の強さを持つ関羽とその相方の張飛が逃げ出すなんておかしいなゝ」まさか二人して化け物が恐いのか？」

愛紗・鈴々『ドキッ！？』

凶星であつた。

朱里「二人とも、これも運命だと思って諦めてください」

愛紗「仕方ない」

鈴々「宝剣を取り戻すためなのだ」

一刀「それじゃあ化け物退治に行くとするか！」

そして一刀達が行こうとすると

美羽「待つんじゃない！その男は置いていくのじゃ！」

七乃「その人は人質として預からせてもらいます」

桃香「そんな！？」

海「いいじゃないですか劉備様、あんな男がいたところで足手まといになるに決まっていますよ。化け物くらい私が倒してあげますから安心してください」

桃香「でも……」

一刀が桃香を見ると

一刀「大丈夫！俺はみんなを信じているからさ！」

二カッ！

一刀が笑顔をする

桃香「はひっ！？／／／」

愛紗「うっ！？／／／」

途端に赤くなる二人

星「そんなところで赤くなっていないで早く化け物を倒さねばいかんのだろう！」

愛紗「はっ！？そうであつた急がねば！？」

鈴々「お兄ちゃん、化け物を退治して必ず助けにいくのだ！」

そして愛紗達は一刀を置いて化け物退治に出かけた。

一方一刀はというと

美羽「さてと、待っている間に仏木をたくさん作るのじゃ」

七乃「蜂蜜ならたくさんありますからお願いしますね」

一刀「もしかしてこのために人質にされたのか！？」

ようやく理解した一刀だった。

## 「化け物の真実」

宝剣を返してもらったためお堂の化け物退治を引き受けることになった愛紗達

おまけに一刀が美羽達の人質（？）になってしまった。

お堂

どろどろ

時刻はすでに夜になっていた。

海「確かに化け物が出そうな雰囲気よね!？」

桃香「でも大丈夫だよ。期待していますよ関羽さん、張飛ちゃん!

」

桃香が愛紗と鈴々の方を見ると

愛紗「も…もちろんだとも!？」

鈴々「が…合点承知なのだ!？」

ガタガタッ!

二人の体は震えていた。

星「全くもう!二人してだらしないな。早く化け物を退治して宝

剣を取り返さないと一刀殿がどんな目に遭わされるかもわからんというのに」

ピクンッ！

星の言葉に反応する愛紗

～愛紗の妄想～

七乃「さあお嬢様をお嬢様と言いなさい！」

ビシビシッ！

一刀「あうっ！？」

ムチで一刀を叩きまくる七乃

～妄想終了～

愛紗「急いでいかなばなるまいな！？」

やる気を出す愛紗だった。

朱里「それではいきますよ」

スッ！

そして愛紗達がお堂の中に入ろうとしたその時！

立ち去れ～

愛紗「星！こんなときに冗談はやめろ！」

星「何を言っているのだ？私は何も言っていないが？」

愛紗「お前以外に…」

立ち去れ

愛紗「なんてことを言っはずが…えっ！？」

突然どこからか声が聞こえてきた。

しかもそれだけではない

ギイツ！

いきなりお堂の扉が開いたかと思うと

バァーッ！！

お堂から巨大な顔をした怪物が現れた。

それを見た愛紗達は

星「出たな化け物！」

スッ！

武器を構える星だが

愛紗「うわぁーっ!？」

ぎゅっ!

いきなり愛紗が星に抱きついてきた。

星「こら愛紗、離さないか!って私の胸を揉むでない／＼／」

さすがの星も恥ずかしいようだ。

一方海は

鈴々「怖いのだ〜!？」

海「ちょっと張飛、離れてよ!？」

鈴々がしがみついていてまともに動けなかった。

朱里「はわわ!？」

桃香「・・・」

こちらはこちらで驚く朱里と立っただまま気絶する桃香

鈴々「鈴々はもう帰るのだー!!」

愛紗「まで鈴々!!」

カランッ!

星「こら二人とも！武人が武器を捨てて逃げるでない！朱里もしっかり歩け！」

朱里「はわわ！？」

ズザザーッ！

海「劉備様、しっかり！？」

桃香「・・・」

愛紗と鈴々が武器を投げ出して逃げ、その後ろを星が愛紗と鈴々の武器を拾い、朱里を引っ張りながら走り、さらにその後ろを海が気絶した桃香を背負って追いかけていた。

袁術の城

愛紗達が城に逃げ帰った時にはすでに朝になっていた。

星「全くもう！命の次に大事な武器を捨てて逃げるなんてそれでも武人か！」

愛紗「面目ない」

鈴々「ないのだ」

珍しく星が愛紗達を叱る。

海「それにしてもあんな化け物だったとわね！？」

桃香「私なんて危うくチビリかけちゃったよ!？」

みんなが話をしていると

朱里「でもあの化け物は偽物ですね」

鈴々「どうしてわかるのだ？」

朱里「暗くてよく分かりにくいですがあの化け物の中に人影があったんですよ。つまりあれは人が作った偽物ですね」

愛紗「なるほど、暗いから作り物が化け物に見えたわけか」

海「だからってどうする気よ？」

朱里「化け物については一時置いておくとして宝剣を取り返すいい案がありますよ」

桃香「ホント!?どうするの!？」

朱里「実は…」

玉座の間

美羽「(ぱくぱく) 化け物退治はどうしたのじゃ？」

一刀が作ったホットケーキを食べながら話を聞く美羽

朱里「それなんですが化け物を退治するには宝剣が必要でして…」

美羽「ダメじゃ！宝剣は渡さぬぞよ」

朱里「ですから袁術様に宝剣よりすごい渡し物があるので交換しようと思ひまして」

美羽「妾に渡し物があるとな？」

朱里「はい。それはこの湯飲みなんです」

スッ！

朱里は懷から少し長めの湯飲みを取り出した。

朱里「この湯飲みはただの湯飲みではありません。お湯を入れるだけで蜂蜜の匂いがする湯飲みでございます」

美羽「なんじゃと！？」

コポポーツ

朱里が実験としてお湯を入れると

ふうん

確かに蜂蜜の匂いがしてきた。

美羽「これはすごいじゃ！？宝剣と交換してたもう！」

もちろんそんな湯飲みがあるはずがない。

実はこの湯飲みは二重底になっており、全体の2/5に蓋がしてありそこには蜂蜜がたっぷりつまっているというわけなのだ。

だが美羽にその事が理解できるわけがなく宝剣を渡してしまった。  
(七乃は知っていて黙っていた)

美羽「いいものが手に入ったらお腹が空いたのじゃ。七乃、ホットケーキのおかわりを用意するのじゃ！」

七乃「わかりました。一刀さん、おかわりお願いします！」

七乃が言うと

一刀「ほいほいつ！」

ホットケーキを手にした一刀が現れた。

それを見た愛紗達は

愛紗「一刀殿!？」

星「どうやら無事のようなな」

海「あいつを連れ戻すのやめにしません」

朱里「はわわ!？それはダメですよ!？」

鈴々「うーっ!鈴々も彫つとけ木ホットケーキ食べたいのだ！」

桃香「あはは…」

そしてその日の夜

一刀を連れ戻すためにも化け物退治をしなくてはいけないので再びお堂に来た愛紗達

お堂

朱里「それじゃあ行きますよ！作戦通りお願いしますね！」

鈴々「合点承知なのだ！」

愛紗「ではいくぞ！」

ザッ！

愛紗達がお堂に近付くと

立ち去れ

バァーッ！！

謎の声が聞こえてきて、化け物が現れた。

それを見た愛紗達は

愛紗「うわぁーっ！？」

鈴々「怖いのだー！！」

バタバタンッ！

気絶して倒れる二人

だが倒れたのは愛紗達だけではなく

朱里「はわわゝ！？」  
「

桃香「きゃーっ！？」  
「

バタバタンッ！

何と！？全員気絶して倒れてしまった。

全員が倒れて少しした後

『ケケケッ！』

化け物から声が聞こえてきて

バサッ！

化け物から二人の子供達が出てきた。

子供A「大人のくせに気絶するなんてバカなやつらだぜ！」

子供B「さっさと金品奪ってやろっぜ！」  
「

スッ！

そして子供達が金目になりそんな武器を触ろうとしたその時！

キラッ！

ガシッ！

子供A B『うわっ！？』

子供達はいきなり起き上がった愛紗達に取り押さえられた。

星「しかし化け物の正体がこのような子供だったとわな」

子供A「重いんだよ！さっさとどきやがれ！」

カチンッ

星「一つ言っておく、女に対して重いは禁句だぞ！」

ぐぐっ！！

子供A「いててっ！？」

重いと言われた星は子供を強く押さえつける。

愛紗「さあ観念しろ！どうしてこのような悪戯をした！」

愛紗が子供達を問いつめると

？「それは私が説明します！」

バツ！

お堂から女性が現れた。

しかもお堂にはたくさんの子供達がいた。

お堂の中

愛紗達は話を聞くためお堂に入れてもらうことにした。

女性「私達は袁術のひどい取り立てにあつて家を失った者達です。  
この子供達の親は遠くで出稼ぎに行つてるんです」

子供A「袁術はひどい奴だ！いつもいつも俺達から高い税金を取つて自分は贅沢三昧しやがつて！」

女性「そしてこのお堂を壊されるということを聞いてしまったのです。このお堂を壊されてしまったら私達は住む場所がありません！だから化け物が出るということにして人を近寄せなかつたのです」

話を聞いた愛紗達は

星「なるほどみんな苦労しておるのだな」

鈴々「袁術が悪いのだ！」

海「この子達を追いついてまであの男（一刀）を取り返す必要なんてありませんよ！あいつはこの町に置いておきましょう！」

朱里「それは困りますよ!？」

桃香「あゝん!どうしたらいいんだろう!」

みんなが悩んでいると

ガサツ!

茂みから何かが移動した。

愛紗「(?!?。今のはもしや!?)」

愛紗が思っていると

朱里「こういうのはどうでしょうか?私達が化け物に変装して袁術さんに民を大事にするよう脅かす(おどかす)んです!」

海「孔明、あんた今日は冴えてるじゃない!？」

桃香「その手でいこう!」

しばらくして

袁術の部屋の前

鈴々「準備万端なのだ!」

ジャンッ!

化け物の姿でスタンバイする愛紗達

愛紗「こんな姿で大丈夫なのか？」

星「大丈夫だとも！愛紗なら素顔で子供が泣くくらいだからな」

愛紗「星！」

朱里「はわわ！？静かにしてください！？」

桃香「それじゃあ皆さんいきますよ！」

そして化け物に変装した愛紗達が美羽の部屋にいかうとしたその時！

美羽「ひえゝっ！？」

美羽の部屋から美羽の叫び声が聞こえてきた。

愛紗「何事だ！？」

海「何が起きたのよ！？」

スッスッ！

愛紗達が部屋を覗いてみるとそこには

ゴゴゴッ……！！

美羽「はわわ！？」

目の前に迫る鬼に怯えまくる美羽がいた。

鬼『袁術！貴様の民を思わぬ心に怒りを感じて地獄からやって来たのだ！俺の怒りを静めたければ税金を取るのをやめて貧しい人々を大事にしろ！』

美羽「わかりましたのですじゃ！？これからは貧しい人々を大事にするから許してたもう！？」

鬼を前にしてびびりまくる美羽

鬼『それと人質になっっている男を解放しろ！でなければ貴様を食ってやる！』

美羽「ひえゝっ！？解放するから食わないでほしいのじゃゝ！？」

鬼『それならよろしい』

スッ！

そして鬼は消えていった。

この状況を見た愛紗達は

桃香「おゝ鬼が！？」

海「鬼なんて迷信ですよ！？」

朱里「はわわゝ！？」

鈴々「怖かったのだ！？」

星「愛紗もびびったであろう！？」

星は愛紗の方を見るが

愛紗「・・・」

愛紗は気絶しているわけでもなく平然としていた。

そして次の日の朝

一刀「やっと解放されたぜ！」

一刀が美羽の城から出てくると

鈴々「お兄ちゃん！」

ガバッ！

いきなり鈴々が飛び付いてきた。

桃香「一刀さん無事でよかったです」

海「こいつなんて別にどうなってもいいじゃん」

朱里「はわわ！？」

星「これでまた揃ったわけだな」

「一刀」そういうことだ！宝剣も返ってきたし桃花村に帰ろう！」

みんなは翠達の待つ桃花村に帰ることにした。

だが愛紗は一刀を見つめてこう思っていた。

愛紗「（昨夜に気配を感じたのと鬼の正体はやはり一刀殿だったか）

」

実は昨夜、茂みから移動したのは気になって様子を見に来た一刀であり、その後隣の部屋に潜み、気を鬼の形に変えて美羽に説教したのだった。

このことは愛紗しか知らないことになるのだった。

「化け物の真実」(後書き)

次回、北郷三羽烏の三人が登場

「とある村にて」(前書き)

今回は北郷三羽鳥と高順が登場します

「とある村にて」

袁術の手から宝剣を返してもらった一刀達は翠、紫苑、伽留、璃々の待つ桃花村に行くのであった。

桃香「ふんふんふん♪」

愛紗「劉備殿はすごいご機嫌ですね」

星「それはそうであろう。ようやく宝剣を手に入れたのだからな」

鈴々「これで劉備お姉ちゃんはお母さんに叱られないですむのだ」

海「そんでもって村に着いたらあんた達とお別れなわけね」

桃香「何で？」

桃香が海に聞くと

海「だって宝剣を取り返したわけですからこいつらと一緒にいる意味がないじゃないですか。村に着いたらお別れですよ」

確かに海が言うことに間違いはない

元々この旅は桃香の宝剣探しのようなもの、宝剣を取り返した以上桃香が一刀達と一緒にいる必要がないのだ。

朱里「はわわ！？それは寂しくなりますね」

海「そう？私はこの男（一刀）と離れられるから嬉しいけどね」

一刀「おいおい！？」

そして一刀達が歩いていると

ポツポツ… ドザーッ！！

いきなりものすごい雨が降ってきた。

愛紗「これはものすごい雨だな！？」

鈴々「早くどこかで雨宿りするのだ！」

雨宿りできる場所を探す一刀達

そして走っていった先に見えたのは

一刀「あそこに村がある！あそこで雨宿りをさせてもらおう！」

ダッ！

一刀達は見つけた村を目指すが

門番「この村には指一本入れさせないぞ！」

二人の門番に止められてしまった。

朱里「私達は旅のものなんです。村に入れてください！」

門番「ダメだ！そう言って俺達を殺す気なんだろうこの山賊め！」

門番が言うと

星「やれやれ、黒髪 of 山賊狩りが山賊に間違われてしまつとはな」

愛紗「星！何を言っんだ！」

この会話を聞いた門番は

門番「お前が黒髪 of 山賊狩りだと？嘘つけ！黒髪 of 山賊狩りはものすごい美人だと聞いたぞ！お前のどこが美人だと言っんだ！」

プチンッ！

愛紗「人が下手に出ていればこいつらーっ！！」

一刀「落ち着け愛紗！？」

暴れまくる愛紗を取り押さえる一刀

星「おやおや、せめて愛紗が噂通りの美人だったらよかったのだが

」

愛紗「星！貴様ー！！」

一刀「落ち着け愛紗！？星も 火に油を注ぐんじゃない！？」

勢いの激しいものに更に勢いをつけること

門番「怪しい奴らめ！楽進さん達を呼んでこい！」

門番「おおっ！」

ダッ！

一人の門番が村の中に入ってまもなく

？「山賊はどこだ？」

バッ！

村の中から銀髪の全身傷痕だらけの女と紫色の髪をした水着のような服を着た女とオレンジ色の髪で海老のような形に結んだそばかす眼鏡っ子の女が現れた。

？「こないだ追い払ったちゅうのに懲りもせずに来たもんやな！」

「

鈴々「何をいつているのだ？鈴々達は今日初めてここに来たのだ」

？「問答無用だ！」

バッ！

銀髪の女が鈴々に拳を向けて攻撃してくる！

一刀「鈴々！？劉雷（海の名前）、愛紗を頼む！」

海「えっ！？」

パッ！

一刀は押さえていた愛紗を海に託す（たくす）と

シュッ！ パシッ！

鈴々の前に出てきて銀髪の女の拳を受け止めた。

？「このっ！」

ブォンッ！！

銀髪の女は蹴りを繰り出す！

一刀「ハッ！」

バシッ！

一刀は蹴りを受け止める。

一刀「女の子相手に戦いたくないけど仕方がない…！」

ガシッ！

一刀「せいやっ！」

ブォンッ！！

？「なっ！？」

ズシャッ！！

一刀は女の突進してくる力を利用して投げ飛ばした。（これはいわゆるレースで走る車が踏み台に乗るとジャンプするという原理である）

投げ出された女は泥だらけになってしまった。

？「風！？  
」

？「風ちゃん！？  
」

タタッ！！

銀髪の女が倒れた方に近寄る二人

一刀「さすがに少しやり過ぎたかな！？  
」

一刀が驚いていると

シュッ！

一刀「おわっ！？  
」

パシッ！

いきなり刀が飛んできて見事に受け止める一刀

愛紗「何者だ！？  
」

愛紗が叫ぶと

高順「村を脅かす（おびやかす）賊どもめ！この高順様が成敗してくれる！」

バツ！

村から一人の男が現れた。

ドクンッ！

海「（何なの！？あいつ（高順）とは初めて会ったのにそんな気がしない！？）」

海は何だか複雑な気持ちを抱いていた。

高順「こいつらを捕らえてやるのだ！」

高順が言うつと

凧「高順殿、お待ちください！」

一刀に投げ飛ばされた凧という女が声を出してきた。

凧「私はこの人（一刀）と拳を混じりあって悪人でないことがわかりました。村の中に入れてやってください！」

凧が言うつと

高順「真面目な樂進殿が言つならば仕方あるまい、どうぞ村の中へ

」

一刀達は村に招かれた。

村の中

凧「先程は失礼しました。我が名は樂進と申します！」

李典「ウチは李典や！」

于禁「沙和は于禁なの、よろしくなの、」

高順「高順と申す！」

凧達が挨拶をすると

一刀「北郷一刀です。こちらこそ失礼しました」

愛紗「関羽と申す」

鈴々「鈴々は張飛なのだ」

一刀達も挨拶をすると

海「あたしは劉雷よ」

海が挨拶した途端

高順「劉雷？失礼ですがどこかで出会ったことがありましたかな？

「

海「知らないわよ」

桃香「海ちゃんは記憶喪失なんです」

高順「ほう」

李典「ところでさっきは堪忍な、この村を攻めてくる賊かと思ったんや」

朱里「さっきも言っていましたけどそんなに賊が来るんですか!？」

沙和「それはすごい数だったなの!？沙和達は早く行きたい所があるのにこれじゃあ行けないなの」

星「そなた達はどこに行くのかな？」

星が聞くと

凧「私達は曹操様に仕えにいくのです!曹操様は才能のある人間を好むと聞きました!」

沙和「こう見えても沙和達武力には少しばかり自信があるなの!」

李典「せやけど賊に襲われるこの村をおいて行くわけにはいかへんからな、だから先に賊の殲滅<sup>せんめつ</sup>をしようとしてんねん」

愛紗「なるほどな、ここで会ったのも何かの縁かもしれないな。我

々も賊退治に協力しよう！」

一刀達も賊退治に参戦することになった。

桃香「ところであの高順さんは知り合いですか？」

李典「いや、高順はんはウチらが来る前からこの村を守っていたんや！なんでももう人が苦しむのを見たくないってな」

桃香「ふうん」

それからしばらくして

賊が来るまでの間、雑談という名の作戦会議が始まった。

沙和「へ〜！？劉備ちゃんも数え役満姉妹の舞台見たなの〜！？」

桃香「はいっ！あのかわいい衣装って素敵ですよ〜」

沙和「わかるわかる！沙和も好きなの〜」

女の子らしい会話をする桃香と沙和

朱里「はわわ！？これはすごいですね！？」

李典「せやろせやろ！ウチが開発したんやで！細い針金を螺旋状にすると弾性によって強力になるんやで！」

李典が言っているのはバネである。

高順「あなたは俺の真名を知らないか？」

海「知るわけないでしょ！あんたとは初めて会ったんだからさ！」

高順「どうも俺にはあなたが他人でないような気がするんだ。実は俺は昔、女を殺してしまつてね、その女が君に似ているもんだからさ」

海「世の中には似てる人なんて3人はいるって言つじゃない！他人の空似よ！」

高順「そうかな？」

みんながそれぞれ会話をしていると

鈴々「そういえばお兄ちゃんはどこなのだ？」

一刀の姿が見えないことに気付いた鈴々が聞くと

愛紗「一刀殿ならば楽進殿を汚した罪として湯炊きに行ったぞ」

星「おや愛紗よ、やけに冷静ではないか。いつもならば一刀殿にやらせずにお主がやるというのに、一刀殿のことだから絶対覗くぞ」

愛紗「それなら大丈夫だ。楽進殿にはもし覗いたら遠慮なく半殺しにしても構わないと言っておいたし、一刀殿も何度も覗いてはボコられているのだから覗いたりしないだろう」

その頃、浴場では

凧「ふう」

湯船に浸かる凧の近くで

一刀「フーツ！フーツ！」

一刀がお湯を沸かしていた。

一刀「ごめんね楽進さん、泥だらけにしちゃってさ」

凧「そんなに謝らないでくださいよ。私の方こそいきなり殴りかかったのだからお相手です。それにしても一刀殿はなかなかの武力をお持ちですね」

一刀「まあね、まあ俺は肉弾戦より剣術の方が得意だけどさ。でも前に使っていた剣は折れちゃったしね」

一刀の話を聞いた凧は

ザバツ！

湯船から立ち上がると

凧「それならば真桜…李典がいい剣を作ったと聞きましたので差し上げますよ」

一刀「ホント！？ありがとう」

凧「共に賊退治をしてくれるささやかなお礼です」

胸を張る凧

一刀「いや、それにしても剣まで貰える上にいいものまで見せてもらってホントに感謝だよ」

凧「いいもの？」

凧が一刀の声がする方を見てみると

バンッ！

一刀が窓から覗いていた。

おまけに今の凧は湯船から立ち上がった状態！すなわち…

凧「きゃーっ！！／＼／＼」

ドッカーンッ！！

一刀「ぐほっ！？」

一刀は凧の気弾でぶっ飛ばされた。

そしてこの後、風呂から出た凧に半殺しにされたあげく、凧から話を聞いた愛紗によってマジで死にかける一刀であった。

「手に入れたものと失ったもの」(前書き)

一挙二話投稿です

「手に入れたものと失ったもの」

とある村にて凧達と共に賊退治することになった一刀達

そして一刀がボコられてから数時間後

一刀「ほゝ、なかなか良さそうな剣があるじゃないか」

真桜「兄さん、ええ目してまんない！ウチらじゃ扱いきれへんから好きな剣持っていつてええで！」

一刀「ありがとよ」

一刀は凧の紹介で真桜が作った剣を貰うことになっていた。（凧の裸を見てしまったことによりおじやんになりかけたが約束してしまったのであげることになった）

スッ！

そして一刀は剣を持つと

一刀「フンッ！」

ゴゴゴッ……！！

剣に一刀の気を流し込むが

バキンッ！

一刀の氣の力が大きすぎてすぐに壊れてしまった。

一刀「これじゃあダメだな。次の剣だ！」

スッ！

剣が壊れたらまた次の剣を持つ行為を繰り返していく一刀

真桜「ほなウチは軍義があるからまたな」

真桜は一刀に付き合いきれず朱里達が軍義をしている天幕に行ってしまった。

### 軍義の天幕

朱里「いいですか皆さん、皆さんの話によると賊がこの村を攻めてくるには今は干上がっている川を通らなくてはなりません。ですから賊が川を渡っている途中で川上にある湖の堰堤（えんてい・堤防）をぶち壊して水を流して賊を流します。そしてそれには水が流れた時に賊が川の中にいなくてはいけませんので第一部隊が賊を川の方に誘導している間に第二部隊の人達が堰堤を壊して水を流します」

高順「さすがは軍師殿だな。良き策だ」

朱里「これは時間との戦いでもあります。どちらかが早くても作戦はうまくいきません！」

風「しかし一つだけ問題がありますよ。堰堤を壊して水を流した先には大岩があつて水を塞き止めてしまう確立がある」

沙和「凧ちゃんは考えすぎなの、最近はず日も続いているから大岩だって雨で流されちゃう確立だってあるなの」

凧「確かにそうかもしれないが…」

真桜「もう凧ったら兄さんに裸見られたからって熱くなりすぎやで」

凧「ば…バカッ！／＼／」

愛紗「（ムカツ！）」

鈴々「愛紗も怒っちゃダメなのだ。愛紗だってお兄ちゃんに裸を見られたのだ（3話『三人が揃う時』参照）」

愛紗「こら鈴々！」

そんなこんなで雨の降るその日の夜

賊を襲撃する第一部隊（愛紗、鈴々、星、沙和、凧、高順、海）と堰堤を破壊する第二部隊（桃香、一刀、朱里、真桜）に分かれて作戦を開始することになった。

その頃、賊のアジトでは

アニキ「ガハハッ！そろそろ食い物も尽きそうだから村を襲いにいくぞ！」

チビ「でもアニキ、あの村にはめっばう強い奴らがいるじゃないで

すか！？  
「

アニキ「バカ野郎！前は油断したから負けただけだ。今度は1万は兵力がいるんだぜ！力で敵わなきゃ数で勝つまでよ！」

チビ「そうか！さすがアニキだぜ！」

そう言いながらも賊達が油断していると

ドカツ！！

愛紗「賊共、成敗いたす！」

鈴々「お前達なんて鈴々が倒してやるのだ！」

星「鈴々よ、今回の目的は敵の殲滅ではないぞ」

海「すっかり忘れてるじゃないの！？」

高順「参る！」

凧「いくぞ沙和！」

沙和「わかったなの！」

賊を襲撃する愛紗達

そしてその頃、堰堤では

一刀「さてととりあえず李典からもらった剣の中で一番耐えられた

剣をもらったが実戦は初めてだな」

一刀が堰堤でスタンバイしていると

ピカッ！

一刀「あれは朱里からの灯籠の合図！ よしいくぜ！」

スッ！

一刀は構えると

一刀「『ガリユースーシンダン 俄龍四神弾』！」

ドゴオッ！！

前に賊を追い払った時以上のものすごい一撃を堰堤に食らわした。

すると堰堤は

ビキビキッ！！

ブシューッ！！

ヒビが入って壊れ、ものすごい水が噴き出した。

一刀「すごいなこの剣！？ 今の一撃でもヒビ一つ入ってない！？ 今日から俺の剣はこいつだな！」

スッ！

そして一刀は新たな剣『聖魔閻龍神刀』を鞘さやに収めるのだった。

一刀「後は愛紗達が頑張るだけだな！」

そして堰堤が破壊されたのを矢倉から確認した朱里は

朱里「はわわ！？さすがは一刀さんです！？おつといけない！早く皆さんに指示をしないと！」

ドンドンドンッ！

朱里は用意した銅鑼を鳴らしまくり賊の襲撃に行った愛紗達に知らせた。

その頃、愛紗達は

愛紗「銅鑼の合図だ！みんな、川の向こう側に急ぐぞ！」

凧「了解です！」

海「急ぐわよ！」

鈴々「まだ全滅してないのだ！」

星「目的を忘れるでないぞ鈴々！」

銅鑼の合図を聞いて川の向こう側に急ぐ愛紗達

沙和「このふにゃちゃん共！悔しかったらこっちに来るなのこのピ

「 野郎が！ 」

もちろん賊が追って来るための罵倒も忘れない

後は川の水が満杯になって川を通ってきた賊を押し流すだけなのだが

朱里「おかしいですね！？そろそろ川の水が来てもいいはずなのに全然きません」

桃香「孔明ちゃん、李典さんに何かあったのかもしれないから私が見に行ってくるよ！」

ダッ！

桃香は矢倉から降りて真桜のいる場所に向けて走る！

そして桃香が真桜のいる場所にたどり着くと

桃香「どうしたんですか李典さん！？」

真桜「・・・」

桃香の呼び掛けに答えず黙り混む真桜。その理由は…

パンツ！

桃香「大岩が川の水を塞いでいる！？」

真桜「その通りや、賊が来る前に壊しとけばよかった！」

今壊してしまうと水の流れに巻き込まれてしまうため危険なのだ。  
これを回避するには遠距離系の強力な技で大岩を砕くしかないが桃  
香と真桜はそんな技をもっていないし、一刀が来るのを待っていた  
ら賊は川を渡ってしまっ！

桃香がどうしようかと悩んでいると

ピンっ！

桃香「（そうかあの手ならばいけるかも！）」

ある秘策を思い付いたのだが

桃香「（でもそれを使うと折角手に入れた宝剣を失ってしまう！？）」

「

悩む桃香だが

前に一刀が村を救うべく大事なものを犠牲にしてまで村を救った話  
を思い出すと

桃香「私だってやるんだから！」

スッ！

桃香は宝剣を抜いて

桃香「李典さん、危ないから離れていてください！」

真桜「何する気や！？」

桃香「いいから早く！」

真桜「？」

真桜は訳がわからないがとにかく桃香から離れることにする。

桃香「んしょっんしょ！」

そして桃香は大岩を登って上に立つと

桃香「えいつ！」

ザクッ！

桃香は宝剣を岩に突き刺した。

サッ！

そして桃香が大岩から離れた瞬間…

ドッカーンッ！！

雷が桃香の突き刺した宝剣に直撃し

ビキビキッ！ バカンッ！

大岩を粉碎した。そして

ドザーッ！！

大岩が砕けたことにより川の水が流れ込んだ！

真桜「劉備はん！早くウチの手に捕まりな！」

桃香「はいっ！」

スッ！

桃香は真桜に手を伸ばすが

ドザッ！！

桃香「きゃあっ！？」

真桜「劉備はん！？」

間に合わず桃香は鉄砲水に飲み込まれてしまった。

ドザッ！！

桃香「あぶっ！？」

桃香は鉄砲水に流されてしまう！

そんなとき

ビヨンッ！ バッ！

一刀「何とか間に合ったな劉備！」

桃香「一刀さん!?」

駆けつけた一刀が飛び込んで桃香を助け出した。

そしてその頃

ドザァッ!!

賊達『うわーっ!?』

朱里の策が成功して流されていく賊達

愛紗「何とか成功したな!?」

鈴々「賊が流されていくのだ!」

これで安心かと思われたが

アニキ「この野郎!」

ガシッ!

凧「うわっ!?」

ザバンッ!

沙和「凧ちゃん!?」

油断した凧の足を賊が掴んで引きずり込もうとする!

アニキ「死ぬ時は一緒だぜ！」

凧「くっ！？」

凧が流されそうになったその時

海「せいやーっ！！」

ドグボツ！！

アニキ「がはっ！？」

海がアニキの顔面に蹴りを入れて

海「趙雲受け取って！」

ブンッ！ パシッ！

星「おおっ！？」

海が投げた凧を見事に受け止める星

高順「さあ、劉雷殿も上がってください！」

スッ！

海「ええっ」

パシッ！

高順が伸ばした手に掴まる海

高順「（この手の感触は！？）」

高順が少し考え事をしていると

ドザーッ！！ ドカツ！！

海「がはっ！？」

パツ！

流水が海に当たって海は手を離してしまった。

高順「しまった！？劉雷殿！？」

高順は再び手を伸ばすが間に合わず、海は流されてしまった。

高順「くそっ！また私は人を殺してしまった！？」

そして川の水が全て流れ出した後

川上から桃香達が駆けつけたが

桃香「そんな！？海ちゃんが！？」

一刀「劉雷！？」

海が流されたことにショックを受ける一刀達

それからしばらくして

風達は曹操のところに向かい、高順は海を探しに川下の方に向かっていった。（風も責任を感じて高順についていこうとしたが高順に拒否られた）

そして一刀達というと

ざくざくっ！

桃香は大岩があつた場所を掘り進んでいき

ガコッ！

土砂で埋められた宝剣を見つけたのだが

ボロッ

宝剣は雷でボロボロになっていた。

桃香「私ってバカだよ、宝剣を自分から壊しちゃうし、海ちゃんを助けられなかったし」

自分のしたことが間違いだったのではないかと落ち込む桃香

愛紗「劉備殿…」

鈴々「お姉ちゃん…」

そんな桃香に二人は声をかけることができなかった。

だが愛紗が桃香に近寄ると

愛紗「そんなに落ち込んではいけませんよ！宝剣については劉備殿の母上には説明しますし、劉雷殿だって死んだわけでは…」

桃香を慰めようとする愛紗だが

桃香「ほつといてください！関羽さんに私の気持ちなんてわかるはずないじゃないですか！安い慰めなんてやめて…」

ムキになる桃香に

バチンッ！

愛紗が桃香に平手打ちを食らわした。

愛紗「ほつておけるわけじゃないでしょう！確かにあなたの気持ちには私にはわかりません！だからといってわかりたくありませんよ！そんないつまでもウジウジしている人の気持ちなんてね！」

桃香に冷たい言葉を言う愛紗

だがこれが愛紗なりの友情である。

鈴々「（愛紗の今の言葉って前にお兄ちゃんを叱った時と同じ感じがするのだ！？）」「（30話『真名交換』参照）」

そして愛紗の思いは桃香にも伝わり

桃香「そうですよね。私がウジウジしてたら海ちゃんに笑われちゃいますよね！」

桃香は明るい顔になった。

桃香「関羽さん、お願いがあります！私を関羽さんの妹にしてください！関羽さんのように強くなりたいんです！」

桃香が言うと

鈴々「ダメなのだ！愛紗の妹は鈴々だけなのだ！だけどお姉ちゃんならいいのだ！」

愛紗「何を勝手に決めてるんだ鈴々！」

桃香「私が関羽さんのお姉ちゃんか、いいですね」

愛紗「劉備殿も納得しないでください！」

愛紗達が話し合っている頃、近くの岩の後ろでは

一刀「（桃園じゃないけどこれって桃園の誓いなのかな？）それにしても劉備が落ち込んでいたら一喝してやろうと思っていたがさすがは愛紗だぜ」

かくして愛紗達は義姉妹になったという

「手に入れたものと失ったもの」(後書き)

次回、あわわ軍師登場

## 「先生との再会」

とある飯屋

桃香「はい関羽さんあ〜ん」

愛紗「やゝ止めてください劉備殿／＼」

桃花村に帰る途中で飯屋に寄った一刀達一行

そして桃香は愛紗と鈴々の姉になって以来しつこく愛紗に迫るのだ  
った。

桃香「あ〜んしないとダメですよ！」

愛紗「子供じゃないんだからそんなことできません！」

桃香のあ〜んを断り続ける愛紗

するとその様子を見ていた鈴々が

鈴々「愛紗はずるいのだ！」

愛紗「ほら鈴々だって言っているでしょう。劉備殿は鈴々に…」

鈴々「違つのだ！愛紗がお姉ちゃんにあ〜んされてずるいから愛紗  
は鈴々にあ〜んするのだ！」

愛紗「何故そうなる！？」

星「やけに賑やか（にぎやか）になりましたな」

一刀「確かにそうだな、朱里もそう思うだろう？」

スッ！

一刀が朱里の方を見ると

朱里「・・・」

朱里は愛紗達の方を見ながらぼけっとしていた。

一刀「どうしたんだ朱里？」

一刀が朱里に声をかけると

朱里「はわわ！？何でしゅか！？」

驚きまくる朱里

一刀「驚かせてごめんね、さっきからぼけっとしていたからさ」

朱里「その事でしたか！？ただちよつと愛紗さん達がうらやましい  
と思ひまして」

朱里には姉と妹がいたが両親が早く亡くなったため、別れ別れにな  
っていたところを水鏡先生に引き取られたのだった。

一刀「朱里には姉と妹はいないけど、俺でよければ兄代わりになる

からさ  
」

ぽんっ！

朱里の頭に手をのせる一刀

朱里「一刀さん／＼／」

顔を赤くする朱里

だが

鈴々「ダメなのだ！お兄ちゃんは鈴々のお兄ちゃんが一番上なのだ！」

鈴々から見た家族図は

一刀、桃香、愛紗、鈴々の順である。

そしてあっという間に次の日

もわ

一刀「霧が濃くなっているな」

鈴々「道に迷いそうなのだ」

鈴々が言つと

愛紗「星、今度ははぐれるんじゃないぞ！」

星は以前霧の中で愛紗達からはぐれたことがあったのだ。（13話  
『諸葛亮孔明参上』参照）

星「心配無用！私はそう間抜けではない！」

しばらくして

愛紗「と言いながらはぐれおって！」

星が再び霧の中で姿を消した。

桃香「どうします！？探しに行きましょうよ！？」

桃香は星を心配するが

一刀「大丈夫でしょ」

鈴々「心配ないのだ」

朱里「先を急ぎましょう」

一見見捨てているような言葉だが一刀達の気持ちはひとつだった。

桃香以外『（どうせまた変態仮面（華蝶仮面）になって出てくるだろっ）』

桃香「？」

桃香は一刀達の言葉に？を浮かびながらもとりあえず星を置いてい

くことにした。

そして霧の中を抜けてしばらく歩いていると

朱里「あつ！あれは！？」

朱里があるものを見つけた。それは…

バンッ！

朱里がいた水鏡先生の家だった。

朱里「水鏡先生元気かな」

朱里が水鏡先生の家をじっと見つめているので一刀は

一刀「愛紗、もうすぐ日が暮れるから今日はあそこに泊めてもらわない？」

と愛紗に言つと

愛紗「ですが桃花村まであと少しなわけですし…」

一刀「あれ、愛紗は前に水鏡先生に怪我の治療をしてもらったよね（同じく13話参照）今こそ恩を返す時なんじゃないの？」

と一刀に言われた愛紗は

愛紗「わかりました！今日は泊めてもらいましょう！」

水鏡先生の家に泊めてもらうことにした。

そしてその後ろでは

朱里「（ありがとうございます一刀さん）」

一刀「（いってことよ！朱里も先生に会いたかったんだろう）」

とひそひそ話す二人であった。

水鏡先生の家の前

朱里「久しぶりの水鏡先生の家ですね」

鈴々「そうなのだ。あれからもう35話は経っているのだ」

一刀「鈴々、わけわからないことを言っではいけません」

愛紗「ともかく入らせてもらおう。御免！誰かいらないのか？」

愛紗が家の前で叫ぶと

ひょこっ

魔女の帽子を被った背丈が朱里くらいの女の子がこちらを覗いてきた。

愛紗「お前はここの者か？すまないがここの主人である水鏡殿を呼んで……」

愛紗が最後まで言おうとすると

？「あわわゝ！？」

びゅんっ！

女の子はその場から立ち去って家の中に入っていった。

鈴々「愛紗の顔が恐いから逃げてしまったのだ」

愛紗「んなわけあるか！」

朱里「あの子は誰でしょうか？」

その頃、水鏡先生の家では

さらさらっ

水鏡「朱里は元気かしら？」

水鏡先生が書き物をしていると

バタンツ！

？「た…大変でしゅ先生！？」

水鏡「そんなに慌ててどうしたの雛里？」

雛里「い…家の前に武器を持った恐ろしい集団が！？」

水鏡「何ですって!？」

スッ!

水鏡先生は箒ほうきを手にと

水鏡「多分この辺りの賊がやって来たのですね、雛里は隠れていなさい!」

雛里「は…はひっ!？」

サッ!

さつと机に隠れる雛里

そしてそうこうしている間に

ギィ…

何者かが扉を開けようとしている。

水鏡「(しまった!?!鍵をかけておくのを忘れていた!?)」

ギィッ!

そして扉が完全に開くと同時に

水鏡「くせ者覚悟!」

ブオンッ!!

バシンッ！！

？「いたっ！？」

入ってきた者めがけて箒を降り下ろす水鏡先生

箒は見事命中したのだが倒した相手をよく見てみると

一刀「むきゅー！？」

水鏡「あっ！？あなたは確か北郷さん！？」

倒した相手が一刀だったことに驚く水鏡先生

さらにその後から

愛紗「何事ですか！？」

鈴々「お兄ちゃんが倒されたのだ！？」

桃香「大丈夫ですか！？」

ぞろぞろ入ってくる愛紗達

そして最後に

朱里「はわわー！？」

朱里が入ってくると

水鏡「朱里！？」

朱里「水鏡先生！？」

互いに目を合わせて驚く二人

水鏡「元気そうで何よりですね」

朱里「先生こそお元気で」

再会を喜び合う二人だが

一刀「あのお二人さん、俺のことは無視ですか？」

水鏡「あっ！？すいませんでした！？」

さつきまで完全に一刀のことを忘れていた水鏡先生

しばらくして

朱里「水鏡先生、その子は誰ですか？」

朱里が雛里について聞くと

水鏡「朱里と同じように私が引き取ってきたで名前は鳳統<sup>ほうとう</sup>よ。雛里、挨拶は？」

雛里「ほ…鳳統でしゅ」

朱里「私の名前は諸葛亮孔明っていうの、よろしくね鳳統ちゃん」  
「

ぎゅっ！

朱里が雛里の手を握ると

雛里「あわわ！？」  
「

パシッ！

手を離そうとする雛里

水鏡「気を悪くしちゃダメよ朱里、雛里は恥ずかしがり屋だからね。さてとお客さんが来たことですし今夜は御馳走を作りますか！」  
「

鈴々「御馳走！？やったなのだ！」  
「

愛紗「水鏡殿ばかりに働かせては申し訳ない！私も手を貸しますよ！」  
「

一刀「それだけはやめて！？」  
「

桃香「あはは…」  
「

この後、何とか愛紗の参加を止めた一刀達だった。

厨房

水鏡「さてお客さんにお菓子を出さないかね」  
「

雛里「頑張ります」

水鏡先生と雛里が食後のお菓子を作ろうとしていると

朱里「先生、手伝いますよ！」

エプロンをつけた朱里が厨房に入ってきた。

それからしばらくして

雛里「よしっ！できた。先生、味見を…」

お菓子を完成させた雛里が水鏡先生に味見を頼もうとすると

水鏡「うん、朱里のお菓子作りの腕は落ちていないわね」

朱里「そりゃそうですよ。先生から教えてもらったんですから」

朱里と水鏡先生が仲良くするのを見た雛里は

雛里「・・・」

ただ黙るだけだった。

そしてお菓子を食べた後

水鏡「さて、夜も遅いから泊まってもらうとして皆さんは客間を使ってください。朱里の部屋は今は雛里の部屋になっているわ」

朱里「だったら鳳統ちゃん一緒に寝よう」

朱里は言うが

雛里「（ブンブンッ!）」

首を横に振る雛里

雛里「知らない子と一緒に寝たくありません。先生と一緒に寝ていいですか？」

朱里「鳳統ちゃん……」

水鏡「仕方がないわね、じゃあ一緒に寝ましょうか雛里」

雛里「はい」

水鏡先生の部屋

水鏡「雛里、朱里はどうでしたか？」

水鏡先生が雛里に朱里の印象を聞いてみると

雛里「…邪魔（小声）」

水鏡先生に聞こえないように言う雛里

雛里「（せっかく水鏡先生と二人きりだったのに邪魔な子が入ってきた）」

雛里は水鏡先生との間に朱里が入ったことが気に食わなかったようだ。

スッ！

雛里が窓側にいる水鏡先生を見ると

雛里「（先生は渡さない！）」

水鏡先生は自分だけのものと気持ちを強めるのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4711t/>

---

真・恋姫†無双～乙女大乱改～

2012年1月12日19時58分発行